にても　秀林院様御事實に思はれさるにて候拙者申合點仕候は　秀林院様の御咄初て久左衛門承候哉ひしと咄止拙者事斗つゝ々々と承候いか成事にても本の正敗事をいやとは可申様無之候久左衛門は同年同位にて右の通に坪明候は少し自慢に存候備頭番頭奉行は不及申拙者小身にても勤は成間敗は不存候尤平九郎は萬一新兵衛殿咄承にも可有之此事の外にも上田殿拙者も事の外感し被申候事石寺九兵衛被申聞候是は小原長四郎事堀次郎右衛門殿に申候時一座に新兵衛殿居被申承被申候多分覺書に可有之候堀殿は彈藏同前に其刻坪明と申人にて候毎度如申古人の事を不承候ては今時鼻の先口に任せ時々に合候者の好事にて無之候武士の武道も十人並の侍の咄と一位上へに聞へ申咄と語申内に早其者の心しられ申候随分々々御吟味可有候皆々老父咄か本に成申候随分心付可被申候尤其時分の風にて無御坐候へは通り不申拙者も四十餘年相勤覺申候然共何そ大事に成候て古き侍の申傳古き事不承候ては當世斗にては成不申候江戸も古きを御慕ひの趣に聞へ申候

一拙者江戸詰の時廿五年以前に熊本より狀參り一子土之進果候由申來十左衛門殿も自筆にて此節忠義の出候所とて平野九郎右衛門方へ被仰遣候由にて拙者居申町屋へ態と參被申聞候本よりあきれ居候へとも其三四十日前　惠雲院様七月廿一日御遠行被遊候土之進は八月十六日にて間もなく覺　惠雲院様の時力を落し食事給候事土之進事不申候時分に心中にて引くらへ見候に神以土之進時には萬事輕く覺申候故扨は未御奉公勤申にさのみ草臥不申事と日本の神心を心にてためし申候　御前にも被聞召上江村節齋に御意被成候は最早唯今より出來たる子は傳右衛門爲に成ましく思召候間養子を取持させ候へとの御意の旨にて拙宅へ節齋被參候扨々難有仕合涙を流し申候は私儀如御存知歩行より段々御取立被下子果候とて又養子を仕候事は先祖の儀を存名字致斷絶は不孝と承及申候如御存知三盛事親の名迄付居申又喜左衛門儀も私同前に新知被爲拜領居申候私儀は尚以段々御恩兄共より重く蒙り存る様御奉公不仕上養子と申事は老父草の陰にても心に叶申間敷と申候へは節齋いかにも拙者

申趣も尤に存候然共兼ての御意に御代に被召仕候衆も代々にて何も跡の斷絶仕候事不便に思召就中當御代に御取立の衆は尚以不便に被思召候との内々御意にて候拙者儀は別而御重恩との仰に候へは右の御意の筋養子被成間敷との儀は御心に叶ひ申間敷候と被申候誠に左様に兼ての御意初て承申候御家中一同に承申難有儀に奉存候然らは乍御六ヶ敷御自筆にて熊本に居申候同名中に連紙にて右の趣被仰遣可被下候私手前よりは少遠慮に存候儀も御座候と申候へは扨々御得心別て太慶仕候御飛脚立候はゝ御同名方へ可申遣とて則息悴陸に書せ同名中に被申入候角入初として扨々難有仕合御取持被下候へと返事も見せ被申候てしからは養子に誰をかと其時工夫仕候處に村井源兵衛參被申候は此間節齋と拙者養子の噂申事に候差當り堀内中に無之様に存候たとへ有之共今度の事は亡妻存生の内にて別て力を落し可被申候左候へは御同名の内にたとへ心當有之共御内方の爲と存寄候へは式は弟か甥か兎角其心寄可然と申候拙者もいかにも尤と存幸に妻の弟有之候是を願上可申とて其後は熊本

へも申遣取遣濟其年極月廿八日養子如願被仰出候ケ様に節齋に申候儀も前々老父咄長谷川久兵衛殿質子被果候て跡養子の事幸孫有之候取持可申と筑後殿御申候時斷被申候筑後殿委細直に御聞承置候尤成事と感じ被申然らは拙者方より願可申とて久兵衛殿に構はず御願被成候事兼々承候日本の神其時長谷川殿存たるにて無之候へとも老父心に拙者存寄叶可申と壹筋に奉存候へは右の通恭次第三悦養子候時彈藏口上書のごとく拙者養子同名中承難被存返事節齋見せ申候右の熊本へ連狀を被申候を三盛なとにも尋候へども何方に有之哉見出し不被申候此後にも自然出申候はゝ傳次に御渡し可有候一金津助十郎飽田詫磨兩御奉行勤候時去る人三百石取祖父島原討死にて候其者の宇土郡奉行被仰付候時咄者へ咄申候は助十郎も同前拙者も宇土郡奉行に成無是非事と申候故何と戰場に不被召れ候役と思召被申候哉助十郎は左様には存間敗候承及ひ候へは兩人役は其時くじにて何役にても一人は被召連候たとへは夫を苦に被存候ても其時に至ては銘々心に有事にて候常々役儀心に叶不申候とも御靜

謹の内にいか様の居役も勤申か本意にて候其上しはりからけて不被召置候御軍法背候て討死と存切腹の覺悟にて昔も御留守より參候て致討死天下に名顯はしたる侍藤堂和泉殿家中には同玄蕃は關原合戰に留守に居申一人ぬけて陳場に參候へは和泉殿も心有りて甲を給はり候頂戴仕討死いたし候事承及び候此類幾たりも御座候軍昔にも見へ申候と申候へはひしとこまり一言出不申候尤拙者より十を余うへかと覺申候後には御鐵炮三十挺御預け利口者餘程當世に叶たる男にて候子孫有之候名は記不申候先此一事も拙者にはおとり申候是も古き能侍の事心かけ申故に與風言葉にも出候助十郎には申聞笑ひ候右の爲に書置候

一父三盛被果候年は拙者廿七の時にて其時分は親果候て三日法事過家屋敷差上申様に被仰付候是は傳々にて能家屋敷御次方の者共病中にも夜るは屋敷の間を打見申なと〻沙汰仕申候老父承被申扱々笑止成事昔は無左候唯今も先君へ被相勤申被候衆御側にも有之候是程の事を不被申上候哉と悔被申候右の通にて手取金津助十郎屋敷へ荷物なと遣候時

坂崎清左衛門殿通り見被申候て尋させ被申候へは三盛荷物と申たるよし御花畑へ當番にて詰被申候時にて御家中侍衆果候て三日過家屋敷差上申事妻子歎きの内に扨々笑止に存候今日三盛屋敷差上候故荷物のけ申候を見申候せめて三七めか或は三十五日かに上ケ申様に御奉行衆へ申度事と被申候近年は五十日過に成候哉其時分も御家中古人は三盛は存命の時人の爲に成申と心有衆は被申候段神以承候扱皆とも助十屋敷在宅にて座敷なく奥に何も居申候處に續頭太夫被參候て傳右衛門殿には御下着以後不懸御目是へ御出候へ遂申度と被申候處臺所口より出候へは拙者手を取候て扱々拙者は能時に着仕數日御看病にて候　先御代より定御供被召候衆親のしに目に逢申衆はすくなく能覺申候扱々御孝行天道に御叶候忌明候は〻早々御出御勤候へど被申聞候其時節は廿七にて歩の御使番定御供は必立身被仰付候事見及候へ共三盛存生にてこそ立身仕候ても悦可被申候母者女にて候へは夫程には被存間敷候一所に居候事悦可被申候當り前の御供は

格別定御供は御斷申上止可申哉なと〻歎きの内に色々あんし申内に右の通り次太夫被申候に付神以其儘心に通し誠に尤成事を承候と其儘心を改申候能存候へはあやまりては改に憚る事なかれと申は如斯の事か此次太夫は　三齊公御兒小姓勤被申候龜之助二男にて古人にて候つる唯今傳右衛門事同名にても父方にて候不思寄の縁に成申候右の仕合故老父の一言と同前に唯々落涙致候

一右の通に銘々上下共に屋敷をもたぬ者はなく候忠利公御時に與津作太夫と申者御奉行勤一國一人と申たる三百五十石にて唯今土山半内居被申屋敷にて子は彌五太夫と申角入は近所にて別て内外となく咄被申候續彦太夫姉聟にて能覺申候三十一二にて病死弟三五郎と申おろか成者にて亂心に成り申後に何方へ參果候哉彌五太夫存生の内にちくてんいたし知れ不申候其時分老父被申候は親作太夫全盛の時分心儘に屋敷の内には輕き者共大勢居申候追立居屋敷廣く仕候小倉より熊本へ被成御座直に落付たるかろき者共にても皆々子供も生れ候尤公儀よりは決て能屋敷家無之には銀子など被下尤作

太夫も内證にては心付候へ共其内に老父老母は別てなけき申候皆其むくいと被申候すきと其跡無之候與津彌五右衛門同名にて實は兄弟の別れと被申候横山九右衛門屋敷を津川一八拜領にて唯今平左衛門居被申候此屋敷差上候時分水前寺へ御供立直に日くれ時分九右衛門方へ見舞に參候得者與へ參候へとて初て通り申候扱々不及是非次第是見候へは爰は親父被居候所是は母か女子共にはり物なとさせ申ためとて與の様一間餘に長さおし通し十間餘可有竹様付其身妻の居候所は茶の間と臺所の間に掛氏家林雲院隱居のこと〻く仕居被申候故神以涙を流し口惜次第御奉行所にて被仰渡候故石守九兵衛に申候は私儀は如御存御取立者首を被召上候とても兎角可申上様無御座と申上たると事の外腹立被申拙者も神以尤に存候故涙を流し初て見申候御すまひの様子見尤成事御兩親への御孝行感し申候神以涙なかし申事唯今も同前にて泪を流し申候其時分家有にて一番の屋敷山崎に平野清兵衛と申四百石被下御奉行役にて勝手も能く座敷ぬり床に圍ひも有之與は三間はりにて如形相應より廣く候就

夫御吟味にて其刻被仰渡にも右之通惣躰家は九右衛門家よりは殊の外能く候へ共屋敷せまく右之通九右衛門心に叶不申候其儘替申は老母すまひ思様にならぬと申ても少上にもあたる心有之と存候即刻段々達　御耳候て事の外　上にも御迷惑に思召九右衛門爲に本の屋敷の家より能き様に被聞召九右衛門に被下候此後屋敷の儀別して々々念を入可申と被仰出候由角入被申神以少も于今失念不仕候筑後殿御存生十左衛門殿も御存たる事も哉と九右衛門は直に心安申たる由承候曾て段々のわけ御存知なく九右衛門方へは十左衛門殿即刻御出候て御存知なきの御申分被成候然は一八親父も父子ともに惣躰利發は勝れ候へ共身慾も又すくれたるとの咄は井田太郎兵衛とて筑後殿より十左衛門殿御もらひ被成候おとなにて十左衛門殿姉聟達の藤崎作兵津川子供衆御兒小姓に被召出候時十左衛門殿御母儀へ御所望召れ候衣類等に付段々夫々の咄拙者は分て十左衛門心安く存候とて十左衛門殿御申おき内證の咄一々承候以後にも拙者に作右衛門一八半八三人ともに何と存候哉と御尋候故神以心底不殘申候へばいかにも々々々々其通と神以御申被成候扨其後流水も口中の煩にて果被申一八も病氣に早く御斷被申一八跡も病氣とて御斷被申候へとも譯有家にて唯今の平左は次男にて家を御つかせ被成候如斯のわけ諸人共にいや其筈是は此筈と當世の不實のみにて心實昔咄は當世にあわぬ々々々と上下申事にて候尤當世にあひ申能事も有之候へとも以後は必々本に成申候唯今江戸の趣承傳候にも昔したひと申傳候是にて能々合點可被仕候

一右の井田太郎兵衛に或時色々申内に拙者申候は皆人に御聞の通立身加增被下候位も能く被仰付候事に候拙者心にひきくらへ曩申候新知被下候時分は夫程にも不存候少御加增被下候て却て拙者心は本よりわろく成申かと曩申候子細は年もより御存知のことく妻子も有之候へはちと身をかはひ申心出來十左衛門殿御前にても昔のことく思ふ事不殘御咄申事十か七八は控申御尤毎度々々口が過候とて御叱り被成此比は此方より控申事のみと申候へは日本の神以非日も誓文にて拙者側により扨も々々拙者は右樣成御詞懼なから奉感候如御存知十左衛門方へ御家中歷々上下共に御出御用は格別常之御咄にて候へは毎度次の間に罷在承申候近比も御加增御拜領是は御存知のことく向の津川殿代々心安く夫故十左衛門方へも御出被成私へも御懇比に御申候つく々々存候へは御奉公人は前より乍慮外おとり申と存候と咄候へ共名は書不申候是にて一言にても不實成事けいはく成る言葉は家來々々皆人にて上下なく實にて候へは恥かしき事にも十左衛門殿舍人殿如形御心安他人にて拙者程心安く御申候事身にも覺申候へとも一言にて其人の心知れ申候在宅仕廿年に成申候熊本に居候時分山名殿大木殿へ出入仕候時分家來中の爲に能事は折々申たる儀は覺申候拙者身の上能き事けいはく成事一言も不申と覺悟仕候故在宅へ引込候時も前々のことく家來共にも逢申間敷候され共打寄候て皆々咄申時拙者事存出し可申候恥ヶ敷存候儀一ッも無之と存候唯今も其通定て皆々果可申と存候前かと舍人殿なと御家老に被仰付候時の事堀次郎右殿上田新兵衛殿なとへ共比立身御取立候衆の批判有之候打寄々々咄申候共時にも能勤候故夫々に又立身御加增

被下候へ共其人は前よりは惡敷成候と申候へは舍人は何と舍人程能成りたる者はなきかと次郎右殿被申候故拙者申候は扨々夫故に御家老役被仰付候諸人に勝れたる事しれ申と申候へは是は尤々々々と新兵衛殿一座にて御申候事も失念不仕候

一同名彈藏御用人に御加增にて被仰付候其刻熊本にて拙者へ祝儀を被申心には少過さたると被存たる樣子に見及候處即座に返答仕候は如仰結構に被仰付候て私共迄難有奉存候併被仰付間敷平八にて御座候其子細は大守樣は格別御老中方の御目利にても平八事においては何として拙者程御存知可有樣に無之候平八事に候へは幼少より能存候惣躰親も御懇比に被召仕御加增も被下候得とも親よりは益たる處多く候其上相役中も前々より能存候圍之進なとは弐千石迄被下候先祖もさのみ皆共に替り不申候併是は兒姓達と申御家の宇右衛門殿も御兒姓達と申傳候然は唯今の御用人にて弐千石迄被下候共さのみ相役にはおとり申間敷と存候御家老役に被仰付候ても宇右衛門殿例有之候へは一萬石迄被下は餘り珍敷事と不存候神以返答仕候事唯今存出々々咄申候共時にも能勤候故夫々に又立身御加增

し書付見せ申候彈藏に御見せ可有候笑ひ可申候心底には多分拙者返答心に叶可申候當世は同名か一門近きは必々ひけの事のみ十人は九人にて候上下共に侍たる者の思樣に如斯の事にさへ傍輩中我より上に被召仕候人に尚以遠慮仕候心にては中々其身を捨勤申事は成兼可申候しかれば忠義の程も當世なみと存候

一四十年前屋敷拜領の刻は林兵助村井源兵衛拙者三人にて候其刻唯今在江戸被仕候關川李太夫親關川檢校は拙者兄是安同名文左衛門心安く語りたると拙者も同前とて心安く被申候熊本へ御供にて被參候時澤村一官も別而にて振舞被申隣屋町屋敷に居被申候時にて右關川相伴に同名文左衛門大鹽彌五右衛門拙者參候節にて文左衛門所へ參候へば早關川は參候被申候處に拙者參候へば傳右殿は屋敷望と承候夜前御前に堀次郎右殿御召被仰付候私も居申承候三人の者共屋敷望候由唯今御吟味被成候へば家有る屋敷三ヶ所有之由定て夫にも上下可有之思召候右三人は同じ樣なる者共にて此內傳右衛門は老母も有之つうに似ぬ孝行成ると被聞召候兎角くし取にて相渡候へど御懇比の樣子と被申聞候拙者申候は扨々難有奉存候併私母に孝行に御座候段被聞召上候事近比恐內に迷惑至極奉存候如御存知喜左衛門は諸人私よりはていねい成ると申三盛は醫者にて毒藥のわけ能存老母給候朝夕の物迄念を入申候私方へ母節々逗留仕候は御存知のごとく定御供にて熊本に居申事すくなく就夫三十日に廿日は私方に居申候每度食傷なども仕候故餘り逗留無用と拙者へも度々申候へ共母心次第と留も不仕候右の通私のを孝行と被聞召候儀は忝內に却て致迷惑候能御聞被下候へ々々々と返々申候其刻文左衛門殿申たると被存たる面色に見へ候扨彌五右衛門も參一度に參候へば一友に關川申候は前夜是に參候事御前にて申上候へば土之丞に能申聞候へ御禮日に御覽被成候へば若き時の風今になをり不申と思召候衣類上下迄に御心つけられ候へば關川申候料理迄是申候本膳の向に腹赤鯛を出し被申關川悅申候高瀨に縁有之間申と一友被申候其外は覺不申候拙者も珍敷覺申候如斯實に內人三盛孝行拙者はおよび不申と存即座に有樣に申候何事も物每

につくろひ不申有樣に申度是も昔の能き侍の咄每度承申老父影にて候是に似たる咄每度山名殿大木殿にて承候へ共皆々我物に出來たる樣に上下申事能見覺候勿論おのづから出たる事可有之候へども能き事と申は皆々古人の言或は父老聞の昔咄承おのづから興風出合申事のみと存候故此間は別て果候間もなく存各同苗中惡名を受申さぬ樣に日本の神ぞ御加增御座候へ位も能く御成候樣にとはさかみ不存候唯今の通に候へば各親より能き所も有之候拙者も見申候然れども年寄功者に成候程實に薄く成當世の風に成申右井田に咄申たる樣に拙者心に覺申候先御代よりの上下侍拙者程大勢出合申者は又有間敷候山名殿前へ出候程の男に拙者しらぬは無之候上下の侍に是は實成人と存たるは少く大身程輕薄多く覺申候打死追腹心懸見可被申候小身者には多く候島原にても大形新參衆に多く古參はすくなく見候大形新參者尾藤金左も新參にて御一言恭事承り被申打死被仕候咄三盛被申聞候島原の事書たるを見被申一人宛に心付見可被申候其子孫多く候皆々親に似たると似ぬと思樣成事心にかけ

候へば拙者ごときの者の心付申儀に候爰を以存候へば無事なる時にも人にうたがはれ申者不實故にて候何程利口に立廻り被召仕候も宜く候ても不實と謂侍に思はれ候事人間の大なる恥と存候へ共其者は人はしらぬ誰も如斯などゝ昔今の同類申たて誰も如斯是も十人は九人申候大形左樣の者が自慢にておれより上は有間敷と思ふ事も脇よりも心有者は見る事に候扨其二三日過堀二郎右殿より呼に參候故唯今申潮助五郎居被申屋敷に其儘參候ヶ樣々々と被仰付候村井源兵衛林兵助は今少以前に申渡候へば兩人被申候は皆共儀は當分居申所少も支不申候傳右衛門儀は母も有之其上承申候へば此中縁組も極め申樣に承申候左候へば兩人よりは傳右衛門早く拜領仕度可存候間閣におよび不申候傳右衛門追付可參候三ヶ所之內望次第に被爲拜領候樣被申兩人ともに被歸候扨々仕合成事と被申どれかと尋被申候故坪井牧丹右衛門上ヶ屋と望致拜領候其後次郎右殿御申候は右の樣子達御耳候へ者然らば此後兵助源兵衛に被爲拜領候屋敷者傳右衛門に被下候屋敷同前なるを可被下間能覺候へと兵助源

兵被申たる事申上候へば　御意に叶たると見へ申候由被申候其時分御小姓頭にて毎度出合候乘谷惣右衛門兼松七右衛門被申候ゞ傳右今度拜領の屋敷は世上にて如形家も能候様に承候近所にて候故咄承候へば板敷も古く天井も奥むきは無之と承およひ候由被申候故いかにも仰の通に御座候へば私には過たると存候は私親は御存被成まじく御家中一番のすり切にて奥に天井も無御座しふ紙をはり申所にて生れ申たる私故に親より者過たると存候と神以申候へば扨々むさとしたる事と申笑ひ々々被申候故おし返々々々申候て大笑に成申事今に致失念不申候拙者はかりそめにも僞と申事別て嫌ひ餘勢成咄もきらひ故老父すり切住居など少もかくし候事なく候當世承申候へば親の餘情其身は不及申多く候心には扨々人はしらぬと覺申候が實の時の忠義思ひもよらぬ事とおかしく存候各能心付可被申候天道明らか成事是に付ても存出書つゝけ申候一兩年の内に山田調庵果候て山崎の屋敷筑後殿振廻申候故座敷ぬり床奥には能き藏も有之候林兵助に被下候村井は佐川儀太夫と申先御代より代々勤

新組にて勤申候唯今跡は無之候貳百五拾石か被下御幼少より被召仕候人にて拙者にも懇比に被申候北屋敷藏奥なる程能座敷は源兵衛代に立申候是を望候て致拜領候是皆拙者拜領の時くし取なしに拙者に讓申候天道明らか成故におのつから如斯致拜領候扨江戸へ參候て拙者に横次左衛門其時は堀次郎右殿組脇にて幼少より隣にて能く存候拙者に申候は林村井拜領屋敷と拙者屋敷とは格別善惡替り申候と御次にて何も被申候只今は尙以能屋敷候間望申候はゝ調可申と拙者ためと存被申候即座に御心入忝は候へ共拙者に被下候時分能屋敷とて被下候唯今は右より能屋敷候とて願申儀心に叶不申とて願不申候かりそめにも慾かましき儀老父殊之外嫌ひ申候事少しも忘不申皆老父蔭と存調置候

一幼少の時三盛拙者兩人者老父臥し被申候跡に寢せ色々の咄聞せられ候十歳斗の時と存候三盛拙者に臥なから色々小歌其時分のはやり事下々の申儀なと互に申候其時分は切支丹宗門の御改毎月ふれ小身者家内にも帳をとち男女手に墨付させ判形のことくさせ申候兩人に被申付候其時せいうすさんた

まりやなとゝ申事思ひ出し三盛ひたと拙者に覺ぬかとて被申候時に扨々うつけめか左樣の事を覺何の役に立事かとて以の外腹立夜更候へ共三盛を踏付被申候へは逃て次に被參候處を又起て追被申候へは長屋迄被參候老母もおさ色々斷被申候へともも聞不被申拙者はおそろしく震ひ居申候へは氣に入夫程おそれ申か能そ天下の御法度殿樣よりの毎月御觸にて候にかりそめにもあの樣なるあはふ成事又は下々のはやり言はいはぬ物そと被申候唯今八十に成候ても失念不仕候扨も々々ゞ樣成事を覺候ても幼少より公義の重き事申聞せられたる其志能々可被思知候與風存出し書置候

一右の時分茶の間にてわるさ仕候故老母しかり候へは腹たち薪有之を投打いたし候へは内入居被申おとれめは母に投打仕候哉とたゝき可被申と被仕候處に其儘逃け門外に出其後歸候へは母被申候は親に不孝成者は　天道御にくみ候男女に限らす天窓を打申事はせぬ物にて候天窓には不斷神か御座候尤下々男女の事にても告口せぬ物に候立聞とて人の物云をしらぬ顏にて聞ぬ樣にするは道をあるく

とても不孝成者のあるき候へ者地神とて土の下に神ある物にて劒をさかさまに立たるよりはいやに思召孝者成者の步行候へはとふしみ一筋置たるより輕く思召物とて色々のおしへ被申候八十に成候ても少も忘れ不申只今思ひ出落涙仕候扨も々々兩親ともにおしへ被申候事皆々　天道神を敬申候斗に候各心得子孫に傳へ可被申候皆々拙者に親母の被申たる事各の爲に成可申候扨拙者果申候ても必々精心無用に候傳右衛門は格別夫もよそへ參申或は悅の坐敷へ參候て扨々能所へ參候とて魚鳥給不申今日は親の日なとゝ斷申事てい主の心に祝事にては心にかけ可申候其心をやふり申事あしく候心に精進の事忘れ不申ために御主の日は格別と親被申候五十年以前十左衛門殿初て江戸へ御越候時拙者毎度咄申候拙者精進多く候誰々かと御尋候故に其時分同名八右衛門八月五日に被致病死候兄是安は八月九日兩日共に朝斗精進仕候と申候へは八右衛門日は跡繼候子可仕候伯父多く候に無用是安者跡なく候一日の筈に候と御申尤に存少も忘れ不申近年は誠に精進多く每月朝も止申征月斗は八月五

日九月廿三日不白は四月六日かと覺申候江戸に居候時にて唯今も慥に覺不申候右の通に候間必々内入被仰置候とも拙者存生に申入候たとへは々々々征月に召れ候はすとも此一冊を御覽候て祖父祖母は見られ不申候へとも如斯の心底其本を御吟味可有候拙者に被申候事を如此傳申等に候尤各了簡御吟味候て善惡御わけ候事不及申當然の道理に叶候樣にと存候祖父祖母より生れ增たる者世に多く候かろき事は其時々の風にまかせ被申候樣にと存候信は古へ今に日月の如くにて候人たる者は本武士たるは義理を專一に用申候軍書近くは大阪夏冬の御陳にて如斯天下治申候其後島原記此時者御父子樣御供御家中不殘被召連候拙者も隨分致吟味書記候御小付御覽可有候尤夫々の働の次第は委細に見へ不申候へとも定て御褒美の如くと存候大坂關ヶ原皆々天下にしられ能武士と申者いつれにても信を用申候御同將の御吟味にも兎角勇を好は世上に常に候へとも吟味仕候へは唯律儀成者武士は第一に好申候律儀成者は此等士の役と存武道能頼母しく存候血氣の勇者不賴母敷小身者は他家を

仕候ても立身望大身成者は謀叛を工み兎角賴母敷と存候者は律儀者ならではと御意候旨加藤左馬助殿御申候樣に何やらの書に見へ申候心を付見候へは大坂陳の刻水野日向守殿右筆にて廣田儀太夫と申者五月六日の合戰の砌そはに居候役放念比に思たるか今日は先手へ參候へと御申候黍と申參候て高名仕能歸申樣には明日は其儘御側に被召置被下候樣にと申其時何も先手を好可申にこりたるかと目引鼻引笑申候扨七日の合戰に日向殿御手に大坂方より大勢突かゝり日向守殿も自身鑓にて二三人御働首は家來共に御とらせ候右の儀太夫如斯可有之事を前六日に先手に參働心にかけ候故一番に日向守殿前にて討死仕候餘り志を不便に思召候て御覽候得は少息も有之故かうかいにて口を御あけ御藥御用候へは氣も付次第に能く其後有馬に湯治被仰付候て段々御取立御家老役に成候よし勇士一言集に有之候寫置候へ共近年見へ不申候何方へ借申候哉繪入たる書物三冊有之候を一冊に寫置たると覺申候御吟味候はゝ後々出可申候難波戰記には廣田儀太夫なと能き働と迄有之如此委細に者見へ不

申候

一兄弟三人少成人仕寄合四方山の咄いたし候時老父被申候はいかにも々々々左樣に寄合候て咄申事は能々惣別人の吟味他人は内證の事不知物に候八右衛門角本文左衛門三人は奥へ參候三人の伯父其事を能々見候てたれは是が能きと致吟味其能と思ふをまね候て見習候へはと被申候事唯今も存尤成事に候

一眞源院樣江戸にて御逝去の年御參勤の砌立田にて皆共見物仕候拙者は五つに成内入者九つと被申候半こふにそり髮をゆひ被申候由就夫御目に立申誰か子かと御尋させ被遊候と内入被申候拙者は唯御袴に黑き御小袖を召させられ御色白く被成御坐候と斗覺申候正月の飾物なと伯父三人の内誰とは覺不申候法師に成り被申候は覺右のかさり物取捨させ被申候を取除被申事は覺申候翌春　御遺骸御下着唯今御花畑と御馬屋の間の廣き所に御家中の妻子各罷出拜申由其刻拙者は六つに成り候由　御通被遊候跡にて女中何れも聲を上涙を流し候時拙者も高聲にて泣候由事の外高く候故なかぬ物々々々

々とすかし候へはいやなこふと申一しは高く泣候由母後に度々被申候故右の通かすかに覺申候直に川端通船場橋より妙解寺へ被成御座御家督延引仕候に付御家中にても上下の内侍中夫々心替り色々わる口被申たる衆中老父打寄咄被申候覺申候長谷川仁左衛門殿老人にて武功有之人にて幼少より親召連參候故男振覺居申候か小男にて若き時唐猪頭被申候由鼻もひしけ見苦敷男振にて候直江山城與力にて度々上杉の家にて武功御聞及八百石にて被召出即座に千石の折紙被爲頂戴候是にて察可被申候此仁左衛門所に御家中老若心ある者皆々毎度咄に參候よし拙者も幼少にて覺申候大里儀太夫大野傳兵衛抔は拙者覺申候右の御跡目不被仰出候内は熊本上下の侍一人も野邊へ出不申ひつそりとして居申候由然處に或日大勢咄申候に仁左衛門被申候は今日は天氣能く段山邊に氣はらしに各同道可仕と被申候へは各見合返答無之故何と懸入候哉と被申候時何も申候は唯今の時節上下侍中遠慮に存不罷出候尤曲輪より外には御以にて候由申候へは笑ひ々々其等々々拙者致同道候程に各心安く被存候

へケ様の時節は別て若き衆は手足すくやかに心も夫に應しすくやかに成物にて候由にて何も同道にて段山にて茶辨當くわし抔持參三盛は殊にかわゆかり被申候ゆゑうすへり敷枕にて臥し被居候處近くに居申候　御城につくゝゝ見被申三盛に被申候は何とゝゝ拙者には如被存若き時より東國中の城々を見ぬはなく候　御城つくゝゝ見申扱々能枕にて老人の心底察被申候へと被申候三盛も心に萬一の時は　御城にて打死と被極たると早心にうかみ申と被申候其後御家中上下歷々も尤と存候て野邊へ出被申候由三盛申聞候八十に成候て少も失念不仕候扱もゝゝ左樣に可有事御家中多き士にて候へは仁左衛門武功におとらぬと可有之儀に候へ共時節に逢不被申候へは委細に心付申さぬ筈にて候ゟ樣の事老功の武道を能吟味被仕たる物と存候佐久間半之丞は大坂にて能三千石にて唯今備前殿屋敷に居被申候此半之丞被申候由先年江戸にて野田小三郎咄申候半之丞には色々咄多き人にて候武士の道の相談可仕は長谷川仁左衛門と被申たる由是にて察可被申候唯今の長谷川久兵衛曾祖父にて候

一拙者初江戸廿二歳の時にて右　御代先　御代勤申歩の御使番殘居申咄も承拙者儀に候へは同名中心安き衆は拙者をかわゆかり御知行衆に別て多とて仲間そねみ申たる事も承申候然れ共夫々の咄に兎角其身の位に應したる咄多く御座候高位高官うかへる雲のことしの言葉にても人により其位よりは高き咄も有之候仲間にても吉田仲兵衛眞野半兵衛は八代に居候兼々雨人は別て心安く咄申候拙者へ申候は心安く申聞候皆々拙者に批仕候先血氣うは氣に見へ扱又咄も多く聞候され共十の内一つ二つ扱々尤成咄と申者も有之候是は皆同名衆の咄を聞たる物と申拙者人から惡敷見へ申候故に同名共にとられ申樣成る事に候隨分皆共心安く語申候ゆゑ如斯申と申候ゆゑ拙者申は諸人の察のことく親の咄伯父ともの咄皆承候ての事にて拙者も存寄一つも無之候申たる儀發申候右の通に候へは　先先御代より相勤申直に居申御入國の時御供にて能被召仕候其者の兄は終に見不申候是も三百五拾石被下親は能き人と申　忠利公にも二三人の内にて何そと申候へは必々御吟味にのり尤御老中迄も其通に

て拙者覺候ては御奉行も勤申候其嫡子故　光尚公御兒姓勤　御遣骸御供にて熊本御着の時に數年勤申父母戀敷存親の屋敷立寄申候いかにもゝゝゝゝ尤たれか身にしても左可有事と咄申候拙者一人わかく承居申扱々合點不參候咄にて候へ共何も年寄能き者と申人に候へとも此咄を尤と存候事とも何共拙者心に落不申と口には出し不申心の內に存候はたとへ何十年父母に逢不申とも御主の御遣骸の御供にて熊本へ御着の日ならは就中父母に逢度心可有樣なく候追腹仕候衆中多く候夫にくらへ候得は見ぬ男成れとも大形つらつき迄見る樣に有之役に立申間敷物をと心に存候尤當　御代迄御側に被召仕候由　御入國前に江戸にて果候哉堀次郎右なとより能く被召仕候樣に承候扱其弟是も能被召仕候故　御前にて軍書太平記東鑑抔の類よませ御聞候由夫故に後には拙者なと一坐にて十左衛門殿に御心安く參候者にて候兄の事は承及拙者は兄か弟にて何事を古き武士の善惡の咄すいさん成奴めと若時分心安く申せともうけつけ不申候然處に御暇被遣候右兩人の親は御奉行迄勤智惠才覺すくれ候と御家中一二人の內にて候へは子供の事親の目に見へ申間敷樣なく候いかにも能申付近き一類に江戸勤外樣に出申時分に拙者事心安く貴樣頼存申入候孫事若輩にて無心元世悴も參居候へ共世悴生れ付氣に入不申候甥をも却て引たをし可申男にて候なとゝの狀拙者見申候見せ申候には拙者心安く色々の咄を仕其男の噂も仕在江戸の時にて伯父樣ふり候て甥の金銀も取申身の樂みは他人は不及申油斷の成男にて無之候親とは貴樣は別て御語被成候故少申兼候へ共今時はやり言においはきとて伯父樣の甥をたをし候者廣き御家中大勢の內にて拙者はすい一と申候へは其仁扱もゝゝ能く目利仕候目利はならぬ物と古人も申傳候此比拙者方へ參候狀見へ可申候ゆるく申す人の目利扱々我折申候親の目にさへ子には迷ひ申は世の常にて候すくれたると申さぬは子の目利さへ成不申候此親は御存可有候當　御代迄　御三代勤能奉公人にて候ゆゑ如斯拙者方へ子の事無心元存頼と申越候必々御沙汰拙者目利のゆるしとて御飛脚着候時分にて右の紙面神以見申候て笑申候はいや善人は善人の目利可仕

候私も此悪人目利逢申候へは同類にて同罪と申物にて可有之候大笑仕候其後御暇被遣一類は殘り居申候拙者つく〴〵存候右の通の親他人の心安に子の悪人と見へ申候故に能く仕度頼申たる物に候夫程の事にて其儘隠居にて讓申儀我か身の爲斗にて御代々の御恩を忘れたる心にて候病氣とか何とそ申立一類の内に子にましたる者他人にても養子に仕候は丶親の跡たへ申間敷候悪人と親目利いたし其儘致隠居候心は子同然の人と存候老父抔は神以子供の内に御奉公のならぬと目利仕候は丶丸裸にして追出可申と誓文にて被申候故神以恐しく存候事八十に成申候ても少も失念不仕候右の通に候へは諸人の目にも能きと存たると見へ上々も御三代能被召仕候信實は聖賢は格別天はあきらかに候故忠不忠果候跡にて諸人心あるは吟味仕思ひしり可申候親の子を思ふ事生類鳥けた物も同前にて候我身の爲に悪人と見申候て跡をゆつり樂いたし候は世に多く老父の様に存候は先拙者一代見不申候勿論親の事故ヶ様に書置たると各者見ぬ事にていか丶と可被存幾所にも〳〵〳〵調置申候御家中に唯

今六人迄に知にても相勤其家の嫡子共には早拾人十二人に成申候御吟味可有候外に類無之候　御家は名高　細川如斯繁昌仕候事老父如形不調法成人と子の目も思ひ候へとも信實の心は中々似せても似らる丶事にてはなく候然とも各信をとふとみ心をみかき被申候は丶成ましき物にてもなく繁昌いたし候へは幸之助傳次事幼少に候へは後々いか様に可成も知れ不申候拙者も廿年在宅にて隙にて夜白淋敷若時分大勢出合咄たる事故古きも新きも覺如斯思ひ出し〳〵〳〵調申も皆老父影能々申心付可被申候

一新地拜領の日母部屋にて喜左衛門内入三盛拙者居互に難有と申内に母は涙流し御花畑方を拜し被申難有かり被申候其時拙者申候は今日の難有さ私一人と奉存候子細を唯今ならては不申候父被果候時何も御聞可被成候三盛は御代々御恩を蒙りたる事常々御咄被置候德庵に其方は御縁つき御暇なと被下候其御断申上候御國に居申在郷へ成其引籠申御國の百姓其末々の者致療治候て渡世を送り申候へ他所へ罷出申間敷候内入拙者は又武士を立居候へ

は侍の習にて傍輩に對し候ても御奉公のならぬ事も有之候左様の刻は兄弟共申合候様にと御申被成候儀常々心悪居申候先年内人は六人扶持にて御座候事御心に不叶何と哉覽他國にも御志有之様に見及申候其時分は歩の御使番勤當り前の一度被召仕候時分の儀に御坐候へは此度又御供と被仰出候へは定御供にて罷成候左候得は定御供の歩の御使番御中小姓は不及申皆々後々は新知被爲拜領候私も其氣味心に存候故右他國へ御越被成候は丶如此の私御奉公にて立身をも可仕哉と口に出し不申候へども心に奉存候故扨々不及是非候他所へ御座候は丶御遺言承候て御奉公仕其儘居候事身爲斗にて御遺言背申候口惜く又上には忝存候て相勤申候へは何の不足にて御暇申上候哉と可被思召候此儀心にかゝり居候處に今日一同に被爲拜領候事は私別て身の上と存候へば一人の様に奉存候扨唯今此座にて申上候右の通の心底にて神以奉存居候へ共今日の難有さつく〴〵存候へは右遺言を背明日いか様の儀にても御暇出他國へ御出被成候共私は殘り相勤可申覺悟に御座候左候へば私不調法御心に不叶

御暇被下候とも御殘御勤可被成候御遺言とても譯違申候間不孝とも思召間敷候と神以申候互に打寄涙流し難有奉存候事八十に成候へとも神以其時の儀如此相調候内にも昔存出し拙者一人殘り四人の内三人は被果候落涙にて調申候間各々能々見被申勤可被申候尤戰場にて義により父子兄弟別々に成申事不珍候へ共御靜謐の世には同名中むつましく兄弟は他人の初と俗語に申ことく早各從弟に成申候次第々々に繁昌いたし候程夫々に家もわかり可申候へとも同名中者堀内と申せは本老父より初御家に參候老父儀各御存知有間敷口に段々調置思ひ出し思ひ出し如此調申候同名六人共に先祖に對したとへ互に心に叶不申共直に善悪を無遠慮吟味仕被申不通仕候とも亦其意趣直り申候は丶本のことくむつましく可被仕候長谷川仁左衛門被果候刻三人の子供呼寄被申候者老體にて快氣可仕様なく候尤各隨分むつましく見及ひ候併果候跡の事一つ殘心有之と被申候へは嫡子久兵衛能出何事にても唯今被仰置候へと被申候へはいや別の事にてなく候後々は三人とも繁昌めされ子供も多く成可申候親

のまねをするは世の習ひにて候兄弟三人ともに幼少の時は一所に居申扱又成人仕家々を持子供出來申は定りたる事にて幼少の時を忘れず成人いたし候ても互にむつまし〻仕候へは又其子々々の親のことくする物にて候間隨分々々むつまし〻召れ候へと被申候久兵衛被申候は其儀一つ思召被殘候は〻御心安可被思召とて誓言にて被申候世上見申候へば十人か九人兄弟或者從弟むつまし〻無之後に不通に成申者ともを能々承候へは十は十ともに金銀慾徳の事にて武士道の事にては無御座候誓言にて於私少も御心にかけられまし〻弟とも萬一右の通の儀にて不通仕候樣に成行申とも私方より斷申候てむつまし〻可仕候併武士の道に不叶儀と存候は〻早明日にも不通に罷成可申と被申候へは扨々尤殘心無之と被申候由老父は別て心安く枕本にて右之咄承申候て每度被申聞候扨久兵衛は島原知行にて武百石親の千石一つに被成被致拜領候即座に弟兩人に百石つ〻三百石宛に成申唯今の長谷川新右衛門と申奉行勤申候先祖にて候子に分遣申候へ共弟に分遣申人此外終に不承候ヶ樣に能きと存候

ても皆々自身々々も心には扨々尤とは存候へ共弟を子の樣には思はぬ世の中取るか上にも慾にはあきなく自分の身かへりみ過たると被存候哉拙者覺にても岩間小十郎千石迄御取立被成後に柏原新左衛門殿も千石の時兩人共に千石宛御加增被下候時小十郎は差上申候共時古監物殿御擧と承候池部宗川江村節齋三百石宛の時百石宛御加增の時池部は差上申候へ共又被爲拜領候是より外拙者一代承不申候昔し志方半兵衛と申者三齋公御代歩行より御取立千石に成申候　三齋公御他界の時御暇申上御國立退の時　眞源院樣委細御聞被成南關に長岡勘解由殿今壹人は覺不申いや松野右京殿兩人に被仰付御留被成其方は御國を御出し被成候者にてなく候年寄勤成らぬと御聞及被成候本知被下御國內居申度所に可罷在候子供は夫々可被召仕心安存候へと段々忝事にて御留被成候扨嫡子に三百石次男に貳百石被下候時に半兵衛申上候は難有仕合奉存候願くは二男に嫡子に被下候三百石被爲拜領被下候樣譯は甥を養子に仕娘と取合置申出申上候へは扨々尤成事を申上候然らは二男にも三百石可被下

と被爲拜領候志方玄求親十兵衛かと存候嫡子半右衛親門跡千石被下高麗門今の中根何某が屋敷に居申候半右衛門嫡子を宇兵衛若き時はやつこ組二王組いはら組抔と申候て或者沼田半之助殿兼松半平山崎新四郎扨其外若輩にて松崎大吉熊谷忠右衛門同氏內入も其內に入申たるとて角入文左衛門しかり被申候事覺申候右宇兵衛親跡被下候時に御斷申私病氣に御座候故存る樣に御奉公仕かたく奉存候しかれは伯父半七私弟又次郎此兩人に三百石宛私には四百石被爲拜領被下候へは奉願其通に被仰付候其時分扨々能く分申候若き時うは氣者と申たるか必々左樣の者には年寄正しき者に成候とて御老中も御譽候由に候近年の若き衆の樣にさもしき侍の道に不叶事はなく候右のことく年寄候へは必々能成候故何に仕候ても不實輕薄者に能は十人に一人と拙者覺候て右の通にて候右志方半兵衛ヶ樣に正しく申上候へは　上にも御意に叶三百石被下候儀は扨もヶ々侍たる道に心かけ申候者他人にても我身に引受可存儀其刻の御年考申候へは御廿六七にて可有御座候三十一にて御逝去被遊候如斯御代

々正しき儀に當世風の何のかと不實にて勤仕合成男多く候必々天罰御先代の御心に叶可申樣なく如斯調候內にも拙者五ツの時奉見候事奉存落涙仕候各の見ぬ殿樣の儀とて親の御恩蒙りたる其本々々を吟味被仕おのつから拜し奉る心にて必々勤可被申候

一御前樣本源院樣は延寶三乙卯年二月廿日御逝去の時百ヶ日の間村井源兵衛拙者歩の御使番のとき御用被仰付相勤申候七日々々には水戶樣御兄弟讃岐守樣御菓子等御佛前に備り申候右の通の時分者御側外樣物頭小姓組每度出合心付見申候御佛前見物に立なから見被申候遠坂關內殿は心安く候故此中每度ヶ樣々々見申候此內には當　御代より被召仕候衆先　御代に親を被召仕候衆段々心付見申候かの人は御寺にて致食傷候漸々被參候樣承候と申候へは多分死可申そ誰は島原にてたゝみをかふり居たる誰は如此抔と古き咄被申聞候拙者おそろしく無勿躰中々皆ともことき歩御使番或は知行被下候ても外樣者大小共に御存命に何として立なから見候樣なる事可有樣に不存候又新參者は道理代々親

の御恩を蒙りたる其子さへも存候唯今に成つく〴〵存候へは早各の前に成申候間能如斯事心付可被申候神佛前にはいかなる者も男女ともに拝し申さぬ者はなく候老父は　御名の書付たる本古にても火にくへそゝふに仕候へは親以の外にしかり被申候其おしへより如斯心付申候ての事に候關内殿は初て召出候時の組頭にて後々迄かわゆかり被申候一熊本老父長屋に居候時分關内殿御出候て咄居申候時色々咄候て後に奥に參候へは關内殿何を御咄候哉と尋被申候故いや世間の沙汰申候通御加增にて御小姓頭と申由申候へは昔者しらす今小姓頭勤る男共見るに成ましき者にてなく候おれ者五拾挺頭か望と御申由咄候へは扨尤成事あれ者祖父越後とてかくれなき人にて　三齋公御代千五百石にて被召出親父は關内殿とて島原討死兄は孫九郎とて眞源院樣追腹めされ候さすか其末はとある伯父は今の志水伯耆殿是も働ある人にて今殘る大身の古き事知たるは別にはあるまじく候我に心安くおもはるゝと見へたり隨分咄古き事能く聞召置申候へ惣別聞たる事後に忘るゝ物そ書付置たるか能きそ

扨名字名もたとへは初て聞たるは何そ何の某といふ其字成とも覺又何そにたとへ必覺に山か川か水土花なとにたとへて思へは其儘思ひ出す物或は御供の時川にて水出候哉見て參れと　御意の時は川端か何そに目しるし付て見候へは後に水增或は水へりてしれる物兎角武士は武士の咄當世はやる事は能はなきそ古るき事ならては役にたゝぬそ又若き者は必年寄嫌ひ申そ犬の年寄たる樣なる男もあれと夫とても何そ一事成とも能事覺候物そ若く心かける者は色々咄聞其内に心にて吟味善惡を心にわけたか能きそ　妙解院樣御代上方より町人御愁比成者參候て歸候時金子可被下と思召御床の視紙の内に拾兩の金子視の下紙の内に被召置候て御目見仕候時明日立か我に金子をとらするとて次の床に置たそ取れと　御意被成候扨彼町人かそへて見れは拾兩なきによりいな事と思ひひたと吟味仕拾兩取て能出御禮申上候何程かと御尋被成候時十兩と申上候へは扨々念を入たるなと御笑被成候町人故多分かそへ可申と思召ての事萬一侍の子供に左樣にかそへ取候はゝ一代御見かきりにあふへき

そなとゝ被申候惣躰何そ申て親の前に出候時か又は坐敷へ客にて茶の給仕に出候時　妙解院樣咄に成と是は又長く可有と兄弟寄申たる事存出し候不斷心に忘れす居被申候事誠以其信にて如此と涙を流し候

一江戸御供にて參候時袋井と申宿一里程手前にて御意被成候は最早袋井は近きかと御意ゆゑ一里斗と申上候へはいつも出候親に孝行成乞食今日も可出と思召奉行共に鳥目をとらせよと被仰付候定て出ておるへきそと御意被成候はつと申其儘落涙仕御跡に少しより扨々乞食にても孝は天の御惠と申せは明らか成事と存奉落涙仕候御覽不被遊候にて其儘下り候へ共跡にも御供衆居申いかゝ可存哉と致迷惑候惣別揃者は十一二の時より涙もろく下々出替りに暇もらひ出候時人により名殘おしく落涙仕候恥敷存候

一又道中藤澤の宿一里半斗手前になんごちやとだんこなと賣申茶二三十間有之候御供代村井に替り申候御意被成候替り候へは村井申者早追そ御意と申候揃者存候は皆共は代り有之歩行より下は皆々毎

日々々の儀御存被成候てとふ仕候事かと無勿躰奉存候て御供仕候藤澤十町斗此方へ入江又右衛門出居被申候故申上候へはとれ々々と御意被成又右衛門出か御口上は申すな宿にて聞ふそと御意被成扨揃者に御意被成候は扨々能所へ又右衛門は出申候いつも　清高院殿より一宿前へ御着被下候明日は精進日ゆゑ暮ぬ先にと思召今日は御急き被成候最早靜に參候樣に申付候へと御意被成其時もはつと奉存扨もゝ々御尤成儀不存前にいな事と奉存候事は扨々無勿躰儀と奉存候後に左に林兵助居申揃者同さに奉存候と申候扨江戸御着坐の時芝御屋敷表御門御はいり被成候時御女關に　與一郎樣御十一二の比にて扨も御盛長被成御機嫌と御祝の内奉見候へは御落涙にてはつと奉存誠に是は　清高院樣へ御對面可被遊被思召上たるよと老母事を存出し上下共に母を思ふは乍憚同し事と落涙仕候て無程御祝すへ申候へは大友殿御命院其外御心安き衆參今日は天氣能扨々目出度奉存と被申候へ共しかと御あひさつもなく御刀を御取被成早く御通被成候御側衆其外大勢能出居被申候へとも頭を下ケ居

被申扱拙者にむき何も仰右目出度と被申候へとも右者も右申仕合故頭を下ヶ兎角の返答もなく居申唯今も落涙仕候

一酒井左衛門尉様江光姫様御祝言の日は芝の御廣間御番にて詰居申候拙者前四尺程間有之折節遠江様被成御座候御敷臺の上左の方のぬくい板には蜂須賀飛弾守様御座候皆共詰居候御廣間一間上に左京太夫様讃岐守様刑部様御兄弟何も被成御座候飛弾守殿夫へ御座候ては皆共是にありにくゝ御座候是へと左京太夫御わいさつ被成候へは飛弾守様御手つかれ私儀は勝手に是か能御座候由御こしの御跡より被成御座候筈故右の御挨拶と存候しはらく仕候て　妙解院様御出被遊御かちかみを少御明け御こし出候を御覧可被成と思召御右の方御覧被遊候へは御一門様方被成御座候故行列を見可申との御意にて御急き飛弾守様被成御座候向御右の方御玄關の戸を御とらへ御覧被成候内に御落涙を見申候是は御前様被成御座候はゝ彼思召上たると奉存其儘落涙仕難儀を仕候共前に承候へは奥にて御一人の御世話と承及申候扱亦其前に水戸様奥へ御出

被成光姫様御供に被召遣候女中何れも上中共に御召出し御意被成候は何も女にても能承候へ右衛門尉は小身には候へとも先祖の武功により如此皆共も安樂に被成御座候越中殿は家も能大にて候左衛門尉は小身にても右の通候間此趣を女にても能存候て必々何事によらすせまきの廣さのと部屋々々の事にても不申様に心得候へと委細の御意と其前承及ひたる衆何も扱々御太切思召如斯　御前様御存生ならはと拙者式迄奉存候故右の節落涙難儀いたし候唯今調候内にも其時同前に落涙仕候

一御前様は本源院様と申候拙者初江戸一二度参候迄は火事にても、太守様御出被成たる儀無御座其刻初て御行列と申事極り申候

御前様御行列も極り申候其節は歩御使番にて御番仕居候處に田邊平助殿通り被申色付の間物頭衆居申所にて咄被申候故能く承候唯今安藤久左衛門三野嘉右衛門方より御用有之間小姓頭共の内一人参候へと申來候故罷越候へは今度差上候御行列付は御表より御極め候哉又は皆共打寄極め申候哉相尋可申との御意と被申候故私共打寄相極申出申上候

しはらくにて両人罷出被申候は私共極申候は、御好被成御座候御長刀の持所無敷被思召上候御先へ参候儀御意に叶不申候御與の御右の方近くもたせ可申旨に御座候扱々御尤至極に奉存候皆共打寄極申候と申上候へは心付不申皆共と可被思召候無調法千萬成儀を迷惑扱もゝゝ乍憚奉感候と神以落涙仕られ候一座にて被承候兼同前に奉感被申候拙者もはるか次に居申候へ共落涙仕候存出如是調置候右の通の儀に御座候故御逝去の刻何れも侍中愁傷不浅御座候

一御下國の刻大津御一泊之日内牧より雨降道あしく二重峠おり候時分就中すへり御駕にとり付隨分念を入かゝせ申候處にて御駕の者共も案堵仕候所にろく道の所にてふみすへり御駕の前はなれ申候共儘三尺手拭にてからけ可申ゝ仕候へはいや見くるしく思召候御召様か有るとて左右の御ひし懸に御取付御ひき立られ御きうくつに思召たるを見申共儘御駕の替りを大津に取に遣候故大津中さわきたると後に承候扱御宿に御着被遊候故御玄關前に大半切に水入候前にて手水なとつかひ申候へは柏原

九八郎出被申候右衛門御用有之候上り申候へと被申共儘九八郎は奥へ参られ候同名文左衛門御番に居被申以の外氣遣成様子何とゝゝと被申候處に朽木内匠殿出被申候様子を見申候へは笑ひゝゝ出被申候故少拙者も案堵の心出申候扱被申渡には道あしく度々なけ可申様に思召候へ共共方心をつけ申故なけ不申候ろく道に成候て案堵いたしよみすへりたると被思召候必々御駕の者ともしかり申間敷候又替の御駕共儘取に遣候事尤に思召候併重ても有間敷事にてなく候道中は不及申江戸にても可有之と思召候間御小姓頭共に相談仕候は、歩の御便番をつけ遣可申候亦熊本へ御着座にて共儘御駕つくろはせ申間敷候何かと可申候暫く間を置候て可申付旨被申渡候扱々難有仕合に奉存候扱いつもは今日の御供仕候者は非番にて明日は不罷出候へ共右の仕合に御座候得は今日は逗留仕明日御跡より熊本へ可参と申候へはいやゝゝいつものことくめさるへく候未た御腰物も御持なから九八郎傳右衛門に殘り候へと被仰付拙者を御呼傳右衛門か事の外迷惑仕と被仰聞候右御様子にては爰許へ御殘候

事必々無川に仕候へ扨々忝思召事無餘儀候とて被
罷立候跡に其儘文左衛門被參候て皆共迄難有奉存
候其身御請の樣子尤に承候目出度々々と被申候
扨しはらくの事ゆゑ村非も林兵助も氣遣に存待宿
所に出居申何と々々と申候て宿へはいり右之通申
聞候へは神以兩人ともに涙なかし扨々御慈悲なる
儀兩人共に道にて窺なけ候故人夫をたゝき能かき
おれとしかりたる事今少先の事に候皆共式は誠に
々々時間敷仕合御窺なけ候てくつれ候とて大津中
驛き熊本にも聞へ可申候早々罷歸候て一門中にも
案堵させ候へと申候故頓て罷歸申候

一其刻佐藤八郎右衛門と申は五百石にて御鐵炮三拾
挺頭之承養父にて候御知行差上候とて引籠居申坪
井兼松屋敷にて候見舞申候へは其儘被申候は描者
儀に候へは他人にては遂不申候久々遂不申其上今
度大津にて御窺なけ御迷惑の旨承候へ共具に御咄
承度と被申候故々樣々々と咄申候へは扨も々々難
有思召事尤に候　妙解院樣は御聞及可被成候御若
き時分は御短慮成儀多く御座候或時御窺なけ前へ
御もたれ被成御座候時の事にて御口中少御痛被遊

候程の事にて津川は譯有人ゆゑ四郎右と御意被成
窺の者共なくべくとは思はぬとも腹かたつはの前
かた兩人せいはいさせ乘物奉行も迷惑させたと御
意兒角御暇被下候と曇申候け樣の儀描者能存咄申
候隨分々々能御勸候へ描者事御咄を承候ても不及
是非仕合描者願の趣定て御聞可被成候如此の　御
主樣にはなれ申樣に成行申儀は心底察候へと其儘
なかれ候尤成事と描者も落涙仕候八郎右衛門儀は
同氏彈藏母爲に兄分かと曇申候八郎右衛門は益田
彌一右衛門聟にて候

一江戸御立前松平豐後守樣へ御振舞直に御痲樣にて
夜に入迄被成御座御歸被成候時紀伊國坂にて御挑
灯蠟燭の眞を切申とて四つの內一つ殘りくらく候
て坂にておとし候へ共少もそこねは不仕能歸候刻
は夜九つにて可有哉右の仕合故餘り氣遣成事と不
存候て罷歸つく々々存候へはいや明日罷出候て此
時可仕と存候へとも草臥なから今夜がまし泊番衆
未寐入申聞敷と存參候へは帳付所に火見へ申候描
者參候を待居申傳右衛門かと尋申故此方よと何事
かと申候へは岩間彌左衛門殿御申候多分傳右衛門

可被參候間早々御次に申候へと御申付候由帳付共
申候其儘立申候へは彈右衛門出申され候は今夜道
にて御窺落し候哉御ちよふちん四つの內一つ殘り
居申候由代る々々具を切らせ候樣に可申付候定て
傳右衛門迷惑かり可申候罷出可申候間可申聞との
御意に候と被申候右の仕合翌日罷出申候はゝ御意
に叶申間敷候事はかわり申候へ共大形似たる事山
川岡右衛門御意に叶不申役儀御免被成候は御小姓
頭迄か御側衆へ遂申其時の事を申さぬとの儀に候
少の事にても我身に不調法か或は手つきの者にて
も不調法と存たる事は其儘斷を可被申候心得に可
成事と存候其後江戶御發窺被成大井川御渡し被成
候日は非番にて參候處に御挑灯持候者に遂候故右
の段申聞代る々々たれは一番たれは二番三番と前
かとより極め候てかわる々々しんを切候へと申
付候へはいや是を見候へととてらうそく見せ申候共
目悪にて〻樣に御座候故しん切不申候へはあかり
不申候就夫節々切申候成程奉得御意と申候描者見
候て扨々御かんりやくにて候へともろふそく御供
にともし申候格別にて候急度可申と存候處に折節

島田金谷御宿に御奉行被宮川金右衛門居候故其儘
如此と申候へは御尤に候神以描者共儀少も不存候
早今晚より可申付との事にて候各能々見申心付可
被申候右段々皆御窺の者共の身の上にて候者交人
の爲には身を捨被申候と被申候事每度承候故おの
つと心にのり申候て我身にはやむくる申候如御存
描者は如形そまつ成ると身氣申他人も申と承及ひ
候然れ共萬事に本を心に吟味仕候故萬事無恙如斯
八十迄存命調有候は各同名中爲と存候しかれは先
祖に孝行又作憚各の御用に被立候樣と此內一事成
とも御奉公の助とも成候へは寸志の忠にも成可申
候近年は組に惡事候へは頭にも遠慮仕候江戶も左
樣かと承及候しかれは老父人の爲に身を捨被申候
と被申候一言組頭の遠慮にて合點可有之律儀にて
當世風にわわぬとても每度書申樣に天明らかに候
へは人の爲か身にむくひ申候

一熊本にて高田九郎右衛門にそは切振廻に松野彈藏
大洞平兵衛佐分利甚兒描者參候に付先甚兒に參候
へは小姓頭故組頭衆大勢參り相談被申候跡に承申
候へは江戶へ逗留仕居申百五十石取の捨三石の事

に候ゟ樣々々に咄被申初て承候其拾三石は御日附同前に役料の樣にて被爲拜領かと覺申候いや々々御借しかも利付候と被申故扨も々々と存同道仕九郎右衛門所へ參候へは松野も大洞も居被申何やらひそ々々と咄被申候何かと申候へはいやなわのり物にて大勢人つき御奉行所に參候下津久馬伯父に芹川何某と申御中小姓初は下津と申候か近年名字替申候銀札の事と沙汰に候久我大臣の筋にて候か夫程ありて大盜人と申候郡源内坂崎半兵衛妻の兄にて候坂崎忠左爲にも姉聟の久馬弟と申候て打寄々々そは切給申候て酒なと過候時分舍人殿より用之候手紙參候何も右の咄の內にて候へは氣遣何事か同類多く尋可被申哉と申候故いや拙者も同類との事たるへきとて急き立申候へは松野は何と存候哉傳右おれか事は申なと被申候道すから右の咄承申候て拙者も無心元參候へは何事なく刀か脇差か御見せ可有との事にて候故何方に居候哉と被申候右の通申候用事濟申出候今日佐分利所へ組脇とも大勢參候故何事かと尋候へはゟ樣々々被申候是は乍憚御無理と存候江戶へは拾三石御借被遣候て當

暮は被遣間敷とは何も受取可申と心當相違可仕候私は唯今迄御日附なとの御役料のことく拾三石は拜領かと覺申候へは御借米にてしかも利付と被申候しかれは唯今迄いかゝ御心被遣候と存候は百五拾石取は小身にてならぬと被聞召候て皆々外樣に御出し被成候しかも彌一右衛門殿御組にて林久太夫壹人御斷申私は勝手迷惑不仕候年若く御座候へは御小姓組の勤仕度と願候へは其通今に勤居申候しかれは拾三石御借利御取貳百石同前に御遣被成候へは唯今は百五拾石取に功者多く被召加候て御借米利被召上貳百石取同前に被召仕候事はいかゝ御德被成候と申候へはいや其方なと時分は四拾一石手取にて候近年四拾六石に成候故此中吟味にて役人中もいかゝの相談の事に候と御申候ゆゑ神以江戶へ百五拾石取拾人餘參居申山樣候へとも名も覺へ不申右の者盡負に存神以不申上候尤佐分利御咄申上候へとの心にても無御座私心にていな事埒明可申儀と存申上候とて立申候以後內入被申候はそなたの舍人殿にて口たゝき被申候樣に成候と被申候其後佐分利に申候へは扨々能被申候舍人殿要

人殿へ節々申候へとも時明不申候此比如願成申候被申候如斯神以人の賴候事に十左衛門殿節齋にも是は其身は能きとおもひ拙者に申聞態と拙者に度々申候へとも受なから終に不申十左衛門殿御隱居拙者同前の時申出笑申候其時其男は佐渡に代々心安度々筑後以來出合能存候ほふなれともむす子出頭故仕合と御申候節齋にも神以終に不申是は御家古き者故物頭の望にて候何も兩人共に四百石とりしかも物頭或組脇勤申居候各若く候間心付可被申候歷々に盜人多く物頭にもおほふ多く候皆々浮へる雲のたとへにて候必々立身位も望不被申心を信に此書置候事一々に心付勤可被申候輕薄ついしよう隨分心付可被申候併おれもせぬとて必々心底におもはれ御咄候事必々無用世間見申候へは十人か八九人大身小身共に多く候　妙解院樣僞の實といふ事あると御意たとへはおれを馳走におもひ皆々數日心置候ても今日は心持あしくいやにおもへ共或行料理等も不出來にても其者には料理も能きなとゝ僞なからいわぬは家來にてもならぬと御意を承候乍憚加斯の儀仍身上に相應しいくらも有之

候少の事輕薄共不被申候少もゝ々不苦候唯工みて我身の慾か道にそむかぬかと工夫召れ可然候大形は外樣者小身成者心に望みなきとおのつから輕薄ついしよふはせぬ者多く候たとへは各心に國郡取申度心は有間敷候貳百石に役料百石取候男は是を御加增に仕度或は七八百石取申は千石に成度存候いかにもゝ々々尤と存候世の常にて候百人に壹人も老父の如く拙者を御小姓に出し申さす他人の賴たるとて道を正し被申事第一に覺書置候能々工夫可有候老父は大石內藏助㊁天下に名上申候大名に少もおとり申さぬ心と存候扨御役料被下候間隨分役儀を大事に存御爲に隨分心かけ是は御爲には能候へともつまる所は御國の百姓侍中末々迄迷惑可仕事なれは却て御爲に成らぬ道も有之と心付我一人の利口止相役とも申合宿に歸候ても工夫仕申事ならは少は心もつき可申候米は役故に被下候て位も應し能成申候へは諸人に用られ其役の顏にて宿にては心安き同類呼甘き物くらひ大酒くらひ申拙者存候ても大形酒にて夭死仕候同類とも殘り候ては能き死仕浦山敷大の年寄たる同前に長生し

て子か迷惑夫はこう誰はとふと申拙者勤申内何も
能存度々咄申候拙者御加増の時帷子拝領として風呂
敷もたせ參候百石兵助に五拾石つゝ拙者も致拝領
候雖有に管出申神以五拾石か忝く又少間候へはい
や百石ならは尚能可有之物と存候事度々有之先年
大海和尚に申候へは感被申佛道に有之心持にも如
斯の事工夫召れ心の内の無念出候時は此書置見可
被申候右の通大形立身近く位よく成候男に就中多
く候節齋心安く被申聞候大歴々に有之候いかにし
ても名書付不申候共人のつら見申かわいやおれに
おとりたる男と心底におかしくしらぬと思ふと唯
今果候男にても義士四十六人の外たるへきと存候
書物能々心付見可被申候必々死狂ましき者彈歟は
御川人別て多き事を心に存へく候必々御見せ可被
成候十左衛門殿舍人殿節齋三人は如形出頭めされ
御家中不殘用申候故拙者程御家中の上下共に知り
たる人此後も有間敷候名字の事は思もよらす我身
能子の爲とて一家一門をもかまはぬ男いくらと申
數は無之候心正しく道を守能く候段老父事にて可
有御存知候

一歩御使番の時江戸へ八代蜜柑につけ被遣候芝御留
守御番頭に横田五郎太夫居被申候時に參候故參候
へは無事に若珍重拙者待兼候先日御國高瀬御逗留
の内山戸源助御意に叶不申外様に御出し候山如御
存知九右衛門御次に居候故氣遣察可被申候扨源助
は御納戸役　妙解院様の時かろき者にて前髮有之
時より小者小姓とて有之候其内にても利口者にて
唯今御知行被下候随分御意に叶たるかいか様の事
と承候哉委細聞申候へと被申候高瀬御逗留中に毎
度御宿に壹人詰居申候御意に源助はいつにても一
人出居申候尤心かけ申とは思召候へ共不實成様に
思召候御爲を存候はゝ殘る御用有之者にも知せ申
候へは御用も達申候其身一人ならてはと存頼置一
番に出申と思召事の外御立腹の沙汰に御座候と申
候へは扨も々々御尤なる事能く心得相勤候へ九右
衛門は拙者子なからた様成事抔は有間敷存候へ共
扨々結構成思召と落涙被仕頼て下り可申候如斯氣
遣にて尋山咄候へと被申存出し候
一在江戸の砌節齋被申聞兵助源兵衛拙者承申候此比
御側若き衆御叱被成候事御座候てゟ様成事は外様

の侍共承たるか能く思召候三人の者共數年被召候
儀は何れも能く存たる事共上あれらは大勢咄申者
多きと被聞召候段々咄聞せ候はゝ外様の者共心得
にも可成事との御意扨々各は右の通に思召儀忝可
存候惣躰御側方勤様銘々の志薄く或相役か何と
存哉人か何と可存哉と傍輩に對おれへの志薄く思
召候抔との儀に御座候咄者共儘申候先以忝次第奉
存候若共身の上に仕候て事の外難勤奉存候は見習
と御坐候て平井山川被仰付候此頃は最早綾々御覧
あけたて仕候成程爰は私のあけ申か能く存候ても
相役の前衆控申事も多く御坐候源太も其通と存候
右の儀を承申候ては何時も相役に後に斷申か唯今
より申聞候か中々難成事に奉存候段申候へは必々
御遠慮有間敷候成程其通に勤候へと被申候唯今存
候へは成程左様成儀のみと存候兎角何事にても御
奉公實に勤申候はゝ相役に申さすとも互に虚實は
存たる事相役扶持も能く可有御座候拙儘奉行勤申
刻池邊宗川節齋に被申候は原田小右衛門富田貞右
衛門相役にて申悪敷候段は無隠事御聞及被成候儀
に御座候就中互にはけみ申候哉數十年にて一日も

かゝし不申煩ひ申時も薬を用なから勤候様に承候
源太傳右は前々より心安く相役に成り被申候はゝ
多分互に申合少の風にも互に養生召れ自分の用事
も互に申合御門外にも折々出可被申候脇よりは小
右衛門貞右衛門とは替りたると可申候併行衛永く
申合被勤候はゝ却て一日もかゝし申さぬ衆同前に
可成と被申候由其時分迄は知人迄にて心安く咄申
事無之候つる本より拙者心にたしなみ村井におと
らぬとの心は何その時の事常勤は年も拙者より增
新參にて　御代々の事拙者の様に存申間敷候随分
申合勤可申と存三十一歳より六十年迄同し様に勤
候へともあひさつ能く勤申候心には是はと存候事
互に可有事に候へ共同し兄弟にても思ふ様になく
候侍たる者のさもしく相役よりは能く見申様に
上にも能く思召様にとは近比々々心の内人はしる
ましく存ても　天明らかに候へは皆々扨も心安き
相役と申候村井は直くなる者に候人を何とも不存
候て人に憎れたる者に候或時水戸様へ御供に參腰
懸に大勢咄申内に相對の事不存候て男振申出笑候
へはそなたは拙者縁者の事知りてか知らぬかなと

丶少迷惑仕たる事有之候其後富田貞右衛門拙者に咄申候は御相役ヶ様々々咄申に付拙者申候は曾て不承候又そなたは其儘たまりて居被申候哉御供の時にて双方所から悪敷候左様の事は昔より有之事にて少も互に武道の疵にならぬ事神以初て承候と存候は丶其時堪忍仕たるは不苦儀と思ふて其分にて通り申候か拙者にも咄不申候必々御沙汰御無用源兵衛承候は丶そなたを恨可申候前々は相役にて師道と存候ても時事によりたるを却て宜く御咄候様にと存候又御咄承候ても神以源兵衛に申聞候拙者にてなく候由申候行當りたる様子にて其後拙者に一人も右の咄申たるは無御座候原田小右衛門と申わしく勤たる故心に拙者もぬしかことく拙者承悦可申と思ふて咄たる儀と存候各心に可成調置申候相役の能は申聞悪敷事は控度存候かけ事と申別て古人嫌ひ申候同苗中寄合咄申事夫々の身爲に成候様にと存如此大形は我身にたしなみ不申人事はかり申候儀世の常にて候如形咄申事數寄にてむさとしたる咄も仕候へ共心の内に吟味いたしとかめられたる事なく候たとへ咎められても御番所か御

供先か或は大勢居候所にては尚以咎め申候は丶いや不存候由申候迷惑いたし候拙者も人か咄承候て申候扨々致迷惑候と申又返して申さは爰は所悪敷候重ての事と申心をしつめて少もせき申さぬ人は大勇と可申候扨堪忍成らぬと存候は丶いつにても成る事にても一坐にて大勢にても其内少し心ある者は扨々むさと仕候せり合にて候互に重て御吟味可有候爰は御供先御番所又は大勢居候へは少御遠慮可有之互に思召ま丶は成申間敷と申候は丶一座の内にて早大勇と可申候何事にても是は事に可成と心付候は丶早く知る人にてなく共其時未得御意候へ共何も左様に被仰候所にて無御座と存候なと丶早く挨拶仕候へは脇よりも申物にて候度々見申候拾人か九人はたまり見聞て跡にて何のかのと批判仕たかり候夫は能き侍の事なと承申さぬ男にてかけ事と申以の外嫌ひ候事に候

一江戸御立前稻葉左京様に朝の御振舞に御供仕候腰懸に大勢居申候拙者歩の御使番の時にて皆共は小姓組新組知る人多く毎度一所に居申候御先供より使番に成候者共は大形其類にて先供仕居申候處に

居申候右の腰懸に御馳走にてたはこ盆なと御茶も出申候故腰懸に置不被申せまく候故に土地に置候大鹽彌五右衛門拙者左の方に居申候故其儘おり候てたは　給申候跡に藤崎太右衛門御供代に參候て彌五衛門跡に叨て居候故直に居申候處に彌五右衛門たはこ給仕廻候て爰はおれかおり所と申候へは太右衛門申候は何とそなたのおり所とて腰懸にきわまりあるかと互に申合候内に拙者申候は太右衛門殿先合羽御ぬき候て緩々居被申候へ拙者に露かゝり迷惑仕候なと丶申内に拙者右の方曲尺のてにて餘程四間斗有之内藤五郎左衛門居申候彌五右衛門殿爰か明居申候爰に參れと呼懸候故彌五右衛門其儘參候故に跡より太右衛門唯今のか心かゝりなら は何時もあひてそこ申候故拙者左に居申候故扨々むさとしたる事をと申候彌五右衛門兎角の返答なく候其時太右衛門左の方に新組一人居候へとも何事も不申たまり居申候尤其外一人も不申何も見申斗にて候此儀にてなく別儀にて後には彼新組も御暇被遣候扨右京様御立被成候て上御屋敷に被成御坐候其晩は水戸様へ御振舞に御座候筈にて御供

代に吉田傳兵衛富田貞右被門眞野半兵衛なと御鉄炮頭小原勘右衛門小屋にて咄居申候本より心安勘右衛門小屋に參候右の通の咄申候て各八代にて心安く咄被申たる事にて男振程なく僞咄多く出頭と自慢仕諸人にくみ候故多分は彌五右衛門返答さへなきと可存候拙者は今朝の返答なきは心内に御供より戻候ての事と存候か又は耳少聞かね申候と先へ御意承候にもかたふき承被申候故太右衛門口上聞ぬ事も可有哉水戸様に被成御座候は丶多分夜に入可申候心をつけ被申候様にと申置候て芝へ罷歸候夜九ツ過時分御歸候大鹽小屋は御次方に居申所は白銀小屋中小屋に居申藤崎小屋は目黒御門近邊小山宇右衛門其時分廿歳斗にて相小屋にて居申候拙者共歩使番小屋者五六拾間餘何も相小屋並び目黒長屋の角辻番居申候後にて御歸の御供皆々歸り候故少用有之とて罷出萬一大鹽か藤崎所へ參候事可有之哉と心懸しはらくあなたこなた仕御屋敷中心懸候へ共無別義小屋に歸申候共後熊本へ御下着被成拙者も禮廻りに續彦太夫所へ參候處に藤崎右作右被參咄居被申候拙者と承共儘玄關に被出扨々

能所にて逢申候先々江戸にて同名太右衛門と大鹽彌五右衛門と御供先にて何か口論いたし候所に拙者居申双方事なく成候由此中咄承候拙者直口承度唯今も彦太と噂仕候何と々々と被申候ゆゑ右の通の事にて中々熊本へ聞へ可申とは神以不存扱々それは熊本へ聞へ沙汰有之程の事にて無御坐ヶ様々々と咄申御同氏は少し過たる様に存候しかし大鹽か返答は耳か聞へぬ故かと存候へ共何れもは大鹽さん々々々々の様子と申候いか様平生男ふり自慢にて惣躰諸人しかり申ゆゑ今度の外にヶ様々々の事もあるとて不承候前の事迄申候拙者存候は最早大鹽立候て太右衛門殿は此儘居られ候へは先其儘にて後々はいらぬ物と存候へ共何も々々太右衛門殿能被申候由神以十人か十人左様申候間御心安く被思召候へと申候得は神以拙者申通に候先大鹽か おれかおゐ所と申程の者にいやと何のと申は太右衛門不調法に存候少しも言に成申事にてなくそなたのおり所か極りたるかなと申立退可申儀に存候何も如御存惣躰太右衛門律儀一遍の男にて働不申右の通と存候と作右心に不叶被申分にて候故に拙者申候はいや左様成事曲様の年ならては成間敷候今度何も々々太右衛門殿事神そ々々譽大鹽はさん々々申候間先々御案堵拙者も神以太右衛門殿は少過たると存候へ共おとりたると申よりは過たる方能と存候と申候ヶ様成事早熊本へ聞へ仰右衛門居申杯と沙汰有之候神以きもつふし申候是にて各能く衆々物の吟味可被仕候

一老父拙者共に若き時咄聞せ被申候昔備前か周防か兎角新太郎様相摸守様両御家中の儀に候侍の子とも六七人夜咄仕候て夜更歸候時分路地口ゟ歸申候先に立申者蹈石際にて小用仕石にかゝり候所を跡より段々参候者扱々たれかしたるか小用か仕かけ置たはけたる男と如斯申候へは先に参候者おれかしたたはけとは曲てをれと申皆々何のかのと互に申々々々歸り候其内一人心付是は今夜にも将咄候哉と参候處に頓て近所にて小川仕候男宿の門にはいり候刻さらは々々々と申くゝりのかきかね懸け不申共儘にてはいり申候右の内に心かけ申候男扱は今夜と存何も致同道銘々宿へはいり申候心かけ居申候男にて候へはあなたこなたと心を付申候内

に兩人とも互に出合候故心かけの男も中に入喧嘩そ出合々々と高聲に申候へとも近邊の者共夜更寂入たる時分なれは壹人も出合不申候佐分利軍兵衛と島原にて能武道心かけたる男夜うかと寐る男にてなく聲は三十丁程にて聞へ道は五六丁の所をかけ付参候然とも切合一人は即坐に果心かけたる男もおさへ申候とて深手負尤相手も深手負軍兵衛近所にしらせ双方へ人を遣候て手負死骸片付させ其後御吟味被成心かけたる男は被召出尤軍兵衛に御褒美被下相手も養生不叶相果申候扨右の同道仕候親子共被仰出候は今度の儀子供若きと乍申侍たる者の左様に詞とかめ仕候に心をつけ申さぬ儀は不及是非思召就夫今度心悪の何某儀は被召出候又右の子供の親々に被仰出候は世悴共にも兼々武藝執行仕内にも若き子供には夫々に應し語り聞せ申事は定りたる事に思召候しかれは父子共に御暇被下候由名も神以夫々被申候へとも唯今變不申候兩人の内即坐に果候伯父江戸御使に参り手負養生被仰付候にいか様何とそ御納の可被成候思召たる事果たる者の伯父即坐に相手に切腹不被仰付候故腹立家老中へ節々参存分を申たるなとゝ被申候へ共覺不申先如斯覺申候軍兵衛は此方の佐分利にて再兒には咄申候承及たると被申候先年江戸より御使に京へ参候時か小田原入口にて荷馬に軍兵衛札有之に心かけ見候へは怨てて寐入居申候色黒くもかさ類此方の道家角左衛門と申同姓文左衛門所にて逢申候能く似たると存其時分道家も甘挺文左衛門同役にて候右の通の咄承置候故おのつから心に覺申候何事も親の恩ならぬと申事なく各爲と書置候在江戸にて承候牧猪之助若き時分山崎通り申候時松村貞右衛門方へ伊藤梶右衛門樽有る奉公人居申候斷申候へとも其儘にて召置候哉伊藤参り呼出し打果候故松村も出何角申内に猪之助承候て門内にはいり私は各様と御知る人にてもなく候へ共通りかゝり申候とて双方事なく慎め申と江戸にて承候猪之助は無程物頭に被仰付候猪之助親五助は拙者に少增可申候前髮有之時分より心安く語り申候親猪之助は昔し御奉行目附佐分利吉左衛門今の十左衛門親志水金右衛門今の次兵衛親上村理右衛門は今の理右衛門祖父にて右四人にて勤申候唯今は十

人と覺申候中にも牧は左馬允甥かと老父被申候左馬允は牧新五と申　三齋公被召仕六千石に御城代後に澤村大學相役に被仰付候由承申候如斯の同名故武功の昔咄親代々承傳被申候と存候唯今牧猪之助と申候哉平井貞之丞小しふとか小野權兵衞なと緣者覺申候

一右の牧嫡孫今の牧左角にて候牧市左衞門祖父尉太夫は次男にて五左衞門と申歩の御使番勤百石被下江戸御賓藏御預けしはらく定詰にて拙者心安被申候老人にてきうくつに存其上茶屋にて茶給申事も難成御長屋より皆々咄居申拙者返り候へは扨も迷惑いたすへくと何も笑申候然處　三齋公一色殿御切被成候咄其外古き咄なと毎度聞せ被申候或時歩の御使番の時十五日か朔日か御禮にて拙者も禮に小屋廻り可仕と罷出候刻急に御出被成候右の仕合にて拙者一番に罷出候へは　太守樣は早御出被遊御玄關の戸を御とらへ御供揃申を御待被成候小笠原古庄左衞門殿は御小姓頭にて其時分御書奉行勤被申候庄左衞門殿御側に居被申候か拙者一人罷出候を見被申高々と傳右衞門御供揃不申間揃候へとふれ候へと被申候　太守樣右の仕合にて御待被成候故御番衆中に罷出御供仕候へと被申候へは　太守樣いや々々餘りおそくなく思召候供役の者共揃御出可被成候由にて御控被成候處に段々罷出有馬玄蕃頭樣以の外御急病にて御見舞に被成御座候有馬殿は其時分水戸樣御歸に御逢被成候最早斯明候由

太守樣へ御挨拶承申候罷歸り候て以後右の尉太夫其時分は牧五左衞門と申候拙者へ扨々先日御供に一番に出候由兼々申樣に奉公人は心かけ候へは天道に叶必々志顯れ申事昔より承及候と事の外悅被申候拙者申候はいや今少し早く可罷出所に禮廻りの衣類にて小屋に羽織の替を取に遣候と申候へは五左衞門其儘扨々其樣成る事は云はぬ物急に御供ふれ成れは衣類の善惡によるへき事なく候重て人にも申間敷事さん々々しかり被申候唯今幸右衞門爲には大伯父にて候不思儀成る緣に成申候右の五左衞門御賓藏預り申內　太守樣御在國の刻若狹守樣御庭御見物被成候刻御賓藏御覽可被成思召五左衞門御藏あけ候へと御意被成候へはいや是は　太守樣御覽被遊候時にも御供の者共御殘し被成候右の通に御座候へは御預被遊候私にても唯今御意にても私心まゝには難仕と被申たる由若狹守樣御若き時分にて以て外御立腹の樣子に見へ申候由承申候然共箇樣成事前々より承　三齋樣時分は別てケ樣成人多く承傳候事とも候へ共事長く書置不申候五左衞門儀は島原働故百石被下同類百五拾石弐百石迄成候も小堀八郎右衞門と申候一人にて御座候五左衞門は百石宛兩度御加增にて三百石御側鐵砲同姓文左衞門相役に被仰付無程外樣廿挺にて果申候多分若狹守樣右の御咄被遊候哉唯今の牧市郎右衞門祖父にて候是皆祖父の武功の咄古人の咄承たる印にて候五左衞門は左馬允甥親丞太夫は左馬允弟にて候關ケ原の時分御家の者の內に兄弟共に無之候左馬允は新五と申候か丞太夫は島三郎と申候か

一江戸芝御屋敷より上御屋敷に御逗留被成候事御座候て御供衆代々勤申候御供小屋一所にて大勢代々居候野々村藤太夫鍵持に惣小屋に居申候前田彦太夫と申は日向有馬右衞門殿牢人にて不破五郎右衞門姪聟にて候唯今子供は不破十之允跡二百石取可申候彦太夫事大口者にて男らしき咄斗好申候右の鍵見候て拙者に向誰か鍵かと申候故藤太夫鍵と申候へは何も皆々鍵をもたせぬに知行自慢か何時もおれか出る時はおれか鍵よと申候故拙者申はいや々々そふいやるなつく々々と見申藤太夫か親は歩の使番にて島原働故にあの並は弐百石百五拾石被下候へ共清高院樣に御附被成候故に三百石初か被下候いか樣親の咄を聞たる者各鍵もたせぬに一夜にも逗留するに奇特成事と神以心に思ふ別の事はいかにもおくれ見くるしく然共鍵もたせたる事は必々別人にても譽たか能きと咄々伏居候處に梶原勘助嫡子源太右衞門とて今の弓削新助伯父前々勘助が兄にて親身三百石取如形能き男にて大酒呑にて候何と々々皆小屋におしやるかとてはしこのうへ一段目迄上り申故拙者申候あかられと申內に彦太夫ははしこのきわに伏しながらねむりたる風情にてへをひり申候故に梶原は拙者に重て々々と申歸候跡にて彦太夫あの樣に見ぐるしき男にはへひ

りかけたが能きぞと申候故いや〳〵々々梶原は心には扨々と思ふと見へて上りもせず戻たるとて咄居申候上田新兵衛殿は親勘助心安く夫故子の源太右衛門も參たると存候上田殿より呼に參り候て色々の咄の内にいや御相小屋衆にはむさとしたる事のみと承申候拙者詰居たる時分成とも少左樣の事なき樣に心付候樣にと被申候故拙者申候は成程私も心付申候へ共皆々若き内にはむさと仕候事のみにて或は御平小姓は御知行取高ぶり申候へばしかり又知行取は親の跡被下自分の勤にて取たる顏にて位牌知行にても御中小姓をば何共不存慮外者の何のかと異名を付申候被仰聞候通にて御座候隨分私より若き衆には隨分心付可申候扨是は多分梶原源太右が咄御聞被成候て察申と申候へばいかにも〳〵先日被參候て惣小屋には居候事難成箇樣々々と咄被申候拙者も居申たるとの咄にて候つると被申候拙者申候神以其刻はつと存候へども何事なく立被申候定て心底に立腹にて可有御座候併箇樣の儀は心安き内は互に數の多きを自慢にて私などゝ若き時分は相小屋多く度々崎座候事に御座候能く思召

被成御覽候へ箇樣の咄皆々承候はゝ源太右はへをひり懸られ堪忍仕候と多分沙汰可仕候其刻は不作法成彦太夫は却て能評判に逢可申候私存候は必々脇にて咄不被申樣に仕度と存候と申候へば上田殿いかにも々々々々と被申候其後沙汰不承候尤拙者彦太夫許其の時居申候外に梶原ちらと參たる迄にて何の沙汰なく候此沙汰大に成候時は梶原心ならず彦太夫と打果不申は成間敷候大鹽藤崎兩人の事熊本へ聞申候にて察可被申候其後無沙汰候つる事

一松兵助咄申候亭主は御使番勤居申候兵助も心安く枕にて咄居申所去る小姓組參候ておれも草臥たとてわきに有之亭主の枕を取申候かひさに敷申候所を起上り扨々おのしはうつけ者侍の枕を足に敷とておつ取申候兵助も氣もつぶし起扨々そゝふ成事是を召れ候へとて兵助枕を遣申候先心安く候ても枕を膝に敷申事大成誤り又亭主も短慮に候扨々そなたはふしつけ成ゝと候何そ枕に成候者遣候が又何とそ申樣可有事に候兵助も扨も々々短慮男と申候箇樣成事多く候能々兼々工夫可有候喧嘩口論

能き侍は不仕候双方能仕候ても大死と古人申候主君に命上私の心儘にあはふをつくし能く仕候の惡く仕候〳〵は賊に双方犬にたとへたる事尤熊澤員原など書置候書にも喧嘩犬にたとへたる事心付見可被申候未御入國前に奥田一殘と申島原にて能　光尚御代五百石にて被召出御逝去以後何と存候哉知行差上一殘と改致法體白川長六橋向に町屋立居申候同名文左衛門以前語被申候拙者も右の通に存候或時澤村宇衛門御家老の時林孫助是も五百石取御使番勤居申候能男振にて覺申候右兩人宇衛門殿所にて其外大勢咄居申所にて互に何かせり合申時孫助申は其方は一殘と付被申たるは定て御幼少の殿樣御入國も被成候はゝ一命差上可申覺悟に見へ申候餘り詞過たるぞと申候へば一殘返答なく堪忍仕居申候孫助は以後阿曾へ御腰物被差上候御使者番に自身の刀に取替候て知れ申候哉御暇被遣候拙者初江戸迄は神明邊に取賣仕乞食同前に成候由皆々咄たる衆にかくれ申由承候如斯の大盜人も口きゝたるは口論杯樣成事には先見事に見へ申候大勇は申度事も控あの男相手には不足と存候へばいか

に々々誤り申候御免候へと少も々々心に懸申間敷候木村長門守事具に見可被申候九十九の鼻のかけたる猿が一疋の鼻のかけぬ猿を笑申たとへに候先頃三悦より扶給申候内に天の見る事宜く候へば人の善惡のとなへに叶不申共心に天道おそれたる古語書付被差越候扨々尤如紙面萬事心つけ被申候へば珍重存候又幸右衛門先年西澤氏時に廿七日は古文右衛門忌日に文左衛門役も被除御暇も廿七日拙者申ごとく祖父の罰を蒙りたるとの事拙者へ被申候扨も々々拙者は覺不申候に尤と存被申候が心付られ候事唯今少も失念不申又傳右衛門御留守番に參候内紙面にて方々御使者勤申刻拙者御供にて定て此通を通りたるかなとゝ心付たる紙面にて早江戸の勤致安堵候他人にても一言一筆の事にて心付候へば大形十に八九ッは如察候八十に餘り數十年の事覺申候隨分々々隙に古人の傳に心付可被申候尤聖賢の書物見申候ても拙者式文盲故中々わけ知兼申候近く熊澤員原書たる物先見よく候各心がけ被申候へば幸之助傳次幼少より尚々能成可申候隨分心懸可被申候忠孝に成可申候

一步の使番勤申時分芝御屋敷に被成御座候小屋近く湯屋有之候故毎度入申候昼より晩方は大形御手廻御組の者共入申候右の仕合故毎度々々出合御組の者の内に與右衛門と申候て就中慮外に見へ申候へとも歩の御使番望出申候本より知行取中小姓は昼より内に入申筈にて候晩方に成右の通に候然る處に御組奉行に無程成申候彼與右衛門も心に慮外仕たる事身に覺候哉事の外別の者共より拙者へいんきんに仕候拙者も若く有之三十か一かの時被仰付候其時分拙者存候心はいや々々拙者唯今に舊悪を思ふは扨々道に背たる事にて候歩の使番の時なれは何れも輕く存慮外したる事さのみ咎にてなく候其時堪忍して唯今拙者心まゝなる時に憎む心はさもしき心と神以たしなみ居申候其後に頭と大勢くし仕熊本御奉行所に不殘村井拙者兩人召れ可罷出との事にて不殘召れ即座に御ゆるし其内四人は直に牢舍被仰付後には四人は追放被仰付候與右衛門にて候拙者は神々々如斯に存候て心をみかき候又其時分も侍預りたる衆にも依姑息負多候組の内に御側に縁有之は或は小姓組なれは新組に成り候

樣に取成し拙者度々御供にて合出能く存候後に一江戸被召仕外樣に御出し被成候者色々有之候御結構成る殿樣にて左樣成は人により手前より病氣なとゝ御斷申樣に被仰付候歩の御使番にても金津權八と申は唯今十次郎か伯父にて候右の通譯有る者にて御斷申五人扶持被下候元田古八右衛門右の通の咄拙者に被申聞候古八右衛門は古十次郎と譯有之咄に候つる頭に被仰付候てたとへ足輕にても不及是非心底天道明らか成事　太守樣思召事心底恥ヶ敗事に候各は能々了簡可有候右の通拙者輕き勤仕心遣書置申候拙者よりは各若き時より結構成勤にて候心に末々の者にも能と存候は隨分々々取立銘々氣に入候とて少にても是は御爲と私慾と工夫可有候天の見る所はヶ樣の所にて可有之候恐れ可被申候

一廿年以前在宅不仕候前大風にて拙者家痛申候へ共たをれ家の者には御銀御借被成候坪井近邊に渡邊何某とて百石か被下候仁の屋敷の前通り見候へはつくろい能くいたし有之候公義より御借被成候故に誠に々々御恩は何事にも洩れぬ事拙者一ばいの

上にても倒家なくなく候へはつくろひさへ不成候と心に思ひ其後内入に參候て咄申内に百石取には銀子いか程御借候哉と尋申候へは百石には三百目か四百目かと唯今變不申候扨それより上はと尋申候へはいや其算用にて一萬石にても同前と被申候拙者申候は扨々合點不參事に候倒家も家にて可申候たとへは長屋座敷與とゝ樣に有度ものにて候右の高に成候ては千石餘取候人は大分に當り可申候と申候へはいや大身はつくろひは持かふりにてつくろわせ可然候家多くつくろひ多く其上御借金銀取立　時小身者は取立にくゝ有之候由被申候故やゝ々小身者ならは年數御のへ候へはいかにもしても大あらめなる吟味と存候長屋其外にて他國の者も通り其屋敷々々のかこい新敗家たてると申候ても先長屋立次には座敷與と昔は立たると承及候尤なる事と存候妻子有之候ても長屋に召置つかへ不申候と内入に申候へは尤とは被存候へ共惣體理知機人にて心には何も吟味御家老中の御談談の上にて被仰付たるとの過たる事を申と被存たる樣子故別の咄に仕候つく々々存候へは昔より屋敷拜領

にて百石高に何程と其つもりにて三百石迄は同前夫より上は段々にへり申候故に千石より上の者には下屋敷渡り申候尤妙解院樣御代には御家老にても下屋敷を御侍中居候近所にては一ヶ所も不被下今の求馬殿御入候屋敷昔清田石見殿三千石にて居被申候　忠利公御申めされ候時屋敷もせまく家來召置候處長屋より外に地もなく川端迄御覽被遊山崎に小身屋敷二軒御坐候則今の川端の裡門の向にてこさ候拙者覺候ては石見殿拜領の下屋敷御小々姓目付に被下候て知る人にて覺申候右之通山崎にても石見殿屋敷狹き事御覽被遊御直に被下と老父被申候又江戸等へ參候侍中御借銀渡り申にも拙者初ての時分迄は知行高三百石迄は銀高多く夫より上は高へり申候事覺申候近年は大形百石より一萬石迄同し樣成事御座候其時分は舍人殿一人にて何やかや銀米御内證方御坐候此事可申と存候て工夫仕參候此中同名喜左衛門と口論仕私勝申候と申候へは何事かと御申候故右申候趣一々申候へはいかにも々々々々其樣に委敷はならぬ事と神以被申候拙者心の内には何の成ましき事なく一國の内の善

悪他圖へ聞へ段々天下におよび申事少心付たる拙者或方へ不圖存寄咄申候奉行目付は心付申候ても中々内入初として御家老中の被申候事のみ請合愚意難被申時節にて何とそ心かけ候はゝ別儀を以も愚意の被申ぬ事は有間敷候老父の咄に惣別昔より能の狂言にひけそりとて毘そり申狂言或は心に叶たる者にはされる衣類不殘やりはたかに成候狂言いたし大將に見せ被申候狂言に心付申毘そらせ候時剃刀者の勝手能様に主に申事ならぬ物故衣類も氣に入たる者にはわけもなく金銀知行遣候左様成人々に見せ心つく様にと昔善人狂言仕候者も人なれは善人と申たると存候幸右衛門は唯今御補上被申候間此心付可有候御幼少様成れば申上よく御成人にてならぬ事に候拙者事如御存輕き御奉公迄勤堀内中になき歩行に出申候へども右の様に心付咄申候事に候其以後承候へば大風吹たをれ家御吟味細かに成たると承申候のみの息も天にあかるとたとへ事昔より申傳候忠節不孝主人の何その時昔は追腹孝行も父子難養物にてなく候へば知れ兼申候聖賢こへ見ぬく書物に見へ申候然共天の明らかに忠孝も死後に顯れ候

衣食住身も輕くして心をば高く思ひて道を正せよ

旦夕　おかしく候

玄旨公御歌

寄神祝

鏡こそしるゝ成けれ曇なき心を神と仰き來ぬれは

神祇

大かたは鏡を見ても思ひ知れ空に曇らぬ神の心を

右の通拙者心底に如斯調候へ共内入三盛書付たる事多分有間敷と存候先熊本にて果申候へば心遣萬事多く拙者は廿年致在宅近年は傳右衛門萬事打まかせ拙者よりは上と存候事神以多く各三悦幸右衛門皆々親より能見及申候然共若く候へは如斯の事咄候ても書たる物にてなく候へば子孫に傳へ不申候皆々老父被申たる事根本にて候先年彈藏方より古き事調置候へ同名中のため事によりては御爲に

も成る事如斯歌書付くれ候尤に存今に失念不申候

後圓融院御製

うつし置筆に何かは增鏡手にとりて見ぬ古へもなし

尤平九郎方より日外古き事承度と申來候調遣可申と初口に　御先君の御意書付申内に内入果被申候故最早拙者前と直に調申候故先後御詞なとましり無勿體奉存候へ共中々調置事不成候後々には御書候共拙者申通可被存候右の段々見被申候はゝ兄兩人より拙者心付能可被存候拙者心には神以内入三盛に及不申と八幡々々さすが兄程有之老父に似たると感心仕事筆にかゝれ不申候彈藏半助二觀拙者同意に可存候半助は生れ付とふちくにて度々しかられ舍人殿も江戸にて拙者に御申候熊本にても何ぞと云へば澤村一友同類と江戸にて被申候則申聞候間覺申べく候拙者申候ばいかにもとふらく者とは存候へ共見物所にも替り申候たとへばさかひ町木挽町は御屋敷近若者に誘れ參候由其身とふらく故同道も仕候遠方淺草邊是は御屋敷遠く火事抔と申候てもかけ合かたく第一男女のかわり御座候と神以申候八十に成候へども失念不申候同道は今の中村市郎右衛門と覺申候半助に御見せ可有候間扨も々々能覺候と可申候中村も今は卅挺預り申候若き時さのみ疵にならずと唯不實にて俊奸聖賢の恐れ書物に見へ申候亂世にて顯れ申候は三好松永石田御靜謐には知れ兼申候夫も死後に顯れ可申候半助は右の通諸人も申各も多分彈藏二觀平九郎三人共に結構に被召仕候へば夫相應可被存候又上にも左様に可思召其外不及申候拙者も各々同前にて候併親八右衛門は彈藏二觀十歳より内に被果候覺申間敷候拙者召出され候時御奉公勤方被申聞候事身に覺申候角入文左衛門被申聞たる事尚以能覺申候老母に年も五六ッ弟にて候老父老母も八右と被申男振も弟兩人よりせいひくゝ候へ共惣體丈夫に力強く武藝は不及申謠なども能うたひ被申候五十六にて被致病死候拙者參候へば病氣成れば頓て果可申候子供事頼ぞと被申小紋あさきの帷子手つゝから給候て拙者に似合不申候へ共外に何□□□呉れ可申物なきとて若き時には色々稽古仕たれ共如斯病氣にて何の役にもたゝず□歌□など心かけたらば

病中の樂みに可成候たとへば江戸にて昔御供其方抔か相組には妙解院樣御目利の者うのめ鷹の目の樣成る者今も殘り居可申候其時我等も承及び候東海寺に今も可有之候入口に柵門有之其戸御通の□明けぬ者もあり明ける者もあり心々にて　光尙公御批判被成候と承及候兎角老人のする眞似をして其內にも吟味して隨分心付申せさりととては若く候故氣遣に候委細被申候角入は袷羽織にむらさきちりめんにて打たる紐拙者に相應の羽織給り候久左衞門は黑きさやの小袖ぬけ付候一度着たるとて給候惣して老父人のくれたるを少も失念仕な人に遣候事は思ひ出し申さぬ樣にと被申候貝原の書たる內に聖賢の言のたとへに見へ神以扨もく老父は文盲拙者程さへ筆も惡敷候か心は聖賢のごとく感心申候奧田古權左衞門は百五拾石十三にて家來切候とて被下後に三千百五十石に成被申候八右衞門と別にて櫻馬場同道にて被參候節と見申候權左衞門家來八右衞門家來と見へ申樣に男もけ高く見へ申候內入三盛とは每度批判仕候不仕合にて貳百石にて果被申候得ども兄弟三人の內にて嫡子程有之と神以存る事有之候各存のごとく角入文左衞門段々立身被仕候に付ても存出し申候半助もとふらくは從弟の內にてすくれ候へども武士のさわりに成候事神一ツも見不申候實儀なる事は惣領程有之と存候事筆には書れ不申候へども彈藏二覽本より平九郎三人か實は神以拙者は上に見申候親に不似仕合にて當時の御役さへ無念に存ると見へ申候各半助咄惣體とうらく故多分何れも同前に可被存候十左工門殿は若き時分半助同前の事多き故若き時分のとふらく少も御咎なく却つて被褒たること多くそなたの同名の五郎兵衞かつらは物頭つらと被申たる儀覺申候舍人殿はとうらく嫌ひにて候山名殿大木殿兩人の內にも實の上下有之と存候同名の內餘り大はつれ仕ましく候尤すい參者從弟の分としてと思ふも可有之候其親は拙者の伯父此內さへ實の上下心に吟味仕申候前にも書たるか拙者兄弟三人に他人はしれぬもの三人の伯父內證迄通り能可能候能きと惡き是は爰か善き爰か惡きと申事吟味仕候へど幼少の時被申候去とは々々尤に存候近年在宅仕熊本にも久々不罷出候へとも大形唯

今の事合點仕候他人の役代の事も十か七八は當り申候神以十左工門殿は折々拙者に被仰出承不申內に申て見候へと御申候事有之候舍人殿は終に覺不申候うかへる雲とは世間不存役儀生れ付たると存候は丶天罰蒙可申候各能心得可被申候下々も人にて候神以尋可申樣なく候へ共十左工門樣に御供に參候へはケ樣々々の樣子拙者の御一門樣にても誰樣はケ樣誰樣はケ樣々々御食も被下ぬなと丶男は女に申女は妻に申事世の常に候夫を知間敷と思ふは先世間に申あほふにて候隨分勘略神以拙者も如形好申候鼻紙一枚如此調候にも隨分紙墨費へぬ樣にと存候紙の事は　忠利公の御筆彈藏に借置候心有て借し申候今時の若き者むかしの事存間敷候彈藏所には歷々の男參候忠利公の此御筆紙に眼を付ぬ男はうかへる雲の大將と存又少にても心付申男御坐候へは忠にも成申と借置候傳右工門熊本にて座敷持候時返し被申候へと約束仕借置候唐にも韓信か老母に一飯抔と有て朝夕定りたる食にてもおのれ々々は腹一はいくらゐ下々とてくはせぬは勘略と可存候へ共天罰蒙り可申候能々心を付らるへく候薮三左工門殿へ先年參り咄候時夕飯給候へと御申候故申候拙者宿にて給申同前の料理にて神以少給にく丶候程有之候給申候に宮仕の者に拙者に飯給らて參候へと御申付可給と申候へは三左工門殿いやおれか云付た是より其所にも可參と思ふてと御申候時忝と申給仕廻十左工門殿へ參候得は扨もく高咄三左所へ參候哉と御申候故合點不參候堀をへたて是な遠くいな事と申候へはいや三左か奧へ居申坐頭參候ゆゑ三左は宿にかと尋候へはいや堀內殿御咄にて扨々高咄と申たる由御申候拙者申樣は箇樣々々の料理にて少給にく丶存候處に私家來に直に食給候樣にと被仰付候由神以扨々忝私結構成料理被下候よりは御志の段兎角被申ぬ事と申へは誠に三左は此比も仲間と咄出候事有之二九之助盛り少も忘れす實儀者と皆々申と御舉被成其後舍人殿へも咄申候へ共大木殿は十左工門やうには感不被申候各能く心得可被申候十左工門殿も末子にて千石被下候三左工門殿も嫡子にて被召遣候時貳百五十石大組にて初江戶十左衞門殿着座にて初江戶拙者は步の使番にて二度目の江戶詰每

日毎夜小屋近く語り申候拙者式の家來に心付給候一事にて扨も實成と存候舍人殿如形同前にて候へ共兄弟衆皆々同前にて家來の事は扨置在宅より出候に終に料理給不申候十左工門殿は或時參候へは重て出候時方々仕ひたるく成申候はゝ何時も參候て食給申候へ誰も喰せ申間敷と御申候扨は近日勘略の被仰出と存候出來合も給不申樣に成申候熊本に居申者は其通在宅者は出候て不自由との譯にて十左衞門殿にはいつにても相伴にて給申候三左衞門殿へ咄候へはいかにも其通組にも在宅有之候其内得可仕候總體仲間にもしはきと存候も有之幸の御觸と皆々喰せぬ多く候熊本衆參かゝり候はゝ是は在宅故と申候へは御觸背たるにてなく候名も被仰聞候へ其拙者心安く御申候ゆゑと存名は書不申候小身にても銘々心得に可成事と存候我輿にては分に過たるおこり美食大酒のみ外向にてはおこらぬ樣に仕候事上中同然心底の程察し不及是非仕合天罰蒙る事此後も多く可有候銘々吟味可被仕候一歩の御使番の時年始の御禮廻の爲に江戸中見習御案内申事今も可有之候村井源兵衞結城孫助拙者三

人被仰付候日本橋にさらし者有之通悪に見申村井拙者は其儘見候て通り近くに糸屋太郎兵衞御用承候者の所へ立寄申候小者一人殘置候孫助に早く見仕舞候て糸屋太郎兵衞所へ參候へと殘置候孫助樣喧嘩被成候由申候肝つふし雨降そふに有之雨羽織じゆりん着居申大小の惣拵袋に頭の所紫皮にて結置候とき申事走りゝゝならぬ物にて其の後頭に又革にて袋させ申候唯今大方其如く成申候と見へ候扨參候て見申候へは見違候樣子にて互に何のかのとせり合申故村井に孫助手を取太郎兵衞所へ參候へ拙者は見違候者召連可參とて跡より同道いたし爰は大勢人集り互にとふこふとの穿鑿成兼可申候先是へ參れと申手とらへ參候内に拙者は御通悪と見へ申候無御構御通候へと申によりいかにも其通に候併奉公人は互の儀に候彼人は見違へて見へ申候そなたは年寄町に被居候人と見申候へはさのみ疵にも成らぬ事堪忍召れ候へと申候へはいやそこの人とこへいくそと爰にて孫明可申と申候故村井に目配り太郎兵衞二階に村井孫助召連あかり候へと申拙者は下に居候見物大勢にてとろはふと申集

り申故目をいからかし高聲にて何者そ町屋の店をふさくと申刀に手かけしかり申候へは皆々逃散申候扨太郎兵衞儀罷出申候太郎兵衞そなたと知る人かと申候へは成程見知り申と申候へは彼者申樣は拙者は日本橋つめ八百屋の何某と申候侍の比興なる男是へ出被申候へ孫明可申なとゝ腹立候故いかにも見違られ腹立らるゝは尤に候へ共度々申樣に町の人なれは奉公人とは替り少もゝゝ疵にならぬ事太郎兵存のことく拙者は傍輩にてもなく通り悪候故如斯候太郎兵幸近所の事なれは能々斷被申候へ近邊の店の妨にも成候といろゝゝ斷返し申候扨二階に上り申候へは下にて悪口申故孫助も可出なとゝ仕候を村井とらへ十方なき事見違たる上に町人を相手とはなとゝしかり候由後に咄申候拙者上り申候時には上に花色の小袖着目に立申とて下なる小袖と着替申時に候扨々十方なき仕方何とゝ申候へは慥に小刀ぬきたるをとらへ申候へは其儘捨たると覺候と申候扨最早可歸と申孫助裏道は近くになきかと尋申候故いやゝゝ着物きかへ申事も拙者同心にてなく候裏道參候候はゝ逃たると可申

候本道可參候併彼町人何方に殘り申事可有候先に村井申に孫助跡から拙者參候故近邊の町人とも店々に出合申候拙者申は扨々各やかましき事に合せ申候なとゝ挨拶いたし通り申候右の役にて上御屋敷へ逗留仕芝へ折々歸候て休息仕候其時分は舍人殿は縫殿助殿隼人殿は綾之助殿七右工門殿は八彌殿三人共に御小々姓にて候織部殿へ參候へは何と替る事はなきか江戸中方々見申頓て江戸功者に成可申そ今時分は別て日本橋は人通り多くどろはふ多く巾着小刀なと用心仕候へなとゝ拙者に右の咄申させ樣に御申と存候へ共いやゝゝ孫助爲に爲らぬ事と扣申候何の替る事も無御座候と一二度申候其後參り候へは少用有之是へ參候へと居間に呼御申候は此中折々噂を申候へ共終に咄不申候孫助日本橋にて小刀とられ見違候三人共に同道と承申候扨委細咄申候へと御申候へはゞ樣々々と咄申候て此間折々御噂承申可申上かと奉存候へ共孫助不調法のみに御座候然れ共御尋に申上間敷道理無御座一々不殘申上候孫助事は召仕候下々迄も人遣稀敷しかり申候侍中も慮外者なとゝ申段承候故今度の

儀は色々惡口をも申と奉存候着物も引破りたるなと丶沙汰仕候へとも左樣に無御座目に立申と着替申候其時分下々多く見知り申候若狹守樣御手廻りの者共も見へ申候へとも歩の御小姓より上なる者源兵衛私も見知り申さぬに無御座候へはたとへ孫助にて皆々憎み申とも私共見知りたるには何としたる事かと立寄樣子承らて不叶儀に奉存候然は皆下々の沙汰と奉存候由申候へは尤々と御申候其時分御屋敷中無隱事故元田古八右工門未緣者にも不成候時かと覺申候老父とも心安く候故拙者に被申候は孫助は柏原殿こん意にて子供衆皆々鑓稽古孫助打太刀にて候由村井は節齋居被申候事拙者は織部殿御懇比の事に候間委細咄置候へと被申聞候然共老父咄に傳たる者能き侍と申は我身の飾り咄常に嗜み組頭なと我身善惡共に尋申共誓文なと立ぬ者御不審に思召ならは家來を御穿鑿被成候へは知れ申事杯と他人に申譯させ申物に候勿論一門の事にても昔より緣者の證據とて皆影にて笑ひ申候なと丶被申候なと丶被申聞候其時分拙者頭宗像彦四郎組頭糸川長右衞門組脇にて候故拙者申候は定て

今度孫助事御聞可有候同道人まて迷惑なる沙汰に逢申候能々御吟味候て可被召置候以後皆共は御奉公の妨に成申事可有之由申候へは御尤此中も彦四郎殿其心得と見へ御買物奉行藤本左五右工門平井太郎兵衛兩人糸屋太郎兵衛方へ御遣近邊の町人共にも尋させ被申候故拙者咄に少も相違無之と申候遠坂關内殿前の頭別て故是も尋被申候故元田八右衞門心付被申候へ共ヶ樣々々の心得にて織部殿にも咄不申候由申候へは事の外心に叶申候哉尤々おれか聞置候少も心に懸申間敷と被申候其後織部殿に見舞に參候へは折節御次に御出候て小屋玄關にて逢申候へは堀次郎右衞門かおるそはいり咄候へと御申はいり申候處に小川重右工門と申織部殿家來と次郎右殿咄居被申候所に參候へは先刻織部か其方の噂にて候由被申候定て御呵り可被成と申候へはいやく々そふてなく則重右も同申候先〻何そ織部か尋たる事かあるかと被申候故いかにも先頃御居間に御呼寄御尋被成候儀御座候と申候へは其方の被申樣事の外感し若き者の扨々感入たる儀あの心得にて勤申候はゝ後々は御取立可被成物と重

右も聞たると被申候へは重右工門いかにも其通日外いのこの餅澤山に御取被成候事にて織部呵り被申候事次にて承候其時とは替り事の外譽申され候と笑申候如斯の事皆々老父被申候事能覺候て事は替り候ても孫助爲にならぬと此方より扣申尋被申候時には有樣に申却て拙者譽被申候は人の爲か我身の爲と成申候

一右の通御案內御禮廻りの時一人は御留御供拙者當番の時に番町に大岡佐渡殿大御目附にて御禮に被成御座候時內藤五郎左衞門に御意被成候はあの森の邊佐渡殿屋敷と思召由いかにも左樣にと五郎左衞門申上候初て拙者御招き御尋被成候に付少御左へ寄可申候森よりは余程御左に當申由申上候時跡より五郎左衞門能出申は御前に御意被成候通に御座候由申に付拙者申上候通に御左へ被成御座候其時又御招被成われかのか能きそと御意被成候惣體御中小姓より上には名を御意被成候步御使番はこれ々々とか又は御招被成候扨御供等仕舞織部殿に參候へは傳右先日御供にて初て御詞にかゝりたると被申

候故成る程左樣に候と申候へは御意にても違申事は有樣に申たる事は尤に候御案內の事成れは初て御意承候其そなたの見覺へ候樣に申事尤に候今時分白鷹多く候少調候て祝候へと御申候其時分心付不申御詞にかゝり難有とて織部殿にも不參鷹を調いわるも不仕候其後承候へは御詞にかゝりたるの何の角のと申時に心も付申付尤五郎左衞門も病氣と申させ程なく御斷申樣に平野九郎右衞門組にて續彥太相組にて承申候番方へ出申候結城孫助も熊本にて御暇出申候拙者如斯の仕合は老父おしへ守り有樣に心付申勤候事天の惠地にかけうつる同意に候能々御吟味可被仕候

一內入御供に被召遣候時織部殿へ禮に參候へは折節庭に出唯今も可有御座候昔　忠利公御直させ被成候石御座候其所に居被申候切ゑんに取付喜左衞門儀江戶御供被仰出候偏に御影と申候へはいやく々おれか蔭にて可有樣なく候譯を段々御吟味にて被仰出候併縫殿にはいきて禮をいやれと御申候老父存生〻內山田竺印上月八右衞門に賴置被申候其□此比の尾藤助之丞は次男にて金左殿は番頭にて織

部殿組の時野瀬甚五兵衛を以御中小姓に被召出江戸御供願被申候其座にて承候中々御吟味つよく御中小姓に被召出候事惣領は人により申次男は中々ならぬ事に織部殿御申候近年見申候へは成能く見へ申候

一江戸にて歩の御使番の時十左衛門殿三左衛門殿澤伊左衛門奥田傳左衛門毎度出合咄申候其時分御精進日は定り雲歩法師被召出色々御前にて御咄し御次に出候ては角入なと皆々承申候外様にても大勢承或は小屋に泊りたる別て多く御座候十左衛門殿も御親父白雲老御果候由申來忌中に雲歩御呼候て平野九郎右衛門伊藤角右衛門上羽四郎太夫次にて皆其承申候仁王心の心にてはたとへは鑓を顔に付あて雷落かゝりても驚不申候たとへは此障子のすきまの風強き物病氣者などは致用心候むねに仁王心を持不斷居候へは風をもひかぬ物と武士の前にて扨も々々死様の事咄申候十左衛門殿は忌中にて御座候故御尤其外小姓頭物頭雲歩若武士たる者の前にて別儀御語候へ死様の事は武士の役にて御咄におよひ不申候と可申物をと拙者廿四若く能々承

候に何とか挨拶唯今覺不申候へ共伊藤角衛門挨拶承さすか外記打果候時分の額に疵有之程志顯れたるよと神以其刻存候唯今とくと覺不申候重て案し出可申候扨其後十左衛門殿二王かゝせ扉風におし澤伊左衛門雲歩一の弟子とて笑申候或時十左衛門殿に打寄咄申候折節拙者に是非々々雲歩に咄承候へと御申被成候時拙者申候は先夜次にて承申候ゟ樣々々に被申候さすか伊藤角右つらの疵顯れ候と私は感申候私も先祖以來武士を立申者の末にて御座候故出家に習ひ不申とも可死所にては果可申心にて御座候此頃承候へは雲歩風引藥給申と承候氣味能事と申候十左衛門殿御申候其心を思ふよりすゝめ申候是非々々聞申候へ夫程いやに思ふに何とて二九之助には聞候へと申候哉と御申候故二九殿は未廿にも御成不被成其上に柔和成生れ付殊更圖書殿御嫡子にて後々は侍の頭も可被成候へは色々樣々の事御聞被成候か能御座候妙解院樣[忠]も澤庵和尚を御別てに被成御兵法の極意は御尋被成候由承及申候私式とは替り申候其上私母常々申聞候私顏付母の目にも見ぬ事なれとも傍輩衆にも憎れ可申

なと能心得候へと江戸前に就中度々申聞候二王心を習ひ候はゝつらにも顯れ可申候第一私心にふつと叶申さぬ事に御坐候神以難うたひ申迄二夜も三夜も御すゝめ候へ共承引不仕候同苗文左衛門は終に出合被申たる咄不承候角入に申候へは御次にて度々承候に其方咄の樣成る事終に不承と被申候其後澤伊左衛門雲歩所に咄居候時坂崎清左衛門殿御出候て此間の禮に參候由雲歩申候はいか成御禮かと申候へはいや此間の御前にて度々御咄候故か戸越に被成御座候事も少止御鷹もおろかに成不申候是はひとへに御咄故と被申候雲歩申候は扨々存もよらぬ御咄に候私は御國の者乞食坊主同前御門はいり出候時一度々々に是かおさめと存心底に一ツも殘し不申萬事申上候御意に叶候へは其通り叶不申て少も苦に不存候御自分は江戸にては御一人の御役直に可被仰上事と存候由さすか雲歩として譽申候拙者申候はいかにも々々々々夫程の事出家の彼身を捨たる坊主の役珍敷からぬ事諫言は唐にも少く有之と聞へ申候當世は日本にも尚少く昔は有之由持懸り々々々にて我身を捨て勤候者さへ少く却

て輕薄ついしよふはやり物なとゝ申拙者は終に一座も不仕候八十に成り候て合點參候扨々若き時故心付不申佛道殊に二王心承候てこそいよ々々心をみかき可申事に候必々各何事も不捨御聞可有候事と書置申候

八十歳に而書

享保九甲辰十二月二日　堀内旦夕入道勝重

堀内傳右衛門殿

同　傳次殿

旦夕覺書 月

一御中小姓にて御祖奉行勤候時江戸にて村井四五十日相煩候て拙者一人にて勤　家綱公五月八日の御一周忌日にて芝より上野へ被成御座候事の外草臥少腹中もすき本覺院に　太守樣は被成御待黒門外に惣御供も寺を御借り被召置本覺院には大矢野源左衛門拙者新組一人三人被召連小姓頭岩間彌左衛門其外三人玄關にて布衣の裝束仕居被申候を外より見候得は茶菓子有之候得は傳右壹人にて毎度苦身茶も有之候給候はぬかと可被申處に能き公家かなとゝたわ事斗のみにて偖々氣のつかぬ男計と存候處に須佐美源左衛門參芝よりは別て御苦ゝ茶參候得宿坊へ同道可申と被申候得は大矢野源左衛門申候は此中源兵衛久々相煩申傳右衛壹人勤申候由申候へは是へ〳〵と大矢野拙者同道仕宿坊へ被參候て此兩人は今朝芝々供に參候茶つけ御振舞被下候得と申置須佐美歸申候跡にてなら茶給申仕舞候て大矢野申候は偖も〳〵須佐美聞番勤候程有之候

岩間か親は百五拾石取淺山何とかいふて子拾貳人持ふとん壹つにならへて寢させたるもの丶子なれども兒小姓の時出頭して岩間小十か養子に成早幼少にて親にかゝりたることは忘れ先刻茶さへ呑といわず三人共に同類の男皆共にさのみかわらぬ男共仕合よけれはなとゝさん〳〵わる口申候偖芝へ御歸候時は暮六ッ半比にて御玄關に御祖すへ其儘御出被成色付の間御廣間唐紙より內に被成御座候迄草臥立申時に大わらび仕候南風吹多分達ニ御耳ニ可申候御手廻り御祖の者か兎角病人と聞へ候吟味申候へと小姓頭御側衆被申候由御成間御取次澤猪左衛門居申肝つふし申由後に承り申候翌九日戸越御屋敷に御供小屋に致休息居申候處御廣間より御用有之間參候へと堀次郎右衛門殿御申候由小使參候故罷出候へは昨夜上野か御歸被成候刻大わくひしたる人有之候拙者も御供と承候誰か定て可存候由被申候いや私にて御座候と申候へは神以肝つふし偖も〳〵苦々敷事昨日は御一週忌にて御參拜被成殊の外萬事御愼被遊候故今に御尋なく候先頃讃岐守樣御出御用の事有之間次の者共退候得と

御意被成候以後御書院の方に人音聞へ申由にて拙者に誰か穿鑿仕候得と御意被成候故御次坊主に尋申候得は何某殿と申候偖々無勿躰歷々にて侍の作法に違たる儀故神以不申上知れ兼申由申上候へは何と思召候や其後は御尋不被成候拙者は仕合何も承候程の事御聞不被成事は有間敷候得共多分上野の御歸と思召御穿鑿不被遊と覺申候右の仕合故承度存候に扨も〳〵何と仕たる事かと被申候故々樣〳〵御奉公隨分精を出し勤申候ても草臥はて申候皆共或は御小姓頭なと心付られ可申事なとゝ如形惡口申候へは笑ひ〳〵三人の噂に成申候立聞侍の第一きらひ候事名は傳右衛門に御申聞候是には書不申候其後舍人殿も御尋次郎右衛殿へ申ことく噂申候岩間と其後縁者になられ候魚住又助御次方々歸り候刻家來に尋申候へはあくひ傳右衛門樣と申又助も氣遣いたし候由御廣間御番は不及申右の仕合にて何の御吟味なく八十迄存命居誠に〳〵天の惠みと難有奉存候

一門司源兵衛日奈久御入湯の刻被召連御鎗御打太刀仕舞罷立候刻來春も江戶御供に可被召連旨被仰聞

其後又唯今御直に被　仰付候得共熊本へ御歸被成候て組頭共より觸れ申候間唯今御直に被　仰付候事沙汰仕ましき由被　仰聞候熊本にて奥田藤次郎組頭にて拙者も相組にて御供の御請に參候へは源兵衛事ヶ樣〳〵と噂被申日奈久にても熊本にても此間右の御意を背方々にてよせいに噂被申候由承候偖々いつきよふ成事と藤次郎拙者へ噂被申候江戶にて節々出合申にもよせい噂多候つる其後御國にて前川與三兵衛殿谷與三左衛門田中次太夫門司源兵衛續三四郎同五左衛門坂井十兵衛此分御暇被遣候八月末と覺申候皆共新知被爲拜領候は九月十二日少前にて覺申候其後門司御國を出江戶へ參候由承候刻十左衛門殿へ參色々噂申內に門司なとは江戶へ參候由承候定て鎗を申立ての望と存候私存候は鎗を聞及可被召抱と他所ゟ申來候共私は先祖以來代々取立被申候私にて剩鎗の相手に越中守前に節々罷出候別儀にて被召出候はゝ罷出可申候鎗を申立候ては少心に悪候儀も御座候と可申事に候太守樣御鎗殊之外御數寄被成御鎗の位も可存候しかれは右之通に申候はゝ御心にも叶武士の道にも

叶可申候御覽被成候得江戸へ參候ても中々今の當世はやり不申候いか程も窄人多く亦御國へ戻候はゝ諸人笑可申候昔長尾伊織と申千五百石に三拾挺御預被成病死仕候伊織は出田作左衞門伯父子は安右衞門と申候千石被下候故御暇申いか樣銀子澤山に持申候と承申候夫故かと申たるも覺申候其刻長谷川久兵衞老父へ被申候は今度安右衞門御暇申事合點不參候如何に存候やと尋被申候老父申候は尤に候親跡へり堪忍ならぬ筈と申候へは久兵衞被申候は日本國をあるき候ても千五百石にて抱可申時節にてなく候おれは明日にも御暇被下候はゝ三十日は窄人仕ましきと被申候へは偖々うは氣成る事大坂京江戸に參候とても三十日はかゝり申と老父申候得はいやわけか有る拙者は島原御褒美にて武百石被下候親は武功にて千石被下候親の知行無相違被下候は御家他家に少〳〵候筑後へ立退武百石望候て熊本程近く御座候聞に可被遣候千石被下鐵炮も預け申候拙者さのみうつけもいたさぬは肥後にて千石にて鐵炮頭勤候拙者を武百石にては三十日の內に有馬殿か立花殿家からも能望候はゝ有付可申候安右衞門はおれ程もなき者の定て銀子澤山に持たる程に男を止町人に可成と思ふべし銀子は子孫迄緞かぬ物子孫に成たらは後悔して御家に御扶持にても被下候樣に無面目參へくと被申候其刻此比の長尾安右衞門は未た御家に不參候數年過候て此方に參り廿人扶持被下候其後熊本へ參後に堀飛驒殿若狹守樣を御賴被成五百石被下候事宮川岡四郎咄承候右の通色々咄候へはいかにも尤成る拙者申分成れとも昔は知らす若き門司か又た江戸へ參るもにくからぬ事と十左衞門殿御申候門司其後江戸よか歸り申候いか樣誰か出家衆賴候て御國へ戻申候と覺申候志方玄求なとも緣者にて右の咄江戸にて仕笑申候是皆古人の咄承付申候右之通に御意を背たる天罰と存候前川谷田中は拙者別て咄申候御暇被下候程の事に候得は常々の儀も惡敷達　御耳候哉其時分の沙汰打寄物なと給申たる由輕き事の樣に聞候へとも皆々不實より起申候兎角實と申物なくては人柄能候ても役に立不申候

一右の刻舍人殿へ參候得は側へ御呼次の者とも退御申候は今度の御暇被遣候衆何れも心安き事に候處

に拙者のかれ申事偖も〳〵大慶に候落江戸逗留中物なと給へ御法度背たる覺はなきかと尋被申候故江戸詰の內急に御供觸仕候故其儘出申候へは間有之故心安き者の所へ參申立なから茶漬給申候儀存出申候夫は背たるにてなく御供の事不苦候いや熊本より八代蜜柑に付參候收圍之允步の御使番落付三日と御座候に差合御法度の日數延申候私事如御存御使番勤申故なしみと存なから茶振舞申候夫も落付の心にて振舞候へは日數遲候ても背たると申儀にてなく偖々安堵とても事に誓言立申せ少子細あるそなたの爲にも能きと被申候神以習らく案し申候は唯今右の外に覺不申候へとも數月の儀に御座候へは此外に御座候事も思ひ出可申候左候へは唯今誓言は御免被下候へと日本大小の神立不申候是老父被申候儀存出申候其後承候へは頭々に誓紙組脇なとの咄承申候皆々古人の咄聞ぬ者は越度とも存ましく候昔の能侍は一言にて名を上ケ一言にて心顯れ申候拙者にさへ誓紙を以別儀にて候得共舍人殿へ申譯賴申候故いやケ樣の事はせぬ物能可申とて差返し申候其後御鐵炮三十挺御預候名は

書不申候色々役も被　仰付候折々存出おかしと存候右の誓言御所望は舍人殿には似合不申候と存候

十左衞門殿ならは誓言御所望は有ましくと存候

一或時角入拙者に被申候は其方は大勢咄衆多く候我等はいか樣に申候やと尋被申候拙者申候御相組衆用事は不破五郎右衞門は能く請合申候おまへは物六ケ敷御請付不被成樣に承候と申候へはいかにも左樣に可申候此間も高瀨善兵衞か三百目の顯申候いかにしても善兵衞か身分の才覺にても闕可申候公儀に申上候ては善兵衞爲にならぬ事と思ふて請合不申候併大勢願候故要人迄は咄置候御怨の御用にて源兵衞其方は折々宿にても出合被申候樣に承候拙者なと宿の時參候へは頓て御次に罷出候間其刻可承と五郎右衞門にも被申候由いか樣各兩人は外樣にては口きくと申由要人もしかられぬ樣にと思ふと見へ候とて笑被申候神以笑被申候

一或時文左衞門に申候は大炊助五右衞門と御別でいな事と他人も申私も其通に存候御存知可被成候大鹽は度々うそつき勇も薄く申候由申候へはいかにも〳〵能く存候此方か扣候へとも近所にて節々參

う前かと御側筒預りたる故咄なと聞たかりついつい參候ゆゑおれに逼うてくる故に外よりは別てと申も尤に候由高橋彌次兵衛も緣者に成申候

一横井左平太に御鐵炮十挺 御預ヶ被成候節大木織部殿へ被 仰聞候は左平太にヶ樣と御意の時早々私所にも參申殊の外難有がり申由被申候へは左平次に申聞せ候得十五六年以前に戸越屋敷にて鷹をはさみたる犬をひさの下にしき犬引の迷惑せぬよふにと存おれかそはに寄て見たる事おれ共おし返し〳〵三度迄申候爰を以慥成者と思召由左平太拙者へ申聞涙を流申候御一言にて命捨ると申はヶ樣成る久敷事迄被爲思召出候事承候程の者銘々身に引くらへ難有可存事と書置候

一拙者未御奉公に不罷出候前かと杉生次太夫と申御鷹匠御意に叶御家老中も應數寄の時分何もかわゆかり被申候由高瀬へ御供に參候砌 殿の御休息のため御茶屋へ御入御膳被召上候内御湯御あかり被成候時御門前に鴨のすわり御座候由達御耳御湯を捨られ御出被成次太夫〳〵と呼候へとも居不申候御手鷹部屋の錠ねし切御すへ被成御あわせ被成候へは取不申候御機嫌も彌不宜候處に二三丁向より頭巾着ぬき入れ手にてそろ〳〵參候を御目に懸りあれからくるは次太夫かと御意被成御ゆかけ御ぬき御腰物を御さし是へつれて參候へと御意の時織部殿其儘立被申候次太夫右方へ近く居被申候御成敗可被成候間留めさし可申との心得と承候織部きけ扨々にくきやつめ成敗と思へ共久敷事を思ひ出したるは先年戸越にて巢鷹を預たる時夜白百日程夜も寢す精を出したる事今思ひ出したるは連て行けと御意被成織部殿偖々難有仕合とて引立被參候由原田小右衛門御鴈奉行にて其時具に承申候何も御供中是は御成敗と心得見申處に右之御意承何も涙を流したると咄申候拙者見申さぬ事成れ共誠に誠に久敷事被思召出候事有難き事と今も落涙仕候

一拙者共新知拜領は九月十二日にて候十六日に舍人殿村井林大矢野拙者四人に銘々手紙にて御用有之間參候得と申來候折節角入へ祝振舞に一家參居申所に申來直に參候へは三人は參り拙者を待居被申候揃候て能出候へは各の儀心安何事も用の儀承遣候へと御愁比の御意傳右は前々々心安事に候傳右

同前に存候由御申吸物にて酒出申候角入へ參咄候へは悅被申候老母も參居申候彈藏十八九多分覺可申候其後江戸用意にて米三石餘にて手つかへ新知被下如斯願申は偖々迷惑併才覺難成候本ゟ拙者は前前より心安く候間一人參候て具に咄申せと三人申候尤に存參候て咄申候は今度新知被爲拜領四人共に借銀の儀申上候事別て致迷惑候先身の上の事に付申上候私儀は具足持不申候尤馬具等は尙以にて御座候尤殘る三人の內所持仕候も可有御座候親小身すり切申候て調兵申儀難成亦讓り申と申儀も無御座尤私たしなみにて持居候哉と伯父共初存ましく候持たる振仕御供に參り候事私の心に叶不申候御知行被下候ては又其通の用意仕候儀本意と奉存候就夫思召の外に銀高多く可有御座候間御內意申上候樣にと三人共に申上候由申候へはいかにも〳〵尤に存候不及申古具足古馬具にても先今度は申合隨分願すくなき樣に尤頭々へも拙者へ被申聞候樣に具に咄被申候樣に三人へも可申聞由御申候偖其年ゟ四つ六分にて御借銀元は御すへ被下候故拙者願ゟは五百目多く渡申候由高坂檢校銀子借申候故拂候得は村井少不足仕候程に拙者五百目村井方へ遣候へ一つに仕幕に遣可申と所望に任せ村井方へ遣申候如斯賓に願候得は却てあまる程渡り申候天明らか成る故に候

一數十年心つけ見候に江戸被 仰付候か又は役儀に付十人か九人は被 仰付候につけて願申內にて家內の或は娘の婚禮の用意なと、差當る御奉公に入申外に自分の用にたて申事多く候尤知行物成の內にて相應〳〵に心かけ子供の爲に仕候事は本より其筈の儀夫も相應より內に心得可申事に候先年傳右衛門御國にて御巡見の時願事の外かろく御座候元より拙者事能く被存候兼々存候併今度脇の願の邪魔に成候程にと頭差圖にて候由傳右衛門申聞候左樣に候はゞ脇々への爲にと被申候事夫には構不申と申儀も心に叶不申其通と申候是は頭により何卒申立によりさのみ脇の願の邪魔にも成間敷事と乍存右之通りにて事濟申候各心に能く心得差當る御用程願被申私用に心當被仕候は、天罰蒙り可被申候神以拙者冤申候目あしく成り勝手能も不慮の事多く後に不勝手に成惡事多く數人神そ〳〵心

には能く存候故　天爵と存候へ共同類多き世の中にて夫もそふ是もそふ皆々外にも有事と天爵と思ふ者すくなく候老父被申聞候事覺居申候昔しも今も同前と思ひ當り申候貳百石にて定江戸おごり不申候何としても跡先の用不足仕候壹貫目御座候へは貳百石にても事足り申利なしに借候はゝ休息候時ぼつ〳〵拂可申なと存る處に存不寄御加増被下候其時分一貫目上に當り偖々難有奉存親よりはくわほふ生れ増申候親被致拜領候はゝ三人の子供に米にても夫〳〵わけて可給候兄に遣候とても請可被申様なく候三盛は勝手別て不調法にて度々三友に頼被申候事能く存三友に必々三盛に申聞敷候差つかへ申時遣候へと頼申候神以返し申様に不申候得共三友方か返したる事覺申候又存候は兄弟三人にて六百五拾石にて候昔し片山自庵も六百石山田竺印六百石老父も六百石は被下間敷物にてもなく被致拜領三人の子に分け呉被申候共三盛角入兩人に五百石わけ可被申候弟の儀拙者には百五拾石分可被申候然れは親の子を思ふは世の習ひにて候如斯の道理に拙者に五拾石被下候事は親に増したる御恩天のめくみと八十に少も失念不仕候傳右衛門事は如形能く心得致案堵候三悦幸右衛傳右衛門申合隨分心かけ天道恐れ必々信實に萬事心かけ勤可被申候尤半助彈藏二觀老人にて萬事尋其外彦四郎尉九郎三郎兵衛何もむつまじく寄合候ては互に吟味いたされ堀内中唯今迄壹人も御勘氣蒙りたる者無之結構に被召仕候各子々孫々迄惡名請不申様に天道恐れ愼可被申候左候はゝ彌繁昌可被仕候

一和田十郎兵衛新知三百石大組に被　仰出候由方方より知せ申候拙者其時は御中小姓にて金津助十郎屋敷借り居申候時にて川事有之候て夕方祝儀に參へしと折節七八寸の江鮒貰に參候故手前鬪鉢に入れ遣申候處に舍人殿其外兄弟衆他人の歷歷居被申處に十郎兵衛持參して傳右衛門祝儀を呉れ申候御覽候得とて打寄大笑の由後に承候暮方に參候得は誰も戻り被申小川次郎右衛門宇田彌二兵衛織部殿以來之五名にて和田と咄居申所へ參候へは偖々今日の御祝儀は忝は候へ共舍人座敷へ江鮒の鉢に入れたるは初てにて何も誰も見被申候て笑被申候由被申候故いかにもいかにも左様に可有之候併世上不相應の事多く御座候私中小姓には少過たると存候へ共今日の目出度さに進上申候偖御自分には御家の古き事御存被成まし〳〵候次部右殿宇田殿は御存可有候御備頭の御次男御舍弟には三百石被下大組に被仰付候氏家源助殿は二百五拾石被下御小姓組に其時節長鹽源太殿青木權之助殿南部土山は皆々五百石被下候得共氏家同前に御小姓組に御入被成候へ共御番御供は御免被成候譯有衆にて可有御座候氏家は備頭にても無御座候得共家がらにて貳百五拾石被下候と皆々批判承候今日三百石御拜領被成殊更大組と御座候は誠に〳〵兎角被申ぬ目出度事に存候隨分御勘略被成馬をも御持被成候へと申歸申候重て參候時舍人殿御申候は先日十郎兵衛に委細の咄治部右衛門なと咄聞せ候偖々尤成る事重ても能々御家の事咄聞せ可給候由御申候終に馬持不被申候馬具一通りに氏家甚左衛門殿よりもらひ被申咄は承候舍人殿全盛之時織部殿存生の内は貳拾人扶持被下候織部殿母方の叔父にて先代清正公の和田備中子孫と申傳候

一拙者新知被爲拜領候時分右の和田十郎兵衛被申候は此間清助彌一右衛門七右衛門と申談候拙者は格別に舍人懇比成る事に候間そば粉に何そ肴そへ被遣候はゝ打寄そば切給へ祝ひ可申と内意被申候拙者申はいかにも私も其心はつき申候へとも如御存新知被爲拜領即刻借銀願申候右之通の儀に私に御懇意ゝ申我身の祝ひに一錢にても遣申候はゝ却て舍人殿御心に叶申間敷と神以何にも遣不申候如斯兄弟衆十郎兵衛差圖と申候はゝ十人か九人は幸と存遣可申候此後も心付け可被申如斯拙者は天道を恐れ申候折々母を振舞候相伴に伯父共被參候事は可有之候他人に出來合ふ〻汁は打寄り給申候終に舍人殿十左衛門殿呼不申殘念には存候士之進出生にて下着の刻舍人殿御申候そなたは有無にしわきと思ふと御申候故何と思召候て左様に思召候やと申候へはいや〳〵男子出生にて祝ひ申せおれなら は結構に祝可申と御笑ひ候

一興津才右衛門は今の彌五右衛門父にて候若き時より御家中一番の口利細川丹後殿なと初として御一門中御家老中御懇比に候　妙應院様若狹守様も御懇比にて御直にも被召仕愚意を申上候程の者にて

一何そと申せは才右衛門被召仕候戸越御屋敷の内廣過たる御沙汰江戸ゟ申來御せはめ被成候時才右衛門江戸へ被遣借銀願申候惣銀所の御目附御中小姓末松勘助に逢申今度願上申候銀高少にてもへし被申候はゝ誓言にて御斷申江戸御斷可申由を勘助聞候故其時分氏家甚左衛門殿御奉行上野故勘助右才右衛門誓言にて申候事内意申如願堺明申候才右衛門何の角のとしかり申候へとも亦唯者にては無御坐と申候舍人殿にはひたしくは不參候才右衛門は學好にて五經も自筆に書たると承候色々才右衛門か咄多く候右之通に申たる者にて信すくなく發明口きゝの名斗と存候御鐵炮三十挺御預沼田小兵衛殿組にて平時分何か御用にて被召出候へは私儀今度御鉄炮御加增殊に一番備の小兵衛組に被　仰付難有由申上候へは一番二番は存まし推參成る儀と御機嫌そこね申なと沙汰仕候藤田助之進父子死骸片つけ申刻も北關に被遣候何そと申は被召仕候其後御鉄炮頭衆と打寄足輕共鉄炮稽古の儀昔は不斷隙々にはうたせ候や其時分は御鷹野多く三月朔日か九月朔日か定り年始の打初か外には打事は成不申候

衛門殿御申候はいかにも御理屈承候併先日そなたの庭を見申候大石を澤山に御求と見申候定て銀子出し御調はよもや有間敷候百姓共に持せ取寄被申候共大勢に定て粮米は出し可被申候左樣成つもりにて帷子布の羽織は出來可申候そなたの數寄には目か見へぬと云ふたれは才右衛門一言出す別の咄にて歸り候と拙者へ御咄被成候いか樣才右衛門何の角のとしかり申候へとも亦唯者にては無御坐と申候舍人殿にはひたしくは不參候才右衛門は學好にて五經も自筆に書たると承候色々才右衛門か咄多く候右之通に申たる者にて信すくなく發明口きゝの名斗と存候御鐵炮三十挺御預沼田小兵衛殿組にて平時分何か御用にて被召出候へは私儀今度御鉄炮御加增殊に一番備の小兵衛組に被　仰付難有由申上候へは一番二番は存まし推參成る儀と御機嫌そこね申なと沙汰仕候藤田助之進父子死骸片つけ申刻も北關に被遣候何そと申は被召仕候其後御鉄炮頭衆と打寄足輕共鉄炮稽古の儀昔は不斷隙々にはうたせ候や其時分は御鷹野多く三月朔日か九月朔日か定り年始の打初か外には打事は成不申候

唯今も其通と存候然る處に中間とせり合有無に才右衛門は打せ可申と申たる儀御吟味被成才右衛門にきひ敗閉門被　仰付候て知行被召上只今之彌五右衛門に弐百石祖父跡と被　仰付候才右衛門は百石御加增にて三百石被下候右之仕合にて病死仕候つく〳〵存候へは中間申合時節を待たる稽古させ候はゝ不殘御用に立可申候才右衛門三拾挺計上手に成候ても差ての事は有間敷候我利口たて斗にて中間にすくれたると自滿斗にて信實の忠とは不存候天罰と存候才右衛門程成る者も又出來不申との噂のみに御座候つる然れ共右の樣子にて御意に叶不申は御直にも申上候推參者と御意江戸にて若狹守樣にも先御代之事のみ申時節しらぬ我滿者にて何哉覺申上候得はおれも　眞源院樣御子なとゝ以の外御腹立られ候わけは覺不申候信實の忠ならは鐵炮稽古も中間申合候て致延引才右衛門果候ても跡々迄も御用に立樣に仕事に候拙者承候てもいくらも不實の事と存事有之候へ共事永くかゝれ不申候兎角利口發明も不實にては天の罰めに逢申候角入被申たる儀尤に存奢置候

屋六兵衛と申御家中に米入申者拙者前々ゟ心安く拙者へ申候は平八様御勝手は頓て成り申間敷候御勝手にて見申候へは御手付衆食被下候夜食も其通御酒迄被下候武兵衛様は終にあの様には不被成手付衆夜更迄御用にて居被申候へ共歸候て夜食給候て又被參候様にと御申付候夫故御勝手も能く御加增も御取候是非〳〵拙者に申武兵衛様の眞似を被成候様にと申候拙者申候は其方心入は過分に候へ共若き平八昨今勤武兵衛眞似したらは末々しかり可申候其上小身成者共に宿へ戻り夜食給候へとは御用にての事夫程の事は物入申も苦に成り申さぬ事と申候歸りて角入に申候へは笑被申候平八勤きけは後々は立身も可仕候平吉も能き生付後々は閒番にも可被成哉拔と悦被申候如願兩人共に成り申候拙者歩の御使番勤歸りて江戸咄なと仕候て立申候へは老父母へ被申候は傳右衛門咄きけは後々は御褒奉行に成御知行も被下歩頭拔に可被成候そなたは年若く候間永いきして子共にかゝり被申候おれは隨分人の爲に成る様にと計おもふた程に子共にむくい可申と被申候二三日程有之承候て偖は拙者咄氣に入たると悦申候二組にて六十人有之候歩の使番の內に拙者被仰付候事又歩の頭に可被成と被申候は定て　忠利公御代の事にて被申たると存候安井太衛門寺內五兵衛眞ト喜左衛門牛島一郎右衛門なと申六人共に歩の小姓より百五拾石宛被下歩頭勤申候右之衆は御入國後迄しはらく居申覺候箇樣の事思被申候哉と存候然處に如斯親の願ゟは結構に被　仰付候事は老父信實顯れ候角入も同前に存候右之才右衛門事は親彌五右衛門三齋公追腹三年の御忌かと承候京都舟岡山にて致追腹天下に知られたる親の子にて信實にて勤候はゝ能く可有之に我滿計にて三百石に御鐵炮迄御預ケ先祖を被思召結構に被召仕候得共右の仕合天罰と存候各若く委細被存候ために書置候

一小笠原勘助と申五百石被下いか樣島原の時は榊原飛驒殿手にて働たる樣に承及ひ候御側筒十五挺同名文左衛門同役にて御家中一番の口聞與津才右衛門よりは上と申候老父なとは慮外者と文左衛門咄被申候事覺申候江戸にて讃岐守樣御發駕の刻豊の御休にて御使者勤申筈の處に休息仕居申下々も臥寢忘れ肝つふし御一宿へ參候て勤申御席間に直に罷出申箇樣〳〵と少も遠慮なく罷出申上候小屋に歸り相役の誰そ頼候て箇樣〳〵とて遠慮仕候はゝ御暇被下候樣には有之間敷物と何も申候拙者初江戸にて能覺申候箇樣の御使者はいか成る不調法者も勤申事に候平生は口聞發明にて人を何とも不存神佛なとは不及申上天の恐れなと夢にも見ぬ男にて熊本にて御暇被下候其後拙者京都に御茶つぼ取に參候て朝山齊寄親の樣に被存齊養子にて候故拙者に寄候て無事成る樣子承候得と被申候故尋申候次郎右衛門は自全と申京へ出留守に參候へは右之勘助居申候て自全家來と咄居被申候拙者に勘助申候は偖々久々にて得御意候先心得に成候事咄可申候御使に桑名拔通り候刻家來にても手討仕間敷候此比紀州樣御家來何某と申仁早使に通候刻桑名にて家來手討に仕候宿主即刻松平越中守殿へ申候へは御留置にて紀州へ被仰遣候て御家來まきれ無之との家老共ゟ使者參りて通申候右の使者早打の由斷申候へとも國法にて御座候由勘助も初て承候拙者も存ましき由にて咄被申候勘助被申候は私儀は如御存うつけを盡し如斯仕合にて候隨分〳〵御奉公可被御精出候拙者は紀州に緣御座候て久敗逗留仕關東にも隙にて居候へは松島迄見物に參申候て方々承申候熊本の樣成る所は無御座候御家柄と申隨分勤候へと被申候山名十左衛門殿も御親父以來別て今の田中又助も初江戸の刻桑名とかにて咄申由今の又助三歳の時御暇被下候由偖も〳〵古又助同前に存候由色々咄御申たる由今又助咄被申候牢人仕思ひ知り可申候右の仕合假初にも輕き事にても御奉公實に心掛候はゝ寢入可申樣なく候得共誰も勤る事とおろそかに存不實にて天罰蒙り申候と存候一江戸ゟ御下國の刻岡崎の入口に廣き所茶屋有之候所に松平丹波守樣御家來乘物引馬にて下馬仕居被申候拙者參候て其儘御召候へと申歸候得は唯今の者は家老と見へ申候念を入ていねいにじぎ仕候や先刻丹後守殿供の侍共四五人下馬仕候刻何も手を土に付居申候我は手を付不申候てじぎ仕候定て乘物にさわると存候て手に土つき可申と存たると思召候併御意にて手よこれ申は不苦候侍の手を土に

つき居申候時は何時も我も手をつき候てじぎ仕候へと被仰聞候ヶ様の事も能々心付可被申候如御意常に手よこれ不申様にと覺悟仕候事能く御覽被成候て右之通に被仰聞候と奉存候

一三齋公豊前小倉に被成御座候時或時朝早々黒田如水老御出被成少の御用御座候て御出被成候由御取次の衆も肝つふし即刻申上候得は無程御對面被成候朝の事故御料理多分出可申と用意仕候由偖如水老被仰候は用の儀と申は別儀にて無御座候互に不申通事は今以御同前に思召候然共御子様の御代には互に御申能様に被成度思召により今朝御出被成候何卒御望之様に被成度思召と御申被成候　三齋公もしはらく御思慮被成候ていやいや互に年寄頓て果可申候へ共子供の代の事迄申置候儀ならぬと御返答被成候へはならぬかならぬか左候はゝ早歸候とて其儘御立被成御料理も不被召上候て御歸被成候由長岡勘解由殿御咄承申候由三盛弟子平林三廻咄申候三廻は勘解由殿へ右筆勤居申候右之咄不承及候勘解由殿御咄被成候由

一黒田甲斐守様は何とそ譯御座候哉御屋敷芝松平薩摩守様御近所にて芝御屋敷より節々御供仕通候に辻番毎度下り御じぎ仕候御城下は筑前の内秋月にて候

一或時江戸櫻田黒田様御門御通被成候刻右衛門佐様御屋敷ゟ御出被成候時にて惣御供の者共何もはじぎ仕候故御小姓頭に下馬仕候へと被　仰付候て其後新組御案内拙者へ被　仰聞候は御城にても右衛門佐殿家來共は御しき仕候故御聞番にもあなたへ御じぎ仕候へと被　仰付候尤　上は前々の通に候へ共唯今も見候通何も能く覺居候様にと　御意被成候事

一或時神田橋の邊内へ御通被成候刻内ゟ乘物にて馬引せ三千石計の様子にて參候者下馬仕候此方の御先供其外見知り不申候　太守様も御咎すへ候得と被　仰候故御咎すへ候得と申付候處乘物ゟ急き下りはたしにて走り〳〵其儘御召被遊候様に私は森美作守家來(カミ)各務三右衛門と申の由申上候私へ被仰聞候は唯今のは美作殿家老にて候惣躰皆か格にても唯今の様成家老共には咎すへ申様に源兵衛にも申聞せ候へ今度道中にて堀次郎右衛門兒小姓共召

れ候て松平右衛門佐殿に何も下馬仕候へは右衛門佐殿も乘物ゟ下り被申又舍人もとこやらにて下馬仕候へは乘物ゟ下りられたると御聞被成候由被仰聞候時二郎右衛門は興津の宿にて御意の通に下馬何も仕候由舍人儀はさつた山にて下馬仕候由私へ兩人共に咄聞せ申候由申上候へはいかにも〳〵能覺居申由　御意被成候事

一或時道中小田原の入口さ川渡り五六丁程被成御座候道に竹中庄二郎と申候て御役者御幼少の御時より御出入仕御懇比に被成候者御目見罷出居申候を見つけ候故あなたに竹中庄二郎罷出居申候由申上候折節御眠り被成御座候處に申上候へはどれ〳〵と御戸を御明ゲ庄二郎と御意被成候て拙者へ被仰聞候は偖々能く見覺申上候庄二郎は久々煩候て熱海に湯治に參申候小田原一宿と聞候て罷出たると思召候久々煩申候故顔色も變り疲衰へ御見違へ被成候様に思召候に偖々能く見覺申上候と殊の外御意に叶候様に被仰聞候事右の通拙者は若き時より物覺見覺能く拙者心にも少自慢に存候　太守様にも左様に被思召候哉或時江戸に於て藤崎作右殿ゟ御用有之由にて御次に罷出申候へは其刻篠川勘平と申步の御使番唯今は竹村平右衛門簑子に成候て勘平御門札落し遠慮仕候時分にて拙者儀は數年定御供相勤申覺可申と被思召候此前より札を落し申候者共多く御覺被成候夫々被　仰付たる様を覺申通申上候へとの儀にて覺申通申上候若き時分より御供計を相勤申拙者には不存寄事に奉存候老父物覺の事度々被申聞候に覺能く御座候事も老父影と書付置候

一或時江戸御參勤之刻大坂より陸を伏見へ被成御座候節淀の橋を御通り川端を被成御座候刻御跡より侍一人上下十人計召連左右の方を御先へ通候刻家來共不殘馬も先へ通し其人は跡より罷通申候刻羽織立付着仕御咎の脇を御時宜仕候て通り申候様子能く相見へ申候其儘拙者に御意被成候は唯今通り申候者は誰の者か偖々功の入たる者と思召候多分行列の内は致遠慮步行にて可參と思召候見申候へと御意被成候見申候へはいかにも御意の通步行にて參候由申上候へは早々參候て宜く申乘り候て參候様に可申聞と御意被成候故其儘走り參候處に餘

程間御座候故跡よりもし〳〵と言葉をかけ申候へは行留り申候故　越中守申候は被入御念候樣に被存候不苦儀に被存候行列の內無御遠慮御召候へと申名を尋候へは毛利甲斐守內瀧三太夫と申者にて御座候由罷歸候て右之段申上候段々御意に叶申候哉度々拙者に功の入たる者と御意被成候偖御着座被成候て其年の九月六日大火事にて上御屋敷御類焼にて芝の御屋敷に被成御座候節右の甲斐守樣に何か御使者に牧五助被遣候御返答申候節右の瀧三太夫罷出候て五助に御口上申候て以後堀內傳右衛門殿は御無事に候哉と尋申候幸拙者は五助とは前髮御座候時分心安咄候故傳右衛門儀無事に居申候如御存上屋敷類焼に付當分は芝の屋敷に居申由被申候へは三太夫申候は御歸被成候はゝ傳右衛門殿へ能々御心得可被下候當春甲斐守參勤之刻道中にて越中守樣へ御目見仕候刻傳右衛門殿宜敷被仰上被下候故お殿中　越中守樣私儀甲斐守に委細被仰聞候由罷歸甲斐守私へ申聞候偏に傳右衛門殿御取成し宜き故と存候此間々御無音仕候幸に傳右衛門殿と御心安き由被仰聞候故具に御咄申候此段能々

被仰遣被下候樣にと被申候由五助罷歸候刻拙者芝御廣間御番勤申所に右之段々五助被申聞候其刻御留守詰に須佐美源左衛門高見三右衛門なと御廣間に居被申候高見は初江戸にて箇樣成る咄は承置度候とて右の咄具さに語聞せ申候以後承候へは三太夫は若き時は桑山修理殿に聞番を勤居申候壽命院江村宗因なと能く被存候由承申候綱利公甲斐守樣とは御心安き御間にて右之通にて御座候へは三太夫爲に別而忝存候事尤に存候箇樣成事各聞置被申候樣にと書置候毛利甲斐守樣は五萬石長府御在所一將軍家光公御上洛の內森美作守樣は於京都御卒去被成候由　忠利公御代々御心安く其儘御見廻に被成御座候へは御存知被成候何某とか名は覺不申候最早御卒去之旨申上候へはうつ氣者と御しかり被成〳〵御座所へ直に御通被成如御存生高々と內々御願の通內記殿御養子の御願可然思召候御取持可被成候間少も御心にかけられぬ樣にと高々と御意被成候て御歸之刻御家來共歷々に被仰聞候は御最期の御願御聞屆被成候何も案堵仕候へと被　仰聞候て御歸被成候由最前御しかり被成候仁感源仕其

外歷々御家來共涙を流し忝かり申候右の樣子にて內記樣に無相違美作拾八萬石津山御城無相違御拜領被成候內記樣と申御名も御所望にて御付被成候樣に承申候右美作守樣は大坂御陣の刻は森右近樣と申候後に美作守樣三位中將にて內記樣は御甥にて中將樣御弟關備前守樣御子の由信長公以來御代々御別ての御筋目御家來落合勘兵衛兄に落合勘三郎とて　忠利公御懇比に被成候者の勘兵衛は弟にて御家へ參候由承申候

一同御代犬追物御昭覽之節　肥後守光尙公御同座に唯今の松平伊豫守樣御先祖越前少將光通樣御十三の時御同座にて御見物被成候內光通樣御自由に御立被成候御前々見へ申故何もしつ〳〵と御立被成候故御歸被成候節御前より見へ申さぬ所より可被成御座候何も思召候處に本の如く御座につかれ候由　肥後守樣御歸被成候て御伽の衆何も罷出今日は珍敷御見物被遊候と申上候へは薩摩守樣家來共弓馬の達者御感被成候て夫より珍敷思召事か有る伊豫守殿息十三にて御同座被成候箇樣〳〵と御咄被成幼少に候へは家老とも今日の樣子いかゝと氣

道に可存候夜中にても家老共へ被仰遣候はゝ案堵仕可申とて御使者委細の御口上にて被仰遣候へは御家老承偖も〳〵忝仕合とも明日何も申合御禮に參上仕候事延引仕候とて夜更申候へ共此御禮爲可申上御家老其外歷々即座に御禮に參申候由三浦九郎兵衛遠坂關內殿へ咄申候一座に居申承候拙者初江戶當年五十九年に成申候其年芝の御屋敷に右の越前少將樣御振舞に被成御座候御相伴には松平出羽守樣佐竹修理太夫樣大久保加賀守樣右御四人被成御座候拙者は初江戶にて御供衆を見物に罷出候て見申能く覺申候其時の出羽守樣は越前少將樣の御從弟と承候其時の加賀守樣は松平下總守樣御姉聟にて後の加賀守樣は御老中御隱居被成奎頭樣とか初御養子に御座候時は出羽守樣と申候同名無發唐津に勤居申時御養子に被仰付能覺申候越前少將樣は右の通に御心安く出羽守樣は　忠利公御代別て御心安く就夫後の出羽守樣も御心安く御座候て長岡筑後殿佐渡と申時分出羽守樣御振舞被成候時上月八右衛門も相伴に御呼被成候此時出羽守樣うつらの燒鳥重箱に入申候を御持被成御引被成佐渡

殿へ若く候間八右衛門親文左衛門事委く御存有間敷と我等は能存候福島左衛門太夫城代勤申候安藤對馬守城受取に參候て文左衛門仕方無殘所樣子に候拙者は若く有之間能く承候へ城代なとは別て可致吟味事と永永敷御咄にてうつら頂戴仕候て手に受居申わつく難儀を仕候とて八右衛門拙者へ具さに咄聞せ被申候事永くしるし不申候佐渡殿はうつら被下候刻かさを持うけられ候得共拙者は憚に存手を出し請申頂戴仕由八右衛門被申候尤に存候一家光公御代　光尚公はすくれたる御大將と世上にて申候由井伊掃部頭直孝の御嫡子靱負樣に掃部樣御咄被成候は唯今若手にて　細川肥後守に續くは無之樣に聞へ候其方は心安く咄候へ近日振舞馬數寄と申候間馬なとも見被申樣に其砌は勝手に御越可被成由本より　光尚公靱負樣と御心安御間からにて委細御咄被成候御振舞に被成御座候御馬御見物の刻此馬は掃部秘藏仕候間御褒可被成候次にて承候は丶悦可申と被仰候得は高々と掃部殿御秘藏の由御尤に存候御老體の召能く可有御座御馬と御意被成候由其後掃部頭樣靱負樣に御咄被成候は先

日吟後守殿被參候節次にて馬見被申候時能き馬とは不被申我等秘藏と被申候へは乘り能可有之と被申候事偖々尤成る事に候大名にて殊に馬數寄之由に候へはあの馬より能馬多く可有之候能き馬と不被申老體の乘り能く可有之とは偖々尤成被申樣掃部頭樣御感被成候由三浦九郎兵衛咄遠坂殿にて

一同御代江戸町御奉行石谷十藏殿（後號出入）御代々御心安御座候町方出入御座候か總體重き御用の時は御老中就中掃部頭樣御聞被成候儀は重き事に御座候由初に御吟味の刻塚明不申重て御寄合の時石谷十藏殿御申出し候儀尤成る事とて十藏殿御申の通可然との時掃部頭樣十藏殿へ被仰聞候は此間吟味にて塚明兼申候十藏被申通尤に候偖兼々心安細川家へ被參候儀存候尤此儀を咄可被申樣には不存候へ共何そに事よせ道理爲可聞

肥後守殿に咄被申たると覺候唯今の被申分は十藏分別とは不被存候由十藏殿被申候は偖々御恥か敗事に奉存候如御察代々心安く　肥後守殿へ參候故別儀によせ　肥後守殿思ひ寄承申候由御申候へは掃部頭樣御笑被成何も　光尚公を御感し被成候由

三浦九郎兵衛咄

一光尚公稻葉美濃守（號泰庵）御同年にて御代々御別ての分御座候美濃守樣相州小田原御在城の時分箱根山の道能く被成候時分於江戸二三萬石より下小身成衆の御批判に箱根山は大事の御關所美濃守殿若さに御合點不參候て道能被成候との沙汰

光尚公御聞被成候て或時大勢御咄被成候刻右の沙汰を承候拙者事代々美濃守と心安幼少の時より咄申候最負にて申事にてはさら〳〵無之候御靜謐の時分別て往來の者のために候故道を能被仕候は拙者は尤と存候大事の御關所と申衆は幼弱成批判と存候皆共の樣成る大身成る衆を在江戸被仰付候は其爲にて關所におよひ不申候小身なる衆の批判には無餘儀事と存候由御意被成候由總體御旗本小身成五六萬石より下の衆は

光尚公しかりたる（ホニエトア）由承及申候右之段々書付置候通に御座候へは左も可有事と存候松平左京太夫樣被仰聞候由江村節齋咄承候樣に御在世の時分は　公方樣にも御愚比に被思召たる事は乍憚御尤と奉存候御三十一にて御逝去御殘念に被思召候由御尤に奉存候　信康公の御孫子の御子にて御家門と思召たると乍恐奉存候

一稻葉能登守樣は　光尚公御從弟にて御城臼杵にて毎度御城御自滿之御咄被成候故或時　光尚公能登守樣に被　仰候は毎度御城咄承申拙者なとか前にては少御遠慮可被成候尤前々々承及候併俗に申樣に小城はさゝゐの城とてから共に皆箇樣成者は取捨申と御笑被成候由右の能登守樣は長命に御座候私在江戸の刻熊本御通の刻泰勝寺の前にて御乘物か御下り被成候由　三齋公の御孫子樣御尤成事と其刻申たると後の三盛拙者被申聞候唐津か島原か御越被成候時の事と承候其時分は江戸に居申候に覺不申候

一在江戸の時芝御屋敷々方々被成御座事の外草臥申候處に御意被成候は御歸被遊候て少御用の事有之御留守分に可被仰付間御忍御玄關前を通り不申谷小屋の前を遣候へと被仰付候處に致失念小屋に歸り足を洗申時に何やら忘れ申候乃脇差はおとし不申哉大事の儀とさくり見申程に神以草臥さくり見申候へはさし居申候不斗右の御意を思ひ出し片足

おちひさし其儘走り參候へは御怨いつものことく御玄關前通可申と參候處に是是と呼懸候て谷小屋通り候へと申付候二三間の間にて呼戻申候儀々あふなき樣子偏に〳〵神佛の御陰と八十に成候ても少も忘れ不申候此外心付見可被申候拙者事度々あふなき事のかれ申候たるは常々　神信仕故と奉存候間必々各能心付神佛敬信心に勤可被申候興津才右衛門小笠原勘助事書置申候兩人共に御家中一人の利口發明と申者の仕損其外御勘氣蒙り御暇被下或は病死にても又は其家つふれ申も皆々天罰と心得被申吟味可被仕候

心たに誠の道に叶ひなは祈らすとても神や守らん

拙者儀身に覺度々　神佛の御助と奉存候事數度有之候故子孫の爲めと返す〳〵も書置申事に候

一御下國にて妙解寺泰勝寺へ御參詣の前の夜明朝は六ツ過に揃申樣にと申來候故拵へ股立取候て御城の太皷打出し候はゝ罷出可申と相待居申候へは御待被成候由にて御怨の者走り參候故急き參候處に其刻櫻馬場三盛屋敷に居申候時にて橋の邊に參候へは亦呼に參候川端黒御門よりはいり馬場の口に被成御待其儘被爲召御出御成候其後角入に參申候へは正壽院被申候は右の咄平八にも被申聞能承候へは角入は御小姓組の時分々朝番の時御門開き不申內にて前の腰懸にて休み候て御門開入り申候に勤申候御結構成　殿樣故に傳右衛門は定て城の六ツを聞候て可出と思召候御花畑の拍子木今朝は少早く未　御城の太皷は打不申との角入へ被　仰聞候由彈藏覺居可申候老父も半時一時人々早く起勤め申事御奉公の第一と被申聞候角入被申同前の事にて初心成る時は早拵候得共功者に成候程必々何事にても仕損申候

一五十年餘に成可申候山名十左衛門藤田助之進父子北の關にて打果し被申候翌春御參勤の道中は大形心かけ申候者は心底に用心仕居申候三島御一宿の夜中に火事と申候其時分は步御使番勤候節にて宿も遠く三島明神前にて四五人相宿にて居申候拙者は常に枕元に御供衣類幷わらし召置候明神の釣鐘つき申候故目覺何事かと尋候へは宿主火事にて御本陣近くと申候故其儘起わらし踏罷出申候大矢野

源左衛門宿は皆共宿々は御本陣近く候故大矢野は拙者々は早く出候て御本陣に出候へは近邊の宿に居候物頭小姓組大形出申御小姓頭寺本八左衛門に逢申候へは火も鎭り申候間銘々宿に被歸候へとの事にて歸候由御本陣より四五十間程に參候得共大矢野右之通申候故拙者も同道にて歸申候後に承候へは御本陣隣家に大木隼人（舍人殿事）宿にて御先番にて立被申候跡にて出火の由御本陣の間に溝一間余有之不斷水流れ申候迄にて箱根山の方の角にて御本陣近く御座の間の雨戶御けはなし被成鴨居ともにはなれたる由承候右之通にて拙者相宿の者共草臥拙者一人出申候得共つく〳〵と案候へは大矢野に逢申ても御本陣迄參り候て御番の衆に成共逢申て歸候筈と存候拙者出候儀は大矢野々外の人は不存候尤草臥出不申候者々は能候得共夫は心悪なく心付ぬと申迄にて善悪に不及候心悪參候拙者にて候故此事失念不申候物前なと證據と申もヶ樣の事にて可有之と存候大矢野は拙者と同年にて御座候利口發明中々拙者は及不申と兼々存候大矢野林兵助村井源兵衛拙者四人一同に御取立被成候得共步御使番の時々別て御意に叶たると存候事多く無恙勤申候は丶兵助々は能く可被召仕に殘念に存候四人共に御中小姓の時拜借願申時大矢野は貳貫目林兵助は壹貫貳百目村井は五百目拙者は七百目願申候其刻御中小姓の願に壹貫目々上の願は叶申間敷候横山九右衛門御中小姓の時壹貫目願申候は親五郎太夫千三百五拾石取候間拂申につかへ申間敷と其時さへ色々と沙汰仕候今度四人共に親も小身に候へは九右衛門とは替り可申候五人扶持廿石の跡にて天窓から拜領と願可申事と御家中沙汰仕候由同名文左衛門も被申聞候拙者事隨分吟味仕七百目願申候村井も同前に存候得共少成とも輕く願ひ申候へ不足は節齋きもいり可申とて五百目願申候其時分大矢野も林も妻を持居申候間勝手向不成事尤と拙者は存候へ共世上にて色々申たると承候其時分は米渡りにて候百目に貳石六斗にて大矢野に米五拾貳石御借被成候其時は四人共に御意に叶不召れ候ては不叶者共故と申由も承候其一兩年前兵助は於江戶不破五郎右衛門賴候て結構に具足をおとし候由いか樣達　御耳候哉兵助は勝手も能と御聞被

成候に兵助借銀願候はゝ殘る者とも願申は尤に思召との事拙者は以後承申候何事も上は正直に被成御座候に下としては必々大形は御奉公に事よせ米銀共に願申儀諸人多く候間能々各心にて吟味被仕萬事願事天明らかにおのつから罰を蒙申候去る人勝手不罷成候由誓紙を以願上五拾石御加增被下候其者の米を川尻に預け置候由林兵助川尻に兄とも御船頭仕居候故江戸前暇乞に參候て承申候由にて拙者へ咄申互に肝つふし申候偖其者頓て病氣に成目見へ申さぬ樣に成り候て果申候其外御奉公に事よせ娘の祝言の用意の何の角のと御奉公に事よせ申事誠に〳〵無勿躰事拜領の祿の內にて養子養申隨分相應な內にいたし申候はゝ子孫繁昌可仕と老父は一人娘持終に能さる物こしらへさせ不被申候或時老父何方よりかりんす一巻もらい被申候を老母角入を呼注文かゝせ京に角入方な染に遣被申候其刻老父よそな戻り見被申心に叶ひ不申由男の子は公義に衣類入申候女の子はたとへ祝言仕候ても奥に通申者は男の兄弟伯父甥從弟迄にて他人に逢申物にてなく候まして幼少の內不入事とて老母を

しかり被申候其時一人の娘に何の談合可入事か早く注文調被申樣に角入に被申候角入も乍迷惑調被申候紅うこんにちらし紋にて妹久敷持居申候故能覺申候如斯調候に落涙書兼申候拙者は右之通直に見聞申候ても中々老父眞似百に一ツも成不申候得共子としては少成とも志繼申儀孝行の第一と承候故委細書沿候各子孫繁昌實願被申候はゝ必々老父眞似可被仕候兄弟三人共に八十迄存命如此の仕合は皆々老父志顯れ申候と存候

一右の大矢野源左衞門皆共一同に新知被下候其翌年正月三日か四日に賓町山本玄長とか申彈藏方へ出入仕候其屋敷の近邊かちや町通り候刻子わるさ仕候故親しかり〳〵割木を投打仕候處に通り懸り源左衞門ひたひに割木當り少し皮打裂申候其儘親逃申候故追かけ打果申候其時分拙者追廻御馬御殿前通り申候刻林仁左衞門とか申步の小姓廻り横目にて知人にて候大矢野源左衞門殿唯今鍛冶屋町にて人々切被申候由にて走々參候故源左衞門は何方に居候哉と尋申候得は組脇簑田左五右衞門へ被參候由申候故其儘參候へは早々宿に歸り申候左五右衞

門屋敷は唯今宮村武左衞門屋敷と一ッ成申候源左衞門は步御使番の時の屋敷にて唯今菅九左衞門隣屋敷にて座敷に這入申候へは唯今西山八郎兵衞被參候源左衞門兄彦四郎組頭大矢野彦四郎は西山組脇にて候源左衞門申は傳右唯今八郎兵衞被參候うつけたる事西山被申候打果候者町人と存候刀差居不申由咄候へは先御仕合にて候刀をさし居不申者にてと被申候ゆゑいや刀さし候とて遠慮可仕樣無御座と返答致し候由近比御番頭の口上には合點せぬとてしかり申故いかにも〳〵道理先々口上書可入候拙者手跡あしく候へ共御右筆山崎傳左衞門父子向屋敷にて見習申候視々と申候て下書調申內同名半助參候故拙者なは半助能筆迚好半助に書せ申候西山は其刻も能番頭と申他國にも御使者に節々被參候結構成人にて候得共武道と申事は本にて常には入不申候へ共々樣の時早源左衞門見おとし申候定て西山は後の吟味にて刀さし申さぬは町人にて可有候刀差申せは半人か後の吟味やかましく存被申たるにて刀さしたる者は切籠可申樣成口上故にそなたは心に叶はぬと存候尤西山殿少念入過たる口上なれ共彦四郎殿御組頭にて慮負の心にて被申たると存候由拙者申候へは兄の彦四郎いかにも〳〵御察の通と申候源左衞門身にしては參打果申節に當り後の吟味の刀さしさゝぬに構ひ可申樣なく候尤其刻迄も源左衞門はせき居申候故尚以聞咎申候ゲ樣成る時節は見廻に被參候者も可尋事も米銀勝手の咄とは變り常々武道を心かくるとかけぬと顯れ可申候山名十左衞門殿にて津川流水咄被申候林外記時伊藤角右衞門額に手負小笠原備前殿屋敷の土路口外記屋敷より近く引取申刻角右衞門常々心安き仁名は不被申候角右衞門手負候哉相手はと尋申候へはうつ氣者手負て相手とはおれか仕留たと高々と申候故其仁大勢の中にて右の仕合事の外迷惑そふに脇からも笑止に存候假初の事にても心知らるゝ事兎角常々の咄とは何その時ならては善惡知れ兼候と咄被申候事覺候昔より手負に心をつくると申事は犬うつわらへもたか舘の草双紙心を付見候へは次信手負たる時弟の忠信か鎌倉權五郎か世を渡る上手の眞似は親かおしへす銘々分別出申候深手にても淺く偖々見事常々の口程あるの

偖も能く切れたのなと其人に先力を添る事は拾人並の者は存候夫ゟ下おろか成と申人も武道は格別右の角右衛門にしかられたる人名は不承候へ共角右衛門はおとりたると存候西山も大矢野には口上不足に聞へ申候常々古咄聞候へはおのつから能き士に見へ可申候武士には高下昔當世無之候

一右の通にて大矢野暫く遠慮仕居候其刻山名殿に參候へは此間源左衛門事に付色々古き咄聞申候沼田小兵衛此前若き時山鹿入湯之刻町家ゟ外に物ほし棹つき出申に沼田顔に當り候故供の小姓其まゝしかり可申と内に走り入可申と仕候へは小姓を以の外しかりうつけめ怪我じやと却て小姓をしかり或時は内より外へ水か湯か小兵衛にかけ兩度迄右の通との事を御聞候由其外は兎不申候偖は御吟味つよく御座候と存候へ共神以終に源左衛門切間敗者を切たると申人もなく候同名文左衛門なとも此中大矢野事に付何の角のと批判候へ共切とさらぬは切たるか能きと被申候拙者心底には神以文左衛門初として切たるか能きと被申候子に打かけたる割木と心付候はゝたとへ目打潰されても切申道理にてなくとは存候へ共相役同前殊に前々ゟ心安く咄申候故終に口外は不仕心に計存居候源左衛門事暫く遠慮仕御免被成候て御案内役も御除け被成候て御番方に御出被成候右之通前年九月十二日に新知被下御小姓組に被召加可被召仕と思召候處に定て御心に叶不申樣子と何も申候其刻は筑後殿御存生にて別て萬事御吟味被成候時分にて御座候前廉十左衛門殿御咄候事書付置候小兵衛殿山鹿入湯の時の事見可被申候怪我と御座候てはたとへ自分身の上にいか樣の片輪に成候ても怪我と心付打果可申道理はなく候我身の災難にて免れざる天命と申にて可有候誰も切捨可申候尤其時も切たるとの御咎も無之世上の沙汰同名文左衛門抔被申候道理に皆々申然れ共御意に叶不申候故に御取立被成百日も立不申内にて役儀御免被成外樣に御出し被成候にて知れ申候大矢野跡に古閑喜兵衛步御使番にて居申候を御中小姓に被召直源左衛門跡役に被仰付候偖源左衛門か身に成候ては何心なく參候處に右之通に額に割木當り肝つふし候て逃申候はゝ追かけ申候共町家の事何方へ可參樣なく是々怪我と思ふ程にゆるすそ其儘居申候儀と申候はゝ定て殊之外迷惑がり申候て偖々不調法千萬子を打申割木御額に當り疵迄付申候に御免被下候事難有奉存候と其身は不及申近邊の者迄罷出悦可申候歩行にて歸り申事不成候はゝ其所に休息仕惣にて歸り申つくゝゝと丁簡仕候はゝ彌能く堪忍仕候と心にも可存候此間の沙汰を定て色々可申或可切事と先十人か九人可申候切間敗事とは十人に一人可申候總體我身の勇臆を心にて吟味仕兄弟親子にも此勇臆は心々にて談合の難成事併自分に塩明不申候はゝ他人にても如斯けかと存候故堪忍仕候得共御奉公も難成體に成候へ共怪我と知りては打果不被申各何と思召候哉定て世間にては色々沙汰可仕候へとも我等の心にも心ながら其時腹立申候得共子に當る者か拙者の頬に當り申候災難と存能く堪忍仕と存候然共　上の思召所如何と奉存候間頭へ御斷申被爲拜領候知行差上可申と存候と極申候はゝ靜りたる樣子大形の者は怪我と存候て打捨可申に落付たる仕方と可成と存候或傍輩中の喧嘩に不斗あたりたるとは替り申候我子せつかんは定たる事人間上下共に世に多き事にて候又拙者ならは怪我と存候はゝ尤養生仕罷出申被召仕樣前に替り御意叶不申樣に存候はゝ其時御知行差上可申候尤組頭にも相談に及不申候四十二の時に候故若きとは不被申三十五六迄三十內外に候はゝ成程怪我と存候ても打捨申たる事は能くも可有之哉たとへ二十內外にても大勇は世間の批判主若の思召にも構ひ申間敗候木村長門守は討死の時二十六と覺申候各御吟味の爲に拙者存寄書付申候我か身の腹立申とて怪我と存打果申は道にそむきたる事能々可有御吟味候

一朽木內匠殿嫡子三郎兵衛殿十二三の時に乙名の子も十一二の時はま弓にて射合申候時三郎兵衛殿目に當りつふれ申候拙者同年かと覺申候唯今氏家平九郎屋敷かと存候爲養生父子共に逗留の內にあそひに參候て覺申候內匠殿七十斗と覺申候若き時三千石被下置候得共病氣と申知行差上唯今三郎兵衛殿の在宅に引籠居申され候右の子の親は乙名にて小知も取居申候三郎兵衛殿目つふれ殊の外腹立被申候へ共幼少成る故其分にて置れ候へ共親にひたと當り右の立腹止不申親も幼少の子故不便に存候

て親自害仕果申候其時分內匠殿串承及候衆は老輩めされ候哉子共の事第一怪我の事は昔より災難として世に多き事あたら親用に立申者を心から無用の者にて果候事は返々も內匠殿御誤りと御家中武功老功皆々一同に申由老父は就中致療治被申候故事の外悔被申候譯は替り候得共大形大矢野か町人打果候に似たる儀と存候右の內匠殿は山名十左衛門殿御母儀の御親父にて候唯今の內匠殿祖父にて候

一五十餘年以前芝御屋敷に御座候時井關左傳次と申御兒小姓勤居り申井關（號甚兵衛）與右衛門四百石取申候者の嫡子にて其子は高見三右衛門婆子に成申か宮川圀四郎孫と覺申候右申候左傳次御次より小屋に歸候刻刀を忘れ道にて心付戻り候て刀を取歸候て兎角致迷惑遠慮仕居申候其刻御家老在江戶は覺不申候舍人殿も未た元服なき時分か拙者も其刻は出合不申候上田新兵衛殿堀二郎右衛門殿とは此噂承候此時色々古き咄古頼母殿內々藤左衛門若き時道中にて刀を盜れ切腹可仕と申候へは古頼母殿少も越度に成不申候とて差料の刀をとらせ其後古頼母

殿病死の時追腹と申候へは盃さし被申最早供仕候同前其の方に頼習事有り平吉（頼母殿幼名）幼少に候命全くして守立呉れ候へと被申候へは奉得其意と申平吉殿後は頼母殿と京都にて五月十一日に被致病死江戶より京へ被參候逗留中の算用迄承屆跡々の事迄一夜に將明申翌十二日致追腹候儀も右之時分具さに新兵衛殿咄被申候兎角如此井關事は終に不承候事心得（一本ニ有之）又有間敷事にて無御座候三齋樣御代と替り唯今の殿樣も御家中の衆も武功と申は一人も無御座候漸々島原の百姓共の時勇臆知れたる迄に御座候殊更江戶にての儀故他所にも其儘知れ申天下の批判可有御座候おそからぬ儀に御座候へは熊本へ御歸被成候て御一門御家老御備頭なとゝ御吟味被成其上の善惡は不及力事と存候若狹守樣と御談合と御座候得共是は格別刀を着申者日本國數萬人御座候者の身の上に引受批判可仕候誠にゝゝ大事成儀と心安御座候へは咄申候其後井關に御暇被下候其刻堀二郎右衛門殿に尋候へはいや常々勤御意に叶申さぬ事共多く若狹守樣と御相談の由被申候故乍憚先御國へ御下し被成右の衆中被召出

夫々の思寄可有有御座候平生御意に叶不申事はいつにても成儀と存候先刀を落し或は武士のなるならしの御吟味斗に仕度事と奉存候末歩の御使番の時分か兎角舍人殿に咄不申時分にて候

一其後江戶にて奥村百助（二郎左衛門嫡子三百石御小姓組号前太郎左衛門小說）刀忘れ御番所か裏玄關迄か出候て思ひ出し候哉兎角右の井關事にて若き小氣者は云ねは男の成らぬと心得候時分にて引籠居候故奥村久左衛門拙者を頼申候故見舞候て申聞候は偖々そなたは生れ付大勇と思へは思ひの外小氣に候先日刀を忘れたる事心に懸り苦に召れ候由久左被申聞候拙者幼少の刻熊本の寶町に同名八右衛門とて伯父の所へ參度毎に山中平左衛門と申は貳百石取親は山中又兵衛と申　眞源院樣追腹仕候者の跡にて兵法能覺申由門に出居申を度々見申候に脇差もさゝす無刀にて居申候能々承候へは右の兵法自滿にて人を何とも思はす無刀にても刀脇差は不斷むねにさしたる心の由承候刻拙者見申候儕亦昔忠信なとは無刀にて大勢引受碁盤忠信とて數百年以前の事なれ共今に五月の子供昇に書て祝に用申候貴殿も大勇にて刀をさのみ

頼ぬ心故に不斗忘れられたると存候人の思わくも事によりたる儀に候ケ樣の事は貴殿の心にある事にて候へ共若さに苦に被存候事も無餘儀存候得共少も少も心にかけられす御勤候へと申候されとも小氣者にて事の外苦に成申候哉江戶ゟ下り候てか病氣に成知行差上亂心の樣にて果候屋敷は今一村彌三兵衛屋敷にて候老父次郎右衛門は其時分も存命京町に居申候て折々見廻候て咄申候年より痛敷存候つる

一其後刀忘れ御番所より裏玄關迄參候て刀忘れ申とて清成武右衛門は島原にてすくれたる働と承候御鐵砲三十挺預り芝御屋敷に被成御座候時歩の御使番勤候時分御番仕居申候拙者前にて忘れ申とて立歸りさして歸候何共可存樣もなく惣體そゝふ成人にて候つる山崎角左衛門御目附の時柏原新左衛門殿は熊本御奉行所へ被出候時分乘物の內に刀を置御奉行所へ跡より小姓持參候由角左衛門咄承候十左衛門所へ參候へは御花畑へ御出の刻玄關にて逢申候刀さしなから乘物に御のり拙者に乘つけぬ乘物にて刀忘れ出候事節々有之ゆゑにさしながら御

乘被成候由其時分中川梶右衛門は心安く四郎右衛門殿へも出入被仕候て大勢の中にて江戸當世は刀を忘れては男のならぬ樣成る事と承候島原にて見申候神足八郎右衛門は陣小屋にて度々刀を忘れ八郎右衛門者と呼候て刀取に遣申候討死もすくれたる事にて御座候つると咄申候其刻江戸ゟ歸候刻三盛咄被申聞候併忘れぬ樣に心付可被申候他家へ參咄申時度々參候所は尙以每度置所替らぬ樣に折々參候所も其の心得仕候へは急に火事抔と申候て出候時も常に心付候へは其儘さし能候江戸の小屋せまき所に大勢咄々伏り居大小ぬき咄候時夜中に火事などと申度々見申候脇差など差替候事多く互に笑々差替候樣成度々見申候是も常に心かけ候へは左樣の時も能く候老父節々被申候刀置候所は立候時跡を見返し候て坐敷奥坐へ通り候へは戻る時能く候必々大勢居申刀置候所に同し樣に置不申柄並ひ置候所にては鐚の方人と替り置候へは其儘見能く武功老功の者は若き者の刀の置樣にても善惡を見ると被申聞候　御城御花畑刀掛に置候時別て心を付可申事に候不苦事とは乍申無調法に聞へ申候

芝御屋敷に見物事御座候て二代目の宇右衛門殿上御屋敷ゟ被參見物所に通被申候時大勢居候所にて刀を持何方に可置かと見合被申候處前廉召仕被申仕內藤伊左衛門と申步御使番勤候者出向ひ候へは刀を渡被申候てしはらく居被申候て刀の置所とくと見定候て通被申候度々心付見申候外には一人も左樣に仕刀を置所見屆申か自分に置候ても見返しとくと心付申人は無之候爲心付可被申ため書置候一上田新兵衛殿は八代御番頭にて被參候御組の衆に逢被申候刻直に被申渡候由承候何も御聞置候通近年は刀を忘れたるとて心にかけ御斷なと申衆有之候世に多き事にて拙者は心得違ひと存候各若左樣の儀有之御斷なと可被仰上と被存候共於拙者は神以取次申聞敷候兼て左樣に可有御心得由申渡され候由承候上田殿は古き事共能く被存候間當世にかゝはり被申聞敷と終に直に尋不申候尤に存候拙者共新知拜領の刻四人出合候刻拙者申出候爲も御同意とは存候得共刀を落し或は忘れたるなとゝ申御斷可申とは神以不存候併左樣の時御斷不申上不屆に思召御暇被下候共拙者儀は御斷申上御國は出間

敗覺悟にて候と申出候得はいかにも〳〵皆共も同前とて笑ひ申候神以右之通心得候昔咄書物にしるし置候

一寺尾加賀之助と申求馬二男にて御中小姓にて御供役勤江戸へ被召れ候處に鶴崎道中にて馬にて參候節雨降馬上にて定てねむり居申候やいか樣の事か刀を落し申候即刻心付候はゝ尋させ可申事又宿に着てもおし出し申候はゝ郡奉行承候はゝ其儘尋出可申候無左候とも夕樣の譯にてねむり覺不申落したる由申候はゝ御吟味之上にて多分不苦事と可有御座にかくし候て誰にも咄不申候て江戸へ着仕相勤候內に熊本ゟ申來鶴崎道中にて刀落し申候者御座候抔等吟味仕候へは加賀之助刀に極りたると申來候哉暫く仕皆共も承申候伏見にても宇治邊にも見物に參候て村井源兵衛抔も同道仕方々見物仕候時分も心に懸る樣子もなく江戸にて御暇被下候拙者も折々兵法習候て心安く小屋にも見舞に參候へは御暇被下不及是非候併熊本には歸ましき迚何共思はぬ心にて小哥抔歌ひ居申候故成程若く候間江戸に致逗留可然と申候其後下谷邊に罷出兵法或は手習子なと參り暫居候か後には病死仕候樣に承申候殘多き事に候右之通に候へは尙以其時有樣に鶴崎にて申出候はゝ刀も即刻出申不苦事と成行可申物をかくし申事心得違ひと存候惣體他國は大形乘懸馬にふとんはりに刀をさし或はくゝり付置候當御家中は前々よりさしなから乘り申候ゟ樣事御座候故と存候馬上にて眠り落し候ても武勇の疵に不成事殊更求馬か子にて兵法も覺申候へは餘人ゟは心に懸落さぬ樣に可仕事御領內故に刀は出申候他國ならは吟味も成間敷候又さしながらも眠り落し申間敷事にてもなく候兎角刀を大事と心かけ候はゝ何れの道にも能く可有之候拙者は常にいたゝく心にてぬきさし仕候然共所により刀のこしりの方にぞふりわらしさし置候て所により能く候此前御船中明石にて風強く御宿へ御上り被成候內に此風にも多分織部は小早にて可參と御意被成候時に即刻に被參候て御宿御番にて拙者見申候織部殿一人草履を刀の鐺にさし被申はいり〳〵偖々無恙目出度目出度とて拙者前通り被申候　信長公御若き時より御刀に御さし被成候足半（アシナカ）兼松又四郎殿素足に

て働の時被下候由兼松家代々傳申由に候或道中悪休なとにて夏はわつく裸に成申時は下帯の上にさし候て能き事多く身に覺申候兎角力も何方にても近く置候て能き事多く候歴々御老中方に參候て手に持心つかぬ様子にて持なから通り候て少もつかへ不申候居申所より程遠く大勢參候へは所により家來共置所直し置事多く候何方にても氣のつかぬ體にて持なから通り候俄に心付たる様に兎角近くに位も所も入不申候刀は近く置候事老父度々咄聞せ被申候間心かけ可被申候拙者も度々覺候へ共事永くかゝれ不申候熊本にて前かとは大身成所にて刀のしとゝ目或は鍔とられ候同名無發も何方にてか鍔はつされ拵直し申事拙者幼少の時熊本へ參候時にて覺申候皆々小姓坊主にて候由承傳候拙者若き時江戸木挽町おとり通りかけに芝居にて見申罷歸候時に見申候へは脇差の下緒とられ申候しとゝめは紙にて下地をはりたるか能きと承及ひ候て紙にてはりはなれ不申様に仕候故下緒計取申候能々あんし申候へは見物可仕かと小用仕あなたこなた仕候内にあみ笠を手に持跡より參候者か取たるや

と存候其時は惜々口惜次第と心に油斷と存小用仕體にて刀の下緒切つけ歸て暫く人に咄も不仕候つるあみ笠着候者は左様の時必ぬき手に持なから切り申候と承候唯今は少なく前かとは多き事にて皆々後に咄申ておれも〳〵と咄笑申候事存出し申候皆々脇に心移り氣付ぬ所を見候て取申由承左様に可有事に候

一綱利公は御幼少の時分御三家にても御刀御差御通被成候由水戸様にて見申候松平陸奥守様御刀御持せ被成御通候其外は不及申候尤御屋敷分御出入御花畑も御同然松平土佐守様御屋敷へ御歸宅の刻通り懸り候故立留り見申候土佐守様は御玄關にて御乘物より御出被成候時尤此方同前にて御迎に五六人出居申候御忽に御刀も御扇子色々被召置其儘御出被成候跡にて右の罷出候者御刀御扇子色々持候て參見申此方とは替りたる儀と存候土佐守様御居屋敷にては前日十五日廿八日毎度御門くゝり戸足輕共御門番に上番と見へ上下着或は羽織にても侍と見へ申者一人ッゝ居申候不斷の儀は不存候此方御屋敷などで表御門にも嫂度仕候御客御振舞の

時は御鐵炮頭兩人御門番居申向合に少高く御座候處に詰居申候或時土佐守様御門前御通候時に右の上番と見へ申者罷出居申候御手を被出候其刻拙者に御意被成候は今日は客か有かと御尋被成候故いや御禮日には上番罷出居申由申上候少御不審の様に奉存候井伊掃部頭様御居屋敷は前々ゟ不斷御門は開き居申候就夫上番上下にて不斷御門番居申高き所に居申候上下の御屋敷共に加藤主計頭清正同忠廣御二代の御屋敷と承申候掃部頭様御拜領被成不斷御門開れ候事は譯有由承候委細は不存候唯今は不存候拙者見申時分夫々御家〳〵替候事多く備前岡山御城主伊豫守様には御心安く度々御供に參候御廣間御番人物頭は小屋より鎗持せ出申候皆共居申腰掛の後に御家中下々居候腰懸御座候見候へは腰懸の板より上に設々鎗かけ候故何本も懸り下々も共儘取能見へ申候角入に咄申候へは前々より向の御下屋敷より御番に出候者鎗もたせ申候定て御居屋敷の者頭は何以持せ可申と被申候

一此方上御屋敷御作事出來仕上に被成御座候事は當年迄三十九年に成申候其前は芝に被成御座候上御屋敷御作事致出來皆共小家なと萬事御作事方堀次郎右衛門殿御聞候故御屋敷内惣雪隱もすくなく八丁堀より芝なとより鎗持せ參候衆も小屋々々の塀持せ置候又馬屋計にて見申候へは馬の置所も見へ不申候鎗かけの儀は松平伊豫様には〻様〳〵抔と咄申候へはとくより承候はゝいかにも成申事候得共最早内の御作事萬事調申御庭御屋敷にひけ申故立可申所なく成申候鎗かけは裏御門番居候向の壁にと申候へ共夫も二階に火事道具入置候所にて出入につかへ申候拙者小屋角小屋同名半助と相小屋にて居申候雨降候時大分水落致難儀次郎右衛門殿に申候へは尤とて御屋敷の小屋不殘角々にはといかかり能成申候二階にて髮そり申にも敷居高く候故是も二階に上り恰好能く下ケ申か上ケ下ケに初ゟ氣を付候はゝ能く可有之候別に御物入は御座有間敷候惣躰我物にいたし物事心付申候はゝ小屋に居申者後々迄悦可申と存候此儀承申候へは上御屋敷小屋の窓も能かけんに明り惣雪隱も所々に御座候由承申候

一前廉芝に御座候時分松平阿波守様年始の御供に參

候へは御門番共丸の内に萬字の御紋付候上下一兩人着仕候故拙者も不審に存尋申候へは皆共式にても大坂御陣を勤申候者の子孫には如斯暮暮に拜領仕由申候其後ゟ召仕候子孫には遣不申由申候小畑傳九郎咄承候阿波守樣に傳九郎弟居申候由に候知行取も二樣に御座候代々地方を被下候者と御藏にて米拜領仕候者と二色に御座候由咄申候其家々にて替り申候と存書置候

一先年御道中にて赤坂には松平兵部大輔樣越前御油には綱利公御泊被成候前之夜御立被成候時分を御使者御取合にて兵部大輔樣は赤坂に未被成御座候内に御通被成候御供衆幕打申は六名の札も大きに丸提灯二ツ小身と見へ名の札も小く常の提灯一ツ札見へ申樣にともし申候右の樣子御覽にて皆共に御意被成候惣躰人の善事は見習たるか能く候おれか者共はゟ樣にはせぬと御意被成候其後の御參勤より此方のも燈し申候

一箱根にて荷馬四五疋御通によけ居候印に高の字付候木綿の小しるし不殘つけ居申候拙者に誰の荷馬か尋候へと被仰付候尋候へは松平讃岐守樣と申候高松の高と存候其後此方のも本の字印に成申候歟年定御供にて江戸も道中も色々しだし出來申事見受申候前廉は御怨の者共も御手廻り同前にかきの合羽にて御座候或時下馬にて見申候へは紋付初て見申候其後見申候へは又四五人大身成御衆にも右の通成るを見申候故村井と申合此方のもあの樣に可仕候かきにては此方御供衆元田小左衛門は目うすく見違候事其外にも有之候其時分朽木內匠殿御怨の事承不被申候故々樣〳〵と申下馬にての樣子咄申候地紺に白く山道付させ申候其後次第〳〵多く拙者見申內に大小名とも大形右い通に成申候御兩殿樣御二家何も無地の黒き雨羽織かと覺申候唯今は不存候尤村井と申合御怨の者共尻からけ申事も前ゟは下ケさせこうとふにからけさせ申候村井拙者勤候迄江戸の者勤申候其時分は續刕右殿御用承被申候何とそ御國者計に仕度候はくちなとうち御國者迄風俗あしく成候由悔申候へ共次第〳〵に止八右衛門と申者一人殘り申候是は男振も如形能く不便に思召候間妻なと對しさせ候樣咄右殿被申候しはらく勤病死仕申候夫より御國者計に成申候

一或時十左衛門殿に參候へは　御花畑ゟ御歸候所にて片衣ぬき〳〵傳右そなたの悦事今日被　仰出候御先供の儀向後は御國者計に可被成候御足輕の內家中に勤居申候者にても人柄吟味仕召抱候樣に被仰出候由御申候故惣躰御先供止申度由神以申候へは其樣には成らぬと御申候定て　先御代の通にて可有之候前廉　殿樣御幼少の時は御供不殘御先は小姓組勤供鎗三十本餘有之たると承候拙者初ての江戸まて御小姓組七人新組壹人供鎗八本其上に肩衣着御使番御側物頭二人御小姓頭一人は騎馬次第〳〵へり鎗も五本に成三本に成肩衣も止申御小姓頭一人に成申肩衣着の役新組御案內御怨奉行勤候其時分も御登城の刻は御小姓頭壹人要人內匠佐內九八郎一八此內二人肩衣着三人被召連候御借馬も初は三疋後には壹疋に成申候惣躰人數少なく成候事は大御目附御差圖と承候御並ゟは殿樣は平日少なき樣に往來のつかへぬ樣にと每度〳〵被　仰付候御怨すへ申所も御門より遠くすへ候樣にと儀小身成衆の乘物すへ申所同前と被仰聞候へ共雨降道あしく候時は尙以御步行近き樣にと此方は心懸申候江村節齋には每度被仰聞候由兎角大名なれは乘物も門きは迄のせねはならぬ事の樣に源兵衛傳右衛門心得申と思召候遠ゟ下り候ても大名と存候へなとゝ御笑被成候由隨分御意の通に心得候樣度々被申候惣躰御結構成御慇懃成る御言葉大度內藏助殿さかりより其下々御心安き衆にもかけにても終に殿を御つけ不被成候儀無御座候又內々侍共にも下馬仕居申名御存知被成候者は名を御意被成候薩摩守樣御聞番伊勢十兵衛と申者下馬仕候時に十兵衛はやうござれ〳〵と御意被成候拙者に被仰聞候は今のは薩摩殿聞番にて江戸一ばいの公義者にて松平越中殿は十兵衛小屋に夜咄にも被參候由大ちやく者と御笑〳〵皆共に被仰聞候如御意承及申なてつけにて冬紅裏着かくれなき男四十五六に見へ申候

一此前田邊平助次男川邊三左衛門と申貳百石新知被下御中小姓御供役勤候時分道中天龍川の船に牧圓右衛門は水不調法にて荷物に取付船しつみ候はゝ荷物浮可申間取付居候由三左右衛門は水能くおよき申大小ぬきはたかに成りおよき可申と帶解申所に船しつみ申候脇ゟ助船參候て兩人共に荷物も取

つき上け候然れ共三左衛門刀流れ候や兎角心にかけ〻ゟ様〳〵の儀と申上引籠坂崎清左衛門殿段々被申上候得者左様成事は世に可有事と思召候達御耳不申共其方共手前ゟ不言事と可申聞せ儀と思召候若き者心にかけ申も無余儀は思召候早々罷出勤候様に申聞候へと御意の旨にて島田ゟ御供勤申候惣躰渡し船川越し申にも皆々急き申物にて候随分心靜に延引少も御奉公のつかへに成不申候たとへ延引仕差つかへ申共申分はいか様にも可成事に候必々急き渡申候へは何そおとし申か兎角悪敷候間下々迄も其心得にて能く可被申聞候前ゟ度々承候事皆々急き申ゟ事起り申候

一道中馬入の船渡し奉行服部四郎兵衛今一人は覺不申候御船に被爲召御祝に付居申候四郎兵衛は御跡に殘り御船にむき跡に心付不申候故御家中荷馬下々迄待居申故人馬道にもみ合申を御船より御覧被成往來のつかへに成ると御意にて御座候時いや此方の人馬と見へ申候由左内初何も申上候へ共此方の者計にて有間敷思召と御せわに候岩間彌左衛門御祝の跡に居被申候扇子二本にて開き見せ被申候時に四郎兵衛も合點仕候てうしろ見申候へは人馬

つかへ居申を見候て何も船場へ通し申候其後四郎兵衛無心元被存候哉拙者に尋被申候御船場に土俵にてはゝをつきたると思召候兼々被仰聞候に所の者共定て心遣可仕との御意の時左内被申候は四郎兵衛私に申聞候は御爲には不仕候二三日以前に何某様御通りの時に仕置候由所の者共申候故其儘にて召置候由に御座候能く御申置候と存候御船に大形むき居申衆多く御座候少し脇により御船も跡の道筋も見へ候様に重ては御心被付候へと笑々申候度々道中渡し川船にても天氣能く御座候へは仕合雨なと降り俄に大勢參かゝり候ては例へは御意にても思召様に無之候大形が　殿様の方計に心付申候前後左右に心を付あなた此方と御祝近く候ても所により少も不苦候慮外とは見へ不申候へ共何も遠慮多く却て不調法に見へ申候ゟ様成時分別て心を大にして氣を廣く所々に眼をつけ可申事と存候御渡し場斗に心滯り廣き川原上下に心付候へは他所の者の上下渡候迄見へ申候兎角物毎人に尋其所々の様子委細尋申候へは心得に成事多く候此方の初勤候者計に承候ても所の者は他家の事渡し様

數度見覺申候承候て其能き事用度事に候大形は御目通迄に心付候故前後左右に御心付られ御覧被成候或時同名彈藏歩御使番頭勤候かと覺候天龍川渡奉行勤申候相役は覺不申候留り申候て川端事の外騒き申候拙者御供にて能見申候御通りの時分何方に居申候　御目見仕候や見不申候川端に立居申あなた此方と心遣仕候様に見申様子能く御座候大方は御目通り近く居申候衆多く候其時御召船に蓑笠着仕候者御船に參候を御覧被成おれか船に人がのるそふなと拙者に被仰聞候故いや御船のあかを取可申と存候と見へ申由申上候拙者如申上候右の者御船にのりあかをくみ捨申候暫御覧被成いや〳〵御船に被爲召候て御待可被成候間御祝遣し候へと被仰付其儘御船に被爲召候内にはや不殘人馬渡仕廻御船も出し申候事の外雨降り水出可申と被思召候と相見へ御祝の戸左右共に御開き被成上のつき上け両方共に御自身御上け被成候故偖も〳〵と奉存能く覺申候茶縮緬の御小袖被爲召候故偖も〳〵と存候定めて水つよく出申候はゝ御祝ゟ御出可被成と被思召様に相見へ申候宮村圓之進御側に被居候

拙者御先之棒を取居申候宮村傳右衛門水出候哉見申候へと被申候故棒をはなしのぞき見候へはいや〳〵餘り強くは出申しく思召と御意被成候無程御船着申候御供不殘川端に御迎に出居申候林兵助御覧被成兵助御衣類可被召替間近く家御座候處に御入可被遊と被仰付候無程罷歸御案内仕御上り場ゟ頓て近くに庄屋と相見へ申候所に御祝さへ申候へは八木市太夫通りかけに承居申候哉市太夫儀々能き所に居申由御意被成暫仕御立被成候翌年御通の刻は家のうしろに簀御座候て道ゟ家は見へ不申候つる簀を切ぬき道の方に門あけ御目見へに罷出居候唯今も其通候哉と存候其刻銀子拜領仕候哉非番にて參候道すから祝かき馬方共の咄に假初に被成御座庄屋に御銀被下候御大名様とて皆々申を承候一五十年以前は天龍川渡場廿丁程も川下にて濱松より近く御座候其時分は河原殊の外廣く御座候濱松より川へ直に參候其後ゟは川端堤の通余程參候て渡し場へ出申候唯今も其通と存候初の所は廣く渡場多く候つる又御若き時分は御道中御急き大形夜明不申候内に御出道遠き日は八ッ半七ッに御出被

成候或時は天龍川にて下の渡し場は殿様上の渡場は本多中務殿にて末御渡不被成候と相見へ廣き河原に所々に無紋の丸提灯五六間程に一ッ宛足輕壹人ッゝ棒をつき本多殿家中の人馬通り候様に致し舟場も惣供の場には大筵たき御召船の左右には水松明と相見へ申候其篝すかし廣く大きに仕内に水松明を二三本入申候御船は不及申三四十間の間は明り能く見へ申候拙者は其時分は痛足御供不仕候て御先へ參候に此方の船場の筋暗く先へ參候者の聲をしるへに參申候此方御舟場に大提灯二ッ燈し候て御座候其刻の本多様は御心安くも無御座候つる其後の本多様は松平刑部大輔様 水戸家 御二男にて御心安く御座候本多内記様 水戸様御聟出雲守様同 御代々御心安く本多能登様も松平左京大夫様御小男にて御座候中務大輔様には此方御家ゟ出候本庄四郎兵衛 二百五十石御兒小姓立御鐵炮十挺御暇被下候 高橋彌二兵衛姉聟にて高橋内ゟ咄承申候貳百石ゟ上は道中馬率せ申由松平安藝守様御家中は江戸にて馬持不申者も道中は引せ候由上田新兵衛殿咄にて御座候御両家共に道中大事に被成候由に御座候當御

家は前ゟ馬數少く馬船も自分〳〵に寄合候て借候様に承候豊前小倉は昔ゟ船多き所にて御座候鶴崎は御船計故渡不申候哉萬事御上下の渡し方豊前小倉の時同前にて拙者共歩御使番の時は六人に馬壹疋渡申候後には四人に一疋に成申候ゟ様の儀迄次第〳〵に直り申候右の通故若き時分より上下に差替なと角入文左衛門に頼申候不自由成る事のみ近年は次第〳〵に自由に成候故何もすり切申と聞へ申候御中小姓の時に馬のり悪一疋に仕挾箱も一ッ宛一荷に仕相役村非と申合候其後新知拝領仕候ても右の心にて通し懇一丁両人にて借ゟ非番には替々乗り申候此儀十左衛門殿に津川次郎左殿尋被申候いかにも左様と申候へは偖々能き仕様と被申候後々に御小姓頭三人にて通し懇二丁借被申候一人は御供騎馬両人の非番乗り被申候様に成り申候萬事手輕は成兼申候重くは成り能く候拙者共新知被下候以後には御中小姓も挾箱一荷持せ候様に成申候前々には知行取候ても小身は乗悪に荷馬は申合仕立挾箱持せ申は道中歩行の御供役ならては持せ不申候物毎次第〳〵に重く成申故勝手も不成候哉

と存候時節々々にて頼て昔しに成候事も可有之候江戸萬事承候へは其分〳〵より輕く成行申候と聞へ候拙者覺へても五六十年以前は御小姓頭由邊半助なとは木綿ふとんにて不断暮被申候由遠坂關内殿被申候其關内殿千石に成候て御小姓頭の時熊本にて結構成るとんす夜の物ふとん掛被申候故拙者申候は前雁御咄の田邊殿木綿ふとんは御失念被成候哉と申候へは唯今能思へは江戸にて頃申時は外の醫者にも逢候事いかにも外聞は上へ對し候事おこりにてなく候由咄被申候如斯に成行候故拙者式も後々は絹のふとん夜物迄持參仕候様に成行申候

一三齋公御代に數三左衛門殿は御家ゟ立退紀伊大納言頼宣公へ三千石にて被召出候由紀州にて毎年正月初に御鷹狩に御出被成候儀御吉例にて御供は大名多く相應〳〵に人ゟ多く召連銘々場所に結構成るどんす或は絹幕に定紋付け辨當も長持に魚鳥料理のさせ荷物も多く持せ給へ申事も埒明不申揃申儀度々致延引候數三左衛門殿被召出候て御供に被召連候て御覧被成候へは布の幕うち主從共に腰辨當三左衛門は將机にて幕をしはり一番に給仕舞居

被申候を御覧被成

三齋所に居申たる様子顯れ見へ申候向後何も御家來共絹幕無用布に仕辨當もかろく三左衛門ことく可仕旨 被仰聞候 由承及候 親數内匠殿は豊前米田監物肝煎にて壹萬弐千石にて被召出候由 内二千石は内匠殿衣來にては舅之候へ共或は縁者又は所々にて手に付働有之者之内湯淺三太夫は五百石被下候第山羽左衛門湯淺角太夫代に御暇被下候服部貳野松村大勢内匠上りと申候 其刻監物殿は六千石にてさのみ内匠殿におとり不申監物か内匠被召出偖々能き者御家に參候とて歎被申候由御聞候由にて長岡筑後殿御咄候由白木貞右衛門咄申候

一光尚公御代江戸にて數三左衛門被參候へは其儘御逢被成三左今日際ならは緩々と居語り可被申候御手前にて茶を振舞可申と御意被成三左衛門も忝かり御意にまかせ御茶も被下候て歸被申候刻御送被成偖々三左衛門はおしき者を 三齋の御出し被成候唯今にても歸參可仕ならは一萬石餘も可被下と御意被成候由同苗不自其時分御兒小姓にて見申候男も如形能く偖又御茶被下候様子 三齋公御側に被召仕候と見へ申様に御座候由不自被申候唯今小納戸役に數七郎右衛門と御座候は三左衛門殿子孫

と承候由十年程以前熊本ゟ紀州へ横山藤左衛門御
番頭の時被參候被歸候て承候紀州は御家老の外大
名は跡へり候て被仰付候に藤左衛門被參候刻も三
千石迄は取不被申孫にて候樣に被申候松平安藝守
樣御家も紀州樣御同然と承申候
一江戸より紀州へ御使に參候大坂に着仕見申候へは
紀伊大納言樣御家老中へ被遣候御文箱の盆のわき
つゝら入申候所にふた合籠もめ申候哉名書の所は
其儘にてわれ候故大坂にて能仕候重ても可有事に
て候間書置候念に入別の箱に入候か上を能くそこ
ね不申われぬ樣に御心得可有事と存候松平左京大
夫樣へも御文箱參候是は道中池鯉鮒の御一宿に
差上申候御宿の外御幕は布白地に紺の御紋付申候
御玄關の幕はとんすのまん幕色替りに御座候
一熊本ゟ松平讃岐守頼重公御代高松へ御鷹の鴨井名
酒持せ參候御書奉行は仲光半助不破十之丞勤申候
砌江戸ゟ大坂迄高松へ御書被遣候刻大坂ゟ小早の
船頭持參仕候本ゟ御飛札と被仰遣候得共讃岐守樣
御意には其飛脚輕き重きと申事にてはなく　越中
殿無事の段直に御聞被成度思召旨にて御座候處に
大坂船頭之旨御斷申不罷出候由沙汰有之候就夫今
度御飛札と申參候得共右之首尾有之候はゝ隨分御
斷可申上候へ共時により召出可申事も可有御座候
間其心得仕候樣にとの事に候其刻近所に上月十郎
右衛門他所ゟ之御使者參候時分に出候使者番勤被
申使故方々ゟ使者の樣子承申候大形は其家の歷々
家老なとの事尋年なとも尋申候儀に候其心得仕候
へと被申聞候儕右之被進候荷物山坂日影なと心付
念を入候て持參仕候樣に被申拙者申候は高松へは
船にて參候由沙時にゟ直に御客屋に船着申と承申
候讃岐守樣御精進日承申其日は着不仕候樣にと申
候へは儕々尤に存候吟味仕書付可進候由被申候其
刻迄は御書所に何も御取遣御一類樣中の御精進日
書付無之候其後見申候へは御精進日は不及申色々
の御書付有之と見へ申候不破十之進は酒好にて高
松はからすみの名物にて候御調被下候へと頼被申
候鶴崎へ着仕候へは加々美善右衛門と申御船頭の
頭申候は惣脉御中小姓ゟ上に屋形御座候船相渡申
候今度もひらた船申付候由申候に付拙者申候は乘
々の御定と御座候得共今度熊本立申刻御鷹の鴨並

名酒被進候間道も山坂念を入日影の事迄御書奉行
衆念を入候へと被申聞候右の通に候故延引仕候は
ゝ熊本へ被仰遣御尋可被成候其内逗留可仕候ひら
たに乘參候て右の御進上物に懸浪かゝり申か雨な
とにぬれ候て被仰付候甲斐無御座候由申候へ共打
寄讃談可仕候とて屋形有之船を渡し申屋形に御進
上物入候ても拙者居候所ゆるりと御座候高松壹里
手前に香西と申所へ汐かゝり仕翌朝夜明候て客屋
の所に直に船着申候御進上物加子共に持せ上り申
候無程横井角右衛門と申三百石被下御使番と承候
罷出取次申讃岐守儀一兩日以前より少し程遠き所
に泊り鷹野に參り申候間則御音信物等持せ遣可申
候右の樣子に御座候間ゆる〳〵御休息候へと朝晩
御料理被下候其内色々の咄とも承候拙者へ入代御
城下の樣子尋被申候故私儀肥後の生れにて御座候
得共熊本より十里餘御座候故未見不申由答候へは
いかにも左樣に可有御座候私事は水戸殿よりつけ
被申候て參り候西國にても高松は名所多く承及申
候近き頃八島壇の浦なと見申候御自分は若く殊に
は御生國と御座候へはいつにても御覽可被成と思
召儀は餘儀なく候其刻老父存命の內にて高松平野
三悅とか知人有之狀遣候屆候へは即刻見舞に被參
候永屋樣太夫親類是も狀屆候へは見舞被申候兩人
共に唯今名致失念候夕飯被下候て御返書出申候遣
方に被成御座候故不召出候とて御銀壹枚被爲拜領
候歸候刻干鹽にて御客屋御門より町を通り船場に
出申候小早船の加子揃着物(一本紺)にてかたをれし候て本
船に參候御町通申にも水打儕〳〵も上下貳人にて
通り迷惑仕候事覺申候
一熊本ゟ日向國縣唯今は延岡と申牧野備後守樣御子
孫之由五十年以前有馬左衛門佐樣被成御座候其時
九州の廻狀唐船の事に付急きの御使に罷越申候八
月末にて俵山を下り申刻大雨雷雨にて松明もてふ
ちんも消へて道も見不申いなひかりの影にて道筋
見へ歩行にて七曲と申下り坂別て致難儀候歸候て
承候其夜熊本も右の通にて京町へ松山樣內妹兩人
共に上とんとの淵に身を投果候御吟味にて樣內は
御暇被下候儕漸々下り高森の高森吉右衛門御惣庄
屋所に參候夫ゟ岩上口に此方の御關所御座候岩上
より日向へは大形下り坂迄或は大すゝき左右茂り

道計少し明夏はくちなわ多く薄の上ゟ落申由人馬もすくなく提灯傘も初て見申候由是にて察可被申候熊本にて承候へは三十里餘と承候故鶴崎道中の積りにて一日一夜に着可仕と食も熊本ゟ致持参候にて可参と存候へは思の外道も遠く日の影綱の瀬と申所は一里有之人馬替り申候谷へ下りいかたにて川渡りから尻馬にても馬そいと申夫二人つき参中々乗られ申道にてなく偖馬も野につなぎ申を引に参候に付中々捗明兼申候旨食給候時に漸鹽に赤からしを馳走に出申候錢もなく銀子持参候へ共右の仕合故人馬の代も遣可申様なく候て所々にて止屋名を書付尤道法も委曲書付申て岩上御關所迄歸申候折節平野武左衛門と申歩の小姓拙者幼少の時分ゟ三盛心安く被参候年寄右の關所に居候故幸に存致談合錢を調申岩上ゟ日向の内にて人馬宿賃拂候て請取とり候てくれ候様にと申御用同前の事とて態々百姓兩人武左衛門申付遣申候偖日向へ着仕客屋に参何の平之丞と申者罷出取次申候拙者へ尋申候は此方に居申候平野萬之丞と申者暇遣申候承候へは此比子共を兩人共に越中守様被召出候様沙汰承申候兄弟共にいか様の位に被召出候哉親萬之丞儀は知行も遣候て代々召仕候惣體家の法度にて暇遣候者の所へ見舞不申候様に申付置候處萬之丞心安く語申候侍船に乗組候處に見舞に参候儀不届に存奉公も捗候て暇遣申候右の通に御座候へはさのみ苦尾無敷と申事にても無御座候と咄申候故拙者申候は親は承及知る人にても無御座候世悴久右衛門作右衛門兩人共に拙者心安咄申候由申候へは偖は左様にて御座候哉いか様の位に被召出候哉と尋候故中小姓と申に兄弟共に召出し申由申候其後間もなく日奈久御入湯の内熊本ゟ是ゟ急きの御用として松野八郎左衛門御奉行勤被申候只今郡源太夫屋敷へ居被申候間町馬も呼寄門外に居申八郎左衛門は拙者可参とて玄關の次に出臥候て文箱渡被申候日奈久迄段々先々馬の事申遣候隨分急き参候へと被申候て夜通に参申候て日奈久へ着仕候へは一里餘有之所へ御出被成候故御跡したひ候て大河原治部之進を以御文箱差上申候折節稲津次郎兵衛御供に参居候に付拙者に逢可申とて其儘参被申候て先日日向へ御使に御出之由承及申候日向にて久右

衛門作右衛門事尋申候に偖々兄弟共に中小姓とは能く心を付申たるゟ悦被申候惣體箇様の時は其身の位能申たるか能由承申候歩使番と申事は御家はかりの名にて候因幡國なとにては八人衆と申由昔ゟ御駕跡に八人御供仕候より右の名ゝ承及候其家々にて色々名替り申候へ共歩と申計にて中小姓同前　妙解院様最前三十人被召抱定御供勤の以後骨折申年も寄候とて六十人に被成おれか者と御意被成候由いな事御意被成候尋申候へは皆々御意に叶たる者迄にて道中は不及申江戸にても御使其外御用相勤使者歩とも名付被成候由承及候就夫　御代々御取立被成候者多く拙者共同前村井源兵衛御中小姓望申候へ池部惣川甥椋梨瀬八郎同前と坂崎清左衛門殿内意被申候へ共定御供望歩の御使番と源兵衛望申由拙者に咄申候　御代々の事他所にても能承申たると存候偖日向ゟ歸候て来田助右衛門殿月番にて参候て物書段々日向にての様子申達候へは存知の外遅く歸候由御申候旨拙者申候は御尤と存候私儀鶴崎道中の道法にて一日一夜には着可仕覺悟にて熊本ゟ食も用意仕候處に鶴崎道中ゟは山坂谷峰多く馬も野につなき置候を引に参候て馬を飼申事の外田舍にて錢なとも無御座岩上の御關所番人頼申候百姓を遣宿ちん人馬の代も遣申候如斯書付参候とて道法人馬継申候村々書付見せ申候其後罷出申候は偖々被入念能く御書付被成候是は此方に留置寫させ置可申候由にて留置れ候其後戻不被申候故其書付は見へ不申候其後仲光半助も日向へ御使者に被参候て難所の咄不自由に候熊本ゟ外に道御座あしく田舍にて萬事不自由に候熊本ゟ外に道御座候得とも道法遠く御座候由平野作右衛門咄申候唯今平野久右衛門伯父にて御中小姓にて果申候拙者歩御使番勤候刻は近使中使遠使とて多く十年勤候内如形の方々仕候定御供の歩御使幷御先供は熊本御供計相勤申候御泊り御鷹野野にも御免被成候得共村井拙者は御駕奉行故熊本にても兩人にて勤申候後に御案内は熊本にても御供に出候様に外には水前寺にも御供御免被成候右の仕合ゆゑ村井拙者は數十年別て〳〵無際に勤申候然共少も〳〵苦に不存相勤申候拙者三十一にて御駕奉行相勤候歩の御使番の時は給候物も嫌ひなく鹿猪も給申候へ共

御奉行に成候ては日忌申候故無勿體存給不申候五十年に成申候其前江戸より塔の澤と申相州の內小田原より三里程御座候たゞし御養生に被爲成御入湯候歩の御使番の時にて御供に參山中には朝晩鹿を給申候老父存生にて咄聞せ候へは偖々湯に朝暮入候て猪給申は無勿體存候必々癪病煩候物と被申候鶏は不及申或時江戸吉祥寺の老僧虎白和尚拙者小屋の隣に居被申候て鶏時をうたい申たるを聞申され使僧にてもらひ被申候廿四五の時にて偖々おしく存候へ共和尚々々もらひ被申候故不及力遣し申候八十に成候て近年庭鳥給不申明君家訓見候て止申候鳩も薬と承候得共　八幡信一申は給不申候由同名文左衛門は若き時分給不被申候是も子孫の爲と存近年給不被申候漸々八十に成候て如斯候

一拙者元服仕候て人に髪結せ申を老父見被申以の外しかり被申候足を下々にあらわせ候事以て外叱り被申候昔は皆々武用嗜深く皆用心と聞へ申候いか様足洗わせ候事も足を取候ては難儀可仕候　三齋公は御年よられ候ても御髪は御自身御すり被成候事承及申候　忠利公も同苗白入御兒小姓の時御櫛上ケ申さる由幼小にて御心安く思召候ての事と奉存候山名十左衛門殿御咄にて候長岡筑後殿御親父佐渡殿御自ひんに御結被成候右の通故御家中の侍に心懸申者は皆々自身結申由御咄被成候御親父長岡九郎兵衛殿其時分は若く御座候へ共氏家甚左衛門殿なども自分に髪結被申候由承候拙者も新知被下候ては人も多く四十餘に成候てじぞり自ひん止申候六十の年在宅仕昔の如く亦結申候此時親被申候自ひん在宅にて別て存出申候拙者なと跡役勤申候堀田次右衛門平井理兵衛其刻は何も十人か八九人は自そり自ひんにて候唯今は少く成可申候

光尚公被召仕島原にても能拙者覺申候歩頭より御鐵炮廿挺預り申候垂水惣兵衛と申者は夜火燈し不申髪ゆひ申由火を燈し不申くらき所にて結申ために自ひん上下共に奉公人は如斯と申咄林兵助承及候由節々咄承候

一氏家平九郎弓御覽被成候祝儀に角入參候へは今朝平九郎髪結申時らうそく燈し結申候おれは御兒小姓勤候へ共火そくにてゆわせ候少申聞叱候へと被申候いかにも御尤に存候併唯今江戸なとにては下々迄もらうそくにも結申候多分平九郎は申付間敷候へとも家來心得にてらうそく燈したると存候由申候平九郎覺居可申候拙者も若き時鏡澤山持申候不斷の二ッ枕箱兩方にくり込二ッ懐中に小鏡二ッ同苗文左衛門見被申御兒小姓の時鏡一ッにて時明候とて拙者をしかり被申候角入も鏡一ッ持被申候事覺申候次第〳〵におこり一色にて濟申事不斷と又道中と御供の時々三色に拵申候併妻子無之內は誰も如斯事は家持不申內御知行被下候ては又分別替り差當る事多むさとつゐへも不仕候と我身に覺申候能く生れ付たる人は若き時よりも行末の覺悟仕候と見へ申候拙者勤の時分迄は御知行不被下候內は大形妻を持不申風俗にて候唯今は何國も其家々古く侍共他所望候事なく成候由五十年此方新參に被召抱候衆無之候他家は尚以てと承候譯有浪人なとも有付兼申と見へ申候

一光尚公御代堀田諸兵衛と申三百石被下御使番勤申候子供多く末子を歩小姓に被召出被下候樣に願申候御家中御知行被下候者の初てにて澤村大學殿へ右之趣被仰聞何共御分別被成にくゝ思召候いかゝ存候哉と御意被成候へは大學殿御請に偖々目出度奉存候豐前小倉にては中々御知行被下候者の子供は末子にても望不申候間大國御拜領被成侍共何も落付候て左樣に願申候如望被仰付可然と被申候就夫如願三人扶持十石被下候て二三日仕候て御中小姓に被召直候堀田九郎左衛門と申拙者覺申候其以後御知行被下候者の子供歩の小姓に被召出候時は時服被爲拜領御切米も何月出申候ても差引なく被下候由拙者共被召出候前々時服拜領も御切米差引も止申候拙者勤候時分は右の拜領仕候者共殘り咄承候堀田九郎左衛門は堀田次右衛門伯父にて候堀田先代清正公以來と承出田作左衛門心安く御座候儀存候

一島原御陣の時清田石見殿甲の前立熊の十文字忠利公御覽被成候て御所望被成御持鎗十文字に被成候由三盛被申候夫故か拙者初江戸當年五十九年にて候其時分迄熊の御十文字を御鎗かけに十本計同し樣成御十文字高サ五尺計の御鎗懸杉なりに仕兩方に懸り御座候御素鎗も熊毛にて筆のごとく是も十本計別々御鎗かけ同し樣に仕候てかゝり御座

候　妙應院樣初て御入國の時右の御鎗か覺不申候
御入國ゟ三度目に拙者は被召仕候て見申時は白き
を後兎の毛にて二本對の御鎗御十文字は白き弥牛
の毛替り不申候御素鎗の鞘は其後白らしやにて初
は紫草にて中を結候樣に被仰付候へ共雨降ぬれ候
へは白さにむらさきしみ申故にくろ草にて結申樣
に被仰付候其時戸越御屋敷へ被成御座候時にて御
出前に何れも見申樣に被仰付非番の者も小屋〳〵
より罷出見申候初の白毛は雨にぬれ候ては見苦敷
御座候間白らしやに成申事の外御物數寄御自慢と
承申候初は不存候拙者御供に參候時は御先に右の
御素鎗一本に御かき鎗一本御鎧の御跡に御十文字
都合三本にて其後江戸にて御かき鎗は持不申候て
御先御素鎗一本御跡御十文字都合二本に成申候唯
今は御長刀御持せ前々の通三本御道具と承申候御
鎧の者衣類の事は忠利公御代に子供銘々物數寄御
開可被成と被　仰付夫々存寄申上候時地紺に山道
たてにかきにて染申候はゝ前後ゟ能く見へ可申由
坂崎清左衞門殿御兒小姓の時被申出可然思召とて
被仰付候由江戸にて老人衆咄承覺申候是も御入國
より御上下二三度目ゟ只今の樣に肩の下に山道三
筋に成拙者勤申內は替り不申後に　與一郎の御鎧
の者はたてに山道兵部大輔樣はたて筋かと覺申候
御鎧に被爲召候て御脇差御鎧はけ申候何卒御鎧の
內にてあたり申所作なき樣に仕度事と栗原彌次右
衞門拙者に申候故織圖右衞門殿にゟ樣〳〵に彌次
右衞門申候御鎧のしきいゟ下を黑びろうどにては
り申候はゝ御ふとんのへり何も黑びろうどにてへ
り取申候間御覽被成候ても御ふとんのへり同前に
て見へ申間敷候彌次右衞門同前に御勘略にても御
座候と申候へは圖右殿夫は御勘略と申物にてはな
く候御鎧はけ申候へはよそにて人の見る事にて候
早々はらせ候へと被申候唯今も其通と存候拙者心
に扨て圖右殿は尤なる被申樣拙者も勘略と心付申
候被召仕樣にゟ心も夫々に成行申候圖右殿にさの
みかわらぬ身に候へ共輕く御奉公勤申故におのつ
から心も輕く成申事無念至極と八十に成候ても失
念不仕書置候

敬白起請文前書之事

一今度信長御不慮に付而無比類御覺悟特頼敗存候條
別而入魂申上者ゟ裏無據公事御身上見放申間敷事

一存寄儀不殘心底御爲能樣異見可申事

一自然中意の族在之者互に直談を以可相濟事

右之條々若僞於有之者

神文略之

天正十年七月十一日　羽柴筑前守　秀吉血判

長岡兵部大輔殿

長岡與一郎殿

敬白天罰起請文之事

一世上萬雖有逆心之不與其黨拙者事且奉對
殿下樣毛頭無別心可勵忠貞事

一以御芳志當分忝之儀向後不可致忘却候御兩所も被
加御愛憐無御目捨樣頼存候事

一令上京候以來爰許之諸立廻隨分所見及雖心懸之生
得田舍者之故何角御合點に不參儀可多之候寔心違
千萬に候以此旨被成御納得不差置幾度も御指南所
仰候遠國之儀候間不存寄事自然可有讒者等之與左
樣之刻被仰出於御糺明者乍憚愚意亦可申上事

右之條々於僞申上者、

日夕覺書

神文略之內ニ薩洲鎭守鹿兒島權現アリ略

天正十六年八月廿七日島津修理入道龍伯血判

石田治部少輔殿

長岡兵部大輔殿

右の二色は此比見出申候拙者は初て見申候故寫置
候前々ゟ薩摩守樣御代々御心安さは此故にて可有
御座哉古今集の御傳受も御家譜に相見へ申候

一江戶酉の年大火事は拙者十三の時にて候　御城御
本丸も燒失仕候　公方樣は即刻御機嫌能酉の御
丸へ被成御座候由熊本へ申來候儀其時分熊本にて
老父所に老功の衆なと咄茶の宮仕いたし來候右の
火事の砌長岡勘解由殿詰居被申候はゝ御十五綱利
公御幼少に被成御座候へは御兄弟共に御供仕西ノ
御丸へ即刻御登城被成爲御用御機嫌御伺被成候は
ゝ御代々御忠節此時に彌御感可有物をと古佐渡殿
古監物殿御噂の由御家中之歷々同前に何も被存候
由咄を覺申候勘解由殿は江戶にても事の外宜く能
き御家老と申たる由御家中は不及申京都にて被致
病死候へは熊本は火の消へたる事の樣に沙汰仕候
由勘解由殿手柄と何も被申候儀も覺申候

一初て御入國は拙者十七の時にて未致御目見候皆とも立田に大勢罷出見物仕申覺申候後に承候へは江戸にても道中にても珍敷結構成る御供行列と申たる由其時の江戶御奉行堀江勘兵衛は　先御代より千石被下御奉行一人の塲明と申候江戶御立の御用意に大分御銀入申候澤村宇右衛門殿差圖の由にて熊本の御家老中事の外立腹にて堀江勘兵衛は知行千石被召上四十人扶持被下宇土邊に引籠致病死候堀江は唯今の伊藤又右衛門が母方の伯父かと覺申候惣躰角力御數寄男すき被成候儀も皆宇右衛門殿召れたる樣に後々迄十左衛門殿舍人殿なと御咄承申候

一三度目御參勤の刻若狹守樣へ三萬五千石二度の御下國長岡を細川に被成修理殿に二萬石被下候御次方にも新知被下候大形覺候は

新知五百石　木村半平　新知二百五石新居十左衛門
同四百石　坂崎忠三郎　同　坂牧瀨兵衛
同三百五十石　纏　關右衛門　同　本庄四郎兵衛
同三百石　江村悰川一本作同　淺香市郎左衛門
同同　江村節齋　同　石川源左衛門
同　長永長次郎

一二百石　不破五郎右衛門
同　内藤市助　百石　栗野又兵衛
同　佐川儀太夫　同　松崎彌兵衛
同　岡田蒐兵衛　同　吉村市左衛門
百五十石　高瀨善兵衛　御加增被下候衆は覺不申候
同　末藤新右衛門　山本志水　岩間　編
同　梅原毛三郎　大河原
同　末松金右衛門
同　野田三郎兵衛
同　笹野甚齋

一初て御入國の時二代目筑後殿祖父長岡佐渡殿が鞍置馬十二疋被差上候拙者馬稽古の時にて見申候江戶へ皆御引せ被成候へ共其内船に乘兼初花と申栗毛に星有之馬は鶴崎が戻り申候其後鹽山仁左衛門咄申候其時分は御家中に馬數六百餘御座候由近國は不及申四國中國にても佐渡殿馬十二疋鞍置被差上候事承及昔しは不存近代不承事とて感申由尤御幼少の內御大小身の衆にも家中に色々沙汰有之候に十二三年の間無何事大國治り御入國被成候儀偏に熊本御家老衆手柄成事世上に申由老父方へ參候衆咄被申候事覺申候尤成事と存候陸奥守樣綱宗御隱居の後家中はた〳〵に成候事覺申候伊達安藝と

申御家老と原田甲斐と申者と酒井吉雅樂頭樣御屋敷へ兩人御呼寄樣子御聞可被成と御目附大井新左衛門殿被致同道御座敷に通候刻安藝を甲斐後が切申候其時分色々沙汰承申事永書置不申候是は大形の衆は聞及可申御禮日の前日にて　妙應院樣御城御見廻被成雅樂樣に御見舞被成候刻御供に參候故能く覺申候ケ樣の事存候にも當御家老中譽申事尤に存候

一初て御入國の以後か豐後國日田の御代官小川藤左衛門と所の百姓共と出入候て御家が老中の屋敷へ兩人御呼寄樣子御聞可被成と御目附大井新左衛門殿被致同道御座敷に通候刻安藝を甲斐後が切申候其時分色々沙汰承申事永書置不申候是は大形の衆は聞及可申御禮日の前日にて　妙應院樣御城御見廻被成雅樂樣に御見舞被成候刻御供に參候故能く覺申候ケ樣の事存候にも當御家老中譽申事尤に存候

一初て御入國の以後か豐後國日田の御代官小川藤左衛門と所の百姓共と出入候て御家が老中の屋敷へ兩人御呼寄樣子御聞可被成と御目附大井新左衛門殿被致同道御座敷に通候刻安藝を甲斐後が切申候其時分色々沙汰承申事永書置不申候是は大形の衆は聞及可申御禮日の前日にて　妙應院樣御城御見廻被成雅樂樣に御見舞被成候刻御供に參候故能く覺申候ケ樣の事存候にも當御家老中譽申事尤に存候

一初て御入國の以後か豐後國日田の御代官小川藤左衛門と所の百姓共と出入候て御家が老中の屋敷へ兩人御呼寄樣子御聞可被成と御目附大井新左衛門殿被致同道御座敷に通候刻安藝を甲斐後が切申候其時分色々沙汰承申事永書置不申候是は大形の衆は聞及可申御禮日の前日にて　妙應院樣御城御見廻被成雅樂樣に御見舞被成候刻御供に參候故能く覺申候ケ樣の事存候にも當御家老中譽申事尤に存候

て參候衆はこくみ夫々有付遣被申候其心故に如斯兄弟共に新知拜領仕候間各能く心付被申候て人の爲能樣にと心かけ可被申候百人に一人も老父の樣成人承不申候子として隨分と存候得共神以中々成る事にてなく候へ共先祖の志を繼候儀孝の第一と承候間書置候右の時分熊本騷き申候或夜老父所へ長谷川久兵衛なと咄に參候か彌日田の出入六ケ敷成候由御人數も出可申樣に今日も承候と咄被申候老父拙者に二の丸に參候て御家老中の屋敷心を付候て見申候へと夜五つ比被申候故罷出候て筑後殿其刻は帶刀殿と申候今日八代より被出候由申候夜中に門の內にて馬一二疋責馬口なといれ申候門のくゞり明き候故外が見申內に怨にてくゝりの內に乘ながら入候故門番尋候へは長岡自雲と申候初は九郎兵衛殿と申候山名十左衛門殿御親父筑後殿ために伯父にて高瀨邊に隱居にて引籠被居候日田の樣子御聞可有とて出被申たると存候右の通に候へは殘る御家老の屋敷へ參候に及ひ不申候急き歸候て久兵衛殿なと居被申候內に罷歸可申と存候處に監物殿屋敷に當り騷太皷の音聞へ申候故偖々いぬひ老母給り申候若く候得は不及是非仕合股引さへ揃候事も不被成候勝手にても右の通牢人と申候

な事と存候て夫より參候て承申候へは能かはやしか御座候帶刀殿屋敷に馬責監物殿にては右の通偖も相遂成事と思ひ申候歸申候へは何も待兼居被申何と〳〵と尋被申一々咄申候へは久兵衛殿御申候は三盛何と存候哉帶刀殿若く候へは從八代御出候て樣子承被申候事尤に候馬なと口入れさせ被申候事尤至極に存候又監物殿もさすか老功にて能にてもはやしにてもしつまりたる樣子偖々御兩所共に尤成樣子成入候と被申候時拙者も心付申候肥前唐津には大久保加賀守樣に同姓無發勤居候時にて日田に樣子承りに參候由其外隣國方々々も聞に參り候由無事に成申候其時分は御家中三百石ゟ上の衆皆々馬持申候隣家に續助左衛門二百石勝手も不成候て致在宅熊本へ罷出逗留の內栗毛の駒求被申候老父見申さすか龜之助孫と擧申候島原の働にて二百石つゝ被爲拜領候諸人に勝れ申候ても都甲太兵衛三百被下候右の通にて股引さへ調兼申候拙者に二百石被爲拜領又御加增都甲同前に成申候事唯今も奉存落涙仕候今日は 三齋樣八十年御征月と奉存候老父三盛御念比に御意の事共被申聞承覺申候

八十に成候て如斯書置候志は各心次第にて御用に立被申候樣に勤被申候へは忠と奉存候段々老父被申聞候事のみ書置候隨分心を付同名中申合被相勤候樣にとの心に調置候へは孝に可成事共存候

旦　夕

君々の惠みをうけておゐる身の心を殘す子末とすへに

見よや見よ思へ思ふそ空ちぬの言の葉草の露の水莖

八十歲にて書

享保九甲辰十二月二日　堀內旦夕入道勝

堀內傳右衛門殿

同　傳　次殿

因澤氏之書寫之天保四癸巳年六月十八日卒業

東肥熊府　鎌田忠助平景繁花押

武藤殿男校

古城貞吉覆校

旦夕覺書 終

堀內傳右衛門覺書

一淺野內匠頭樣御家來十七人御預之節、右之輩請取に被遣候砌、我等迄も被指越候、其後御預中、林兵介、村井源兵衛、我等共三人、御附置被成候故、當番之刻、十七人之衆へ、心易物語申候、我等咄合覺之通書附置候間、折々見可被申候、最同名共且又他之衆中も、望次第實體之志有之候はゝ、披見に可被入候、惣體今度之一卷、むさと諸人に咄し申さぬやうにとの事、

一元祿十五年午の十二月十五日、月次　御登城被遊候處、於　御城淺野內匠頭樣御家來之內、拾七人御預之旨被　仰渡、芝泉岳寺へ、御侍中請取に被遣候段、從　御城、藤崎作右衛門上御屋敷御使者に被參候、我等折節當番にて、町屋敷へ罷出居申候、定て御人數之內にて可有之と存、直に同名平八方にて認等いたし、直に罷越、十五日未の刻前、上御屋敷に罷出候事、

一三宅藤兵衛、鎌田軍之介、平野九郎右衛門、橫山五郎太夫、堀內平八、旬坂平兵衛、右之衆請取に被遣候砌、我等迄も被指越候、其後御預中、林兵介、村井源兵衛、我等共三人、御附置被成候故、當番之刻、十七人之衆へ、心易物語申候、我等咄合覺之通書附置候間、折々見可被申候、最同名共且又他之衆中も、望次第實體之志有之候はゝ、披見に可被入候、惣體今度之一卷、むさと諸人に咄し申さぬやうにとの事、

一元祿十五年午の十二月十五日、月次　御登城被遊候處、於　御城淺野內匠頭樣御家來之內、拾七人御預之旨被　仰渡、芝泉岳寺へ、御侍中請取に被遣候段、從　御城、藤崎作右衛門上御屋敷御使者に被參候、我等折節當番にて、町屋敷へ罷出居申候、定て御人數之內にて可有之と存、直に同名平八方にて認等いたし、直に罷越、十五日未の刻前、上御屋敷に罷出候事、

一三宅藤兵衛、鎌田軍之介、平野九郎右衛門、橫山五郎太夫、堀內平八、旬坂平兵衛、右之衆中裏附上下、物頭、御小姓組迄は、羽織袴着、芝御屋敷へ被參候、物頭皆共迄は、羽織裁付に而候事、左の人數、

三宅藤兵衛　鎌田軍之助　平野九郎右衛門
橫山五郎太夫　志方彌次兵衛　原田十次郎
牧　七右衛門　須佐美九太夫　旬坂平兵衛
富島伊兵衛　堀內傳右衛門　林　兵介
池永善兵衛　寺川助之丞　本庄喜助
吉田孫四郎　氏家平吉　澤　庄兵衛
堀內五郎兵衛　竹田平太夫　石川源右衛門
田中隼之介　池部次郎助　橫井儀右衛門
宇野彌右衛門　下村周伯　原田元澤
木村權左衛門　關彌右衛門　郡　次太夫
堀內平八　野田小三郎　村井源兵衛
松浦儀右衛門　塚本藤右衛門　魚住惣右衛門
服部番右衛門

此外にも有之候哉覺不申、步御小姓も參申候得共、夫々名覺不申候、

一足輕百人餘、駕十七挺、外に用心駕五挺、人數都

合七百五十四人と承り申候、

一御知行取不殘馬にて、御屋敷より罷越被申候、芝御屋敷表御門前にて、芝御屋敷詰に出合申合せ、泉岳寺え參申筈之處に、櫟子巻り、仙石伯耆守樣御屋敷にて受取申筈に成り、彼御屋敷愛宕下に參候、此方樣御人數は愛宕下細川和泉守樣御屋敷に參り、御門內には侍中斗入候て亥の刻過に伯耆守樣御屋敷に何も參り候事、此方樣え之御預衆を、一番に御渡し被成候、三宅、鎌田、堀內三人、御預り之面々受取下さるべき旨被仰渡候、則伯耆守御前にて鈴木源五右衞門樣、水野小左衞門樣御列座にて被仰渡候、其外は御門外に居申候事、

一十七人之輩、伯耆守樣被仰渡候者、夫々に書付を御よみきかせ、內藏之介は御側近く被召寄、十七人は細川越中守え御預被成候間、左樣に心得候哉、乘物にて被遣候儀、いかゞ思召候とも、老人又は怪我人も有之、指向付添參申候ため勞乘物にて參り候へは、段々被爲入御念御事忝とたひ〳〵何れも被申候事、

一十七人之衆、何れも駕に乘り、請取人は御門外に

各夫々請取揃候て、御紋付の大挑灯二ツ宛、自分挑燈一ツ宛、駕一挺騎馬一人、步御使番一人宛付、御使番不足分は、步御小姓相勤、尤手負怪我人も有之駕々を靜に、細川和泉守樣御門前より、松平隱岐守樣御屋敷前、愛宕橫町に出、三島町筋より通り丁に出、芝伊皿子坂より目黑御門に入、役者間之御玄關より御廣間樀形之次御間より、二座敷に被居申候、其夜はいつれも、先一つに着座有之候、尤道筋靜に參り御屋敷え落付は、丑の刻過に相成申候事、

一右之面々を御渡之刻、乘物の戶窓なと明申者も候はゝ、其通に仕候て不苦被思召候、怪我人も候間、道も靜に參り候樣にとの事故、堀內傳右衞門と申者、付添參候、何ぞ御用も候歟、乘物戶なぞ明け申たく思召候はゝ、被仰聞候へと、步行之者へ申させ候事、

一太守樣早速御出被遊候、受取人數も其儘居申樣にとのに儀にて、其所に罷在候、扨十七人え御意之趣には、扨各今日之仕方神妙に存候、是に大勢之侍共差置候にも不及事何とやらんおこかましく候へ共、公義に對し差置候間、皆々左樣に御心得何ぞ相應の用事承候得と、一番之御家來共之方を御覽被遊、最早夜更候間、先早く料理を給被申候樣にとの仰にて、御入被遊候、いつれも忝奉存られ候體に見え候、夜更まて御待被遊、早速御對面被成候事、いつれも後々まて有かたかり被申候事

一其夜其儘御對面被遊候は太守樣迄と承り、殘御三人御衆は以後に此方樣御聞合被成御逢被成候由、一於御城十七人御預之節、被仰渡候刻も、此方樣御請、御尤成御儀と、となたも御感被成たるとの御沙汰、御旗本の咄を、壽命院なとの咄し被申候段、江村節齋申候、十七人之輩を、泉岳寺へ御受取被遊候やうにとの儀に付、太守樣被仰候は、家來共迄泉岳寺へ遣候事、無心許被思召、御下城以後不苦候はゝ、御自身御出被遊度と度々被仰出候由、然とも夫には及申間敷、御家來迄被指出候樣にとの儀に付、向樣も御家來まて被指出候由、此趣御尤之儀と沙汰有之候由承り候、

一町御屋敷よりは、林兵介、村井源兵衞、堀內傳右衞門三人代合、芝御屋敷八木市太夫、吉弘嘉左衞門

此兩人共五人にて、兩人宛代合、夜番相勤申筈に被仰付候、三宅藤兵衞方被申聞候者、今度之一卷には、十七人之面々え、此方樣御內より噺懸候事、堅無用に候、あの方より噺かけ候共、唯返答計にて相濟樣子に有之候はゝ、咄止可申候、其心得にて勤候やうにとの事故、其覺悟にて罷在候、然とも能々了簡いたし候へは、今度之事は古今不承及忠臣高名、それかし武士たる事、別而若き者共は承置度可存候、萬一御赦免にて、いつれも寄合申候刻、數日之御馳走、侍中大小身共罷出、如形挨拶をもいたし候得は、今度一卷を終に尋もなく、間には咄聞可申と被存も可有之候へとも、此方仕懸次第には、いな事とや可被存、右之通りの筋、藤兵衞方度々御申聞候、外之御三人樣にても、夫々に思召寄かはり可申候、此儀はとかく透を御見合、荒增の樣子御聞可然存候、いかゞ思召候哉と、色付の御間にて、九郎右衞門、平八に噺懸候へとも兩人いかにも尤に存候、承置度と費之內は、御側方段々出被申、透も無之、夜食なと過候樣子なと見合可參とて、卒度罷出候へは、思ひ〳〵にはな

しねられ候、能時分と存、九郎右衛門、平八に只今能折からと申聞候へは、其儘兩人共座敷へ罷出、吉田忠左衛門(イニ敷)、原宗右衛門を片脇に呼寄、閒に今度の一卷、荒增承候由被申候事、

一翌晩夜に入、原宗右衛門、紙數の物を書被申、夜更候て仕廻、翌朝とゝ被申候に、小刀無之候故、八木市太夫を頼みとゝ被申候、今度の一卷の書付と承申候、夜前九郎右衛門、平八一卷の荒增尋申候故、又尋の人も候はゝ、右之書付見せ可申との事、是を御書所にて、市太夫とゝ被申候刻、寫取候由、上之御閒

四十二歳(一本四十五) 六十三歳
大石 内藏之助良雄　吉田 忠左衛門兼亮
五十二歳 三十七歳
原 宗右衛門元辰　片岡源五右衛門高房
六十二歳 六十一歳
間瀬 久太夫正明　小野寺十内 秀和
七十八歳 六十九歳
堀部彌兵衛 金丸　間 喜兵衛 光延
四十歳
速水藤左衛門 滿堯

次之御閒

二十九歳 三十九歳
磯貝十郎左衛門正久　近松 勘六 行重
三十四歳 三十五歳
富森 助右衛門正因　潮田又之丞 高敎
二十五歳
赤埴 源藏 重賢　五十七歳(一本五十五)
二十九歳 奥田孫太夫 薫盛
矢田五郎右衛門助武　二十七歳 大石瀬左衛門 信清

但磯貝は上之閒之筈に候得共、速水と申合せ入替り被申候事、

一或時、富森助右衛門え參候て申候、拙者儀旦那代々召仕候ものゝ悴にて、末子にて候故輕き奉公に罷出候、江戸定供に連れ被申、段々取立、小知をも賜、追々加增をも申付、物頭並に申付候、近年は年罷寄、供役、使をもゆるされ、寛々町屋に居申候、今度各樣え罷出、得御意候樣にと被申付候、若時分より一兩年以前迄、駕の明立の役を申付候夫故江戸表の儀、あらまし存居、京、大坂其外道中筋之儀も能覺申候、居屋敷に詰候ては、門の出入自由ならす、町屋敷え居候得は、晝夜共に何方へ參候事も支無之候、いつれも樣御事に候へは、越中守爲にならぬ儀は、可被仰聞樣も無之、何そ被仰聞度儀も可有御座候へとも、拙者爲にならぬ事と、御遠慮之氣味も有之候やうに見及申候、御忠義の御心底を察候へは、拙者身命を惜み申事、

日本の神毛頭無之、御心安被仰聞被下候はゝ、本望武門之冥加に叶たると存候、尤貴樣御一人に不限、殘御衆中御同前に存居申候、御一人へ申達候儀も、何とやらんいなものに候、私の心底を殘る御衆中へも、御噺被下候へと申候へは、扨々御深志淺からさる儀共存候、何れへも申聞候はゝ、忝く存可申と被申、其後殘面々も、追々禮等被申候事、

一內藏之助被申候者、若き者共其外何れへも、御深志之儀共、於私も扨々忝存候、寔に御心易存居申候、少是へ御寄被成候へ、御咄申度事共候へ被申候故、御心易思召被下忝とて、側に差寄候處に、內藏之介被申聞候は、いや別之事にても無之、今度の儀を、定而御傍輩衆中御批判と察申候、是に居申候者共、大かた小身なる者計にて、大身成もの も可有之と、思召も御はつかしく奉存候、尤大身なるものも加り候へとも、皆々了簡を替、不及力候、先奥野將監と申候は千石にて、番頭を仕居申候、今度赤穗にて、私と何角申合、御目附荒木十左衛門樣え、書付をも差上、口上にても申上候儀有之候、江戸へ御歸座以後、卽刻土屋相摸守樣へ委細被仰上候間、左樣に相心得候へと、私幷に將監え、十左衛門樣より御書付被成被遣候故、兩人共に江府え御禮に罷越候、右之通にて御老中樣御存之將監も心替仕、其外城代申付候、佐々小左衛門と申者、三百石にて、吉田忠左衛門よりは高座に召仕候、いや此小左衛門は、若き時分御當家に居被申たると承り候が、御覺はなきやと被申候故、我答候には何とやらん名は承り候樣に存候へとも慥に覺不申、總體越中守入國、幼少の時分、段々暇を遣し、或は暇をもらひたる者共御座候、其內にて御座候哉、しかと覺不申由を答申候、又被申候は、近藤源四郎、小山源五右衛門、河村傳兵衛なと申者は、知行も多く遣し、足輕も預置、是に罷在原宗右衛門より上座に申付置候、剩右之內には、拙者遣ぬ者も有之候、一旦加り了簡を替不及力と咄被申候、自是申候には、御心易思召、委細の譯も可有御座候へとも、唯今各樣え被對候ては、被仰分も有御座ましく候、各樣今度之御樣子、兎角を可申上樣も無御座、傍輩共も打寄感申

候、總體身重き者は、小身者には劣り身命を捨かね候と、古今申傳候、定て御聞及も可有御座候、肥後國先國主加藤清正は、度々の武功の後、肥後半國御拜領被成候刻、同國天草の戰の時、木山彈正と申者と鑓を合せ候事、清正公御一代の勇道を御ためし被成候と、常々御自談にて御咄被成候と申傳候、其外古今の勇將にも可有御座候、扨々今度の御事、とかくを不被申候、皆共小身にて難儀は仕候へとも、昔物語を承り、小身者もたのもしく存候て、傍輩共の大身の前にても、思ふ事申散し候と挨拶仕候、右之内には、内藏之助伯父有之との事、

一助右衞門被申候は、十七人の者共、些物語有之度との事別の事にても無御座、拙者共儀今度之事定て斬罪に可被仰付候、天氣晴れ候て、所柄成共能候へかしと願居申候、然處各樣御咄、又は世上の批判を承及、はや奢が付き、萬一切腹なとゝ結構に可被仰付や、左樣之節は、御屋敷に可被仰付やなとゝ、奢が付き申候、若左樣にても候はゞ、十七人は夫々宗旨もかはり候へは、寺々の坊主共、又は一類なと、死骸を被爲拜領候樣に願申にても可有御座候、必す被下間敷候、泉岳寺中空地有之處に、四十六人共一つ穴に御埋被下候へと被申候、それかしの答には、扨々御尤成る御事に候、成ほと御意は去なから、左樣之儀は有御座間敷候、行末長く得御意申樣に成行可申と挨拶いたし置候、大御目附長瀨助之進え、右之趣噺申候へは、尤なる事と感心被致候事、

一忠左衞門被申候は、助右衞門より我々共之願を御賴申候處に、御快御請合被下、何れも忝存候、夫に付て拙者も又其上に御心遣に相成申度事御座候、是に金子少々所持仕居申候、是はいなものを所持いたし候と可被思召候へとも、持來候故捨もいたしかたく、其儘致所持候、是を夫へ進可申候間、白布御調させ二重の大風呂敷を被仰付、四方につかりを御付させ、死骸の見へ申さぬやうに、其儘くくりよせ候樣に仕度候、御覽の如く年罷寄大からに候へは、いか程に仕候ても見苦敷も可有御座候それかし申候は、承知いたし候、然とも此儀は公義よりの被仰出次第の儀にて可有御座候哉、先

は難計候、此方打寄、幾通りにも申談、諸事之儀何も支申事も無御座候、若も思召の通にも被仰付候事も御座候はゝ、如御望可仕候、金子御遣し被成候に不及事と申候、御尤成御賴致承知候、乍去助右衞門殿へ得御意候如く、行末ながく得御意候樣に成行可申と、挨拶いたし罷立、右之趣を長瀨助之丞に申達候へは、尤成事共と涙をなかし被申候事、右之通いつれもそれかし心易被存、何やかや賴有之事故、助之丞御役柄故些不審に被存體に付、此方助右衞門え返答之趣不殘申聞候へは、助之丞被申候は、扨々尤なる手前了簡に候由、寔にいつれも摩利支天と存候と被申候、助之丞御用に付、堀部彌兵衞を折々呼立、咄被申候事共有之候、此趣も殘衆中はいな事と可被存候、助之丞心底をいつれもへ申達吳候樣にと、助之丞被申候故、助右衞門なとへ申通候へは、殘衆も承被申て、扨々忝、助之丞殿へ御出仕之上、分而御禮を申事もいかゝに候、いつれも忝かり申候段、宜申吳候樣にと被申候に付、其段猶又助之丞え申達候事、

一或時助右衞門と隣合居候處に、原宗右衞門立出、いつれも御咄被成哉とて被參候、其時助右衞門被申候は、赤穗にて宗右衞門、大野九郎兵衞を追立候樣子、御聞被成ぬやと被申候に付、いか樣承度と申候へは、宗右衞門被申候は、扨々むさといたしたる儀を、助右衞門は申とて、わらひ被申候故、それかし申候は、かやうに御心易得御意候私に不苦事、御咄承度と申候へは、私は赤穗にては、內藏之助むかふさすに成候て、諸事申談、內藏之助存念と、九郎兵衞所存と致相違候に付、拙者九郎兵衞に申候は、先刻段々承候へは、御自分の思召寄、內藏之助とは、致齟齬、是に罷在者共、不殘內藏之助存念同前に、了簡替へたる事に候得は、此座に御滯の事御無用候、早く御立候へと申候而立せ申候、其時若立兼候はゝ、其時には打果申候左候得は今度之一列之志は無に成り申候、以後了簡致候へは、扨々うつけを盡したると申候へは、助右衞門被聞申やうには、いや其時の樣子、中々あの樣成る事にてはなきとて、何れも笑ひ被申候事、一或時矢田五郎右衞門被申候は、傳右衞門殿には、御道具數寄にて、御目利と承り候と被申候故、いか

にも若き時分は數寄にて、目利いたし候へとも、大方はつれ候とわらひ申候へは、又々被申候は、いや御尤に候、拙者儀は目利は無調法に候、今度拙者指申候刀は新身にて、定て疵有之けるか、物打より五六寸下にて折れ申候、總體其夜之儀、内藏之助兼而申付、三人宛組合申候、廣間より書院え通り廊下の右の隅に、何者か居候三人目の跡に拙者通り候、後より切懸候へ共、拙者は着込仕候故摺手も負不申、ふりかへり切付申候へは、初太刀にて倒れ二の太刀にて打折申候に付、心を付見申候へは、此者の下に火鉢有之、倒れ申候を打付候により、折申たると存候、夫故相手の刀を取、指替申候との物語有之候事

一堀部彌兵衛被申候は、磯貝十郎左衛門事、別而御懇意被仰聞忝存候、十郎左衛門儀は、是に居申候老人共、別而不便に存居申候、仔細は是に罷在候者共、二代三代の勤家久數者共にて候、拙者は三代前に浪人分にて呼出し申され、後の代に新地を賜り、内匠頭代に、物頭に被申付候、右之通代々重恩を受申候故、御覽の通年寄候へは、志計りにて、

働も難成門番を致居申候、若き者共は隨分何れも拵（カマヘ）申候と被申候故、此方々答に、御尤の御事、若き御衆の働と、御老體の門番と、事は同事と答申候、又被申候は、十郎左衛門事は、其身一代にて、拙者肝煎にて、十七歳の時、（一本十四の時）小兒姓に被召出、僅十ヶ年の内の勤にて、古き者共同前の志にて候、其朝も、仕廻候て立退候節、金杉橋をいつれも通り、將監橋を渡候迚近に十郎左衛門老母被居候故、立寄暇乞をも仕候へと、内藏之助を始、何れも申候へとも、いかゝ存候哉立寄不申候、嗜故と存被申候故、扨々不淺御志と申、次座に參り、十郎左衛門に逢、唯今彌兵衛殿御咄にて、貴樣御事承り、御嗜之程、慮外ながら感心仕候と申候得は、十郎左衛門被申候は、夫は定て彌兵衛殿が、能樣に咄を仕たで可有御座候、拙者事いかにも幼少より被召仕、別て念比にて段々被取立、江戸小屋なとも廣く申付候て、老母も緩りと召置、古き者共の重恩におとり申事、さら〳〵無御座、成程立退候節、内藏之助を始傍輩共も、立寄候て老母に逢候へと申候へは、先は裝束も目立、第一老母居申候處は、

小身とても御屋敷に對しふしつけと存、又は暫時の間も、いか樣の義か可有之も難計、旁にて立寄不申候、只今存候へは無何事立退候に、些後悔にも存候と笑ひ被申候、誠以別而感入候事

一助右衛門被申候は、仙石伯耆守樣え參候節、今度の一卷御聞被成、被仰候者、上野介屋敷え仕懸候時、輕き者を捕へ案内致させ、蠟燭を出させ火燈させ申候義、扨々落付たる仕方、誰にて候哉と御尋に付、磯貝十郎左衛門にて御座候と申上候へは、若き人の落付たる義と、殊の外御感し被成候由被申候事、

一或時、忠左衛門被申候は、拙者は若き時分、軍法を數寄にて承候、采拜を所持いたし居申候、もはや今度果申儀にて候へは、内藏之助にも隱し候て所持いたし候、御取寄被成候道具の内に可有御座候間、御燒捨させ可被下候へと、被申候、改見申候へは、柄は黑ぬり、丸の内釼菱の紋、金粉にて、兩方一つ宛、柄の先に三ヶ所に付、白紙に所々血付たるにて包有之候、以後いつれも道具共に不殘、泉岳寺へ被遣候時、右之采拜も一同に參候事、

但十七人衆の刀、脇差、鑓、長刀、懷中の小脇差、鼻紙袋等、仙石伯耆守樣より、句坂平兵衛に御渡被成候、受取參候芝御奉行所にて、御側衆一覽之刻、我等も一座にて見申候通書付置申候、

右刀脇差、同名平八必付にて札を付置、泉岳寺へ被遣候節の爲とて、大小の入候刀箱、十七さゝせ、紺の木綿風呂敷にて大小を包置候事、

一内藏之助大小共相州ものと相見え申候、大亂燒にて、刀の先一尺計のり付居申候、定て上野介殿留をさされたると存候、松葉先刃こぼれ居申候、大小共に鞘黑塗金拵にて、小刀の柄は、古き木柄に忠義の語を彫上け有之、それかし文盲に候へは、よめ不申候事、

一磯貝十郎左衛門大小鞘黑塗、こひ口二三寸朱にて、筋違にぬり、金拵にて、紫かひの口新敷下緒付申候、鼻紙袋は紫縮緬の帛紗にて包、右の下緒の切にて結有之、内には琴の爪一つ有之候、此事以後十郎左衛門、其外噺承候、奥に書付置候事、

一近松勘六脇差は鮫鞘にて、二尺餘の大脇差にて拔ケ不申候故、其儘召置候、夜討の時、泉水にころ

ひ入被申候由にて、水入申たると存候、
一奥田孫太夫大太刀は、身三尺餘有之、無地之鐵鍔懸り居申候、堅木之臺尺六七寸之柄、切柄之如く仕たる物に而候、小長刀抔の心に而、持參被仕たると見え候事、
（編者云本條は異本に據り補ふ）
一堀部彌兵衛、鼻紙袋に竹笛有之候、相圖の笛と存候、小脇差懷中に見へ申候、其外の衆も笛見へ申候、小脇差六七腰有之候事、
但何れも大小の柄は、平打の木綿糸にて卷有之候、いか樣切柄の心持にて、手の内能有之たると存候、島原一揆の節、山川宗右衛門、兼て討死の覺悟にて、大小の柄を苧繩にて卷、差被申候由、亡父咄被申候、古今とかはり候へとも、志は同前と感心の事に候、各持鎚の柄は、いつれも九尺計に切有之たると見へ申候、身は大振成る篠葉の形、長サ八九寸、幅も廣き所は二寸餘、古身と見へ申候、素肌者に能と兼々承及候大形のり付居申候、鞘は大かた無之候、白布にて結有之候、夜討の節、兩袖の相印と見え、間には名を書付たるも有之候、何れも刀脇差は金拵にて結構に見え候、古身多く新身も有之、錆たるは無之候、いつれも咄被申候は、相手無之候へは、手に合不申者多く候、其上逃走候者は其儘捨置、手むかひいたし候はゝ討捨候へと、兼而内藏之助被申候故、夫故刀脇差にのり付居申候は少く、鎚は大かたのり付居申候、其夜の仕合不仕合にて、手に合不申も有之たると咄被申候、一々御尤、御志のほとはいつれも御同前に可有之と答申候、
一甲府樣御家老小出土佐守殿賴之段、細川桃菴老御聞繼のよし、江村節齋申候は、吉田忠左衛門え申通吳候樣にと、跡妻子の事、少も苦に致されましく候、土佐守殿家來鈴木彦右衛門に能被申付置候、此義申通度由にて、卽剋忠左衛門に申達候へは、忠左衛門、常々懇意候間、左樣に可有御座候、添承屆候との儀申達吳候樣に被申候故、返事を節齋え申通候事、
一或時、次之座に出候へは、何れも被申候は、奥田孫太夫に被仰聞候やらん、不存寄儀承候とて歡申

候、秋元但馬守樣御內に、眞居申候、頃日中瀨助五郎殿、太守樣御供に御出候得は右之眞罷出、助五郎殿え御目に懸り、孫共何れも無事に居申候段を、孫太夫に被仰聞被下候樣に、言傳を仕候と被申候故、扨々夫は一段の御仕合と挨拶致候、後に承候へは、右之趣を達御聽候て、言傳を申通候儀に候、助五郎それかしに常々心入にて候、同名文左衛門妻に付ての緣と存候、助五郎拙者に被申候は、十七人衆親子兄弟え御通候樣に承候、今度之儀は、誠に大事に付、不及申へとも、能々御心得候て、內意を可申候御心入にて被仰聞趣、扨々忝存候、いかにも得貴意候事は、但馬守樣御屋敷にて、右之眞それかし事を聞おゐひ、尤某名迄被申たるにて可有御座候、尤助五郎に、誰か左樣に申たるやと尋も不致候、通し申事は僞にて無之、勿論覺悟いたし居申事故、少も驚申事にて無之候事、
一忠左衛門被申候は、拙者は今度裏門より打入申候、大方隱居候者は、奥座敷裏の方に建申候事、尋常に御座候故、幸と存吟味仕候故、誾垣有之、雪隱の樣なる處に人音仕候故、押破り參候へは、何者か其儘座敷にはいり申者有之候、大かたは臺所より仕込申候歟、かこひの樣なる所を、兩方よりせり込み候處に、三人居申候て、皿茶碗、又は炭なと投打いたし候故、間十次郎、其儘鎚付申候、上野介殿前に、兩人立おさがり、防申もの働き申候、兩人共に討果申候、上野介殿も脇差をぬき、振廻し被申候處を、十次郎鎚付ヶ印を揚見候へは、古疵らしき所も見え、白小袖を著にて候、得度吟味仕候へは、上野介殿に極申候、只今迄もよく寢被申候と見えて、蒲團も溫に有之候て、刀計有之候、左兵衛殿も、長刀にて出合被申候へとも、手を負、其儘長刀を捨、退被申候、夜明候て、長刀を見候へは、金具に定紋付、拵結構に有之候故、扨は左兵衛殿にて御座候と存當り申候、手むかひ仕候者は討捨、逃落或は構はぬ者は、其儘召置候樣にと、兼て內藏之助申付候故、其通り何事も仕候、扨何れも相圖の笛を吹、惣樣集申候刻、若き者共、早水藤左衛門なとは、弓にて長屋の人の居申處を探、上野介殿を討取立退候が、出合申さぬかと、高聲に申候へ共、一人も出合申者無御座候、門の脇に

家老の小屋と見えて、路地口の戸短く、上をのねに
板にて繼たる所、一尺計見え申候、内の明りも行
燈とは見え申さず、蠟燭と相見え申候、早水藤左
衛門と名乘懸、二筋矢を射込候へとも、物言なく
候故、立退候と咄被申候、それかし答申候は、上
野介殿御討取被成候て、夫より無縁寺に御立退被
成候へとも、住持内に入れ不申候故、夫より泉岳
寺へ御出のよし、寔に御心つかひ共に御座候、翌
朝は十五日にて候へは、往來も一入多く、御屋敷
への辻番も、道すから多く見とかめ、何角申候て、
御隙も入可申候、無支御出被成候事、天道の御加
護と存候と申候へは、如仰　御登城の御衆と見え、
御乘物又は馬にて、御通りの御衆も二三人、御目
に懸り候へとも、火事場なとへ出候者歟なとゝ思
召候やらん、辻番なとも同前に存候や、何之支も
なく、泉岳寺へ參候儀、いか樣仕合なる儀と被申
候事、

一何れも咄の内に、高田軍兵衛と申者、小知遣候者
にて御座候、此ものは赤穂籠城と承及候由にて、大
形一番に罷成申候、然共實なき者にて、中々一列

に加り申樣成者にて無御座候、然處上野助殿討果、
泉岳寺へ立退候刻、三田八幡の近所にて逢申候、
何れものを不申罷通候處、堀部彌兵衛申候は、
何れも如此志を遂て、上野介殿印を只今泉岳寺へ
持參申候也、被見候へと申候へは、軍兵衛申候は、
扨々いつれも御心安可被成候、私も只今三田八幡
へ社參仕候而、各樣御本意を被遂候樣にとの祈願
の爲にとて、立わかれ申候、其後軍兵衛酒なと持
參、泉岳寺の門番を賴、内藏之助其外へ、祝心に
酒を持參仕候、御通被下候へ、御目に懸り度由申
候に付、若き者共、扨々にくき奴かな、幸の事、
是によひ入れ、踏殺可申候、刀をよこし申事迄も
無之と申候を、内藏之助申候は、扨々各はあの樣
成者を踏殺して、何の益やとて、軍兵衛は呼入申
者にて無之候、酒も返給へと、門番に申付候由被
申候、それかし申候は、定而其仁は、平生何に被
召仕候ても、能き奉公人と譽申ほどの人にて、可
有御座やと申候へは、いかにも其通りにて、内匠
頭家中にても、大形勝たるもの、何を勤させても、
勤かねぬものと被申候、それかし申候は、必々左樣

に萬事に能きものは、本心の實はなく、世渡の上
手にて候、昔も今もおほく御座候、輕薄を以出頭
人は、主人をたまし候事、本心の不實故と存候、
是に付存出たる事の候、故文左衛門切々咄申候は、
眞源院樣御代、於江戸、入割の有て六ケ敷御用を、
去る仁に被仰付候處に、幾處もなく御意に叶候樣
埒いたし候、其後御意に彼者事は、何に召仕候て
も、御氣味よく被思召候へとも、一所に召仕可被思
召との御意、其時分故文左衛門は御兒小姓にて、
御意に叶たる内にて候、名も被申聞候、其仁後々
迄も息災に居候て、其噺は老人衆も被申候間覺居
申候、兎角御大名の内には、色々樣々の侍多く有
之候が、能々上大工の材木を用ひ申に、ゆかみた
るも直なるを、大小共に夫々に用ひやうにて用
に立候、名將の士卒を用も、其でとくにて候、正
成なとの事承り候へは、おもひ出され候、然共我
身に成候ては、何事も不調法にて、常々不召仕候
共、一所に可召仕と思召、常々の御用に、埒の明
ぬ所を御凌被遊、一所の御用に立可申と、信實に
奉存、武士は冥加に盡果、不及是非、生つきと存

候、誰とは難申、名跡は及絕消候、島原之時分も、
わろき人と申たる仁にて候、五百石以上の男にて
候事、

一或時、次の間にて咄居申候節、何れも被申候は、近
松勘六が小もの、甚三郎と申ものゝ儀を存出候へ
は、不便に存候と被申候故、いかやうにて候やら
んと尋候へは、勘六儀、先祖以來代々近江之者に
て候、在所より甚三郎を、今度江戸へ召連參候、
彼者親は庄屋を仕居申候、代々わけあるものにて
候、今度何れも存立候前日歟、在所への狀なと認
て、差返可申と存候て、其段申聞候へは、彼者
申候は、此間何れも樣の御樣子を見候へは、近き
中思召立候儀有之と見及申候、私儀被召連候刻親
共申聞候は、隨分御奉公、精を出御爲には身命を
捨申候樣に申聞候段、御聞被下候通に候、御用に
立申間敷と思召、御返被成候事、無是非仕合とて、
腹をも切申體に見え申候故、不及力其分にて召置、
夜討の節も供に召連申候、然共兼て内藏之助申付
候は、今度の儀内匠頭え勤居候ものの親子兄弟に
ても、他家に居申たる者、其外内匠頭に對し譯も

無き者は、同道不仕筈に申付置候故、其夜門外迄召連、翌朝上野之介殿屋敷を出候時に罷出蜜柑餅の類を袂や懐に入、御喉の渇き可申とて、皆々へ給させ、扨々首尾能御仕廻被成候迚歓申候、定て今度伯耆守様より、私共被召連候刻も、多分跡先に成り、辻番邊にうろたへ居申候はんと、不便に存候と被申候、さては左様のものにて候哉、神明の御惠にて、後には冥加に叶可申と申候へは、唯今に成存候へは、勘六名付をも遣、内藏之助に申断、一列に加へ不申事、殘念至極と何れも被申候、某其後いかにもして、彼者心底不便に存、上野の脇谷中の入口より左に往て、長福寺と申寺に、弟子文良と申出家は、勘六朔の由に付、尋参り文良に逢、勘六無恙段をも咄聞せ、且又甚三郎事を尋候へは、無事にて十二月廿四日迄逗留いたし、在所に罷歸候由、暫物語いたし、座敷を見候得は、菅谷半之允と札付き居申候葛籠、其外にも見え申候、何れも折々参宿をも被致候やと相見え候、其後勘六に噺申候得は殊の外歓にて候事、

一或時、内藏之助へ此方より申候は、此頃町人の噺承

候へは、於京都萱野三平と申仁、書置なと被仕、自害いたされ候様承候と申候へは、内藏之助被申候は、夫は皆共京都に居申候内之事にて、存命にて候はゝ、今度之一列にも加り可申ものにて候と、返答被致候、何れもの咄に、三平か父浪人して京都に居、三平を何方へそ養子に遣候て、奉公をいたさせ候と談合有之候へとも、三平志に叶不申候、右之通書置をいたし、内匠頭様一周忌に、自害いたし候と咄被申候事、

一次の間にて、若き衆中の咄に、矢頭右衛門七と申もの、十七歳に罷成候、江戸初にて候、十郎左衛門引廻申候、彼者親は京都にて病死仕候刻、右衛門七え申聞候者、内々内藏之助と申合たる事、志を不遂候て果候事、不及是非次第也、汝志を継候へと申候へは、奉得其意候由にて、今度の列に加り申候、叔父は松平大和守様御家中に居申候、是に母を預置候とて、母子共に道中荒井迄参候處に、若輩と申初旅故、女切手を持参仕候事を不存候て、荒井より立歸申候、如御存知久々浪人にて暮し候へは、少の路銀も無之候故、何れも申談、母は赤穂

に存候もの有之候に賴遣申候、今程は定而難儀可仕と被申候故、扨々御父子の御忠義感心仕候、神明の加護にて、御母儀もゆる〳〵御暮候様に成可申と申候て、涙をながし申候事、

一或時、十郎左衛門被申候は、傳右衛門殿には、古き事を能御存知にて候、忠左衛門に古戰の噺御聞被成候へ、忠左衛門も歓可申と被申候へとも、藤兵衛殿段々被申聞候趣も有之候故、所望不仕候、松平宮内大輔様御家來、渡邊數馬、河合又五郎喧嘩の咄を承候處、兼々承り候よりは委く咄被申候、右喧嘩の書付一冊、前廉寫置候故、忠左衛門咄にて、御家老荒井但馬を、御老中様より御稱美の事を書加へ申候、右但馬は眞源院様の御代相摸守様を御招請なと有之、御馳走の刻、但馬も御供にて被召連候へとも、參候節相摸守様御次の間に被居候へは、見物被仕候様に、眞源院様御懇の御様子、同名故文左衛門、其頃兒小姓相勤候砌にて、見被申候迚、咄承り及候、亡父なとも心易、書通なと被仕候、隱居名龍雪とか申候事、

一十郎左衛門又被申候は、原宗右衛門足輕を預り居

申候、常々足輕とも召仕候様子、氣味能き事共多く有之、先内匠頭闘諍の刻、傳奏屋敷の諸道具、宗右衛門働にて、即刻埒仕候と噺被申候處、宗右衛門被參、何を御咄被成候やと被申候故、箇様々々と申候へは、宗右衛門被申候は、拙者は前廉側用人勤居申候故、道具の様子有增存居申候に付、船を數多借り寄、道三橋の下に付置候て、船印夫々に付置、諸道具片付させ、其夜早速赤穗に參候、大學申付候日より、六日ぶりに參候と被申候故、扨々夫は早い事、いか様に被成候やと申候へは、惣體公義の御法度にて候へとも、内匠頭事は、代々傳馬町問屋共に、兼て金銀を遣置候に付、右の通無滯參候、扨々無力早使を仕候と被申候事、

一或時助右衛門被申候は、私衣類の内に、女小袖の白袖口なともせはく有之候が御座候、いな事と可被思召、是は老母著物にて候、其夜遠方え罷越候、殊更寒候間、下著に仕度迚借候て著仕、罷越候と被申候、扨々御尤成る御事、母の衣と書候て、母衣と申傳候へは、御孝心の程感入候と申候、其後寒氣强候故、何れもの枕本に、立させ可申と、御

小屏風の中に、鶏の子を育申處を書たる繪を、助右衛門見被申、此方へ被申候は、扨々口惜事御座候、皆共はとく果たるものにて候、今迄存命、此御屏風の繪を見候て、不圖倅事を存出候と被申候故、御九至極にて候、貴樣も凡夫と思召御心にて、夫程の事は御心にて御免被成候へ、各樣の御忠義、古今無雙の御忠臣と、末々迄奉感候事は、此頃非番の時分、遠方へ用事有之、町屋敷より出駕に乘候て參候道すがら、駕昇共申候は、四十六人の御衆は、辨慶、忠信に增たる人がら男ぶりまて揃大男にて、就中大石主稅殿と申は、若輩に候へとも、大男大力にて、其夜も大薙刀にて、辨慶にも增りたると承り申候と、寔にこゝろ無き其日暮しの駕昇、日雇の者まても奉感事、日本神(此處不明)屋敷出入の町人共も、此咄專ら仕候と申候へは、助右衛門被申候は、扨々傳右衛門殿へは、御賴母敷、何れも打寄忝きと申事に候、御身上被捨、今時の世上侍出家に至迄、當世のなかれ渡者多候間、能々被附御心、御噺被成候樣に、誠に大事の儀にて候と被申候故、扨々御心入忝、成程被仰聞候通、

私も神以存居候と、返答申候事、

一助右衛門一子長太郎とて、二歳にて候、愛宕下田村右京大夫樣御家中、菅次右衛門と申仁の所に居被申候、同御屋敷の內に、峰宗扑と申御茶道有之、江村節齋小屋にて、知る人に成居申候、右宗扑小屋にて、長太郎に逢申度、兼々案內いたし置候得とも、悅にて幼少之人に初て逢申事故、われら町宅近所に、小西十兵衛被居候故、前夜に人形を調給候樣賴遣候得者、其儘調參候に付、挾箱に入參候て、長太郎に逢申候、扨も〳〵助右衛門に能く似たる生付にて候、其後助右衛門母儀も、此方御屋敷出入いたし候竹屋惣次郎宅にて逢申候、惣次郎先祖は、內匠樣御先祖、子細有之、東國邊に暫御座候節、輕き奉公人にて候由、夫故宗次郎所の者一列の衆中用事をも承申段、兼て存じ申候段、若き衆中咄被申承居候故、右之通助右衛門母儀へも彼者宅にて對面申候、母儀被申候は、御尋被下初て懸御目、助右衛門無事に居申候段を承候儀、寔に氏神の御引合と存候、助右衛門儀、其夜出立再逢可申やうも無御座候へば、猶以左右も同前之事に候私の女心さへ、內匠殿は切腹、上野助殿は其儘被指置候と承り、片手打之御仕置、不及是非事と存候、助右衛門は男子に生れ、今度の振廻、尤成る儀と存候て罷在候私の影にて無事に居申段々結構成御馳走共に預り候へば何ぞ存殘事も有御座間敷と被申候故、神以拙者は、兎角の返答成兼及落涙、漸々挨拶をいたし、初對面の口上、片手打の御仕置などゝ被申儀、珍敷女性、流石助右衛門之母儀と感心申、母儀の親は、山本惣右衛門とて、何方へか千石にて、口をきゝたる侍と承候、助右衛門親父も、歷々筋の仁にて、江戶町人の福人にて、御用抔承候、住江仙右衛門などゝ、一類にて候由、福田淨慶咄承候、侍たる者の子は、女子なりとも、能々嗜度事に候、我等嫁共にも、此段可被申聞候事、

一助右衛門十九歳之時、內匠頭樣御使役被仰付、卽日より馬を持可申由、先年水谷出羽守樣御居城を內匠頭樣御受取被成候刻、助右衛門を赤穗え早使に被差越、六日ぶりに着仕候由、惣右衛門噺に、其馬丁問屋共に、兼々金銀被遣候由、定而道中筋之問屋なとへも、同前と存候、其故助右衛門も早着と存候、助右衛門懷中に金子二十兩入置候由被申、右被仰付候節も、御廣間より直に立被申候由、若き面々咄申され候、他所は組付にても使役とて有之由に候事、

一助右衛門被申候は、上野介殿屋敷へ、每夜代る〳〵申合せ參り候、平長屋、竹腰板、中塗位之壁にて透通り、燈の光如形用心の體見え候に付、鍵なと柄短くいたし可然と申合せ、九尺に仕候、戶障子を蹈破り候へば、座敷の內も廣く覺え申候、長屋之內しか〳〵隔もなく、妻子など居申所一間にて、夜仕事など仕候、灯透渡り明く見え候迚笑被申、何れも心を盡し被申候、上野介殿居間知兼、致難儀候由、十郎左衛門などは、女にもたより見、心を盡し尋たる事も候とて、何も咄被申候事、其後の事に候、十郎左衛門母儀に逢ひ候が、色々咄に十郎左衛門は、內匠頭殿兒小姓に被召出、段々懇意に預、衣類なとも澤山に持居被申候、傍輩中浪人して、困窮に及びたる人には、右之衣類、夫々遣申たるよし、十郎左衛門儀、當夏之頃、町屋へ出居被申候內、熱病を煩被申候故、母下女を召連參候

て、看病いたし候處、譫言申候も、兼て心底に思居一列の事を而已申候故、町宅にてあり、外に洩れ可申と、殊の外氣遣いたし候、十郎左衛門兄共兩人有之候、未妻も無く、兎角妻無御座候ては ならぬ事とて、方々心懸頼廻候事も、手段と存候よし被申候、扨は何も被申候樣女にも心を盡し被申候へは此事以後一入感入候、十郎左衛門切腹之節血出兼申候、いな事と被申衆有之候、畢竟大病を久々被煩候故と、存候事、

一潮田又之丞被申候は、松平壹岐守樣御家中に、有田安菴と申醫者居申候、右之者因幡國へいつ發足仕候哉、承りくれ候へと被申候に付、彼御屋敷へ參候て尋候得は、舊冬在鄉え無恙着被仕候、左右も有之候由、又之丞へ申聞せ、悦被申候事、

一次之間にて咄に、今度上野介殿屋敷に打入申時分、十郎左衛門母儀、殊の外煩居申候、多分此頃果申たるにて可有御座候、十郎左衛門の心底御察可被下候、其後十郎左衛門側に寄候て、母御の在處尋候へとも、不申聞候間、某參候て內々私儀各え如申入候哲言、以身命惜み不申御用々承と申儀を、御失念にて被申候哉、不及是非と申候へは、十郎左衛門被申候は、扨々不淺御志、兎角難申とて、具に咄被申候、將監橋筋に、松平與右衛門樣と申御寄合御座候 細川主稅樣なとの御相談役にて、外輪御門御預りにて候、右與右衛門樣御內に、內藤万右衛門と申て、私兄居申候、母も一所に居申候と被申候、扨は私町宅へ通ひ申道筋にて候、御尋申候て、御左右可仕候、何そ印を被下候へ、咄迄にては慥に思召間敷と申候へは、扨は不淺仕合、然らは迚手紙之樣に認て、紙にて包、內を御覽候て、御持參被下候へと被申候、扨々被入御念御事、日本神、見申心底にて無之候迚、懷中いたし罷立候、右万右衛門は、與右衛門樣御家老と相見え、平小屋にても廣庭も有之、路次より通候、座敷床も有り奇麗に候、後に承り候へは、與右衛門樣折々御出と承候、十郎左衛門母儀之名、貞柳と申候、万右衛門も在宿にて、兩人共に被罷出、緩々と咄居候へは、蕎麥切出申候、貞柳被申候は、十郎左衛門儀、其夜立出候而、再左右も可承樣無御座候處に、御出被下、無恙おとつれを承候事、誠に氏神の御引合とて歡

被申候、我等惣體涙もろく、兎角返答成兼、暫候て挨拶をいたし、朝晩二汁五菜の料理、御酒をも出し、傍輩共寄合、思寄次第の御馳走をいたし候樣にと申付、饂飩蕎麥切奈良茶なと進め候、蕎麥切も最早二三度も出候と覺申候と申候へは、扨々段々の御馳走忝次第とて歡被申候、扨もはや歸申候、段々御馳走忝存候、御氣色も御快然の御樣子と見候て歸候はば、十郎左衛門殿へ咄可申候、是に罷越候刻も、印を被下候樣にと申候へは、万右衛門殿へ紙包認被遣候、內を見候て致持參候樣にと被仰候へ共、神以見申候心底に無之候と申候て、こなたへ參り候、罷歸候ても、慥に思召のため候間、御ふみを被遣候へと申候へは、扨々忝存候、十郎左衛門、赤穗籠城之心得にて罷越候刻、私へ申聞候、自然日數も重り、能便なと御座候共、必ふみを遣申候な、城中に女の書通はならぬ事と、くれ〳〵申聞候、其上私は無事にても、御ゆるし被下候へと被申候、万右衛門へ向ひ候て、再往申候へとも、被入御念儀、貞柳申通に御座候へは、御免被下候へと、被申候故、兎角を不申、責て今日の御馳走の御たては

てを、持參可仕と、はな紙を出し包み、床の花生に梅椿有之候を、紙に包、是を印に可仕と申候て立歸り、此儀十郎左衛門に咄申候へは、殊の外被悦候、堀部彌兵衛と、十郎左衛門亡父と、心安くいたされ候故、彌兵衛肝煎にて、十郎左衛門も、內匠頭樣へ被召出候由、貞柳被申候事、

一最前は御廣間二座に被召置候へ共、庭も見え不申、惣體開く候故、御役者の間に御移被成思召にて、坂崎忠左衛門、三宅藤兵衛、宮村國之進、其外御側衆 御小姓頭、御聞番皆共迄も次第の如く罷出、思召之趣を十七人衆へ挨拶有之候、此間俄の事故、此座敷へ御座候樣に被仕候、殊之外暗く、庭も無之候間、庭なと有之所に御座候樣にと申付候、明日より少々繕を申付候、大工仕なといたし候故、御聽障りにも可被思召と御案內を申候、次之間の衆へも同前に申候へは、助右衛門被申候は、段々結構に被仰付、誠以冥加至極難有儀に奉存候、御侍中も大勢被付置、結構成儀共、就中堀內傳右衛門殿、別て情ら敷被仰聞、忝次第と挨拶承申候、左候而、何れも立被申候刻、國之進殿、我等へ被申

侯は貴様には御名迄被申候、歟侯と被申候、いかにも是にて承り候と申たる事候、上之間にては忠左衛門、次之間にては助右衛門、挨拶の時分は、進出被申候、辨舌分明なる輩にて候、夫故仙石様えも、此両人被罷越候と存候、寒氣の時分故、大なる火燵に錠をおろし、べんがら縞の蒲團をかけ申候、何事も御目附衆へ、御伺ひ被成候而之事と承候、煙草酒も、初一両日は出不申候へ共、是も御出し被成度御伺と承候、誠に何角御心に懸けさせられ候御事、何れも有難かり、被申候事、

一番人衆は、御小姓組、御中小姓衆、二座に勤被申候、尤無刀、挨拶馳走に出候衆も、同前の事に候、大小用に被参候節は、御番衆に向ひ手を付、時宜之様に被仕候て、立被申候、其時々々に御番衆之内一人宛、立被申候て、跡より参、大小用に被参候口迄、つき被参候、御番衆之内、心安き仁に申候は、定て被仰合にては可有之候へ共、毎度跡より御付添候ては、窮屈に可有之候、毎度各之方に向き案内之心時宜を仕候と見え候と申候へは、其儘居被申候事、

一手水つかひ被申候度ことに、坊主衆を遣し候て、水をかけ申候故、殊の外迷惑かられ候、手水桶に柄杓御添可被下候、何れも自身につかひ申度と被申候へは、柄杓出候事成かね申候、何事も芝御屋敷に伺申候儀故、其内龍口を仕かけ候て、出候様に成共致度と申談たる事候、それは少も御時宜に不及、御かけさせ被成候へと、我等毎度挨拶申たる事、

一御屋敷へ参著被致候夜、小袖弐ッ宛被下、歳暮に一ッ宛、帯なとも被遣候、右之品持参候坊主に、内藏之助被申候は、此御屋敷にて、太守様御居間は、何方にて候哉と尋被申候、次之間衆も同様に尋被申候、其方へ向き頂戴被仕候段を坊主衆我等へ申聞候、尤なる事共に候事、

一坂崎忠左衛門殿は、いか様の筋目にて候哉と、御尋候に付、忠左衛門親清左衛門と申候は、故越中守代、兄小姓にて、懇に召仕、段々取立、當越中守代にも心に叶、其後家老に被申付、以後家督を嫡子に譲り致隠居候て、病死仕候、嫡子病氣に有之、知行を上候、忠左衛門は二男にて、幼少より段

々取立、懇に召仕候、只今は大かた親の身體程に、結構に被召仕候、三宅藤兵衛殿はと被尋候、藤兵衛儀は少わけ有之者にて、定て御聞及可被成候、明智日向守殿は、先祖越中守と少すうき有之、日向守殿内に明智左馬助と申候て、名高き者有之候、藤兵衛は其子孫にて御座候、其故様子よく召仕候、長瀬助之進殿はと被申候、是は三齋代、小谷又右衛門と申候て名高き者有之候、足輕に具足を着せ、武者足輕とて五十人宛仕立、右又右衛門預申候、其の末にて側に召仕申候、堀尾万右衛門殿はと尋被申候、是は堀尾山城守殿の末にて、幼少より心に叶、懇に側に召仕候、囲之進殿はと尋被申候、是も代々召仕候者之悴にて、幼少より心に叶、段々取立結構に仕候と申候へは、度々御出被成候、扨て能御辨舌、奇麗なるおし立と、ほめ被申候、横山五郎太夫殿はと被尋候、五郎太夫は、定て御聞及も可有御座候、島原陣場にて、板倉内膳正様御討死の砌、祖父横山助之進と申て、物頭仕候を、内膳正様え被付置候て、一所に討死仕候、其子孫にて御座候故、懇に召仕、唯今小姓頭に申付候、

助之進同前に、伊藤十之允と申者も討死仕候、其子孫只今伊藤又右衛門と申て、側に召仕候、平野九郎右衛門殿はと被申候、是も祖父以來代々能召仕候、只今小姓頭申付候、遠江守様の平野にて御坐候、中瀬助五郎殿はと被申候、是は御聞及も可有御座候哉、三十年斗前、攝州芥川にて、十三四歳の時、親之敵を首尾よく討申候、少譯も有之、幼年より召仕、小姓頭勤候と、夫夫致返答候へは、扨々御大家様と感被申候事、

一井上吉右衛門被申候は、今度は大勢の事に候へとも、夜着ふとん小袖迄も無支、何と御大名様にては無きかと被申候故、拙者申候は、夜着ふとんとも に、大形日野の酒たるにて候、御大名様と申は、常々諸事支ぬやうに有之候こそ御大名様なれ、今度は富澤町にて、調られると見え候、妙解院様御代に、長崎物下直の時分、段子しゆすの巻物、澤山に御調させ、何その御用のため、夜着ふとん百斗、坂崎忠左衛門殿被申付候と、親三盛申聞候と、返答いたし候へは、是はくと手をふり、金銀少とて笑被申候、おもふ事申さねはならぬ手前故、

前々より人に惡まれ申事も存居申候へとも、堪忍成かたく候、兎角奉公人は、大小身共に、夜日心懸、御爲と奉存候はゝ、何事も成間敷ものにては無之候、當座能やうに、流渡りの世中口惜候、貴殿段々御奉公可被致候、身命を惜不申心懸候はゝ夫々の生質心の付ぬは其通、心付きては流渡りの勤は、武士たるものゝ口惜き事、何その時、猶以無心元おもはれ候、能々心懸肝要にて候事、

一廣き御座敷へ臥被申候故、寒可有之と存、拙者指圖にて、小屏風澤山に取よせ、枕元に立させ申候、或時さる仁被申候は、小屏風建候事、不入事に候、人數見え兼申候と被申候故、拙者申候は、御尤に存候、御番人多く相詰、其上あの衆の儀に候へは、氣遣之事は有之まじと申候へは、其分にて後々迄臥被申時建申候、助右衛門拙者え被申候、内藏之助はさむがりにて御座候と被申候故、羽織か何そ出し度、あれこれに色々申談候へとも、内藏之助斗には出されぬ事にて、埒明不申候、其後同名平八に申談候は、御側衆其外大身の面々、自分々々の心付のやうに、老人衆へ頭巾なと持參被申、夜々は御かぶり候へと、持參有之様に有御座度候、上より頭巾可被爲拜領様は無之候と申談候へとも、是も埒明不申、内藏之助は、夜臥被申候時は、茶縮緬のくゝり頭巾をかぶり、間には火燵ふとん引かつき臥被申候、拙者儀節齋より給候新敷くゝり頭巾、外に新小袖一ツ挾箱に入、小判も二兩ほど懷中いたし、たばこも澤山に持參いたし候へとも、わけて一人に出させ候事も成かたく、箇様の時小身ものは口惜候、右頭巾と金子は、十郎左衛門母儀に、魚籃の後清休寺を賴み遣候事、

一潮田又之丞と咄居申候處に、原宗右衛門被參、何やかや歌の咄なと有之候、又之丞被申候は、小野寺十内妻の歌、御存被成候哉と被申候、いや不承候と申候へは、宗右衛門殿被書付候て、傳右衛門殿へ被遣候へと被申候へは、惣右衛門被申候は、十内承候はゝ腹を立可申候と、笑ひなから書付給候、

筆の跡見るに涙のしくれ來て
いひ返すへき言の葉もなし

一片岡源五右衛門被申候は、先頃は皆共被召置候御屋敷の釘隱、九曜の御紋を見申候て、風と存出した

る儀御座候故、故采女正代に、三齋様より被遣候由にて、御召料の御具足、御小手はうふ小手にて、手の甲に、釘隱の御紋の大きさにて、銀の九曜御座候、惣體采女正武具の物好き、三齋様を眞似被申候由、指物なとも、三本しなへかちんにて、白餅を一本に三ツ宛、九曜の心にて九ツ付させ候、私は武具を預居申候故、能存候、被申候、扨は左様にて候か、御先代々御心安得御意被申候様に承及居申候、旦那奥方本源院殿先年果被申候刻、寺え爲御名代、大石賴母殿御詰被成候事覺居申候、内匠頭様御家中立物なと、其身〳〵の物好きにても候哉、又一列にて候哉と尋申候へは、侍中物頭も同前に、三寸四方の金の角を向立に仕候、當御家は被申候故、番方の侍十二組は、一より十二迄の文字に、金の引兩を付、色はかちんにて候、小姓組六組は左右の文字に、金の引兩同前にて候、立物は銘々物好に仕候、組付は金にて御座候、物頭はおもゝ〳〵に仕候、只今御咄の三本しなへは、中小姓共にさゝせ候と返答致候處に、十郎左衛門被參候へは、源五右衛門、十郎左衛門に被申候は、御自分にためし進候、具足の下地絨候時分入念候へは、火を入穴をもみ申候故、ためしかならずもとり申ものにて候間、御舍兄達へ能く〳〵御咄置候哉と被申候へは、成程兩人へ能咄置候、定て絨申時分念を入申たると被申候、扨て其後野田小三郎に、指物の事を咄申候へは、成程三齋様御代は、御番方も三本しなへと承り候と被申候、拙者小三郎咄にて社承候、とかく古きことは可承置事に候、

一老人衆へ、拙者申候は、各様御事、國本え申聞悦申越候、私も初若輩の時は、老人は益に立ぬ者と存居申候、最早私も老人に成候故、尽負に存候、旦那親父肥後守代、福島左衛門大夫殿城代仕居申候、上月與右衛門と申者を、五千石にて召抱候砌、肥後守親父三齋、八代に居被申候、家老村上河内と申者に、壹萬石遣置候、河内申候は、肥後守様は、此頃高知の者被召抱候と申候へは、三齋被申候は、侍に歳か可入哉、今日召抱、今日用に立は侍也、扨々うつけたることを申候とて、以の外呵り被申候由承り候、其時分の老人どもゝ歎申候て、

八代へ向拜み申候と申傳候由を咄候て笑ひ申候、此の咄は遠阪關内へ、志水伯耆殿咄被申候由にて候事、

一右の噺を、後に内藤万右衛門母義貞柳忌中見廻に參候て噺申候、拙者十郎左衛門懇意に仕候迚、悦にて候、奥中熊太郎樣御家中、万右衛門弟十郎左衛門ために兄にて、神谷成右衛門と申仁勤居被申候、右の衆中存寄とて、右のためし具足の下地を形見に給候、志の段不淺、暫留置候、貴殿へ遣可申と、返禮に刀脇差の内、札有を遣度存居申候處風と心付候は、万右衛門も成右衛門も若き仁にて、いまた妻子もなき由、後々妻子も出來候上、天下に名を顯し十郎左衛門事に候へは、甥達に讓り可申候儀、當然の理と存、十郎左衛門旦那寺清休寺に參候て、右の心付を噺し、十郎左衛門殿事、御新參にて年數も無之に、御代々御重恩の衆中同前に、一列の御志は、別て勝れたる樣に私は存候、万右衛門殿、成右衛門殿御妻子も出來御成人の後、天下に名を顯候十郎左衛門殿、御具足候へは、御持傳候儀、當然の理と存候、私へ形見とて被下儀、

一日本の神、御志不淺忝存候、拙者方へ召置可然と思召候哉、道理二ッの内を尤と被思召候哉、被仰聞候へと申候へは、住持被申候は、段々被入御念、御志兎角を難申候、行末の事迄、御心被附候事、感入申候と被申候故、右具足、貴僧迄返進可申候間、貞柳、万右衛門殿、成右衛門殿へ渡被下候へと差返候、二ッ玉にて、一枚宛ためしたる跡有之最目壹貫目餘有之候、清休寺より、右の趣三人の衆へ被申通候て遣被申候へは、三人衆歡被申候上、感心の由留置被申候、其後貞柳より、泉岳寺へ被申通、十郎左衛門其夜著用の肌著を乞請、我等心底不淺存候由、是を形見に仕候へとて給候、我等にては扨て〳〵不淺御志にて候、子孫まて十郎左衛門殿に、あやからせ可申と一禮を申候、白羽二重に、後に磯貝十郎左衛門正久と、自筆にて書有之候事、

一十郎左衛門書被申候物を見申候へは、手跡は夫程に見え不申候、歌抔書被申候假名も、同前に見申候へとも、右之肌著之書付、具にて書御座候、見事に見え申候、後に万右衛門咄被申候は、十郎左衛門若年の時分は、亂舞を好、其上器用に有之、誠太皷萬事稽古仕候、内匠頭樣被召出候而、御嫌にて御座候由にて、透と捨申候、御學問御好にて、色々書物好にて寫、就中しんの物は見事に見え申候、好候へは成事と存候と、萬右衛門咄被申候、承候而一扨は私見申候眞の見事に御座候、代筆かと存候へは、右之通に而見事に見え申候、後に万右衛門被申候は、肌著書付申候も、御覽候へ、かなよりも能見え申候由被申候事、（本條は異本に據り補ふ）

一松平安藝守樣御家中は、江戸にて馬を持不申候も道中は專幸せ申候、江戸にては御借馬も有之由、道中專に幸せ候由、上田新兵衛咄にて候、先年道中にて我等も見申候、馬數大分に候、前々より馬宿の咄承候、本多中務樣御家中は、貳萬石以上は馬は幸せ候、是も先年道中にて見申候、右の通候へは、内匠頭樣も安藝樣と同前と存候、數日の儀にて、何も心安坊主共に、色々の事を尋被申候由候へは、我等身の上の事も、定て尋たるにて可有之候、馬幸せ候宿の時も何となく、右之咄を得候、心底には扨々おかしく痛入候、何角に付小身は口惜候、

一次の間にて咄居候處に、上の間より忠左衛門參、傳右衛門殿は、每々若き者斗と御咄被成候、御年もさのみ皆共と替りも無御座候と被申候故、神以追付夫へ可參と存候へ共、御咄しみ候て居候と申候へは、忠左衛門被申候は、いや左樣にても無御座候、惣體是へ參候事、内藏之助心に叶不申候と存候得共、傳右衛門殿御聲仕候と、内藏之助其外へも申候て、是へ參候、必此座がらに御はなし可被下候、此間に參候て御噺承候へは、氣晴快御座候と被申候、是にて内藏之助威高き事、可有御察候事、

一上の間罷出候時、忠左衛門、惣右衛門、彌兵衛なと、我等側へ被參、傳右衛門殿は馬御數奇と、何れも咄にて承候、馬咄可仕候、總體道中御幸せ候馬、遠路達者不達者に可有御座候と被申候、いかにも若き時より數奇て見候にとかく馬は生質すなほに、すそ廻りよく無御座候へは、遠路道中なと役に立不申候、頭持能、轡うけ能、喉も前地道乘能

のと申候ても、小うて延び申候か、或はそむき爪
惡敷候か、とかく馬は總體能候ても、右の所々に申
分候へは、遠路必皿落、自然の時益に立不申候と、
返答仕候、御番人後に詰居被申候故、われらも心
の内おかしく、いたみ入候、若輩の時分、御馬屋
に稽古に出其後定て御供にて、舍人殿就中馬好き
にて、切々右之咄承居候故、取合候て返答いたし
候、とかく何事も心を付て、人の咄は可承置事に
候、當座身の爲にならぬ咄は、うはの空に聞申事
に候、武士はいか樣の事かありて、大名に可成事
もしれぬ事に候、昔より申傳候、心は身體より大
きに持度事候、扨右之三人衆被申候は、扨々傳右
衛門殿は、承及たるよりは馬御功者にて候、定て
御家の御馬役衆、其外御侍中にも御乘手多可有御
座候、前廉の上田吉之允なとの樣成上手は、當世
有兼可申候と、忠左衛門被申候、如仰昔之樣に勝
れて乘候は有兼申候、馬役之者に中山九郎左衛門
と申者候て、隨分奇麗成る乘方にて御座候故、越
中守唯今の旦那の祖父妙解院と申候、三齋子にて
御座候、如形馬好にて、自分にも能乘被申候、馬

上にて色々の事を被仕候て、慰被申候、腹中すき
候時分、馬上にて湯漬なと給被申候由、親共咄承
候、其時分は右吉之允におとらぬ上手共多く、馬
役之者に永井安太夫と申ものは、皆共幼年の頃ま
て存命にて覺居申候、小男にて奇麗成乘方にて御
座候、吉之允は馬上手にて、武功も有之候、一所
に佐分利九之允と申仁御座候由、此佐分利同名之
者共、傍輩に多御座候、兩人共に松平宮内大輔樣へ
被召仕、九之亟は後に原城にて討死仕、石塔なと今
に有之候よし、傍輩共は見申候との咄承候、吉之
允兒小姓佐治賴母と申仁は、右吉之允、九之允働
有之刻も、同前之働にて、富田信濃守殿當座之褒
美に、作の鞍を給り被申候由、後に松平新太郎樣
え被召出、千石被下、鐵炮頭被仰付候段、親共噺
にて承り申候と申候へは、三人共に傳右衛門殿は、
古き事を能く御覺被成候と被申候、近代大坂軍島
原一揆之刻、御父子共に被成御座、御家中侍中討
死手負、或は御褒美之書附、折々見可申候、生れ
ぬ先の事も知申候、御當家之事を、御家人の不知
して、他家の人尋申時、不存と申と、不心懸之事候、

遠坂關内、此以前相良遠江守樣へ御振廻之時、御
供に被參、其刻我等は步御使番にて、腰懸に居申
候、御知行取は御座敷に上り、御料理被下候節、
關内方え彼方御家老被申候は、前廉御家に居被申
候而、御暇申上候早水忠兵衛と申人、松平大和守
樣へ被召出、結構なる首尾にて御座候、御家にて
は百石被遣、御臺所頭被仕居候由、島原之刻、長
岡佐渡殿、益田彌一右衛門殿、右御兩人之證據狀
持被居候て、右之通結構に被召出候由、右之通之
仁を、何とて御暇被遣候哉と尋被申候へは、關内
方返答に、成程被仰聞通に承及候、其節越中守、肥
後守父子共に罷越候故、侍共過半召連候、其時忠
兵衛は、輕き奉公をいたし、臺所廻りに役儀を勤
申候者にて、働いたし候、他所へ參候ては、身體
の足りにも成可申と、兩人より狀を遣候儀も承及
居申候、前々より召仕候侍とも、働多御座候故、
越中守方にて、さのみ賞翫不仕候、大和守樣へな
とにては、島原之働有之者少可有之候間、御賞翫
御尤に候と返答いたし候へは、御家老とかくの事
もなく、御尤と被申候由、則我等腰懸に居申候處、

關内被參、何と存候哉、僞にもなく誠を以能返答
にては無之哉と被申候、今に忘不申候、扨々能被
申候樣、先祖越後守殿之名を汚さぬ樣にと、申さ
れたるを覺居申候、關内は古き咄好にて能覺候、
關内島原の時分は、未生以前か、三四歳か、夫よ
り上にては有間敷候、皆々好たる事は、わけもな
き事さへ覺申事に候、貴殿心得にも成可申と、書
加へ候事、

一忠左衛門、我等側に寄咄被申候は、拙者聟伊藤十
郎太夫と申者、本多中務大輔樣御内に居申候、折
節在江戸にて候、本多家普代之者に御座候、親は
八郎左衛門と申て、武功も有之候へとも、申度事
斗申候故、小身にて今に二百石被下居申候、内記
樣代或時御前へ被召出、御夜咄之節、酒も出段々
御機嫌能、後には出頭仕候、兒小姓衆罷出、八郎
左衛門に酒給せ候へとも、下戸にて常々短氣者故、
頭にのませ可申とて、兒小姓衆戯候て、色々の事
を申て、腹を立させ候へは、散々惡口を申候故、
幼少之者共と申、殊に御前にて迚、御機嫌損し候
由承及候、今に小身にて子孫も居申候、心儘に申

度事斗申候へは、今に小身にて居申事と被申候、我等申候は、左様の儀は多き事に候、苦にも不被存、定て一つ所を樂に存可被居候と、返答致候、又被申候は、右十郎太夫殿へ、折を以御知人に成可申と被申候、本多様御屋敷は、御成橋之内にて、いか様遠慮被仰付候哉、長髪にて些頑居申と被申候、緩々と咄、忠左衛門殿御無事に御座候と申候へは、扨々忝、神以御禮難申盡と被申候、悴兩人痘瘡輕く相仕廻、湯も懸り申候、其外忠左衛門悴共も、無事に居申候、私妻子にも無事に居、寺坂吉右衛門無事に下り、私所にも參候段申越候と、御咄被下候へと被申候故、歸り候て忠左衛門に咄候へは、扨々不淺御志難申盡とて歡被申候、吉右衛門事申出候へは、此者は不屆者にて、重而は名も被仰被下間敷と被申候、吉右衛門は、其夜一列に一同に參候て、逐電いたし候由、兼々何れも被申候、然とも無恙仕廻申たる儀を知せ候使申付なと色々申候へ共、右之通に被申候事、不審に存候、實の缺落かとも存候事、

一いつれも へ我等申候は、箇様に御懇意に仕るも、因縁ある事にこそ候へ、折を見繕ひ、追々各様御一類中へ、御身分之様子、委敷御咄可申と心掛居候、乍去御人に寄ては、何を申かと思召御方も可有哉、無心元候、いつれも様御自筆にて、御手跡御親類中之御名を、御書付置被下候へかしと申たれは、皆々殊の外歡はれ、銘々親類縁者、御當所に被居候分は勿論、京伏見大阪其外所々、委敷書付出され候故、其分追々相尋、傳言之趣申通、始末も委敷咄し聞せ申候、(本條以下六條は異本に據り補ふ)

一或時、堀部彌兵衛能寢入て居たるか、矢聲をかけ被申候は、丑の刻比にても有たるか、我等寢ず番して居たるが、此聲に驚候、彌兵衛は老人故、若き人に劣る間敷との噂にて、常々心張り居候故、寢入ても折々箇様成事ありと咄被申候、彼仁は、飯後には何れも御免候へ、老人は足すくみ申とて、縁かはに出て、あなたこなたと歩行、足をならし申とて、笑被申候事能く存候、其の後夜四過比、潮田又之允、寢入候て齒切被仕候を、去仁參候て

起し、はきりを強被成候、御氣色惡敷候哉と尋被申候由、以後又之丞被申候は、先夜誰殿之被御入念候て、被仰御心被下候、私癖にて寢入候て間々齒切仕候、扨々入御念、忝くは存候へとも、扨々迷惑仕候と被申候に付、笑候て、夫は念入過し、御目覺御迷惑と申笑申候、惣體萬事入念勤候様、毎度何れも承り申事にて候へとも、事によりたる儀と存候、名も又之丞被申聞候へとも、態と書付不申候、能く〳〵萬事心付候て、了簡可有之事と申候事、

一内藏之助は、御預之翌朝より髪を結せ候、幾之衆は、其儘にて二三日居被申候、我等進め候へは、其後追々髪を結せ被申候、

一十二月下旬、江村節齋老の孫成庵が、十七人之衆見度由、我等に賴候故、同道致候、其以前寒風強く、十七人の内には、手負病人老人もある事に而、御心元なく被思召、江村節齋老へ被仰付、見廻も被致候事故、此者は節齋孫にて成庵と申候、各様に御目に懸度由申出、幼年には希特なる事に存候間、是へ召連候と申候へは、内藏之助始、扨も々々と申、各側に寄、いくつに御成躰と被尋、十二歳にて候と答候、彼の衆へ被下置候菓子の有たるを、鼻紙に包、成庵に遣し、其後は折々成庵之事を申出、富森助右衛門被申候は、内藏之助を始として、同歳の子供を持候者は、思出し候と噂被致候、右成庵か見に出候噂を聞傳へ、御番方幷御次詰之衆も、追々彼の衆を見に出被申候、いかさま後年咄しの種になり申へし、

一いつれも被申候は、舊冬より度々火事沙汰承候、此上皆様の御苦勞に相成居候間は、御近邊に火事無之様仕度と也、我等答に、當屋敷廣、殊に泉水流れ、芝原も廣、樹木も茂り居候、萬一之時は、庭内に御連申筈に而、手當被申付置候と答候へは、左様ならは、ちと御近火を願ひ申とて、皆々笑ひ被申候、

一正月十一日、御役替有之、岩間何五郎、片山重之允、着座被仰付候、其砌私へ何れも尋被申候は、着座とは、如何様之御座配御役儀かと尋被申候、私申候は、他家にて申番頭之類にて御座候、旦那家にても、大方は其位にて御座候、併着座と申は、

先は年始之禮之節、大刀にて申候、着座にも段々有之候、小身にても家筋能者共は申付候、番頭より上座之着座、下座之着座と、色々御座候と挨拶仕候事、

一いつれも若き衆中被申候は、堀部彌兵衛養子安兵衛、定て御聞及も可有御座候、先年高田馬場にての仕方、彌兵衛承及候而、何之由緒も無之候へとも、養子にいたし、不思儀なる事は、手跡物こし迄も、彌兵衛に能似申候と被申候故、成程承及候、感入たる儀に候と申たる事、

一次之間にて助右衛門被申候は、吉弘嘉左衛門殿御先祖之儀、承度と被申候故、我等申候は、大友家にて吉弘嘉兵衛と申者、秀吉公之時、九州合戰之砌討死仕候、石垣原の戰と申候、豐後詞にて子共迄も小歌に、長い刀をシヤッと抜て切てさるけばエレ〳〵皆はいまはると、諷申候と申傳候、就夫嘉左衛門と心安者共は、ムヽエレ〳〵と申て、なふり申候と申候へは、助右衛門被申候は、アレに居申候、矢田五郎右衛門も、嘉左衛門殿御先祖にまけ申ましく候、三河記なとにも有之候、矢田作十郎と申候者は、隱れなきものにて候と被申候、後に承り候へは、大村因幡守樣御出被成、太守樣え御咄被成候は、御預り内、矢田五郎右衛門先祖作十郎は、三河にて三人之内にて、二人之子孫は、只今御旗本に御鐵砲頭被仰付置候、名は失念仕候、其内にても、作十郎は勝れたる武功之者と御咄被成候由承候、堀部彌兵衛事も御咄にて、今時之聞番之樣成るものにては無御座旨、被仰候由之事、

一内藏之助を初、何れも被申候は、度々御斷申候は如御存、私共八々浪人にて、輕き物迄を給暮し申候故、結構成御料理數日頂戴仕、殊之外つかへ申候、此間の麁飯戀しく成申候、何とそ御料理輕く被仰付被下候樣にと被申候、我等申候は、左樣に可有御座候、私共も逗留中御相伴に、次にて料理給少つかへ申候樣に覺申候、御尤に存候、隨分御好被成候へ、輕く可申付候、乍去菜數之儀は、旦那耳に達候て之儀故、減申事は難成と申候へは、左候はゝ、唯今御座候ちさ汁、なまこ鮒糖味噌汁なとゝ、心安衆は望被申候故、色々申候へとも、御料理人共、唯うまき樣に計仕、存候樣に成兼、殘念に存候事、

一助右衛門被申候は、いろ〳〵御馳走、誠以冥加に叶たる儀に御座候、水風呂も一人宛御かへさせ被成候事別て迷惑仕候、大勢入候跡程和かに能御座候旨被申候故、後は二三人にて替候樣に申付候、每度下帶なと被下候へとも、度々には替不被申候事、

一上之間若き衆、大勢咄被申候處に、罷出候へは、何れも被申候は、御覽被成候へ、間喜兵衛いつとても咄不申、人の後に計つほんといたし居候が、如形律儀に堅き男にて御座候と被申候故、我等申候へは、夫はいか樣の思召にて、被仰候哉と被申候故、今度各樣上野介殿をこそ、御心に可被懸候へとも、十次郎殿御鑓付被成候て、印を御あけ候事、喜兵衛殿御手に被懸候より、十次郎殿御手柄を、何程かと大慶に可被思召、冥加に御叶候事、常々喜兵衛殿之御貞心故と申候へは、何れも誠に左樣にと被申候、何れも喜兵衛の方を見向被申候へは、歡ばしき顏色にて、笑て我等に向、何共物は不被申候、忝と計之樣子にて、折入て時宜を被仕候、夫故か終に咄もなく、しかと言をかはしたる事無之候、最期之時、側に寄候而、何そ御口上之御方可承と申候へは、懷中より辭世を書きたるを給候き、

草枕むすふ假寢の夢さめて
　常世に歸る春のあけほの

一御老中秋元但馬守樣御内に、中堂又助と申仁、喜兵衛聟に御座候由に付、傳を以此辭世を又助内儀へ見せ、所望には可被思召候へとも、是は拙者に給被申候故、所望は斷申とて遣見せ候へは、又助より卽刻禮狀給候事、

一堀部彌兵衛被申候は、津輕越中守樣江、大石無人と申候て、拙者同年七十八歲に罷成候、前廉故采女代の勤の者にて、只今は津輕樣へ、大石鄕右衛門御側御用人相勤居申候に懸り居申候、今度一列の同志と申候故、拙者扨々無分別、御家を替り、子に懸り居候ては、道理に叶不申と申候へは、得心仕候、御滯留中御隙の砌、御知人に御成候へ、故事

共能覺居と被申候故、彌兵衛果被申候以後、本莊に被居候由尋候て罷越、無人并子息鄉右衛門、三平共在宿にて、綾々語、色々馳走にて被歡候、無人存候と挨拶いたし候、右無人は大石同名にて、瀬左衛門大伯父と承候、内藏之助着込は、去人泉岳寺小坊主に心安有之所望被致候、それかしは見申候、随分隱し、向方よりも聞付、所望も可有之候哉と、内々にて求被申候、忍緒は内藏之助に歌頼し時分、同樣に二枚調呉被申候、助右衛門を頼候て、如望二枚調被申候、内一枚は、右忍の緒に替へ遣申候、追て右着込を求被申候仁、歌の下書を被仕、此通に何とそ内藏之助に歌を書貰候樣にと被申聞候、初者拙者心も付不申候、只今存候へは、能こそ書せ置候と存候、是も右之仁の影と存候、右の仁は江戸定詰にて候事、

寺の寶物と成り其儘召置被申候、子孫の所望も有之節、讓り渡被申心底にて、中々拂物に成候と承り、肝をつぶし申候、拙者なとも望に存候而、殘念に存候と挨拶いたし候、右無人は大石同名にて、瀬左衛門大伯父と承候、内藏之助着込は、去人泉岳寺小坊主に心安有之所望被致候、それかしは見申候、随分隱し、向方よりも聞付、所望も可有之候哉と、内々にて求被申候、忍緒は内藏之助に歌頼し時分、同樣に二枚調呉被申候、助右衛門を頼候て、如望二枚調被申候、内一枚は、右忍の緒に替へ遣申候、追て右着込を求被申候仁、歌の下書を被仕、此通に何とそ内藏之助に歌を書貰候樣にと被申聞候、初者拙者心も付不申候、只今存候へは、能こそ書せ置候と存候、是も右之仁の影と存候、右の仁は江戸定詰にて候事、

一拙者肩衣に、紺の水衣有之、單にて夏中着、冬に成り古き羽織の裏に茶の形付置候を、或時着用罷出候へは、片岡源五右衛門被申候は、此御肩衣は、何と申もの にて候哉と、尋被申候故、水衣とか申候樣に承候、若きものともの物好きにて拵候と申

候へは、拔々能き御物好き、裏の取合迄能御座候と、手にて探り褒被申候、神以それかし迷惑致候、總體衣類に不限、時々のはやり事致さぬものと、亡父被申聞置候、三齋樣御眼あしく、八代え相詰居申内、細川刑部殿と申候、後に玄伯老と申候若年の時分、江戸より下着にて、八代に被參候節、京都より御咄伽、宗吟宗和と申者、并槇島雲菴半之丞祖父也も被居候、刑部殿短き羽織着御出被遊御覽、御機嫌惡く、次へ被參、其羽織誰にそ道候へとの御意に付、宗吟宗和申上候は、唯今かうひり道服とて、江戸御旗本衆、馬の三頭に懸らぬ樣にとて、はやり申事に御座候と申上候へは、三齋樣御拜領の羅紗の羽織を御取寄被成、刑部小袖に、兩方五步宛長く仕立させ候樣にと、御意被成候、扨江戸にて何を仕居候哉と御尋被遊候、小畑勘兵衛軍法を承りたる由御申上候へは、御意に證據かなければいはれぬ事なれとも、雲庵是にて聞候、關原之時分、勘兵衛もさして替候事なく候、われ等馬上にて働、太刀打も、雲菴、存知之通に候、三齋子越中守弟なとゝ申者か、時々の時行とて末々の仕事無用に

と被申候故、扨々迷惑仕候、たはこを御取被成候上、若き私を古人とは、近頃迷惑に存候と申候へは、此御たはこ入の御物好にて、いつれも左様に存候〻被申候故、見苦しく御座候へ共、皮がよくたはこを持候と返答仕候へは、いや〳〵、總體當世にては無御座、乍慮外いつれも、神以存候と被申候、あれ是たはこ入懐中の衆中、隨分奇麗に新たはこ入にて、様々の物好き多く候へとも、皮か宜御座候ゆゑ、才覺いたし候、此たはこ入は、何れも度々手に取り申され候故、形見と存殊當候、肩をぬゐ申されたる時は、めいわくに存候か、古人と被申候事は、ちと太慶と存候事

一内藏之助をはしめ、何れも被申候は、御番被成候御衆、其外御通被成各様、最早久々の事にて、扨々御苦勞千萬に存候、早く埒仕度と被申候、拙者申候は、皆共〻代り罷歸、心を付見候へは、各様へ朝夕料理を進候手傳の荒仕子までも、少も苦に不仕　隨分御馳走仕度心底と、日本の神見及候間、御苦に不被成候やうにと存候、右之通之儀は、偏に各様の御志故と、傍輩とも寄合御噂仕事に候と返答いたし候、大石主税其砌強き風を引被申候様に承候に付、隠岐守様御聞番に尋申候へと、同名中八に申候へは、即刻承候にもはや御快、食事なとも進み候由、平八咄にて、委細承候と申候へは、内藏之助被申候は、扨々被附御心、忝次第と斗にて、仔細は尋不被申候事、

一正月初頃次の間にて、忠右衛門被申候は、御町宅に被成御座候へは、定て色々咄をも御聞可被成候、不苦御咄共承度と被申候故、舊冬より江戸中末々迄各様御忠義の咄斗承候、舊冬二十七日八日頃か岡林杢之助殿と申仁、書置をして自害被仕候との沙汰承候と申候へ者、忠右衛門暫く案し、いかにも左様可有御座候、杢之助は、千石取番頭仕居申候、成程誠にて可有御座と被申候へは、十郎左衛門被申候は、傳右衛門殿御咄之通に候へは、忠左衛門殿、いかゝ思召候哉、おそしはやしと申ものにて候、今少見合、時節も可有之事と被申候、能々了簡いたし候へは、深心にて存寄有之事と見え、別て感入たる事に候事、

一忠左衛門被申候は、傳右衛門殿、御通り被成候道筋は、いかゞと尋被申候故、大工町に居申候故、河岸端を通り、數寄屋橋を通候事も有之、又用事御座候時は、道筋かへ申候、大形右之通にて、八官町通り申候と申候へは、八官町の後に、三輪丁と申候て有之候、夫に内海道億と申、道三門弟御座候、相弟子なと、御家にも御座候様に承及候と被申候故、成程町方にも大勢扶持なと遣置候醫師御座候へ共、識入無御座、家名なとも、初て承候様の事共御座候と申候へは、御大家にて、誠に左様に可有御座、此道億は隨分療治もよく仕候、内匠頭方へ居申候、一亂以後浪人にて、町宅に居申候へとも、脇々の療治を止、皆共類在江戸之者迄療治仕呉候て、志有之者にて候、御隙之刻、御寄りにて候へとも、御立寄御咄被成候へかしと被申候故、夫は奇特成儀に候、いつそ立寄可申と申候、其後立寄知る人に成、緩々咄承候へは、在江戸にて、京大阪に被居候衆へは、萬事此道億へ通し合被申候由、京都に寺井玄溪父子にて、互に通し合被申候、以後承候、玄溪子息玄達と申候由、最期の時、内海道億様大石内藏之助と、上書きの大きなる書狀、原惣右衛門手跡にて調申たるを、惣右衛門拙者へ、是を屆呉候へとの頼にて、同名平八に申置歸候後、平八も道億居所不存、藤兵衛殿へ持參之處、御前え上り申候由平八申聞候、道億え見廻候節、寺井玄溪より參候書中之内、拙者言傳候を切抜、見せ被申候を寫置候、此文章略す、

一原惣右衛門被申候は、本町呉服物共、定て大勢出入可仕候、本丁に、京都より寺井玄達と申醫師參居候、舊冬京都え歸申筈に御座候、いつ頃歸被申候や本丁より出入の者に、御聞被下候へと被申故、本丁一丁目、七文字屋彌三右衛門方え居被申候寺井玄達、極月二十六日、京都へ歸候由承候て、惣右衛門え申達候、是は京都より内藏之助なとへ付候て、病用に被參候由、後に承候事、

一堀部彌兵衛被申候は、高田馬治居申候處は、熊本より道の程、何程有之候やと尋被申候、三十二三里の道法と申候へは、拙者も高田行長重行之作致所持居申候、誠に御下被成候はゝ、同名甚之丞へ御咄可被下候、拙者事兄弟九人有之候、其内酒給

申者兩人御座候、是は仕合の儀、其外私も初め酒給不申、不仕合と存候、甚之丞は、隨分酒を給候へと、御咄可被下候へと被申候に付、甚之丞殿は參候樣に覺申候、只今被仰聞通候はゝ、御喜可有之候、江村宗周老御緣の譯、私はしかと存不申候、甚之丞殿の望にて御座候、堀部十藏事はいかゝ務候哉と被申候故、旦那心にかなひ、懇意被召仕候、御心易思召候へとも申候へは、又被申候は、十藏は、存知居申候哉、彼者幼少の時分、私養子に可仕なとゝ、甚之丞方へ申遣候、前々より書通之文體なとも、慇懃に紙面も相見え候へは、手全に御奉公も相勤可申と存候由被申候、其後十藏に逢候て、右之趣を咄申候事、

一彌兵衛悴安兵衛從弟佐藤條右衛門と申浪人御座候先年長崎御奉行諏訪何某樣にも、浪人分にて被召連候、長崎にてくわもつ盜取候足輕之類三人迄、條右衛門一人にてからめ捕申候、今度內藏之助免し不申候へは門內へは入不申候得共、私老體とて（ノ脫はイニ）介抱仕候、中々男らしき者にて御座候、乍併不男にて御座候、然れとも主取仕候はゝ、主人の御心に叶候樣、奉公可仕者に御座候、此者事心懸りにて、不便に存候と被申候故、御心安思召候へ、左樣之御心底にては、男ふりは入不申候、武冥利に可被叶候、追て御知人に成可申と申候へは、殊之外被歡候、其後堀部十藏、成田伊右衛門小屋に、右條右衛門被參候て、知人に成申候、則伊右衛門同道にて、同苗平八にも知人に成候樣に仕候事、

一或時上之間には、八木市太夫毛拔はさみ澤山に包持被出候、鏡ちいさきをも紙に包、是は我等持出候、內藏之助被申候は、只今も市太夫殿如此御持參被成候とて、我等鏡と同前に頂戴被仕、段々被爲附御心忝仕合迚、其儘差置、堀部彌兵衛は脇之方に寄臥居被申候が、其刻目覺被申候、內藏之助被申は、彌兵衛目覺候哉、是にと被申候へは、其儘はい寄り被申候時、唯今是は市太夫殿御持參、是は傳右衛門殿御持參にて候、頂戴被仕候へと指出被申候、彌兵衛も頂戴被仕、辱かり被申候、去人被申は、毛を拔被申候時、又（ハはさみにて爪なと取被申候節は罷出候て居候樣にと被申候に付、我等申候は、傍輩心安きだに、先止咄申候事、禮義にて候と申候へは、然らは見え隱に居被申候而、見申候樣にと被申候、惣體我等は、心底に存候事は、誰にも遠慮なく申度事は申候故、諸人氣隨者と被申候段、前々より承居申候へとも、御奉公等之儀は、尙以心底に存候事は、少も扣不申候、天道次第と平生覺悟いたし居候事、

一平野九郎右衛門被申候は、皆共出候へは、何れも窮屈に被存候、緩々と語り申事も遠慮に存候、此段宜敷樣に挨拶を致呉候樣にと被申候に付、我等申候は、九郎右衛門は咄好にて候、五郎太夫も同然にて候、となたも規度御あいしらい被成候に付、御窮屈にも可被思召候、必々無御遠慮、御心安緩々と御咄被成候はゝ、何も悅可申と申たる事、

一何れも徒然の時分のためにとて、平家物語、太平記なと出申候、老人衆眼鏡を、我等へ所望被致候、其儘調候て致持參候、三國志、同名平八致所持候を出申候、吉田原磯谷なと切々見被申候事、

一或時平野九郎右衛門、蕎茶碗にごまめを醬油にてにしめ、唐辛子かけ、茶うけにとて、宮村圀之進持參めされ候由にて、我等へ被申候は、是はあの衆へ出し申候はゝ、慰に成可申哉如何と被申候に付、成程能可有御座候とて、袂に入持參仕、傍輩共茶うけに仕候へと遣申候に付、すそわけ仕候とて出し候へは、何れも打寄、扨々是は忝、夜の藥酒被下候時分、肴に可仕とて、皆々紙に包取、悅被申候、惣體御酒も御伺被成候て、朝晩の御料理にも、三遍より外は成不申候故、好被申候衆は、中椀なとにて給被申候、右の通にて、夜は藥酒として所望被仕候樣に成り、夜給被申候衆も有之候事、

一助右衛門被申候は、十五にか成候坊主衆、名は失念仕候、藥酒の酌に被參候刻、內藏之助申候は、誠に此間は久々の儀にて、各にも晝夜御骨折忝存候、頓て埒明果可申候、乍此上其上にては、精進を賴申候と笑被申候へは、右之坊主衆泪を流され候、幼少の衆迄右之通にて、不淺仕合、何れも及落涙申候と被申候故、我等申候は左樣に可有御座候、度々如得御意候、初て各樣へ御意得て、心安きも不思議の御緣深き所、天道に叶候故と申候事、

一或時潮田又之丞被申聞候は、我等へ內藏之助尋くれ候樣にと申候、松平伊豫守樣へ居申候池田主水

は、御出入仕候樣に承及候．御當家に上月名字之御衆御座候哉と、御尋被申候、いかにも上月與右衛門と申候て、福島殿へ城代仕、隱れなき者、只今の越中守親肥後守召抱申候、右與右衛門末子、上月八右衛門と申候て、番頭仕居申候、最早病死いたし、只今は孫の代にて、八代番頭申付候、池田主水殿事、譯はとくと不存候、いか樣當家代々心安筋も候哉、當越中守初て入國之刻より、船中主水殿領地にて候哉、下津井より水を船にて音信、使者も參候、此方よりも小姓組を返禮に遣申候と及返答候、其後內藏之助、直に被申聞候は、扨々委細能御覺被成候、主水は私ためには伯父にて、只今の伊賀は從弟にて御座候と被申候故、我等申候は、上月八右衛門弟、上月三右衛門と申浪人、京都に居申候、此者之娘、主水殿の御聟父出羽殿へ進申候樣に承候と申候へは、扨々誠に能御覺被成候、其三右衛門娘は、申さは拙者祖母分にて候、乍然此腹には、子は無御座と被申候、我等申候は右與右衛門事は、時代替り候故覺不申候、私親とは咄申候哉、與右衛門子共、いつれも心安咄、就中八右衛門は、近所にて、猶以心安仕候と申候へは、段々委被仰聞忝存候、扨々松平安藝守樣へ、平野の名字之者有之候、拙者儀少內緣も有之候、九郎右衛門殿とは、いかやうの續にて候哉と被尋候、我等申候は、惣體九郎右衛門事は、遠江守樣同名にて御座候、平野氏傍輩ともにて多御座候、安藝守樣へ御座候は、九郎右衛門には、何程の續と申儀、不存候と及返答候、扨又序に書加置候、右池田主水祖父出羽と被申候は、池田勝入公の御嫡子、紀伊守樣と申、長久手之合戰に、御父子共に討死被成候、出羽は紀伊守樣御子にて候へとも、幼少故、御次男三左衛門輝政公、御家を被繼候て、只今之伊豫守樣迄御相續にて候、出羽は殊に御嫡子筋にて、三萬五千石にて、御家老相勤居申候、出羽も二代にて、初出羽は、右之通ゆゑ、蜂須賀蓬菴樣の御聟にて、松平阿波守樣御妹聟、就夫阿波守樣、妙解院樣御相聟にて、眞源院樣御爲に、阿波守樣御伯母聟、其妹池田出羽奧方にて候へは、右之御由緒を以、御代々備前下津井にて、水船を出し被申事、能存居申候へとも、其譯は惣とだまり、いか樣の譯か、代々心安御座候と迄及返答候、我等共先祖、池田の御家に居申候故承傳候、內藏之助も能存知とは存候へ共、差扣候事

一內藏之助へ我等申候は、大石賴母殿御跡は、いかゞと申候得は、賴母跡は譯御座候、只今御旗本に成り居申候と被申、越中守與方本源院樣死去之刻、爲御名代賴母殿寺へ御詰被成候を覺居申候と、物語致候事、

一同名平八、御使者に罷出候刻、我等町宅へ立寄咄申候、今朝藤兵衛殿、其外御側衆被申聞候は、不殘被爲拜領候事も可有之候、殘三人樣にも其御用意有之候樣に相聞候、俄になり兼可申候間、そろ〳〵刀屋共に申付候て、金二三枚の札付の道具など取寄、吟味仕置事、刀屋共に密に申付候ても、世上多分公義の御用の樣に沙汰可仕候間、私は不可然存候、私弟氏家平吉、同名五郎兵衛、傳右衛門參居申候間、私共四人分は著替を差上、御用に立可申候、就中傳右衛門儀は、常々道具好にて、良き道具とも持居申候、乍慮外各樣にも左樣可思召と申候へは、兎角之返答も無之候、いかゝ存候哉と

申聞候に付、扨々夫は能被申候、何かと平生申候、箇樣之時節あくみ行當り申さぬ覺悟、常々互に申事に候、扨も〳〵能被申候とほめ申候、我等事折節正利の刀拵させ、取寄目釘を打申候處にて、右之咄平八申聞候故、幸如此出來參候、三枚之札も有之候、是は內藏之助に可被爲拜領候、中心の象眼に有之ことく、御自分に賴候て、生けさを落し、きれいなる出來にて候、箇樣之時節に進之、內藏之助なとへ被爲拜領候へは、日本之神、武士之本意に叶たると存候由申候へは、平八も同意とて悅申候、其後橫山五郎太夫被申候は、右之通平八被申候を一座にて承候、能被申候と被申候に付、我等申候は、平八中々左樣之思寄なと、申兼候者にて無之と笑申候、就夫昔之事を風と存出し候、長谷川故仁左衛門は、度々武功有之仁にて、直江山城守與力にも成候て、働き有之と承及候、妙解院樣御代、八百石にて被召出、御目見被仕候時分、(終)折節京都より、御伽之入道共も、御前に居申候由、右仁左衛門はかたの如く不男にて候を、我等も幼少之時分にて能覺居申候、右御伽に下り居申候京都之者共に、

御意被成候は、唯今罷出候侍は、いかゞ存候哉と御尋之時、何れも申候は、男ぶりは乍憚下々仕候ては召抱申者は有御座候間敷候、定て能ふしにて可有御座候と申上候へは、御機嫌にて、八百石可被下と御約束被遊候へとも、千石被爲拜領候と成る儀に成申候と、亡父毎被申候事、

一二月二日、番代り參、早速罷出候へは、内藏之助被申候は、先頃は内記樣御出被遊、何れも御覽被成、難有仕合に候と、手を付候て被申候、扨は左樣に御座候や、とく罷出被申度被存候へ共、付居候者共兎角と仕、致延引候、如御覽若年に御座候へとも、大ちやくなる生つきにて、當正月初て年始之御禮に被致登城候節、足袋の紐とけ申候に付、兼て心安出入仕候御城坊主に結はせ被申候、其節供に參候奥村安左衛門と申者承り、輕き者とても御城坊主之儀に御座候へは、重ては些遠慮被仕候樣にと申候へは、いや〳〵輕き者共に申付候へは、結句悦申候と被申候由、何も承候て笑申候と咄候へは、扨々乍憚御大家樣へ御生つき被遊候とて、皆々感し奉り候と被申候、内藏之助挨拶に、内記樣被遊御覽候とは、尤成被申樣、次之間の衆々同前

殊の外御感に預候由承及候、其時拜領被仕候哉、拜領之馬とて、黒栗毛白き星有之候馬、幼少之時分見覺居申候、刀脇差馬共に、武士たる者の嗜にて候へとも、あしく心得候へは、博勞取賣なとの樣成る儀に成申候と、亡父毎被申候事、

一二月二日、番代り參、早速罷出候へは、内藏之助被申候は、先頃は内記樣御出被遊、何れも御覽被成、難有仕合に候と、手を付候て被申候、扨は左樣に御座候や、とく罷出被申度被存候へ共、付居候者共兎角と仕、致延引候、如御覽若年に御座候へとも、大ちやくなる生つきにて、當正月初て年始之御禮に被致登城候節、足袋の紐とけ申候に付、兼て心安出入仕候御城坊主に結はせ被申候、其節供に參候奥村安左衛門と申者承り、輕き者とても御城坊主之儀に御座候へは、重ては些遠慮被仕候樣にと申候へは、いや〳〵輕き者共に申付候へは、結句悦申候と被申候由、何も承候て笑申候と咄候へは、扨々乍憚御大家樣へ御生つき被遊候とて、皆々感し奉り候と被申候、内藏之助挨拶に、内記樣被遊御覽候とは、尤成被申樣、次之間の衆々同前

にて、詞のおやまても、吟味被仕候と感申事に候、右之御足袋の紐御結はせ被成候事、後に上御屋敷にて、野田小三郎被咄候へは、初て聞被申候、萬事御附の衆中善惡共外樣には、咄申さぬ事可有之候へとも、箇樣之儀は、何れもへ承せ、奉悦せ度候事、

一二月二日夜九つ半過の頃、上之間へ罷出候へは、内藏之助、惣右衛門　十郎左衛門三人、中かさにて酒飲居被申候、忠左衛門、久太夫、十内、彌兵衛は下戸にて甘ミ、それを猪口にて飲居被申候へは、傳右衛門殿是へと呼被申候に付、能い所へ參候と申候へは、十郎左衛門其盃を、内藏之助、傳右衛門殿へさゝれ候へと被申候故、十郎左衛門さし被申、拙者も給申候へは、内藏之助是へ被下候へと被申候故、是は慮外と申候へは、是非と被申、盃さし、其れを拙者へ返し被申、又給申候時、内藏之助被申候は、十郎左衛門へ、一つ御のませ候へと被申候に付、直に指候へは、一盃飲被申、又一つと申候へは、先刻より殊外給申候間、御ゆるし候へと座を立被申候、内藏之助被申候は、十郎左衛門は總體能給申候間、御とらへ御飲せ被成候へ〳〵被申候故、樣際へ追懸引留、是非と申候へは、誓言にて候、給醉申候間、御免しと有之候故、其通りにてしひ不申候、後に考候へは、右之樣子暇乞の心にても可有之候、世上の批判も能く、とかく御赦免可被成候なと、申候故、曾て切腹の心付は無く其内にも内藏之助、又は物頭分は、遠島にても可被仰付候やなと、申たる事に候、正月中は御祝多、いつれも江戸功者故、二月朔日過候へは、被仰付樣の趣尋被申候、只今存當り候事のみ多く、一入殘念に存候事、

一二月三日夜四過頃、吉弘嘉左衛門、拙者當番にて詰居申候處に、長瀬助之進出被申、只今上御屋敷より、如斯手紙參候、明朝は花を兩座へ御出被成筈申來候、明朝茶道可仕候、我等兩人能挨拶いたし、花を出し候へと被申候故、御懇の儀共忝り可被申と申候處に、次之間の衆より、坊主を以何れも臥り不申候、御聲と承候、是へ御出被下候へと被申候故、助之進は我等え出候へと被申候に付、其儘出申候處に、大かたは寢所へ居被申、助右衛門清左

衛門なと、若き衆中色々咄共にて、頓て埒明可申候、御暇乞に、藝の盡しの程、懸御目可申とて、御番衆の見申さぬやうに、枕屏風の蔭にて、堺町木挽町踊狂言の眞似を被仕、そろ〳〵さわき被申候、脇に奥田孫太夫、潮田又之丞、御ゆるし被成候へとて臥被居候、又之丞被申候は、とかくあの樣に騒き申候間、頓て埒は明可申候へとも、先明日は内藏之助に申候て、手錠をおろさせ可申と笑ひ被申候、拙者存候は、助之進も跡より見可被申哉と存候て、最早夜も更申候、孫太夫殿も、御迷惑にて可有御座候、最早御休被成候へと申候へは、是非共に今暫と被申候へとも罷立申候、今存候へは誠に暇乞に成り別て殘念に存候事、

一翌四日の朝、花を出し候へは、何れも忝り被申候、飯後に林兵介代りに參候故、拙者は何心なく代り相引取申候、四日には太守樣御入被遊沙汰前夜より有之、依て何れも衣類改居被申候、次之間に出候へは、十郎左衛門被申候は、今日は御代り被成候由、重て御越被成候砌迄はいかゝ、多分其内埒仕にて可有御座候、何れも樣此間の御懇難申盡存候、

就中傳右衛門殿、何れも御心易存居申候、とても の事に、御詰内に埒明申樣に、願申事に候と被申候に付、拙者も何の氣も不付、被仰出前以承申にて可有御座候間、詰前にて無御座候共、罷越候て可得御意候と申候て罷立、詰所に參候へは、關惣左衛門も參居申、何とやらん急に歸候心もなく咄居申候處に、堀尾萬右衛門被參候て被申候は、我等へは其儘逗留にて咄候樣にと被申候に付、私宿へは同名喜左衛門罷越、逗留致居申候故歸り可申候、こなたは何とやら、各樣がおそろしく候と、雜談なと申候て立申候、四日には代あひにて歸候儀と、同名平八は兼て存居、其日は平八方へ他客も有之、精進日を能存候故、是非立寄候へと、約束いたし置候事を存出し、數寄屋橋邊にて、御借馬の仲間に時を尋候へは、九ツ半過と申候故、夕飯時分もと存候て、小姓弁に挾箱は町宅へ直に返し、鑓斗にて數寄屋橋御門内へ乘込候へは、向より平野丹右衛門羽織着、馬に乘參候にあひ、樣子尋申候へは、追付芝え上使有之候と申候故、早速草履取を町宅へ遣し、小姓挾箱持なと參候へと申遣し、丹右衛門

と致同道、丹右衛門は愛宕廣丁通參候、拙者は近道日影丁參り、增上寺門前通にて、堀七郎兵衛に逢ひ上使有之故、御用に付參り候とて立別れ、夫より新堀にて鎌田軍之助に追付申、些用事御座候迚乘通り、目黒御門番に馬を預、其儘裏玄關に上り候へは、何れも麻上下着用に付、同名喜左衛門方へ麻上下取に遣、着用仕候てより、丹右衛門なと追々參申候、夫に付兼ても申候樣に、武藝の内にても、馬は生ものにて候、乘手をよく存候、兵法鑓は心の働にて候故、大體に有之候てもよく有之候、當時馬少き時節故、稽古成兼可申候へとも、心懸候はゝ成可申儀と、亡父も度々申候、上手に成候ても武藝の名高き武士は、昔は嫌ひ申候、心懸有之事肝要と存候

但拙者今朝代り歸候處、其儘出候はゝ、何れも不審に可被存と、指控のそき候て見申候、總體諸人の顔色、其外の樣子共、何共合點不被仕樣子にて、御料理給被申内にも、互に見合、早く仕廻度との樣子に見え申候、いつれも給仕廻被申候て、八木市太夫罷出、上使にて御座候間、麻上下御着

用可然と申候て、黒羽二重小袖、淺黄無垢二宛、拙者は麻上下、上帶、足袋出申候、我等も罷出、十郎左衛門助右衛門なとには、袴の腰を當遣候事、

一内藏之助被申候は、傳右衛門殿、もし花は御取入被成間敷哉と被申候、依之花は自身に取入申候、扨十七人衆、上の間に次第のことく着座有之候事、

一上使御使番久永内記樣、御目附荒木十左衛門樣、御通り被成候、御跡より此方御側衆なと、段々次第のことく罷出被申候、拙者も唐紙越に承候、上使の趣は、淺野内匠頭儀、勅使御馳走之御用被仰付置候處に、時分柄殿中をも不憚の仕形に付、御仕置被仰付、吉良上野介儀、無御構被差置候處に、主人の讎を報候と申立、内匠頭家來四十六人致徒黨、上野介宅へ押込、飛道具なと持參、上野介を討取候始末、

公儀を不恐の段、重疊不屆に候、依之切腹申付る者也と、十七人の名字共、一々御よみ被成候、内藏之助御請に、いか樣に可被仰付も難計奉存候處に、すべ能切腹被仰付候段、難有仕合奉存候と申候、又十左衛門樣なと何か被仰候やうに有之、内藏之助も御返答被申候樣に聞え候へとも、

譯はとくと不承候、總體内藏之助は、小譯なる人にて候、其後助右衛門側に指寄申候へは、右の譯を被申聞候、助右衛門所に書付置候事、

一上使御立以後、我等も其儘可罷出と存候處に、宮村圖之進被罷出候て、内藏之助を呼立、何か暫被申候、堀部彌兵衛は、長瀬助之進呼立、是も右の通にて候、定而御意の趣有之事と存候、圖之進、助之進被立候跡にて、上の間に出候へは、内藏之助上之間に被參候て、扨々難有仕合、御意の趣可申候間、何れも御寄候へと被申、老人衆被申候、其譯は何も分り不申候へ共、内藏之助落涙の體にて、段々有難事共と被申候、事は聞え不申候事、

但右の樣子、外に見申たる衆も無之、其後江村節齋に逢咄候へは、逢御聽被申候へは、何とも不被遊御意、いかにも左樣に可有之との御意と申候、

一御酒土器銘々に出申候、心易咄申候衆には盃所望仕候事、

一鎌田軍之助長瀬助之進我等へ被申候は、心安衆有之候て若介錯を賴被申候事も可有之候、仁柄極書付御目附衆へ出申候、其心得仕候樣にと被申候、

然共箇樣の事賴被申候事無之候事、

一同名平八に申談候は、何そ書置度被存候衆も可有之候、いかゞと申候へは、御目附衆へ尋申候へは不苦候、料紙御出し候へ、不及申御内見にて、御屆候へと被仰候故、料紙硯坊主衆へ持せ、堀七郎兵衛罷出、御目附衆へ相伺、少も不苦候、何そ御認度儀も候はゝ、御認被成候樣にと、内藏之助に向ひ被申候、其時内藏之助何も認可申事も無之、重疊忝と被申候故、七郎兵衛引取申候、扨者も内藏之助に、右の通申候へは、七郎兵衛殿にも申候通にて、此間は段々御馳走難有仕合、難申盡候と被申候に付、耳本にて申候は、此方御心安思召被下私事に御座候間、御口上にても被仰聞度儀御座候はゝ、承度と申候へは、扨々忝存候、此夏の頃は、定て御供にて此元御立可被成候、内々御咄申候樣に、八幡を御通被成候砌、御非番にて御座候はゝ、大西坊へ御立寄、今日の被仰渡、天氣もよく、箇樣〳〵と御咄被下候へ、次男共方へ通し申事に候、我等申候は、得貴意申候、當番たりとも、傍輩共申合せ、立寄可申候間、御心易思召候へと申候へは、悦被

申候、前以内藏之助被申候は、大西坊は八幡山に居申候、是は譯も御座候間、拙者家より段々繼來候、唯今の大西坊は、實は從弟にて御座候へ共、公義は私甥と申上候由被申候事、

一吉田忠左衛門は、内々御咄申候伊藤十郎太夫と、御心安御語被下候へと被申候事、

一惣右衛門は、大きに封したる狀を指出被申、内海道億へ内藏之助より之上書也、

一源五右衛門は、内々御咄申候朱柄の鑓、泉岳寺へ殘置候、是は先祖備前と申者鑄にて候、生殘たるもの共へ遣度、賴被申候に付、其夜林兵助、泉岳寺へ被遣候に付、咄申候へは、兼て兵助も、右の趣は存知居申候事、

一久太夫は、近頃憚成る申事に候へとも、此度腹中惡しく御座候處に快罷成候、萬一麁末成儀も可有御座候間、承置呉候樣にと被申候、扨々被入御念候儀共少も御氣遣被成間敷候、慥に承置候と申候へは、悦ひ申され候事、

一十内笑ひ被申聞候は、私妻の歌、此間惣右衛門に御書せ被成候と承申候、今日之樣子、京都弓削太郎衛門殿迄被仰遣候へは即刻通し可申候〳〵被申候に付、太郎右衛門は心易者にて候、早々可申遣と申候へは、悦被申候事、

一喜兵衛は、何ともものは不被申、笑ひ〳〵指出し辭世の歌と書付給候事、歌は前條之内に書付あり、

一十郎左衛門は此間別て御心易被仰聞忝存候、老母兄弟共事被附御心被下候へと被申候、御袋樣をも、私母と奉存候と申候へは、悦ひ被申候事、

一彌兵衛は内々御咄申候樣に、同名共之丞に御酒を給申候樣に、御下着の上、御咄可被下と、笑ひ〳〵被申候事、

一勘六は、如御存此間手を痛居申候處に、外科本道衆まて御付置被下、御懇意の仕合故、昨日迄に快成候て、箇樣の事誠に難有儀と奉存候、長福寺にて文良に御傳被下候へと被申候故、得貴意候と申候事、

一助右衛門は唯今御聞被成候通、十左衛門樣内藏之助へ御挨拶被成候は、今日吉良左兵衛事、今度之仕形不屆に思召候故、領知被召上、諏訪安藝守樣へ被成御預候、此儀我等心得にて、御噺被成との事にて、扨々本望奉存候、乍此上老母事被附御心被

下候へと被申候故、得貴意候と申候へは、辭世と戒名も少前に書付遣被申候、

春帆獨讀　富森助右衛門

四日は姉の忌日なれば
先立し人もありけり今日の日を終の旅路のおもひ出にして

一巻紙に書付置候故不具候、其後助右衛門旦那寺、淺草の長延寺へ致參詣申候へば、位牌有之、戒名黒塗に金粉にて書付有之、日付とては可有之樣もなく、助右衛門存生の內節々參詣被仕、とくより調置被申候由、住持咄被仕候、

但書狀之書付、在所は播州加西郡北條に而、渡邊與右衛門と申者にて御座候、同國加子川本陳、中屋與右衛門に被仰付候へは、北條村へ早速相達申候、道のり加子川より五里程御座候、

一潮田又之丞も、辭世又は通し申所を書付、少前に遣被申候、播州加西郡北條村、同國加子川本陳、中屋與右衛門所に賴候へは、北條村へ卽刻通し申事に候、加子川より北條へ五里有之候、我等下着候はゝ、直に可申聞候、其內造成便も候はゝ可申遣候、

武士の道とはかりを一筋におもひ立ぬる死出の旅路に

一早水藤左衛門は、御家に前廉居被申候早水助兵衛、亡父と別て咄覺居申候、御眼被成候刻、古町の光明寺右助兵衛聟故、彼寺へ引取居候事覺居申候に付、熊本光明寺と申寺は、御存被成候哉と被申候、知人にては無御座候へとも、承り及居申候と申候へは、辭世を書て給候、

地水火風空のうちより出し身のたとりて歸る本のすみかに、

一赤埴源藏は、此間より如御存、小猪出來いたし、致難儀候へとも、御懇にて本道外科衆御附被成候故昨日より快、今日　上意にて切腹仕候段、本望奉存候、此旨土屋相摸守樣御內、本間安兵衛と申者に御通被下候へと被申候、相摸守樣に、今枝彌右衛門と申者、御取次相勤居申候は、我等緣者のものにて、其方へ相賴、早速知らせ遣し候、

一奥田孫太夫は、內々御咄申候樣に、一類共へ御咄被下候へと被申候、少前に若き衆と咄居被申候、

傳右衛門殿私は切腹の仕樣不存候、いかゝ仕ものにて候哉と被申候、我等々終に見申たる事も無之候、三方に小脇差出候樣に承候、肩衣を御拔不被成內か、兎角なとゝ申內に、助右衛門其外若き衆、扨々不入稽古、いか樣にも不苦事、唯首を受討れたるか能可有之なと被申談申候、夫故色々遲速、或は首を受て居被申候衆も有之たると後に承り候、林兵助、村井源兵衛、拙者三人は、御座敷の內に居申候、何れもへ挨拶なと仕候に付、切腹の場へ出不申候、十七人衆いつれも、茶たはこなと給咄被申常に少しも替り不申、其等之事なから感入たる事、

一五郎右衛門は、內々御咄申候樣に刀を打折申候て、相手の刀を取候て差居申候、一類共いな事と可存候間、御咄申置候間、御通し可被下候と被申候に付、少も被懸御意間敷候、委細に通可申と及挨拶候、御町奉行松前伊豆守樣御與力に吉川藤次郎と申仁有之候、右藤次郎は、五郎右衛門伯父にて、尋參候て具に咄申候へは、悅にて候、五郎右衛門子息作十郎は、御旗本衆之內に內緣有之幼少故參被申候事、

一瀨左衛門は、大石無人子息鄕右衛門父子へ、今日の首尾を御通し被下候樣に被申候、近日參咄可申と申候、其後津輕越中守樣御屋敷へ參候て、無人と鄕右衛門三平父子三人へ知人に成り咄申候事、

一右十七人座配、次第のごとく、一番に內藏之助殿、御出候へと、吉弘嘉左衛門、八木市太夫兩人にて呼立、切腹場に伴ひ申候、內藏之助殿と呼候時、潮田盛を懸、內藏之助殿、何れも追參可申と被申候事、

一右之通段々に罷出被申候、嘉左衛門、市太夫、內藏之助殿首尾よく御仕廻被成候、忠左衛門殿首尾好御仕廻被成候と、每度申候に付、拙者指圖いたし候は、首尾好との事を不被申候共、唯名計御呼立可然候、介錯人も次第のごとく、待被居候故と申候へは、氏家平吉承り、尤に存候、あの衆の首尾能はいらぬものとて、わらひ被申候事、

一十七人衆切腹相濟申候場所は、芝御屋敷大書院御舞臺脇、御手水石の向にて、御小書院より御出被遊、御大書院之間、御唐紙に御立被遊御覽候、扨後

に御座敷清め申ため、眞藏院へ御奉行所より申參候へとも、不及其儀候、尤達　御聽候得は夫に及事に不被思召上候、其儘召置き候へ、十七人の勇士は、御屋敷の能守神と被思召上候との御意にて候、草葉の蔭にても、何れも難有可被存候と感涙を流さぬ者無之候、殘る御三人樣にては、清め申候由、伯耆守樣などは、疊の表かへ、腰張唐紙にて御張替被成たるとの儀に候、大目附にて候へは、定て格別の思召寄も可有之候、其以後江戸中も沙汰廣く、奉譽たると承及候事、

一夜に入候て、忠左衛門殿、藤兵衛殿、皆共へ被申候は、十七人衆の衣類はな紙袋、何そ書付たる物なと、夫々致吟味改候て、若不審成物も御座候はゝ、此方へ見せ候へとの事に候、林兵助は、泉岳寺へ參候、村井源兵衛、吉弘嘉左衛門、八木市太夫拙者抔改、夫々に長持に入泉岳寺へ遣申候事、

一内藏之助著込、留理紺の段子、小手も同前、股引くさり入、源五右衛門、十郎左衛門、共に同樣にて、十郎左衛門衣類之内に、布の香袋のやうなる物有之候、匂ひなともなく、いな事と存候處に、後に清休寺の住持に咄申候へは、夫は血脈にて可有之候、存生の中、遠方へやかて參候、何方にて果可申も知不申迚、被致所望候事、

一十内著込は、具足の樣に、くさり布の兩面、中かたのどんす、紋を鼠色に染、總體ケサンくさりにて七ツ、殊の外重く、中男より大く、力もつよく有之たると承申候事、

一いつれも不殘白布細くくけ、内にはくさり入たる手繰にて、衣類を結候て、銘々名札付居申候事、

一甲頭巾上を黒革にて包、白革にて緣を取、鞠付居候、内藏之助は、表に良雄と名乘有之候、忍の緒は、大かた紅のしらへにて有之候事、

一右念を入改候樣にとの事に候へとも、及落涙、委しく見え不申候、いつれも必死の覺悟故、むさとしたる物を入置可被申樣も無之候、浴衣十七有之候、

但右之通仕廻、御夜食頂戴仕候へとも、食氣も無之、湯漬なといたし給、九ツ過町宅へ歸申候、

一二月六日上御屋敷へ御侍中不殘被召寄御直に被仰渡候は、今度御預りに付、何れも骨を折候、此屋敷に居候者共も、御番等も繁く同前に候、扨十七人の勇士共事は、定て　上にも色々と被思召候故、五十日程間も有之候、か樣に被仰聞候も何とやらん上を御憚被遊候事、いかゞに被思召上候へ共、定て權現樣以來の御仕置と被思召切腹被仰付たると被思召上候、尤他所の者も尋申候節、不存と可申樣は無之候へとも、揃たる勇士共に思召候へば、善惡可有之とも不被思召上候、能々了簡仕候て咄なとも可仕との御意にて候、いか樣勇士共と、三度まて御意被遊候儀、誠皆共迄も難有草葉の陰にてもさこそ難有おもひ可被申と、及落涙候事、

一二月九日、江村節齋被參候而被申候は、扨今朝も於　御前御相伴被仰付候、一七日は御精進被遊候由、御意被遊候は、三人の者人共、定て此咄計にて殘念かり可申候、いかゞと御意被遊候に付、申上候は、晝夜共寄合、此咄より外無御座候と申上候へは、傳右衛門別て心安いたし候もの多く、たぶん寺參なと可致と被思召上候、今程は傳右衛門志にて參詣候ても、泉岳寺の出家共御名代と可奉存候、左樣之沙汰有之候ては、　公義へ對し不可然儀に被思召上候間、見合候樣にとの儀に付、可申聞たために參候と被申候、拙者申候は扨は左樣に被思召上候哉奉畏候、明十日は一七日に相當申候間、何とそ窺にて成とゝと存居候處に、今日御意の趣を承候事、誠に仕合成儀と申候へは、此御意の咄は、兵助、源兵衛にも申聞ましく候、傳右衛門はと計御意にて候間、其心得いたし申候へと被申候事、右之趣はおもひ出し〳〵調候故、前後は可有之候へとも、譯は相違無之候、尤憑悟仕候ての義に候へは、他家の御屋敷幷寺又は町家共に、十七人衆存生之内、通し申所多く候、從　公義御預り被成候衆中の事故、拙者あの衆に懇にいたしたる事、萬一後御吟味に逢可申儀も有之、太守樣御越度に成らせられさる樣にと、專ら心を付、若もの事も候はゝ指出可申と、如此の口上書を調、致懷中居申候、

紙面左之通、

越中守儀、兼而奉重　公義、每度參勤之節は、國許にて、御當地江發足仕而は、當屋敷に而、上下の侍共不殘呼出、直に申聞候は、　公義御代々御重恩、就中越中守は幼少より大國を御預被置、家中之者上下共に妻子相育申候、　公義之御恩と奉存候樣に、道中船中在江戸共に、御

法度之趣堅相守候樣に、常々申付候故、今度御預り之儀は、別而入念候樣にと、家老共に度々申渡候、然處に私心底には、無雙の忠臣共と奉存、何れも存生之内、毋兄弟息災成る事知せ申度、在所承候へは、中々不申聞候故、一越中守爲にならぬ儀は、可被申聞樣も無之候、私之爲いかゝと被存儀は、毛頭遠慮被仕間敷候、日本の大小神祇を奉懸身命を惜み不申承度と、切々申候故、何も歎委細咄被申、承候而、いかにも通し申候、御吟味にて、唯今罷出候へと、兼て越中守念を入申儀を背き申たると奉存候へは、私儀は不忠罷成候、此段不及是非奉存候、此外別に申上候儀、少も無御座候、以上、

右之通申上、果可申樣悟にて候、今度喜左衞門御使に被參、逗留被仕候へ共、喜左衞門は、御役勤居被申候故、右之趣委細に可申樣も無之候、荒增は二十一日に立申候に付、初て申聞候而、下著之上咄可被申候事、

日の本の名まて揚ぬる武士の親とやいはん四

十六人　おかしく候

未二月二十九日　堀内傳右衞門

堀内勝助殿へ

一逗留之中、津輕越中守樣御内大石無人、本田中務樣御内伊藤十郎太夫えも參逢申候、松平與右衞門樣御内内藤萬右衞門、磯貝十郎左衞門母貞柳と一所に被居申候、貞柳も十郎左衞門死後病氣指重り、五月二十六日果被申候、病中にも見廻申候、富森助右衞門母義は、助右衞門舍弟半左衞門、初は麹町に居被申候、後に增上寺裏ちり屋敷と申所に被居候、助右衞門旦那寺淺草長延寺、十郎左衞門旦那寺芝寺町清休寺、近松勘六甥文良被居候所は、谷中眞言宗長福寺、八丁堀松平伊豆守樣御組保生太夫近所、與力町に吉川藤次郎、同新兵衞、藤次郎儀は矢田五郎左衞門伯父に而、息作十郎、小瘡煩逢不申候、右之衆中、拙者方へも禮に被參候事、

一九月二十五日、御先立にて泉岳寺へ參、金子寺納いたし、出家三人同道にて、墓所へ參候事、

一十月十日、京都へ著致候處に、寺井玄溪被訊候て、音物なと有之、初て致對面候、拙者も返禮に參候、子息玄達も在宿にて、ゆる〳〵語申候、玄溪被申候は、於江戸内海道億にも御知人に御成候段、扨々御深志の儀、於拙者も忝存候、内藏之助存命の内、去

極月十八日、同二十四日、二月三日、書狀三通に委細申越候、死後の儀共、傳右衞殿御京著の上承候樣にとくれ〳〵申越候、越中守樣結構成被仰付、不及承御馳走共、誠以冥加至極難有、手紙述かたく御座候段、此上も不可有之と申越候、扨々難有儀、私式迄乍憚難有と被申、右内藏之助書狀とも見せ被申候、拙者申候は、不苦候はゝ此御狀は御寫被下候へと申候へは、安き事とて玄達寫給候、其紙面、

一筆令啓達候、兼而我々存念の通、今月十四日夜同志相催、吉良上野介殿屋敷へ致推入候、家來中出合候者は、薙切に討捨、如本意上野介殿討取、印を泉岳寺へ持參備仁君御影前候、春以來の散鬱憤候儀、太慶御察可被下候、貴丈にも御滿足と押計申候、定而先達而欣悅と、粗及御聞候と令推察候、御同名玄達老御登、可被相達候へとも、討入候次第、引取候樣子、玄達老も、委細御聞屆有之間敷候に付、荒增書付進候、皆共えも御預に罷成候條、暫之餘命と存候内、生涯覺無之、他にも不承及御馳走共、誠以冥加至極、難述筆紙仕合に御座候、追付罪品も可被仰付候と相待罷在候、段々の次第、武運にも叶候儀、本望此上不可有之候右爲可得御意、餘命の内如此認置候、恐惶謹言、

十二月二十四日　小野寺十内

原惣右衞門

大石内藏之助

寺井玄溪老參

追啓、此書付の次第、同志の者共眷屬の内、若も御仕置に洩而、殘候者御座候はゝ、速に被仰聞可被下候、播州龜山赤穗に有之者には、和田喜六より相達候樣に被仰達可被下候、將又寺坂吉右衞門儀、十四日の晩迄有之候處に、彼屋敷には不見來候、輕者の儀、不及是非候、以上、

追而一札之事、無相違以時節御あみ立所麁幾無他候、爲其如此書附達候、又々申候、此狀夫々御屆候はゝ、此筋より便有之との儀、面々沙汰不仕候樣に、被仰聞可被下候、

一筆令啓達候、兼而度々被仰聞候御内存之趣承屆、御尤之至、別而致感心候、然は今後一同に御下り之儀は、拙者を初、同志願立候衆、銘々にも申談候通、御下には不及儀と存候、御志を

破り候段、無本意可被思召候へとも、元來御勤方違の貴様儀候故、御同道仕候而は、此方より駈催候かと、萬一人口に可懸候段、互に無本意儀に候、勿論戰場え警役にて供奉之筈之儀に候、是は流石戰場にて無之候、然は御止り候儀却て道理當然と存候、御身命をいとひ候て、如此申にては神以無御座候、皆共いか様にも罷成候はゝ、跡にては定而世間取々毀譽可有之候、年月之寸志を能御存の貴様にて候間、其時相應之噂被成被下候儀第一之御芳志と賴存候、此段御聞屆、是非共に御止可被成候、奥野將監も此頃の上り に貴公御噂被申候、右同前に宜相心得、拙者より可申達と、吳々被申置候、猶惣右衛門。傳兵衛、源五右衛門、源四郎、十内等、面談可申述候、恐惶謹言、

傳吉川村傳兵衛、進藤源四郎、此時迄將監一列也、

八月六日　　大石内藏之助

寺井玄溪老

一玄溪宅は、京都柳馬場押小路上ル西側にて、内匠頭様に相勤居申候、内海道僊は、江戸住居にて、

宿下通り居被申候由候事、

一片岡源五右衛門妻子借宅は、伏見兩替丁筋銀座にて尋參候、妻之弟有之候に逢申候事、

一淀川船中より上り、八幡山大西坊に尋參候、本社之後に結構成住居座敷、チウタイの間の様成所も有之、段々馳走なと被致候、大西坊は二十斗と見え申候事、

一大坂天滿丁九丁目、苫屋次郎兵衛借宅、樋口杏庵と尋候へは、和田喜六も此所に居被申候故見廻申候、尤拙者旅宿へも被參候、是は浪人にて、原惣右衛門娘四人預り居被申候事、

一早水藤左衛門賴之、大坂町與力大森次郎兵衛と申仁、天滿與力屋敷に居被申候、潮田又之丞賴之狀も遣し申候事、

右之通候間、貴殿御奉公も相勤、若江戸罷越被申候節、此面々ゆかりと申候て、自然尋可被申事も可有之候、其時無音なと無之様にと書置候也

古城貞吉校

堀内傳右衛門覺書　終

御預人記錄

一元祿十五壬午年十二月十五日曉七時分、淺野内匠頭殿家來之浪人四十六人、吉良上野殿本所屋敷え押入、上野殿幷出合候家來討果之、不殘芝泉岳寺え引取罷在候、其内兩人、大目附仙石伯耆守様え參上、旨趣申上候事、

一右四十六人之内十七人、越中守綱利え御預被成候、此日例月、御禮登城之處、於　御城、御用番之御老中稻葉丹後守様、右十七人御預被成旨、被　仰渡候、

御城退出後、直に泉岳寺え罷越、請取可申旨、御請申達、左候而供之内藤崎作右衛門え申付、御預之十七人、仙石伯耆守様御指圖次第、於泉岳寺請取候筈に付、請取に指越候、人數駕籠等用意之儀申含、御城より早速上屋敷え指遣候事、

一御城退出後、稻葉丹後守様え越中守伺公、御用被仰付辱旨申達、直に芝下屋敷え罷越候、外之御老中方え、使者留守居を以右同斷申達候、

一請取人指出候儀、爲案内仙石伯耆守様え使者、以留守居於　御城御談申候通、請取人泉岳寺え可指越哉、御指圖次第、人數可指出段申達、請取に指出候家來名前書指出候處、於　御城被仰談候とは違、伯耆守様御宅にて御渡可被成候間、愛宕下御屋敷え人數可指越由、被仰聞候、

請取人支配人

旗家老

三宅藤兵衛　上下三十九人　鎌田軍之助　上下二十一人

小姓頭

平野九郎右衛門上下二十人　横山五郎太夫　上下二十人

請取人

留守居

堀内平内　上下十六人　留守居（爲使者罷越直ニ罷在候）　句坂平兵衛　上下十六人

警固人

物頭

原田十次郎　上下九人　牧七郎右衛門　上下九人

同

須佐美九太夫　上下九人　同　野田小三郎　上下九人

同	使番		
志方彌次兵衛 上下九人	富島猪兵衛 上下九人	同	同
使番			
堀内傳右衛門 上下九人	林 兵助 上下九人	同	同
池永善兵衛 上下九人	澤 莊兵衛 上下九人	同	同
小姓組	小姓組		
堀内五郎兵衛 上下九人	澤刑右衛門 上下八人	同	同
伴 儀兵衛 上下八人	竹田平太夫 上下八人	同	同
松浦儀右衛門 上下八人	氏家 平吉 上下八人	同	同
木原猪右衛門 上下八人	糸川政右衛門 上下八人	同	同
増田貞右衛門 上下八人	寺川助之允 上下八人	同	同
本庄喜助 上下八人	吉田孫四郎 上下八人	同	同
原田小右衛門 上下八人	塚本藤右衛門 上下八人	同	同
波々伯部權八 上下八人	石川源右衛門 上下八人	同	同
田中隼之助 上下八人	池部次郎助 上下八人	同	同
魚住惣右衛門 上下八人	横井儀右衛門 上下八人	同	同
宇野彌右衛門 上下八人	醫師本道 下村周伯 上下五人	同	同
外料			
岡田玄喜 上下五人	次物書一人	提灯裁料途中より注進寺	此内八人道具等裁料
歩使番四人	歩小姓二十人銘々連人宛	足輕六人	足輕百三十八人
足輕小頭六人		長柄之者六十二人	足輕小頭一人
荒仕子三人	此内駕舁長持共道具持之	家中之者六十一人	仲間百四十七人
用心駕籠五挺	提灯持之	提灯四十張	手木之者五人
棒七十本	駕籠十七挺		

大提灯二十張　長持二棹
惣人數八百七十五人

右伯耆守樣にて可被成御渡由に付、御近所之儀に候間、細川和泉守屋敷迄、人數寄置可申由申達置、和泉守屋敷へ、人數並駕籠等揃置、伯耆守樣へ留守居罷出候處、控居候樣御差圖に付、御門前に相控居候處、夜五時過、四十六人泉岳寺より伯耆守樣え參、御門內え御入れ被成、御楯置、暫時刻押移候而請取、兩人並駕籠十七挺、舁人斗御門內へ入候樣にと、御徒目付衆を以被仰聞候に付、家老用人も差越候に付、此者も入申度由、留守居より申達候へは、左候はゝ三人共可被罷通由に付、家老、用人、留守居、御門內に罷通、右之外請取人小姓頭二人、刀屬等入候長持支配之步使番二人、駕籠支配步小姓一人入之、家老用人留守居此三人御徒目付衆案內にて御玄關え上り相居候處、伯耆守樣並御徒目付水野小左衛門樣、鈴木源五右衛門樣御列座、家老用人留守居被召出、伯耆守樣より、請取人之儀、今日於御城被仰渡有之候に付、則御渡被成候間、受取可申由にて、御預十七人名付目錄を以、大石內藏之助初一人宛御呼出、十七人揃候上、御渡被成候旨被仰聞候に付、家老御請申上候、先御廣間に控居可申由にて、其席退出御廣間に控居候處、其內御預人え被仰渡有之御樣子にて、其內小姓頭より相斷、駕籠を御門內に入、御預人を兩人宛、御徒目付衆同道にて、御玄關より被出候を、小姓頭駕に立添、御預人え何となく改申に不及候得共、御法之儀之由致挨拶、懷中をも改、一人宛駕籠に乘せ、御門內に揃置、不殘受取候段、御徒目付衆え相達候上、御門〳〵より出、御門外に段々並之、揃候以後、留守居並先拂足輕四人、其次小姓頭、先拂足輕十一人、其次用人、左候ひて御預人乘候駕籠十七挺、但一挺騎馬二騎、步小姓二人、足輕十人宛附、大提灯一張、箱提灯二張宛、其跡御預人之道具入候長持二棹爲持之、支配人步使番並才料之足輕四人附之、跡乘小姓頭、惣抑家老、夜半過芝下屋敷へ着、座敷之上迄駕籠を舁入、小姓頭、留守居致介添、駕籠より出座敷、兩間分差置候、御預人名前左之通、

大石內藏之助　吉田忠左衛門

原　惣右衛門
間瀬久太夫
間　喜兵衛
堀部彌兵衛
富森助右衛門
早水藤左衛門
奥田孫太夫
大石瀬左衛門

一御預人受取候節夜、仙石伯耆守様より、御預人之發道具、御渡可被成候由申來候に付、早速請取人差出候處、鎗長刀十本半弓一張御渡被成候、

一御預人受取相濟、芝屋敷え無異儀着之段、松平美濃守様、御用番稻葉丹後守様、留守居を以御届仕、自身可相勤候得とも、今晩夜更候に付、以使者御届仕候段申達、仙石伯耆守様、水野小右衛門様、鈴木源五右衛門様えも御届之使者差出候、翌十六日、美濃守様、丹波守様、土屋相摸守様へ自身罷越、發御老中様えは使者差出候、

一越中守、前以芝屋敷え罷越居、卽夜御預人え致對面候事、

片岡源五左衛門
小野寺十内
磯貝十郎左衛門
近松勘六
潮田又之丞
赤埴源藏
矢田五郎左衛門

一卽夜より御預人え二汁五菜之料理、晝は菓子ともに出、酒は御用番様え相伺候上出候事、

一卽夜御預人え小袖二つ、宿衣一通宛、其後小袖一宛、翌年始に二宛、上帶下帶足袋迄遣、小袖等古成、又は損候得は、時々新遣、御仕置之節は、小袖二腋上下一具宛、上帶下帶足袋ともに遣候事、

一越中守、十五日十六日兩夜、芝屋敷え致逗留候、其後自身罷越居候に不及、家中計差置候様、土屋相摸守様より御差圖に付、折々日歸に罷越候事、

一翌十六日、御用番稻葉丹後守様え左之趣相伺候處、小書之通御返答御座候事、

一昨日私え御預被成候者共之儀に付、奉伺候覺、

一自然下屋敷近所火事之節は、風之方角次第、自分別屋敷え遣可申哉之事、

此書付之通、入念儀思召候、大罪人とは違可申候、當分御僉議之内御預之儀候間、其趣旨存申付候様、

一相煩候はゝ、手醫師に藥計用可申哉之事、

此通苦間敷候、

一少手具候者有之候、先手醫者之療治申付置候、

此以後如何可申付哉之事、

右同斷、

一櫛道具望候はゝ相渡、行水、髮さかゆき、爪等取候節、人を付置可申哉之事、

此通苦間敷や、髮さかやき、爪取候儀は、無用可仕候、

一楊枝望候はゝ相渡、たはこも給候様可申付哉之事、

此通苦間敷候、

一料紙硯望候はゝ、相渡可申哉之事、

右同斷、

一若親類緣者之方ゟ、書狀音物差越候はゝ、如何可申付哉之事、

書通は無用、依品苦間敷由、

以上

細川越中守使者
　句坂平兵衛

十二月十六日

右伺相濟候以後、御預人え火鉢、火燧、行水、風呂等申付候事、

一元祿十六年正月十六日、御用番小笠原佐渡守様え左之書付、留守居を以差出候處、御請取、卽晩留守居被召呼、御取次を以被仰聞候は、書付之趣、御同役方へも被仰談、入念儀思召候、はさみ、毛

覺

此書付通御聞届、入念思召候由、

堀部重藏
成田猪右衛門

實は右重藏弟に而御座候、他家養子に參り候に付、名字改申候、

右兩人之者、私家來に而御座候、今度御預被成候堀部彌兵衛と申者之又甥に而御座候、依之兩人共に遠慮申付置候、以上、

細川越中守使者
　句坂平兵衛

十二月十六日

右重藏、猪右衛門儀、遠慮申付置候處、御預人翌年御仕置被　仰付候以後、稻葉丹後守様え留守居を以相伺候處、勝手次第召仕候様、乍然當月之御用番様え相伺可然由、御取次を以被仰聞候に付、二月廿日直に御用番秋元但馬守様え參上相伺候處、被成御承知、少ゝ御構無之候間、前々之通召仕候様被仰聞候事、

一元祿十六年正月十六日、御用番小笠原佐渡守様え左之書付、留守居を以差出候處、御請取、卽晩留守居被召呼、御取次を以被仰聞候は、書付之趣、御同役方へも被仰談、入念儀思召候、はさみ、毛

抜之内、あふなく無之様いたし、何れも相渡候様、被仰聞候事、

細川越中守え御預被成候十七人之内、遥延候者も御座候而、食事之障に罷成申候間、はさみにてつまへ申度由申候、はさみの先丸に〆借可申哉、又は毛抜を相渡申候而も苦間敷哉、奉伺候、以上、

正月十二日　　細川越中守使者
　　堀内平八

一御預人、昼夜勤番、不寝番申付候役付、左之通、
　　族家老
不限昼夜見計出仕　坂崎忠左衛門
　　側用人
　　宮村圀之允
　　松野龜右衛門
　　藤崎作右衛門
　　小田原武兵衛
此内二人宛勤番　鎌田軍之助
　　長瀬助之進
　　堀尾萬右衛門
　　小姓頭
　　平野九郎右衛門
此内一人宛勤番　中瀬助五郎
　　横山五郎太夫
　　額田櫨之允
　　留守居
　　堀内平内
此内一人宛勤番　句坂平兵衛
　　堀七郎兵衛
　　新組之
　　組脇
此内一人宛御預人用　吉弘加左衛門
聞挨拶　八木市太夫
　　使番
　　堀内傳右衛門
此内一人宛御預人之　林兵助
用事取次挨拶　村井源兵衛
本道一人外料一人宛　醫師
此内より御預人差置候両　小姓組
間之内一間に四人宛勤番　中小姓

一外に二人宛様類に勤番　（中小姓部屋住　此内ゟ右同断上の間に四人下の間に三人宛）　歩小姓

一外に二人裏様類に勤番　一外に四人物入口に勤番

勤番之人刀嶋脱置候

此内二人宛裏様類に勤番　側足輕

此内ゟ大小用所両所一ヶ所に三人宛勤番　外様足輕

此内より御預人之宮仕相勤　長柄之者

此内ゟ一人宛御預人之薬煎人として相詰候　掃除坊主

此三人御預人入用之諸道具衣服食物請色共受込昼夜相詰候　歩小姓組脇三人

表門目黒門白銀門三所警固　物頭三人

右同断　歩使番三人

一御預人番之面々、御預人に對し不可致無禮、且今度之旨趣、其外不依何事、尋承間敷旨、堅申付候事、

一御預人差置候中、他所は一切、門内に一人も入不申、火用心精々入念候様申付候事、

一正月二十二日、稻葉丹波守様より留守居被召呼、御預人之親類縁者書付、親類は忌掛迄、縁者は聟、舅迄書出候様、尤堅紙に判を加差出候様、可申付旨被仰聞候に付、御預人十七人江申渡、銘々書出候を、同二十六日、丹後守様江差出候、且又御預人子共年齢書、差出候様にとの事に付、左之通書付差出候事、

大石内藏之助子共

當未十六歳　大石主税

同二歳　大石大三郎

同五歳　娘一人

吉田忠左衛門子共

當未廿八歳　吉田澤右衛門

同廿三歳　娘一人

原惣右衛門子共

當未五歳　原重次郎

同十五歳　娘一人

片岡源五右衛門子共

當未十二歳　片岡新八

同六歳　娘一人

間瀬久太夫子共

同十三歳　大石吉千代

同十四歳　娘一人

同十七歳八幅　大西坊

同廿五歳　吉田傳右衛門

同十七歳　娘一人

同廿歳　娘一人

同十三歳　同一人

同九歳　片岡六之助

同四歳　同一人

當未廿三歳　同廿歳　間瀬定八
間瀬孫九郎　同廿二歳　娘
同廿二歳　娘
小野寺十内子共
當未廿八歳　小野寺幸右衛門
當未七歳　娘一人
堀部彌兵衛子共　同廿七歳
當未三十四歳　養子　堀部安兵衛　娘一人
富森助右衛門子共
當未二歳　富森長太郎
潮田又之丞子共
當未七歳　娘一人
奥田孫太夫子共　同十九歳
當未廿五歳　養子　奥田貞右衛門　娘一人
矢田五郎右衛門子共
當未九歳　矢田佐十郎
間　喜兵衛子共　同廿四歳
當未廿六歳　間　新六
間　十次郎　同十六歳
同三十歳　娘一人　同一人
以上

一二月四日、御老中樣御連名之御奉書、御徒衆を以被差越、如左、

御預被置候淺野內匠家來、御仕置被　仰出候に付、追付御目付荒木十右衛門、御使番久永內記可被差越候、其節御自分被出合不及、家來計可被差出候、以上、

二月四日　稻葉丹後守
秋元但馬守
小笠原佐渡守
土屋相摸守
阿部豐後守

細川越中守殿

右御請書狀、早速御使之御徒衆え相渡、御用番秋元但馬守樣え越中守罷越、幾御老中樣えは使者差出候、御預人御仕置之節、自身出合不及旨に候得共、卽刻芝屋敷へ相越候事、

一荒木十右衛門樣、久永內記樣、二月四日八時分、芝屋敷え御出有之、御小人目付衆十二人、御徒目付衆七人、一同御出有之候、介錯人柄之儀、御徒目付衆え相尋候處、越中守家來に被仰付筈之由被

申候に付、侍又は步行之者、何れに可仕哉と申達候得は、何れにても宜由に付、侍共勤候樣可仕段申達候事、

一十右衛門樣、內記樣、御預人差置候圍之內え御出有之、一人宛御呼出、大石內藏之助を座上として、何れも相揃候上、御書付御讀聞被成候處、內藏之助御請に、如何體にも可被仰付之處、切腹被仰付、難有仕合奉存候旨申上、不殘拜伏、扨又吉良左兵衛殿は、諏訪安藝守樣え御預被成候、何れも可爲本望と思召候、此儀被仰渡に而は無之御會釋、何れも緩々支度可仕旨被仰聞、【御兩人大書院え御引取有之候、御書付如左、

淺野內匠儀、
勅使御馳走之御用被・仰付置、其上時節柄殿中を不憚、不屆之仕形に付、御仕置被　仰付、吉良上野儀、無御構被差置候處、主人のあたを報候と申立、內匠家來四十六人致徒黨、上野宅え押込、飛道具抔持參、上野を討候儀、始末　公義を不恐候段不屆候、依之切腹申付者也
未二月四日

一御預人支度仕廻候時分、銚子盃出候得は、類々末期之盃仕、此間中取扱悉旨、謝禮申述候事、

一切腹之場所、大書院前之庭に、白布幕三方に張之、通筋には薄縁三枚通敷之、椽頬に御徒目付居被申候所は、毛氈敷之、椽頬之白洲御小人目付居被申候所は、薄縁を敷、切腹人之座所には疊三疊敷之、其上に木綿之大風呂敷をしき、十右衛門樣、內記樣、大書院椽頬之方に御座着之上、大石內藏之助を初一人宛、小姓組差添、介錯人【跡上】【下】跡に付罷出候、切腹人座に直り、介錯人左りに添直候時、三方に小脇差を乘、步使番【跡上】【下】持出、切腹人之前に置之、切腹人小脇差を取戴之、切腹仕、介錯濟候時、檢使之方に白屛風引廻、死體不相見樣に仕、敷置候風呂敷にて死體を包、取除之、疊敷替、一人宛右之通にて、七時分より七半時過迄に相濟候事、

一介錯人之書付、十右衛門樣、內記樣御望に付、左之通書付差出候、

介錯　安場一平　四十二歳　同雨森清太夫　四十二歳
大石內藏助　吉田忠左衛門
同增田貞右衛門　二十八歳　同二宮新右衛門　三十二歳

原 惣右衛門　片岡源五左衛門
同本庄彦助 二十八歳　同横井儀右衛門 二十九歳
間瀬久太夫　小野寺十内
同栗屋平右衛門 三十四歳　同吉富五左衛門 二十九歳
間　喜兵衛　磯貝十郎左衛門
同米良市右衛門 四十二歳　同横山作之允 二十九歳
堀部彌兵衛　近松勘六
同氏家平吉 二十四歳　同一宮源四郎 三十四歳
富森助右衛門　潮田又之丞
同魚住惣右衛門 四十二歳　同中村角太夫 三十三歳
早水藤左衛門　赤埴源蔵
同藤崎長左衛門 二十八歳　同竹田平太夫 三十六歳
奥田孫太夫　矢田五郎右衛門
同吉田孫四郎 二十八歳
大石瀬左衛門

一右相濟、檢使御引取以後、御用番秋元但馬守樣え自身罷越、殘る御老中樣えは、今晚夜に入候に付、使者留守居を以御屆仕、翌五日、自身罷越候、其節若御年寄樣并檢使御兩人、御預人御渡之大目付衆御列座之御目付樣えも、使者を以御屆仕候事、

一御預人死骸取置候儀、泉岳寺え申談、規度葬送之規式に無之、輕取置有之候樣申談候、寺社御奉行樣えは、泉岳寺より御屆仕候由、夜に入十七人死骸桶に入、乘物に乘せ、一挺箱提灯二宛燈之、步小姓一人、足輕四人宛附之、爲支配物頭一人、使番一人、小姓頭之組脇一人遣候、右爲取置料、卽夜金三十兩、爲茶湯金五十兩差遣、其外十七人之衣類、隨身之道具、此方より指遣候諸品共に、不殘泉岳寺え遣候、翌日墓所臺石一宛置之、廻り竹垣を結候儀申付候事

一吉良上野殿御息左兵衛殿は、諏訪安藝守樣え御預被成候、左兵衛殿は、實は上杉彈正大弼樣之御二男にて、上野殿之御實孫也、

一切腹人之子共、遠島流罪被　仰付候、十五歳以上之者、先島え被遣、其以下は及十五歳候上にて被遣候、其內親類に御預被成候女子妻子、諸親類緣者は御構無之由、被　仰渡候、御書付如左、

申渡候覺

父共儀、主人のあだを報候と申立、四十六人致徒黨、吉良上野宅え押込、飛道具なと持參、上野を討候始末、公義を不恐之段不屆に付、切腹申付、依之倅とも遠島申付者也、

內藏助二男
大石吉千代 十三歳
同　三男
同　大三郎 二歳
源五右衛門倅
片岡新六 十二歳
同人　二男
同　六之助 九歳
久太夫二男
間瀬定八 二十歳
忠左衛門二男
吉田傳內 二十五歳
惣右衛門倅
原　十次郎 五歳
助右衛門子
富森長太郎 二歳
數右衛門子
不破大五郎 二歳

（大岡越左衛門と申者之方へ養子に參候）
勘助子
中村忠三郎 十五歳
同人二男
同　勘次 五歳
岡右衛門子
木村惣十郎 九歳
岡右衛門子
大岡次郎四郎 九歳
和助子
茅野猪之吉 四歳
定右衛門子
奥田清十郎 二歳
八十右衛門子
岡島藤松 十歳
同人　二男
同　五郎助 七歳
喜兵衛二男
村松政右衛門 二十三歳

右文政八年酉二月二十三日寫畢而追考

御預之十七人ゟ書出候子共名前之內、終之遠島之名前書に不相見者、左之通、

内藏助子　八幡大西坊　當未十七歳
吉田澤右衛門　當未廿八歳
忠左衛門子　同　傳右衛門　同廿五歳
久太夫子　間瀬孫九郎　當未廿三歳
久太夫二男　間瀬定八　當未廿歳
十內子　小野寺幸右衛門　當未廿八歳
孫太夫子　奥田貞右衛門　當未廿五歳
五郎右衛門　矢田佐十郎　當未九歳
喜兵衛子　間　新六　當未廿四歳
喜兵衛子　間　十次郎　當未廿六歳

以上十人

御預之內に而無之、遠島之名前書に相見候者共、

數右衛門子　不破大五郎　二歳
勘助子　中村忠三郎　十五歳
勘助二男　中村勘次　五歳
岡右衛門子木村惣十郎　九歳
岡右衛門子大岡次郎四郎　九歳
和助子　茅野々猪之吉　四歳
定右衛門子　奥田清十郎　二歳
八十右衛門子　岡島藤松　十歳
八十右衛門二男　岡島五郎助　七歳
吉兵衛二男　村松政右衛門　二十三歳

以上十八

且亦十七人請取に被指越候節、足輕之人數小頭六人、足輕百三十八人、足輕六人、小頭一人と、口之書付に有之、小頭共都合百五十一人、然るに、伯耆守様より十七人請取引取候節之行列付に、先拂足輕四人、其次小姓頭、先拂足輕十一人、其次用人、左候而御預人乘候駕籠十七挺、但一挺騎馬弐騎、歩小姓二人、足輕十人宛附之と有之、十七挺に十人附候へは、百七十人也、足輕之人數不引合、其先にも才料之足輕四人附之と有之、指寄足輕三十八人不足也、書寫之誤歟、

宇野　東風校
古城貞吉　覆校

御預人之記錄　終

拾集昔語　一

一阿蘇大宮司公神孫御代々之事
一阿蘇四ヶ社四ヶ之神領と申事付健宮明神之事
一同神主公從前々天正中比迄之御領知之事
一同神主公從前々御家頼侍仁人之事
一永正之年中に阿蘇神主惟長公を菊池家之主將に菊池之侍取持候連判仁人之事
一阿蘇神主公中古以來天正之年中迄益城郡矢部へ被遊御住城候事、以後同神主惟豐公御名譽御高位之事、阿蘇之御家御寶物忩者拜見申候事
一益城郡御船古城根元之事
一同郡同城主甲斐宗運事
一甲斐宗運同郡之熊之庄合戰之事、同郡早川城主同所圓福寺渡邊氏討死之事
一甲斐宗運黒仁田氏を被討候事
一甲斐宗運同宗立飽田詫麻兩郡境丹花之瀨合戰之事
一相良氏阿蘇家之內益城郡豐田鄕之原まて發向之事
一甲佐松之尾城主伊津野氏討死之事、同豐田之城樣子之事
一甲斐宗運響之原へ出馬合戰相良氏を被討候事
一田代宗傳渡邊吉次首尾能事

△阿蘇大宮司公神孫御代々之事

一人皇一代目神武天皇を神倭磐余彦命と奉申候也
一神武天皇之太子人皇二代目綏靖天皇を神八井命と奉申候
一綏靖天皇之皇子健盤龍命と奉り申候阿蘇明神一之宮之御事也
一健盤龍之命の御子を速瓶玉ノ命と奉り申候
一速瓶玉命之御子を惟倉命と奉申候
一惟倉命より神主公御初代にて御座候
一阿蘇二の宮を阿蘇都媛と奉り申候草(クサベ)山(ヤマ)吉見明神之御事也

惟倉公(コレクラ)　成兼公(ナリカネ)　高正公(タカマサ)　高範公(タカノリ)
友則公(トモノリ)　友兼公(トモカネ)　惟兼公(コレカネ)　惟風公(コレカゼ)　利名公(トシナ)
頼高公(ヨリタカ)　成時公(ナリトキ)　則高公(ノリタカ)　惟敎公(コレノリ)　惟文公(コレフミ)
惟氏公(コレウヂ)　忠行公(タダユキ)　惟峰公(コレミネ)　友助公(トモスケ)　惟顯公(コレアキ)

惟保公　遠明公　宗延公　惟清公　友利公
友成公　友仲公　頼元公　惟助公　惟親公
惟信公　惟通公　惟満公　惟遠公　惟雅公
惟綱公　惟員公　惟行公　惟四公　惟貞公
友孝公　友賀公　友房公　惟俊公　惟宣公
資永公　惟泰公　惟次公　惟参公　惟景公
惟國公　惟直公　惟時公　惟澄公　惟村公
惟郷公　惟忠公　惟歳公　惟家公　惟衆公
惟長公　惟豊公　惟将公　惟前公　惟種公
惟光公　惟善公　友貞公　友隆公

右神武天皇より友隆公迄七十三代

△阿蘇四ヶ社四ヶ之神領と云事付健軍宮明神之事有増

一阿蘇明神、甲佐明神、健宮明神、郡之浦明神、是を四ヶ社と申候
一阿蘇三百五十町　南郷八十町
一甲佐三百五十町　堅志田八十町
一郡之浦三百五十町　網田八十町
一健宮三百五十町　津守八十町
是を阿蘇四ヶ之神領と申也

一健軍宮明神者阿蘇明神にて被成御座候阿蘇にて東にむき立給ふ事は王城鎮護のため健宮にて西に向て立せ給ふ事は異國しう來をのぞけたまはんとて東西右之通に跡をたれたまふなり

△阿蘇之神主公從前々天正中つ比迄之御領知之事

一宇土郡之内郡之浦三百五十町網田八十町
一詫麻郡之内健宮三百町
一飽田郡之内正保、深海、蠏江、國町、合四十五町
一玉名郡之内日置八町
一阿蘇南郷菅の尾小國總之數千町
一益城郡甲佐三百五十町、堅志田八十町、小川百二十町、鈎野四十五町、津守八十町、中山八町、海東八町、小熊野五十五町、祇用七十町、御船五百四十町、守山八町、木山三百五十町、熊無田之庄千町、小野百町、萩之尾十八、町豊福三百五十町、諸富千町、七半濟、早川十八町、津志田、田口、中山、吉田、在々合五十五町、豊田九十町、六ヶ百六十町、矢部四百貫分百四町、
一薩摩之國にて伊豆守一跡　一筑後國にて穂波郡

一豊後國にて井田、太宰、青野、山田、家中、坂田
一日向國にて鞍岡二町

右之通天正年中迄阿蘇神主公御領知にて御藏納其外そこ發城主其外家來之侍に被下候也

△阿蘇殿天正前三十年天正十四年比落去之砌迄之御家直參之侍仁人之事

大小名但荒増

甲斐大和守親宣　甲斐民部大輔親直入道宗運
甲斐相摸守親秀入道宗立　村上丹後守
柏治部大輔　仁田水長門守　迫参河守
關上總守　野尻豊後守　西越前守
西加賀守　惠良筑後守　東遠江守
上島彦八郎　小陣刑部少輔　南左近太夫
犬飼備後守　黒仁田豊後守　北美濃守
甲斐將監　早川越前守吉秀　早川越前守秀家
早川丹波守秀貞　渡邊右衛門太夫吉八
渡邊軍兵衛吉次　甲斐相摸守　甲斐能登守
甲斐志磨守　甲斐無躬　田上右近
中山若狹守　西左衛門尉　村上治部少輔
中村右衛門尉　伊津野參河守　伊津野山城守
木山備後守惟久　萬次九八千左衛門
田代宗傳　甲斐正遐　光永左右衛門尉
南坂梨右衛門尉　北坂梨内藏人　坂梨孫太郎
西源兵衛　甲斐右馬允　野尻忠左衛門
玉目丹後守　今村藏之助　高森伊豆守
北里加賀守　高森參河守　村山刑部少輔
市下山城守　竹崎與左衛門　二千石九郎左衛門
關右京太夫　長野藏之助　野原權五郎
下田左京太夫　竹原甚五右衛門　豊福丹後守
篠原藤次　小野武藏守　大野天進
早幸良治部　小屋野丹後守　中村忠五郎
小倉美濃守　小島五郎三郎　野中出雲守
今村隼人　阿蘇品下野守　瀬田彦三郎
井田長門守　三宮近江守　横田阿波守
藏原志磨守　三ケ島彌八郎　北里將監
湯浦九郎三郎　岩下增章　佐々原伊賀守
小境板章　柿野玄番允　目丸遠江守
草壁左衛門　菅彈正忠　鞍岡勘七
大野民部少輔　海東伊織　野邊左近

蘇生　主水正　中島　左馬允　中村　右近
中島　右近　砥用　出雲守　林　喜市郎
向山三郎左衛門　大山田源左衛門　釣野民部少輔
栗野　修理　山田金左衛門　原　常陸守
野邊　右近　海東　右馬允　山西　越前守
近見　隼人　久木野備後守　田代　半十郎
荒木次郎右衛門　郡浦五郎三郎　大矢野主馬介
栖本　櫨之進　松崎　兵太夫　井日向守
橋本　將監　高橋　帶刀　早楠　櫨五郎
大河　清太夫　廣瀨　豐前守　今村六郎次郎
阿蘇　山城守　品奈　六郎　伊津野十郎
舟津民部少輔　白石次郎太郎　光永　又四郎
島子　若狹守　光永　孫三郎　竹崎　安藝守
高森　伊豆守　村山右衛門尉　坂梨　又五郎
小陳　玄番允　光永　中務　北小左衛門尉
下城　采女正　石井　遠江守　野中　孫二郎
北里　安藝守　喜利子次郎太郎　三宮　源次郎
二太夫松次郎　井手三郎四郎　井手　孫二郎
中島　孫九郎　小島五郎次郎　小陳　伊豆守
竹原　下野守　今村　六郎　今村　空五郎

岩下　三郎　久家　太兵衛　瀨田　彥六
今村　新三郎　瀨田三郎四郎　原　二郎太郎
三ケ島彌八郎　横田新左衛門　今村四郎三郎
竹原民部少輔　鞍岡　八郎　石野　六郎
堀　左京進　猿　安藝守　久木野因幡守
田上三郎次郎　久木野　隼人　内野江兵庫頭
向山次郎衛門　三宮　近江守　大山田源左衛門
蒲生原次郎五郎　三宮　掃部　田上新左衛門
大山田新左衛門　阿随子助五郎　今村　新五郎
今村　三郎　今村　鹽市丸　大戸　孫太郎
倉原　犬坊丸　湯浦九郎三郎　今村太郎四郎
下田　山城守　原　常陸守　田上　甲斐守
光永三郎左衛門　荒木　若狹守　下田源左衛門
相良　主稅　脇川　備前守　瀨田　周防守
菅　彈正入道　高柳　又八　今村左馬之助
三宮　民部丞　井手　掃部　長野　出雲守
高吉　尾張守　高森　倍東　北里　參河守
北里左馬之介　北里　又介　村山　善五郎
山島　孫太郎　林　喜市郎　北里二郎左衛門
田代　半七　北里　大藏　下城　乘竹

下城　右近　下城　采女正　下城　九郎助
下城四郎兵衛　伊津野太兵衛　田上　備後守
田上　周防守　津々良隼人　甲斐　守昌
甲斐　親房　甲斐　親英　村上　丹後守
甲斐　宗運内　甲斐　伊勢守　同　武藏守
下山勘解由左衛門
栗林伊賀入道等與
緒方　喜藏　井芹　加賀守
早川越前守内　同氏　河内守
佐渡　大學　同　能登守
村山　家人　同　圖書　同　修理
滋淵　甚喜　同　大和
鹿末　安藝守
甲斐右馬允守昌内
北里　内　甲斐　帶刀　同　運天
北里與三兵衛
伊津野　内　江原　雲晴　伊津野四郎右衛門

右之又内御陣中に度々阿蘇殿之御用に罷立候故御目見へ御禮直之衆同前に申上候也

右書出候仁人は阿蘇之御家之侍達にて候

阿蘇之神主惟種公益城郡矢部之御所へ被遊御在館侯御善世之砌は遠近を不レ論每月朔日十五日之御禮に矢部に相勤をり申候旨申傳候矢部へ被レ遊二御在城一之分ケは後筆に書出べし

永正之年中に阿蘇神主惟長公を菊池之大將に取持可申との菊池家之仁人願之故に惟長公菊池へ被成御座候へ共不被成御滯留候其砌菊池家有名之面々連判之寫

一永正二乙丑之年十二月日城上總守賴峰
隈部式部少輔武治　赤星　彈正忠　重規
内空閑備前守重載　田島　右京進　重實
小森田安藝守能世　内田　遠江守　重國
長野　備前守運貞　立田　伊賀守　重雄
窪田　大和守爲宗　隈部和泉守宗直
鹿子木民部左衛門員治　御宇田上總守重直
長田　右衛門尉武秀　出田　刑部大輔重綱
立田　小太郎重治　城　大藏少輔敏峰
隈部　豐前守貞明　吉田　左衛門尉公世
北山城守　公村　隈部源兵衛守治
關部新左衛門尉朝家　内田　右京進重貞
小森田和泉守朝右　内空閑次郎左衛門朝貞

瀬田新左衛門尉惟夏　山北掃部助景直
臼間田又十郎武益　隈部彌十郎清平
赤星右京進惟清　竹崎忠左衛門惟忠
高倉圖書之助俊直　相良式部少輔朝長
吉田新十郎公棟　竹崎兵部進惟直
赤星飛驒守房繼　古閑山城守貞載
關將監公願　高橋薩摩守朝乘
若園源兵衛忠通　長野清左衛門尉運俊
阿佐古清左衛門尉能世　内空閑周防守朝誠
小森田加賀守高世　平山十郎太郎能世
隈部右馬助重門　合志藏人少輔隆峰
小山十郎三郎運貞　關部萬龍丸
小森田四郎兵衛運清　窪田式部丞重宗
山井丹後守賴直　赤星大藏少輔重直
隈部新兵衛賴夏　城彌七兵衛昌峰
御宇田山城守直貞　佐藤日向守重秀
鹿子木式部丞房員　内空閑神十郎運直
合志掃部助隆八　馬見塚藤左衛門盛秀
出田六郎貞峰　佐野伊豆守朝經
多比良出雲守朝道　右京進安滿
牧

△中古以來阿蘇之大宮司惟憲公迄益城之内矢部之内矢部に被遊御在館候に付色々之事

一益城郡之内矢部犬飼村に有之候古城を愛東寺之城と申候彼城は阿蘇之神主殿前々御築被成候城之由に候天正中つ比國中一同に令落去候其比迄は犬飼備前守と申仁阿蘇殿之御家臣にて御城代仕居被申候之由語傳候

一同町頭に有之候古城は岩尾之城と申候此城も前々阿蘇殿御座被成候御城の由に候此城も落去は右同前にて候阿蘇神主公は右に書出候通阿蘇明神之御神孫にて被成御座候神書にも肥後國を最初には阿蘇の國と申候と有之候由承候就夫阿蘇之明神を國

造之明神とも奉申候由語傳候然は神主殿御善世天正中つ比迄は彼岩尾之城番を黒仁田豐後守と申仁被二相勤一居候由に候其前廉は甲斐大和守親宣と申御家老御城番被致候由に候黒仁田氏分ケ候而滅亡被致候其跡は阿蘇家之御家老中替る〳〵被二相勤一候由に候彼岩尾之御城は御要心能城と御座候而從阿蘇被成御座候而中古より天正の年中迄惟種公も彼御地へ被成御座候夫故に御家老衆替る〳〵に御城番被勤候而神主公は彼御城邊に御陣之内とも濱の御殿とも濱の御所、濱之御屋形共申候所に被遊御在館候て被成御座候彼御城之近所に濱と申村も有之候然れ共御陣之内は其村之内にては無之候へ共矢部は海邊遠里にてはまと申事矢部にては珍言故御座處を右之通に申候由に候濱之町などゝ申來候事も左樣之由緒と語傳候如此之語傳益城にも然々無レ之候と見へ候惟種公迄右之通に彼所に被遊御在館被成御早世其儘其砌令二斷國一候ゆゑ彼城も天正中つ比致二落去一候彼御城には右之通に御城番被相勤居候而神主公を守護被申候由に候濱の御所へ神主殿被遊御安住岩尾之城は右之通に御座候ひつると乍レ恐たゞ今御花畑之通にて御座候半と奉存候右之城々落去後に當國を加藤主計頭清正公小西攝津守行長へ南北半國づゝ從二秀吉樣一被成御拜領候に矢部は小西行長領分に成候由然は右之愛東寺岩尾兩城番に從二行長一結城彌平次太田市兵衛と申侍頭兩人に與力之侍被二差添一被レ遣置候岩尾城には平人罷在候事不相成候而さたなしに其砌各愛東寺迄に被罷在候由語傳候右之侍頭兩人共に二千石取にて候右之通與力衆を手に付ケ御城番被召候由に候與力之侍衆は

五百石土橋掃部、三百石島澤市右衛門、三百石半地源右衛門、三百石中小路三右衛門、三百石速水七左衛門、同後藤三五兵衛、同田邊平左衛門、同横田勘左衛門、同加々山二郎作、同岡兵左衛門、同天木庄太夫、同小野田彌右衛門、同吉田木右衛門、

此通に城番之由に候然は小西氏滅亡以後從二家康樣一清正公に肥後之國をあさねて被レ爲二拜領一候砌右兩人之侍頭を清正公被レ成二御抱一候て城番頭は被成御替別條に被レ召仕候而城番には長尾豐前守

加藤萬兵衛と申御侍頭何れも知行三千石取にて彼兩頭被レ遣候而與力衆も同前に被成御抱候與力衆はやつば前々之通に被成御付置候然れ共其以後古城々々被成御立置候事從二天下樣一御禁制と被二仰出一古城々々山野或山畠と成果候清正公行長へ肥後被レ爲二拜領一候事清正公へ一國おさねて從二家康公樣一御拜領之分ヶ後筆に可書出候

一阿蘇之神主公は右に書出候通に御神孫にて殊更前々は御大名にて乍二其上一高位高官之御家に而御座候右に書出候前々の御領知を當分石積に致候はゝ三四十萬石も可有御座候然は神主殿御代々附に御座候惟豐公に其砌之帝從二後奈良院樣一御內裏御修理を被レ成二御勤一候而被成御獻上候樣にとの就二御勅定一右之通の御領內を被レ成二御勸進一金子に御おさね被成候て其比迄は海陸共に人心不可然候ゆゑ矢部に當分まても有來候天臺寺福王寺と申候彼福王寺其砌の住持法印に被レ成二御持せ一御獻上被成候而御修理被御調上候以之外被レ遊二御叡感一烏丸殿を勅使に矢部濱の御所へ被爲差下惟豐公に忝くも從二後奈良院樣一御勅筆被レ爲二御頂戴一惟豐公矢部に乍二御座有一從二二位之御位階被遊二御勅定一候綸旨口宣被遊二御頂戴一候御無類なる御事に候難有忝くも右之御勅筆綸旨口宣其外御公家衆より被レ爲レ進候御書愚老此前御病用に被召阿蘇友陸公樣へ伺公仕候砌被レ成二御免一身を淨め頂戴仕候而奉二蒸請一冥加之至天山難有奉存候箇樣之御事は阿蘇家頼之末孫々々に有之候共儀にては無之候大形に被存間敷候愚老儀は曾祖父渡邊吉久與に書出候通に永祿八乙丑年三月十二日熊之庄舞の原にて阿蘇殿御用合戰に被致討死家傳子同氏軍兵衛は愚老が祖父相良義陽の侍頭豐永藤時を討取阿蘇怨敵の井芹大將加賀守を討取此後筆に可書出候通に惟光公惟善公御兩殿の御母上樣に付添廻り御奉公を勤佐々成政公へ肥後國侍一揆を起したる砌も名譽なる後詰各同前に致し助城仕被申候事是皆神主公に被レ奉レ對たる事ともに候か樣の分ヶ自然の道理にて候上に軍兵衛吉次の傳子愚老が實父渡邊吉政入道號休巴右先祖以來神主殿へ年々當年迄も年始の御祝禮闕し不申候左樣の分ヶにて神主殿御一家の內に而も不レ被レ成二御免拜一御寶物を御拜せ被成候

前々御舊例とは乍レ申友隆公兩度拙宅へ被遊御出候も古今怠慢不レ致右之通故に而御座候間此旨を被相守候て愚老無ク成候とても年々一度づゝは阿蘇殿へ御禮可レ被二相勤一候軍兵衛吉次忠節の段々後筆に可分細書候扨又右之御寶物迄に限不申一同に被レ成二御見一候色々有增書出候に如レ此之御寶物奉レ拜候事は天和元年の辛酉二月十一日に奉レ拜候此段はめつらしき事ゆゑ書出召置候

一忝も後奈良院樣之御勅筆綸旨口宣

一右御同前に從二御公家衆一神主殿へ被爲進候御書

一阿蘇神主樣之御由來之御文書色々

一神主殿は阿蘇明神之御神孫惣成御由來之書立

一阿蘇之御社家衆之由來書

一神主殿の御代々被遊御頂戴候綸旨口宣百に及奉拜候

一正平之年中に薩摩之國主を阿蘇殿へ被レ遊御勅許候との御綸旨

一阿蘇山衆徒大宮司請二下知一相守候へとの綸旨

一同衆徒中より大宮司之御下知背申間敷との連判書物

一阿蘇四ヶ社の神事無怠慢大宮司勤候へとの綸旨

一大宮司に九州を引卒して鎌倉へ責上り逆徒を可令進罰との綸旨

一高氏直義逆心を構候間不日に責上追罰候へとの御綸旨

一賴朝公より被進候御書

一北條殿御代々より被進候御書

一新田左中將之御書并錦の切れに御書被成被進候御手紙之御書

一直冬公より被進候御書

一今川了俊公より被進候御狀

一筑紫小貳より被進候御狀

一大友殿より被進候御狀

一薩摩島津殿より阿蘇宮へ御願書

一阿蘇に可被成一味との相良殿之書物阿蘇の宮に被納候書物

一下野之御狩之御繪圖

右之御數々奉拜候此外色々御寶物馬の角なとをも見申候爲後覺書出候

一惟種公は當友隆公之御曾祖父にて御座候右に書出

侯通り天正之中つ比迄は岩尾之御城濱之御所へ被成御座候然は惟種公之御舍兄を惟前公と申候彼惟前公に先々御親父從二惟將公一御神主職を被成御讓候然れ共御亂心に被爲成候故に御舍弟惟種公へ御神主御ゆづらせ被成候而惟前公へは砥用、中山、甲佐、在々にて過分の御知行被進甲佐伊津野居城松の尾之上當分迄も御陣の內と申所の三四町四方も可有之平地一面之所當分迄も大堀有レ之候處に被レ成二御殿作一御安座御住館被成候甲斐宗運取持被申候而御兄弟樣之中めて度樣に道之道を諫言被申上居候故矢部甲佐目出度御兩殿へ阿蘇御家人群集致し無事にめで度相通り申候由に候然は惟種公に若君御兩人被成御誕生御嫡子を惟光公御次男を惟善公と申候

△御船城根本之事　御船當分之古城之事也

一益城郡石津之鄕甘木庄御船之古城之城名を御船城と申候彼城地を御船と申候由緒は大昔從二大國一日羅と申法師日本へ佛經を被レ渡候砌被二乘渡一候船之由に候其ふね以後山と成居候を前々城に築き初め候由語傳候就レ夫城名を御船城と云ひ町在々なとも御船と言ならはし候と語傳候定て日羅法師之被レ渡候砌迄は御船只今之在々は海にてこそ有之候はんずれ御船城之近邊の田地のさげなと云物に一艘二艘なとゝ云さげ名とも有レ之候偖は船三艘も被レ渡候はん哉然上は御船を三船と書ならはし可レ申事と存候然れとも右に書出候阿蘇殿前々御領知付ケに御船五百四十町と書候而有レ之舊記に御船と書出候而有レ之候上は御船と書候儀勿論にて候日羅之船之儀も紛有之間敷候は和漢合運圖年代記にも日羅之船肥後に着くと見へ候由或る仁被レ申候殊に飯田山は日羅の開基にて日羅之被レ渡たる佛像など緣記共飯田山に有之候由に候飯田山下の御船にて候へは船山城尤候事

△御船城主甲斐宗運事

一御船城主に永正之年中に房行と申惡人有之候而其砌之阿蘇殿へ不忠不義仕候故甲斐大和守親宣と申候御家老に房行を討取に御船城領共に從二阿蘇殿一被レ下御船城に發向可レ有との處に親宣之嫡子同氏民部大輔親直乍若輩被二申出一候は自分初陣に是非とも御船討取之合戰被遊御免候樣に阿蘇殿へ被仰上被下候へと達而願被申候に付親直謹而願之通に被申上候へば若年にて神妙なる事を願上候如レ願被レ遊二御免許一候と被二仰出一候に付親直に其通被二申渡一候へば親直謹而御受被申上矢部より御船へ被致出陣苦身坂の峠に本陣をはり木倉御船にて被レ遂二合戰一親直被レ得二勝利一御船城を乘取房行を討取上下四百八つ之首を取御船の城主に被罷成候彼親直智仁勇三兼之侍にて以後は阿蘇御家の一之大老にて所々にて度々合戰に打勝四百八つづゝの首を度々一世中に取被レ申候て國內は不レ及レ申九州の御屋形樣とかしづき申たる大友とのへ折々被召出國中に而大友殿へ直參の城主衆にも異見敎訓を仕候へと從二大友殿一被仰付たる仁にて候乍二其上一日本にも令二顯名一以後は阿蘇御家の惟の上字を被レ爲レ免候而老期には惟親と名乘被申候由に候

一親直被致法體入道號を宗運と申候阿蘇の家天正中つ頃迄は御善世故彼宗運は一之大老にて薩摩方之防ぎ大將には彼入道肥前筑後方の同斷には木山下陣健宮城主達、宇土、天草、球磨方之同斷には熊無田之庄城主、豐前豐後方之同斷には兩坂梨、高森、北之里、下之城、日向方之同斷には仁田水、犬飼、黒仁田、右の城主々々大老宗運之下知を請右之通被相勤矢部濱之御所を守護被致候由に候

一甲斐宗運は阿蘇二之宮の化人と申傳候其譯ケは親宣の內方毎朝阿蘇明神の閼伽之水を奉レ供願くは顯名仕候はん男子出生仕候樣にと念願被仕居候而被致出產候子息則宗運之由に候宗運誕生之日阿蘇二之宮之祕戶內より開け申候由にて化身と申傳へ候と已來被申候

一宗運一世中軍陣出馬之砌は御船城邊に阿蘇甲佐勸請之若宮明神山并城內天滿宮森より鷹舞出宗運旗竿之上に舞候を被拜候て自身大貝を吹立出陣仕居被申候なとゝ語傳候大貝は砥用鉾の尾嶽より出候由宗運は七尺餘之大男にて大力之由語傳候右の大貝は二尺餘廻り之由語傳候

△甲斐宗運熊無田之庄合戰之事、早川城主同圓福寺同渡邊氏討死之事

一甲斐宗運は子供達數多有之候由にて聟達も數多にて候甲佐松之尾城主伊津野山城守、早川城主越前守吉秀入道休雲、熊無田庄城主甲斐右馬允守昌、

右之三將聖にて木山備後守惟久は息宗立の聖にて宗運爲には孫聖にて侯然處甲斐守昌宗運所へ參被申侯に奥へ通り咄被申侯之處に宗運之鐙通しの小さすがを刀懸にかけおき被申侯に猶障り侯へば拔け侯て其下に茶臼有之侯上に逆に落ち侯て刃さき五六歩程茶臼にぬかり立侯を守昌見被申侯て以之外驚き其後所望被申侯由に侯然れ共入道被申侯由は安き事に侯へ共老身は阿蘇殿他に異に思召侯故何事も侯はゝ乍老身御用に立死可レ致と存居侯故當分遣侯儀不相成侯併遣物に遣申べく侯と被申侯に付其分にて侯處守昌内方を遣侯て盜被申侯昔之小烏丸にては無之侯へとも夫に類し侯とて小がらす丸と名付ヶ宗運一之寶物にて侯を右之通に侯然れとも入道は其分ゝよと被存何の別條も無之侯之處に守昌被存侯は入道公深々敷惜く可被思召物を如此侯上は多分阿蘇殿へ被申上無首尾者に可被仰付侯然上は手替可有とて宇土の城主本郷伯耆守と被レ致二一味一向後は薩摩方に可被成との約束被仕侯其段宗運慥に被聞屆侯而以之外被致立腹惟將公へ被申上侯へは殊之外の御惡心にて熊之庄討取可申旨被仰出侯に付宗運其年中賣被申侯へとも落城無之侯故翌年永祿八年三月に從二阿蘇殿一被仰出侯は宗運聖とも見せしめのために早川甲佐兩城代井早川嚴島宮の權大宮司渡邊右衛門太夫吉久、同圓福寺、甲佐社家とも宗運に致二加力一發向侯へと被仰付侯故早川越前守吉秀入道休雲、承陽山圓福寺住持春藏司、渡邊吉久、城主之侍頭佐渡大學同圖書、同修理、同能登、各七十五騎雜兵三百餘人卽日辰之剋に出陣侯而已之刻熊之庄より半里手前吉野茶臼山一之谷頭に陣取侯由に侯伊津野も同日同刻に着陣侍頭に江原雲晴、甲佐宮の赤星一太夫、權大宮司數人之祝部都合八十五騎雜兵四百餘熊之庄より一里手前出水村之前河原に遠陣を取居侯宗運之陣所は上島村の川向に千原村の南坂本村のかさの方に被取申侯由に侯然は宗運の侍頭乍二其上一軍法者下山勘解由申侯は早川の陣所茶臼山を先々ひかせられ餘所に陣取被召侯樣にと存侯茶うすはひかでは敵を粉になし得不申侯と申侯へは宗運聞被申侯而尤之事實々と被申侯て早川餘方に陣所をかへられ侯へと被申侯へ共かへ申間數由に

て其分ゝにて侯然は入道は城中より思ひがけ無レ之方より破り責入被申筈之工夫之由に侯へ共彼城は無類の名城にて七重の堀築地甚數可被責人手立無之侯へとも城内令二周章一彼入道は智謀人にていか樣の手立もや被致侯はんと城中の手だれ者とも各宗運の責口を守堅め居侯由に侯在侯へば前以守昌宇土本郷を賴被置侯は御舟早川甲佐各三將衆被レ致二發向一侯由令二風聞一侯實正にて侯はゝ急に加兵を賴入侯と被申置侯由に付本郷の執事乍二執事一伯州之舍弟本郷武藏守を大將にて侍頭には大河六彌太、成松式部左衛門都合二百騎從二宇土一差遣侯に彼人數木原村、阿高村、塚原村の山邊を忍び沈目村に忍び入令二伏兵一罷在侯事早川の軍人努々不レ存宗運と兎限の約束にまかせ甲佐早川兩將舞の原堀道を忍び大手の一之城戸大堀迄おの〳〵責より申筈之處に甲佐衆遲々に及侯に付早川人數一手計にてせめ寄侯處に思ひがけ無之沈目村の方より赤旗一流れ眞黒に打て懸り侯に付休雲、春藏主、渡邊一同に申侯は城を見捨後詰に引返し懸れ〳〵と向ふ敵を振捨て宇土勢と火花をちらし戰侯處に

城中より甲斐運天、同帶刀、城戸を開き令二後詰一侯ゆゑに前後之剛兵に被レ圍侯而早川人數令二敗北一侯然れとも本郷武藏守後陣に控居侯處に休雲春藏主渡邊三騎かけぬけ馬上にて休雲武藏と引組雙方差違侯て兩人討死一所にて渡邊春藏司討死右之通故早川人數不殘討死致侯然れとも大將本郷武藏守如レ此之上は乍レ負之面目と早川之事令二沙汰一侯由に侯扨早川の仁人宇土本郷より加兵の勢令後詰不殘討死侯旨入道之本陣に相達侯に付宗運の陣所からは早川衆討死之所迄は十五六町程も可レ有侯に本陣には田代を被置不斷逼兵二百騎程にて飛鳥の樣にかけ被レ付大河、成松、沈目村之林を小かげに致し息を休め扣居侯に眞一文字に鎧をいれ被申侯に付以之外左行右行に成侯處に宗運領内山出村大武明神の社人田上周防と申者大河六彌太を討取侯同村地侍に井芹河内と申者成松式部左衛門を討取侯兩侍頭如此に付本郷勢敗北不レ大形一沈目村下之沼田に逃入かけ込見苦き死を致侯者多く不殘討取被申侯宗運被申侯由は自分手を碎きかほとに戰侯事今迄には多く無之侯と被申侯由に侯歸陣の上

にて入道被申候は自分は天道之冥加に相叶ひ武運つよき者にて候其仔細は宇土勢と合二一戰一候處を城より令二後詰一候はゝよほどの可レ令二難義一候に兼々入道におゐはな致候故左無之仕合にて候と被申候て被レ致二一笑一候などゝ語傳候さて又甲佐人數河原よりかけ上り本郷勢の後詰仕被申候はゝ早川衆敗北之儀は念もなく得二勝利一可申之處に遠陳を取早川衆を令二見殺一候段不レ及二是非一候とて入道以之外被致立腹甲佐之人數を打捨可申哉と被存候由に候へ共却て熊之庄に利を得させ可レ被レ無二是非一と被存致堪忍用捨被申候由入道其以後折々被申出候由に候然れとも此段惟將公に被申上候へは殊之外被遊御立腹伊津野に切腹可被仰付候へとも彼者は村上天皇の御末葉にて御綸旨を頂戴仕候分ケ有る侍故死罪は被遊御免候併御追放と被仰出天草へ被遊御追放候然處に阿蘇家の仁人は不及申阿蘇山龜甲山飯田山其外諸出家衆矢部へ被レ致二刻參一伊津野本領安堵歸城御免之御訴詔被申上候に付三年目に被レ遊二御免許一被致歸城候其城の惡名無二是非一存られ相良藤向之砌には不及籠城出陣背水之

被レ致二陣取一一足不レ去討死被レ仕候半と其比有心之仁人致二取沙汰一候なとゝ語傳候

一早川休雲嫡子秀家渡邊吉久嫡子又太郎次男孫四郎圓福寺小僧善忠彼者とも御用に立討死仕候跡にて惡しく被仰付間敷候急度宗運承りにて可被仰付候との御事にて忌中故に御目見は不被仰付候との仰出しにて追付け宗運承りにて秀家を越前守に被仰付早川城領とも に如二前々一被レ爲二拜領一候其上金子亡父供養のためにとて被下難有入道へ御禮被申上候又太郎にも前々の通に權大宮司役知行被レ爲二拜領一候其上同郡御舟木倉御藏納之內しときよつじ二名御加增被下兩人共に今度吉久御用に立死仕候御褒美に御殿中にて傘履（カラカサブシゲ）被レ遊二御免一候と被仰出眉目過レ之不レ申其砌是而已令二取沙汰一候由に候其砌は御老中衆も右之通之段は難レ成候由と語傳候圓福寺小僧儀は無學無能にて乍二龍在一後住被仰付前々之通寺領被下候との仰出何れも宗運處へ被呼寄右之通を被申渡候由に候又太郎孫四郎十五十七之時にて玄番と申老臣藤二郎と申中老彼等兩人にて寄立候由に候下人頭に源五と云者有之由に候

百十の上にて死候由亡父若輩の比迄存命せしめ其砌の咄とも亡父に細々仕聞ケ居り候と亡父語被レ聞候條二郎は糸田村にて死候忠兵衛が祖父にて候玄番は早川村にて死候理右衛門が祖父之事にて候偖又圓福寺之弟子善忠十六に成被申候時にて師匠之陣立に附そひ被參候而各合戰の時は鑓をふりかたげ麥畠の中に忍ひ居候て見居候處に圓福寺渡邊は休雲討死後に八人を相手にして切合被申候處に三人は討被申候て五人に成候を又あひ手として戰ひ被レ申候內に渡邊吉久被致討死候其跡に三人に成候を春藏主あいてとして切合被申候內に春藏主討死被召候に兩人は立去候處に一人相殘り師之首をかき候を善忠見すまし麥畠之中より無二無三に走寄り鑓にてたゝ中を突通しつき通しながら鑓は打捨置師の最後迄被二持居一候長刀をおつ取なくなく逃けさら不レ頓村に圓福寺之末寺有之候に走り入死をのがれ早川の樣に歸候と善忠亡父なと又は其外當所之者ともにも語聞けをり被申候と亡父被申聞置候亡父目水をたれ昔之事ながら殘念に候は圓福寺渡邊兩人にて八人を相手に致し三人を討取五

人を相手に致し兩人討取三人に討なし兩人討死は偖も大手柄にて有之候へ共入道も見不被申早川人數各令討死候故見候人もなく善忠の咄迄にて無是非はたらきと申候て百年餘の後に無念がりをり被申候渡邊は武士にても春藏司右之通不思儀と亡父善忠に被申候に善忠咄をり被申候は師の坊は五尺の屏風立物を外に立候て長刀をつかひ飛こしたてもの屏風のふちに上り步み候て長刀をつかひ居られ候と善忠咄居被申候と亡父被語聞候彼長刀を善忠右之通に被持歸候を圓福寺本尊當分まても御座候彌陀木像のわきに立おきいつ迄も被召置候由に候然は天正年中國代落去一同に寺社も同前にて圓福寺寺領も百姓と成り小西領分に成候時分渡邊三藏と申侍之知行に右の寺領も成候故圓福寺を山の中に追入候而寺地を屋敷に被致在宅被レ召候由に候左候而彼長刀を見被申候て被レ致二押取一小西殿へ上被申候に正身の正宗にて行長一の重寶になり申候由亡父咄被聞候柄入かまのえびしりの樣に打まげ候而有之由に候急用に正宗作り候時うちまげ〳〵作り立候に如レ此に有レ之候と其比

申たるなど、亡父咄居被申候

一惟將公甲斐入道に被仰付候は健宮甲斐正運は元來其方が一家にても候間慮も宜候間彼者を同陣にて熊之庄乘取候へと被仰出候其段卽正運に被申聞候へは謹而被レ奉レ得二其意一兩將出陣被致御船川、水泉寺川になれたる河達水連どもを忍ばせ濱戸川を夜中にわたさせ城内に令二放火一漸くの事に都合三年目に被致落城候由語傳候宗運數度の高名他國迄も被レ致二顯名一候弓取にて候へとも三年目に右之通尤の事と申候其分けは已後小西行長領分に成候故彼熊之庄城を一覽候而目に付き既に居城に可レ被二取立一と被思召候へどもの城邊に薪山を可被仕立之地無之とて御用捨の由に候其後加藤清正公肥後ふさねて被遊御領候砌此城被遊御一覽前々より御目に被爲付候由にて城に又御取立可被成と御座候へ共城邊に薪山地無之候とて被遊御用捨候然れとも小西領分之砌は舍弟主殿佐と申を城番に被遣置大形城分に成居候由語傳候

一先筆に書落候右之圓福寺善忠は生前中山之內九尾村にて候當時作左衛門、七左衛門、木左衛門、兵左衛門、當分御百姓相勤罷有候彼者とも曾祖父善慶と申者之伯父にて候

一早川城主之侍頭佐渡大學、同圖書、同能登、同修理、被仁人の子孫當分矢部の內佐渡村に百姓と成罷在候早川村と彼さわたり一村同前之分ヶ後筆に書出べく候

△甲斐宗運黑仁田氏を被討候事

一岩尾之城代黑仁田豐後守は甲斐宗運の嫡子同相摸守親秀入道宗立の四男にて候然處に彼豐前守阿蘇家の御家老分の仁にて候に阿蘇之御家を背き日向之國伊藤に隨意有之旨甲斐宗運聞屆被申去とては不忠不義不及是非候討可申との事にて姬之宗立內方に被申候は其方が父豐後は阿蘇殿を背日向伊藤に隨身之旨慥に聞屆候爰元へ呼よせ可討候かわとせも可レ致二一味一候哉有體を申出候へと被申候へは姬被申候者儕は左樣にて御座候哉及是非不申候代々之主君を被レ奉レ背候無法之仁を親と存可レ申樣無レ之候急き御討可被成候味方可仕樣無御座候と申候へば入道機嫌にてさて〳〵能言たり〳〵尤之事儕は誓言を可聞候と被申候へばあら〳〵と誓言被申候に付黑仁田一家中不殘幕下に至まで豐後守同前に御船川河狩遊に令招請候とて日を定呼請被申候而大將の黑仁田豐後守一人宗運與座數に通し飯後に入道手討に豐後を被討候て一つ貝を吹被申候と一同に亭主々々客々を討候へば御船城下九十九小路中に被申渡置何某は何某所々々々と宿割被申付置右之通に一つ貝を相圖にて各一同に客々を討候由に候如此之智略故入道の家人は一人も不損大將を始め上下四百八人卽時に討取被申候由語傳候宗立內方尊常に衣紋かいつくろひ罷出入道にさて〳〵御本望不レ過レ之候わらはも大悅此事に存候と祝詞を申候てから〳〵と打笑目水一滴も落し不申候と語傳候

△甲斐宗運同宗立丹花之瀨合戰之事

一天正八年三月十七日に甲斐宗運同宗立飽田託磨之境丹花の瀨にて無類の合戰被致候高名分々は河尻、鹿子木、隈本、宇土、高橋之城主々々元來豐州大友殿幕下にて殊更甲斐宗運は阿蘇殿の大老にて又內の侍にて候へとも大友殿他に異に被思召肥後國の仕置そこ爰に宜く御馳思召との事ともにて隈部合志いつれも宗運とは無他事語あひ被申候之處右之城主衆思ひ〳〵心々に成被申候て豐後を相背き密々薩摩肥前心々に被罷成大友義統公に不忠にて候へとも阿蘇殿計豐州方にて御座候を右之城主々々猶被申候て阿蘇家計如レ此之段見苦候阿蘇家を可被亡と內談有之候由を甲斐入道慥に被相聞屆不移時日八千町を催し大將分〳〵八千人入道手勢三百騎父子大將にて明後日出陣候とて御船城々代迄にては無心元候間孫之早川越前守秀家今度御用之陣立同前之勤にて候間御船に被罷越爲要心被致入城可給候早川城の用心には一家にて候上は渡邊孫四郎被致入城宜候との使者入道より被差越候に付秀家祖父と云ひ大老の宗運と申し味方と被存候而之事と云ひ阿蘇殿御用軍立同前と被申越候事勞にて無據御船に被罷越候渡邊吉次も早川城に相詰候儀得二其意一申段返事申候故入道滿悅候而父子の入道大將にて手勢右之通之上に領內在々庄宮等阿蘇家總勢一萬餘にて託磨本庄に被レ致二發向一候處隈部、鹿子木、隈本、高橋の城主々々、白河丹花之瀨を前にあて各陣取候而被レ扣候由に候宇土川尻

兩勢は丹花の瀬にて矢合之砌宗運の跡を取切可レ
令二後詰一候とてとがはらと云村の邊りに令二伏兵一
罷在候由に候然は宗運父子本山よやすと云村之小
篠林のかげより左巴鷲矢旗を押立無二無三一に丹
花の瀬のこなたへ人數を押寄是へ々々と招かれ候
へとも各川を渡し不申に付宗運被申候は御比興千
萬是へ々々と耻しめ被申候へは各一同にひた〳〵
とおつひてかけ入被申候處に甲佐御船の大河にな
れたる川達水練の若武者とも水の淺深をも不論か
けこみたゞうより川中にて無雙の大合戰其外矢部
砥用、中山、南郷、菅之尾、阿蘇、小國、山野、
谷坂不斷自由之馬達共各神便之様に戰候故右往左
往にかけ立られ敗北不二大形一後詰存懸もなく川尻
宇土の軍士本所々々へ逃可申皆に候處に追討にと
存候哉藥師町之通の深淵を渡り河向なる味方も相
加り高橋隈本をさして引取候所存之外北目衆敗北
にて各右之通之城主々々おくれを取家兵大分討死
致候宗運父子如此被得勝利候事は唯事にあらす阿
蘇明神の御冥助と各上下一同に阿蘇の御燈を拜申
候由に候今度之合戰にも入道吉例にて四百八ッの

首を取勝閧を上げられ上下一同に食水飲食被致候
處に引取候味方を押分け武者三騎近くはせ寄名乘
候は我々は城之家臣木葉平川、城の藤左衛門と申
者共にて我々事は國中に令二顯名一候故御聞も被成
候はん今日令二他出一先刻之戰に不罷出殘念に候自
分共令二遲參一味方おめ〳〵と令二敗北一無二是非一候
甲斐殿御事未下懸二御目一申上候乍慮外御父子に自餘
を不交勝負をあふぎ奉り度と申しもあへす打て懸
り候宗運被申候は偖も一騎當千の侍見事にて候心
ざしの通りにと被申候て味方に先々手指を者後に
花軍して見すべしとて三人の荒手の者どもと受つ
流しつ古今無雙の見物事にて終には木葉平川を入
道父子にて討取被申候而國中の是沙汰の大手柄被
致候由に候城藤左衛門はかいふつて逃候をきたな
しかへせ〳〵と總軍勢のゝしり候へ共無レ難逃去
候が取而返しかけ來りたけ宮八千左衛門殿はおわ
せぬか見參せんと申候故八千左衛門是を聞願ふ所
に幸とてかけ出八千左衛門罷在候と云よりはやく
かけ合せ秘法を盡し戰候へとも互に勝負なく雙方
氣力つき相引にひきなんなく藤左衛門は隈本をさ

して引取候由に候宗運は四百八つの首を取歸陣被
致候に宗運事は漸く千町の領主にて候へ共書出之
通に神の化身にて候哉薩摩の大守義久肥前隆信不
二大形一名將偖又島津之大老新納武藏守乍レ又內一日
本に令二顯名一高弓取達が彼甲斐入道には以之外恐
怖不二大形一北目迄は折々隆信萬騎之勢にて發向候
へ共阿蘇へ出馬無之御船近所迄は被令出陣候へと
も御船城に被押懸候儀無之候然者八千左衛門其日
の合戰に有名の首七つ宗運に見せ候由に候彼藤左
衛門各別雙方氣力つき相引の事八千左衛門は尤之
事と其比申候由に候被八千左衛門は其日に不限そ
こ爰にて無類の手柄仕候故阿蘇殿より八千町に無
比の軍士と被仰出假名を八千左衛門と被仰付候右
に書出候通の阿蘇家武者揃に万次丸八千左衛門と
候はかの八千左衛門か事にて候其砌は假名實名從
二主將一被下候を天山の高名に存候由に候彼八千左
衛門元來は矢部の御殿近所に被罷在御奉公被相勤
候仁にて候か健宮甲斐正運事宗運に內緣の分け有
之候故健宮に參住候はん哉と存候宗運に健宮之城
主正運內緣の分け後筆に可書出候城之藤左衛門事

天正年中に隈本城殿之家人に藤左衛門は剛之者故
城名字を被レ免候ものにて候八千左衛門健宮に罷
在候に雙方知る人に成不申候事いかゝ數候然とも
其砌はそこ爰と領主〳〵持切にて候ひつる故隈本
より健宮に行候事も健宮より隈本に行候事も當分
他國へ參候同前には殊更其領主〳〵の木印札を不
斷にさげ居候はねば打殺ししめ殺候ても盜人と名
付候故可レ仕樣無之時世之由に候偖は藤左衛門八
千左衛門乍兩人剛之者にて互に見參之望は有之候
はんずれとも右之通故初て右之通にて候はんと存
候他國は不レ存候亡父被語聞候に天正の年中比迄
は大小指ながら茶水酒飯たへ候由にて客に行き來
候而も大小さしながらあいさつにて有之候など、
被語聞候右之通彼藤左衛門逃候を入道家來之若武
者とも追懸け討可申と仕候を入道深く制止被申候
而被申候由は彼等が樣成る武士は敵にても惜く候
偖又彼者を討取候はねば味方負候にてはなしかち
軍仕なから彼者打取は惜しく候家頼を討せ候も猶
更惜候逃がせ〳〵と被申候由語傳候歸陣の上にて
阿蘇殿へ被申上今度の首は大友殿へ致進上宜奉存

侯と御座候而有名の首豊後へ進上被申候へは大友義統公被成御満悦入道に御感状被下飽田郡之内池上在々を今度の忠節に被下候との御書出拝請被申候由に候然れとも程なく入道も死去追々亂國に成候故當分迄の如此なる昔物語と成果候右八千左衛門娘矢部の御殿に御奉公仕居候而御落去已後令縁付候由にて津志田に近年まて伯樂致居候七右衛門母即八千左衛門娘之子にて候偖又右の首を豊州へ持參候者首くさり候故惡臭をかぎ毒となり候て人馬大分に死候由語傳候

△甲斐宗運益城郡豊田村畷の原合戦相良義陽を被討候事

伊津野山城守討死田代宗傳渡邊吉次事

一相良修理大輔義陽は天正初比迄は球磨、蘆北、八代三郡を隨へ八代郡古麓に住城之由に候彼古麓之城を前々八代之城と申候由に候義陽も元來大友殿御幕下にて候由然者阿蘇も同前にて候故阿蘇相良互に無野心一味可被成との御堅約にて阿蘇よりは甲斐氏承に而右之證人に被罷出互に誓紙書物の取替被申候て相良の誓紙は阿蘇宮、阿蘇の誓紙は八代白木社宮に御奉納之由に候阿蘇の誓詞は甲斐宗運家頼侍頭甲斐伊勢守と申者書候彼伊勢は學力能書色々故貴者にて候ひつる由語傳候然る處に義陽右之通之誓證文を違背被レ召候而薩摩島津家に隨遂被申候由にて相良被申候由は阿蘇と令二約束一候誓證文を令二違背一候上は多分從二阿蘇一可被取懸候間左無レ之内に阿蘇へ發向可有との事にて相良の幕下八代郡興善寺城の城代相良伊勢守、同岡の城の城代佐々木宮内左衛門、同吉本城の城代東掃部助、同種山城の城代蓑田五兵衛、蘆北郡田浦城の城代惡兵衛、同佐敷城の城代西肥前守、同津奈木城、同水俣城此兩城代深水宗甫、此外天草刑部少輔彼天草は其の比相良に縁引候而之事かいか樣のわけかにて同陣候哉語傳處無レ之候右の城代々々幷に諸出家の武者所存藝法師を始め數人の出家衆各引率し出陣候て天正八年四月二日に義陽産神白木社明神に社參有られ候處に旗竿鳥居に懸り眞中より切れ候由に候此の段は阿蘇と右之通之約束誓文相違の御冥罰と其の比有心之仁人致沙汰候由に候然れとも左樣之怪事も不レ被レ驚無二止事一即日騎馬雜

兵一萬餘にて出馬候て益城郡之内小川町守山小野村々を被二燒立一小野村上野之峠しやばがみと云ふ所に古麓より七里程押し本陣を取被申候而翌朝未明に堅志田北左衛門尉之居城赤蜂の尾に西肥前守甲佐伊津野山城守松之尾に東掃部之助彼兩將に三千餘の軍士を差添被差向候西一手の軍人千餘にて赤蜂の尾に打向候處に堅固令籠城候故頓に責落候事難レ成取卷き候迄にて時刻を移し候東一手之軍士二千餘に而甲佐松之尾に令二發向一大將東本陣を油坂と云坂の峠に取居候て軍人を甲佐近所迄差向候處に伊津野城下を引卒し可レ被レ申間も無レ之相良勢何程の事か可レ有とうか〳〵と被レ存候哉又は運盡はて候而之事に候哉手廻之者共斗にて早速出城候而碧川を打渡り日和瀬河原之大平なる芝河原に陣取候て東か本陣油坂へ人數を被差向候處に東の軍士は坂上より眞下にかゝり伊津野の軍士は坂下より眞上りに坂中にて相戰ひ即時に伊津野勢令二敗北一大將の本陣日和瀬河原に引退候處を東の軍士得勝利急に追かけ河原にて手痛く戰候に東の人數は二千山城の人數は二百には過不申候故たゞ

るへき樣なく後は大河引へき道も無く即時に伊津野被致討死候彼山州碧川を渡り大河を後に當て敵のかゝりばよき太平の河原に陣取候而被致討死候は先年熊之庄合戰の砌おくれをとり被申候て面目を失被申候殘念にて背水の陣取被召討死被致候哉と其比有心之人々致二取沙汰一候由に候山州は討死被致候へとも家老伊津野四郎右衛門を大將として家來の侍赤星一太夫甲佐宮の社頭權大宮司數人の祝部中にも田上伊豆守各一同に大將今朝城下を御催なく出陣我々とも遲參不及是非候と申候處に伊津野四郎右衛門と申家老は宿に今朝有合不申候而大將を討せ無是非候東掃部を討取候はすは二度と甲佐へは立歸間敷と猪の齒咬をなし引取味方を押返し〳〵油坂へ切て上り候に相續く仁人には田上伊豆赤星一太夫權大宮司數人の祝部面をふらず四郎右衛門眞先きに油坂へ山州を討取上下のゝしり居候處へ二百程にて乍二歩立一眞黒に切上り候處に眞先に進む四郎右衛門が左之乳の下を東掃部鑓にて表裏に突通候四郎右衛門剛の者にて手轉害候て東掃部を討取候東之軍士大勢とは乍レ云東大將討

死の故以之外に周章右行左行に令二敗北一候處を赤星田上其外の仁人死を一途に致候て追懸々々手痛く戰候故東の軍人多く討取候故四角八方へ殘兵令敗北候四郎右衛門右之通深手負候を家人せおひ候て油坂下之岩下に甲佐宮之總錄祝部と申社家の所に置候由に候松之尾城下之家人令還參候事尤之事に候坂谷水越横部田遠境之在々にて恩下の地侍同野伏の兵人かけ付候事不相成候右の田上伊豆守は甲佐宮の鬼丸祝部と申社家にて候田上甚兵衛曾祖父甲佐作之亟爲には高祖父にて候赤星は甲佐宮の一太夫にて彼仁も社家にて候當分安平村に城形少々有之候地は赤星の住所にて候國代落去以後には有無の體にて候を安平村當分の庄屋の祖父右之赤星を懇に勞育致候故赤星名字をも相讓り候此外孫々とても無之候伊津野四郎右衛門は江原雲晴と申伊津野之大老の嫡子にて候山城守之親父三河守と申候彼三河守の娘山城守の妹を四郎右衛門女房に致候故江原を改め伊津野名字に成候伊津野氏は村上天皇の末孫にて故有之家にて候然は天正の年中初つ比に從京都碁樂と申天下一之碁打豐後大友殿へ下り候就レ夫彼碁樂を九州之內御幕下を令二一廻一候に付甲佐伊津野へも來り候左候へば山城守は傳受と云事なくして國中無類の碁之名人にて彼碁樂と碁一盤を兩日に被レ令二成就一先手を碁樂に被渡候又二盤に碁樂負に成り是非とも一つを取返度存候天下にて名を失ひ候と碁樂申候由に候へとも伊津野被申候は其方連の下手と打候へばてき面に碁の手下り候間いや〳〵と被申候故無是非松之尾よりすゝ様に豐後之様に立歸り無念がりいきほしをつき令二絕食一船中にて氣を煩死候由を亡父咄聞被申候右之通を渡邊吉次見被申候て此事は慥成咄にて候右之四郎右衛門娘三河守之孫は愚老伯父九郎右衛門女房にて候彼九郎右衛門惣領子を助兵衛と申候助兵衛惣領娘當分の助兵衛女房にて候助兵衛兩人之子又兵衛惣兵衛にて候助兵衛女房の弟甲佐宮の宮寺神宮寺只今の法印にて候さては伊津野の末孫は如此にて候彼四郎右衛門は母方に令連續軍兵衛とは從子にて勞重緣故に四郎右衛門令法體清念と法號を申候を九郎右衛門所にて育殺候山城守之子息宮內少輔と申候右の合戰の折節は大病中に

て被レ致二平伏一出陣無之由に候落去後加藤清正公に被召出手筈有之候へとも如何被存候哉筑州に知處有之候とて鬼神太夫と云伊津野之家に傳來候大脇指をさし深編笠を着候て被致逐電以後成行不相知候由に候偖東討死の殘兵ともを中山砥用より令發向堅志田かたひらと云所の林の左右にて大合戰致候に東の殘兵とも又々令敗北山林方々へ令退散候由に候砥用馬入城の城代砥用丹後守佐々原後藤兵衛中山柿野の玄蕃允秩川小屋野の何某各荒手にて追かけ〳〵悉く討取候柿野玄蕃は中山當分の御惣庄屋中山孫左衛門高祖父にて候佐々原後藤兵衛は砥用大庄屋善兵衛先祖にて候後藤兵衛妹は愚老祖父吉次の妻女にて亡父の母にて候小屋野は秩川に末々有之候小屋野の證文秩川村に慥に源兵衛と云老身令所持候右の仁人相良本陣の近所迄は令遠慮長追討は不致候由に候以後宗運を始めなれたる古老とも申候由は右の荒手の仁人赤蜂の尾を取巻居候西肥前守が後詰を致し城より切て出候は西氏をも討取候はんに軍士なくして無是非事などゝ申たる由に候然は義陽の本陣へ伊津野討取候然とも東は令討死候通相達候へば以之外に大悅にて軍初に一城主を討取事は難有事とてさばがみより半里程甲佐の方に押よせ四方十町ほとの平地一面之所擧之原と云に本陣をはり伊津野討候祝之酒宴被致居り候由に候

一豐田之城之城代村山丹後守に從二義陽一使者を以被申候は村山氏相良の幕下に被相成可レ被レ遂二一禮一哉及二異儀一候はゝ軍士可差向候急に有無之儀返事に被申越候へと被申遣候然は村山丹後守は矢部の御殿に當月番に被相詰候由にて留守居の城代此由承候而返事申候は村山丹後守今月は阿蘇殿御館に月番前にて矢部に被罷上留守に而御座候私儀湛淵甚喜と申家頼にて留守居までを被申付置候に付私に有無之返事可申上樣罷成不申候尤人數を出し防申事も私には不罷成候殊更家來少之侍ともは村山召連右之通に候故尙更此段不罷成候此方に御軍士被差向候は村山之妻子とともに自害仕候より外分別に及不申候如此の御使の段村山方に今日可申遣候然上は從二村山方一邪正の返事は可被申候此旨義陽公に被仰上可給候是非乍此上も御人數被押向候

とも に侯は丶其段被仰聞可被下候則閉門仕居可申候此旨被仰上有無之段被仰聞被下候へと申候此旨段々相良殿へ申上候處に各評定取々にて押懸可被打捨哉扨又至極の道理を申候に付手指し被成間敷哉と色々吟味の處に侍頭豐永氏すゝみ出申候は去とては湛淵か申段至極の事にて御座候留守居承候身上にて得其意候と申候而御禮申候は丶其座にて討取可申を主人の上を計ひ不申道の返答申候事見事に候人數被押懸候は丶矢を一筋射不申村山氏の妻子を手にかけ見事可致自害候其時には後年人口不可然候いかにも至極と思召候村山氏より返事次第に候其間は御かまひ不被成との使を被遣御尤と存候と申候へは各一同に尤の事と申候て其通之使を甚喜に被差越候に付豐田の城は其日無事にて先々相通り候由に候然は甚喜右の通に丹後守に卽刻申遣候へは返事之申樣無二幾所被一レ得二其意一候彌申越候樣に心得罷在候へ若相良より村山はいか樣に申越候哉と使に申來候は返事に可申は村山申越候は先以妻子に無御構候旨難有存候今日中罷歸候而宜可申達と申上置候へと申越候と返事を申候てだ

まり罷在用心仕居可申候早々可罷歸と申候て甚喜が飛脚早々差戻し御殿に罷上相良發向之段相良より村山に申越候使口上の趣留守居湛淵か返事之段細々申上候へは惟種公被聞召上卽刻歸城可仕候御舟之樣に參候て宗運入道に申聞け下知を可請候最早多分宗運は今二出陣一候半と被爲思召上候と被仰出御暇被下急速に村山被罷立候由に候彼甚喜今度の首尾中々甲斐入道の機に入村山氏に乞ひ被申候而以後は入道家頼に成候國代落去浪人となり果申候彼甚喜曾々孫は早川村に當分御山之口仕居候新兵衞にて候右之通祖父吉次より慥に申傳候

一甲斐宗運へ甲佐早川より注進申候は相良義陽發向被有候而今朝未明に堅志田甲佐兩城へ東西兩將被差向候に付伊津野今朝被致出城ひより瀨河原にて被レ遂二合戰一被致討死候併寄手之大將東掃部助を伊津野四郎右衞門討取申候西肥前守大將にて赤蜂の尾に令發向候へ共堅固に令籠城候故取卷申候まてにて別條無御座候相良の本陣は豐田響の原にて御座候と申進候宗運承知不レ被レ移二時刻一兼日近從を放し不被申甲斐武藏守同伊勢守栗林伊賀守入道

等與と申侍頭共に被申付不斷の逗兵二百騎程にて早々被出立候に嫡子親秀入道宗立に被申付候は御舟鄕中の百姓共を卽刻早々飯田山にのぼせ山之峠を鍬にて開かせ岸抔さめさせ大勢色めかせ候而響之原あたりより見え候處を右之通にと申付候へ扨又城代に旅の者他領の者外川より內に入れ間數候色々要心致候へと被申付候て若宮明神幷城內天滿宮を拜し黑之名馬に打乘自身大貝を吹立軍士を引卒し出陣被致候に件の鷹城內天滿宮之森之上に舞候を吉例とて拜し響之原の順道は押し不被申廻り道を可押とて山出村に被押出彼村領內故彼村之大武明神之社人田上備後と申者幷同村地侍頭井芹河內と申者を供せられ田口村と津志田村との間道を押し安見村に被二押出一候を相良の物見とも見物候而大將に申候は御舟より北に當つて見え申候高山之峠に大分人數見え申候乍二其上一岸をさめつちをうがち申候哉新の土色見え申候偖又是より一里計下り末の村際を鎧武者大分見え申候乍去旗指物は見え不申候と申候へば相良の人々申候由は晉而難必得候と申候に義陽被レ申候は宗運居城をはづし

飯田山に引上り候はんと察候扨又見え候人數は宇土本鄕伯州兼々懇志之ゆゑに今度益城へ自分令出馬候段被聞付爲加兵被差越候人數にて可有之候誠以重志之至不斜候と各大悅何心もなく被罷在候に下糸石村際の堀通し道を宗運隱密に押通し義陽の本陣響之原へ押上り三四町ほども手前にて左巴鷺矢旗を押立鬨之聲をあげ貝を吹立無重法之太皷を打貝一文字にかゝり被申候に付相良の仁人すはや甲斐宗運候そと周章候處におしかけ右往左往に懸散し突崩し片時之間に義陽を討被申候總而宗運兼々目を被懸候一騎當千の剛の者とも と申候は本田田之上、下山、栗林、緒方、志戶、岡、井芹、鳥居、湛淵、椎葉、杉田、保田、林、村山（異本云本田右京進田上伊豆守下山左馬允栗林若狹守宍戶采女正井芹伊豆五郎岡越前守緒方喜藏湛淵八郎左衞門鳥井彥太郎林土佐四郎椎葉七郎太夫杉田佐渡守村山帶刀保田左衞門佐）彼者とも は一面に切崩し突崩し戰候故に相良勢一人も立合せ候人是なく追まくり切まくり悉く討取候故四角八方へ逃去敗北不二大形一糸石山しやばがみを指し令退散候相良家之法師武者所存藝法師を田上備後守討取候彼備後は先年熊之庄合戰の砌宇土本鄕家之侍頭大河六彌太を討候田上

周防守が嫡子にて侯中横田村庄屋傳右衛門實祖父
にて侯存參法師天草刑部少輔東西南北と云相良家
之四天王之侍豐水なと云侍頭皆々宗運討取被申侯
義陽は入道家人緒方喜嶽と申者討申侯片時之間に
有名の侍七十餘人雜兵二百餘人討取被申侯而勝閧
をあけ被申侯由に侯宗運家人は左程不レ損響之原
を引取巢林村之前經之坪と云丸野畠之上小高き地
に陣取被召上下飲食を相調侯て休息之處に
一宗運幕下の田代在々之領主田代城代宗傳と申仁走
せ參じ謹而被申侯は今日之御出馬遲く承り響之原
の御手に合不申殘念に奉存侯不珍御事とは乍申相
良を被成御討侯事無類之御儀と感悅申上侯へは宗
運被申侯由は其事に侯併堅志田甲佐へ令發向侯
東西か殘兵とも義陽を打せ啃々とは引取心得有之
間敷侯其上可引道を如此に差塞ぎ居侯上は一途の
合戰相殘り候然れとも此方へ不相構向の山邊を引
侯はゝ手指させ間敷侯窮鼠却而猫を咬と諺傳へて
渡り侯と被申侯へば田代入道畏而承り申侯は仰は
御尤にて御座侯へとも此方に相構不申山邊を引申
侯とても伊津野を討通申侯者ともを啃々と難通

存侯是非とも愚老に一合戰被成御免可被下侯自餘
を不レ交荒手にて一合戰遂申度と申侯得ば宗運御
聞侯而樣子次第にと被申侯處に甲佐堅志田に令發
向侯軍人とも相良殿打れられ侯事を聞前後不覺に
成侯て糸石の桑之迫と云所を轉引に引き宗運之陣
所へは不構申侯へとも宗傳歩立之軍人二百程にて
一面に鑓を揃へ眞黒に突入被申侯に片時の間黒煙
立侯而相良の人々令敗北しやばがみを差て引る是
あり糸石山より小熊野海東をさして引人も多く見
苦しかりし事共にて侯堅志田原に相殘侯東西の殘
兵とも桑之迫の難儀を聞何方へ可引やと十方を失
ひ罷在侯を赤蜂の尾より令出城追討致侯故四角八
方へ令退散侯糸石と堅志田との間に當分も清水涌
く所有之侯彼左右にて堅志田若宮明神之寺社落行
く殘兵を沼田に追はめ大分討取侯に付赤蜂之尾に
令發向侯西氏被討侯共落侯とも不相知成侯由にて
萬餘の相良勢一人も不二見得一體にて見苦しかりし
事共なりさて田代宗傳相良の軍士五十餘人討取宗
運に見せ申侯由に侯宗傳家人は左程不損手柄被致
侯宗運被申侯は今度に不レ限事なから紛骨神妙に

て侯と感賞被召侯と語り傳侯今度も甲斐入道吉例
にて響之原桑の迫首數四百八ッ討取高名の段語傳
侯

一宗運は阿蘇之御家國内之御領地は不及申其外右に
書出侯通之國々所々之御領地に仕置被二申付一侯に
第一被申付侯は若し事急に珍事令出來侯時分は住
城を堅固に相守り令籠城疎に不可致出城侯入道が
指圖を得城外へは可罷出侯籠城及難儀侯はゝ後詰
之助兵を可遣侯と城代々々に被申渡置侯伊津野出
城不及是非侯と其砌取沙汰致侯由に侯就レ夫早
川城主越前守秀家相良之軍人甲佐へ令發向侯由風
聞と即時に被致籠城侯然處に早川嚴島宮の檜大宮
司渡邊孫四郎吉次事秀家とは乍二一家一阿蘇殿へ直
參之者にて侯故甲斐入道出陣之段令風聞玄番と云
古老一人供し響之原への近道舟津篠之尾越より西
山正法寺之門外を通り野傳に入道之陣所經之坪へ
參着侯て入道に致對面侯て吉次申侯は御出陣遲く
承り遲參響之原桑の迫兩御手にあひ不申殘念に存
侯と申侯へは宗運仰侯は懇志故に早々被罷越致滿悅
侯と御座侯而兩度之合戰之次第被咄聞侯を承り田
代入道へも感悅申居侯處に陣所より南の繩手田原
之中を馬に放れたる武者と相見え長刀を横たへ只
一人心靜に不レ臆引退侯を吉次見侯て宗運に申侯
はあれは相良家有名の者と見請申侯討取懸御目可
申と申侯て追懸け其方は相良家の仁と見請侯名乘
侯へ此く申侯者は蘇阿家にて渡邊吉次と申者にて
侯と申侯へばさては左樣に侯か某は相良家にて少
々侍頭承侯豐永藤次と申者にて侯家賴致落去如此
に侯と申もあへず長刀をまくりかけかゝり侯を吉
次二尺五寸の刀にてさすり合ひなんなく彼藤次を
討取侯て兩入道に見せ申侯て手柄仕侯然は彼藤次
は一方之侍頭大將分の侍を甲斐田代兩入道之眼前
にて如此之高名宗運證に被立惟澄公へ被申上侯へ
は殊の外之御感にて嚴島宮下七半濟之在々にて其
内之數納にて御加增被下乍二其上一御刀被爲拜領軍
に兵者との御褒美の御言にて假名軍兵衛と被仰付
冥加之至得二家名一侯と亡父申聞侯則亡父の實父軍
兵衛事にて侯健宮八千左衛門を阿蘇領八千町に無
類之軍士と被仰侯て八千左衛門と假名被下侯段右
に書出侯軍兵衛と被仰付侯儀其類にて侯被致拜領

侯刀令傳承其方に遣侯刀にて侯然は豐永討取之刀之銘我里馬と打侯て有之侯を其比從京都佐渡原加運と申目察者豐州大友殿へ罷下侯を御幕下に被差廻侯に阿蘇殿へも參侯故阿蘇家被差廻侯に付早川へも見之侯に吉次彼討取侯刀見せ被申侯へば加運見申侯て申侯は此刀は阿部仲丸を大國へ被遣侯砌勅定にて名鍛冶に御うたせ被成侯刀にて侯無類の名作にて胡馬北風になにとやらん云故事を以て此銘をきり申侯などゝ申侯て大友殿へ被召上以後は上々に上り侯と吉次致風聞侯が

内裡へ上り申侯哉　公方に上り申侯哉と被申居侯と已父折々に被咄聞侯右之玄番は吉久之被召仕侯玄番が子にて侯

一然處に村山丹後守留守居湛淵甚喜使を以宗運に申上侯は乍恐使を以申上侯甲斐武藏殿宜御取成可被下侯夕部相良殿より御使被下侯口上には村山氏今度相良に可レ遂二一禮一候哉いかゞ可レ被レ遂二一禮一候はゝ人數可被差向侯有無之返事可申旨被仰越侯甚喜返事に申侯には扨は左樣侯か村山氏儀當月は矢部御殿之月番前にて御座侯故矢部へ參勤被仕留守にて御座侯私之所存として實否之御返事申進侯儀罷成不申侯家頼とも矢部へ飛脚を差立御使之わけを守らせ召置侯即刻矢部へ飛脚を差立御使之わけ村山へ可申達侯村山所存之趣被成御聞其上にいか樣とも奉存侯乍此上御人數被押懸侯は少も防不申村山の妻子を手に懸申侯て自害仕より外無御座侯即閉門仕罷在可申侯聞此旨相良殿へ被仰上只今御評定之趣可被仰聞侯と返言申侯へは從二相良殿一被仰越侯は湛淵が所存道理に思召侯早々村山方に申越侯上は村山氏より返事之邪正次第にとの御使にて御座侯右之段村山方に委細申遣侯いまだ如何樣とも不被申越侯右之通故村山領之男頭々は城に籠め置侯而女人之分は縁引々々に忍ばせ申侯如此之通に付先刻より無音申上居侯追付村山罷歸伺公可被申上侯乍憚謹而被仰上被下侯へと申上侯に付宗運以之外感し思召侯とて褒美之言之由に侯然處に村山丹後守急歩にて被致參着すゝに經之坪に被參侯而入道に被致面談湛淵が飛脚之通に付惟種公早速歸城仕侯へと御暇被下御船之樣に參侯而貴老に段々申達御下知を請侯へと被仰出急馬にて御城

下迄參上侯而御出陣之旨承レ之唯今如此に御座侯然は强敵を急速に被成御討侯事絶二言語一申侯御手柄と祝詞を被申侯へば先々急き可被致歸城侯如此と侯ても堅く要心尤に侯間能々無怠慢可被相守侯義陽事今度てそ被致無分別侯元來は學力も有之侯位階をも身代にて侯はゝ見事に侯あたら事と存侯今度村山家頼への使などは尋常に存侯は若輩分別の者にてうはきのやからにて侯はゝ村山氏留守と聞侯はゝ幸と思ひ人數を押懸城を乘取其風聞取沙汰を根元にせんと可存侯へとも少々智力有る者は各別にて侯と相良を宗運審被申侯を丹州も感し被罷立侯由に侯眞星之宗運被申分と存侯は右の情故に村山氏之領内に於二手今一相良殿之石塔有之侯右の情にていか樣とも可承侯左樣御心得侯へ〳〵と申侯而笑ひかけ〳〵祝に二笑被成侯而御歸りあれ〳〵と申しかけ侯へとも一言も返言を不申首をうけ取箱にいれしほ〳〵として罷立侯由語傳侯箇樣之筈之事にてこそ侯はんずれと其砌令見聞侯仁人申侯由語傳侯愚老乍推參存侯は錠所に參侯而罷立侯時笑ひて立侯物と申來侯もわらはず物をもいはず罷立侯事も右之通之事にていやと申たる儀共と存侯

拾集昔語二

一宗運歸陣色々工夫緒方喜藏事
一同宗運折々四百八ッ宛の首討取之事
一同宗運盛世之砌甲佐御舟在々地侍に井芹と云者之一黨有之候一黨を譯有之候而悉被殺之事
一同入道實子を數人被殺同氏嫡子宗立無分別之事
一同入道殘念咄之事
一同入道死去之事
一阿蘇神主惟種公御逝去惟前公御謀叛之事
一益城郡に熊野花の山城振本已後落城之事
一薩摩島津より初發に肥後國へ人數を被指向之事
附肥前國龍造寺隆信を島津被討之事
一阿蘇惟種公の御後室兩若御達を隱し申事
一島津大友殿を亡し可申との事
一秀吉機九州へ被遊御下向候事
一阿蘇惟種公の御後室兩若御達御歸城之事
一秀吉機御横目九州へ被爲出候事附惟種公の御後室秀吉樣へ御禮被仰上候事、秀吉公薩摩へ被遊御入

馬候事、肥後國侍秀吉公へ御禮被申上候事
一秀吉公佐々内藏助成政公へ肥後國を被爲拜領候事
一阿蘇惟種公の後室若御達を佐々成政公の居城へ忠臣共各申合せ入置申候事
一佐々殿山鹿郡隈部を被責候事
一同郡有勳の家頼知略之事
一肥後國侍佐々殿へ對し一揆を起す事
一阿蘇家の侍成政公の城に助城仕る密忠之事

甲斐宗運從經坪歸陣之事付色々工夫緒方喜藏事

一宗運經の坪より歸陳被申候手輿には乘不被申以前の黒の馬にも乘不被申候餘もの馬に雜兵手負の樣に歸り被申候に伊津野四郎右衛門手を負ひ岩下村に伏居候處に立寄脉を伺ひ自分血を吸ひ帶の強弱被致吟味藥を附黒藥を用ひて歸り被申候由に候彼入道は本外兩道の達醫の由申傳候其頃河尻大慈禪寺の住持洞春和尚と申候は參内被召勅額拜請の名僧にて彼和尚元來宗運菩提所御船邊田村東禪寺の住僧にて有之候を東禪寺事大慈寺の末寺にて候故彼和尚本寺の大慈寺住職に直り以後令隱居宗運と一所に可被居とて東禪寺に彼洞春歸參被召遷化被成候東禪寺に彼和尚自畫自讃の影なと當分も有之候宗運事彼和尚と折々問答なと被仕候由語傳候彼入道兵道之儀は勿論歌道儒佛神道をも通達にて惣て大信行者にて自讃仁王經萬部之守を具足之上帶に奉納仕被申候由慥語傳候右歸陳の祝詞を寺社百姓町人各參上にて申候に被申候由は今度相良討候儀は味方討同前にて是非に不及候と被申候て以の外笑止顔にて祝詞を請被申候由語傳候此段は重て薩摩より相良の弔ひ合戰可有やと被存右之通に被申候や宗運死去無程島津より初發に肥後へ出馬被致候砌有心之仁々入道味方討同前と被申笑止顔いたされ候事を感じ申候と語傳候

一義陽を討申候緒方喜藏には入道過分之加增被申付阿蘇殿も御目見被仰付御褒美共被下候由に候宗運死後迄も存命落去以後は有無の爲體にて罷在候處にはるか以後清正公被成御入部御船に緒方喜藏と云者も存命居候やと被成御尋被召出饗原の合戰之譯宗運の樣子共扨又義陽を討申候樣子旁の譯被遊御尋候に一々申上候上にて守袋々木茸の樣成物を差出し是は田夫の私義陽の御首を仕候證據に耳をそぎ取居候を御目に懸奉り候とて指上申候へば以の外清正公被遊御感七人扶持に三十石被下熊本坪井の田端小屋數被下罷有無程令病死候坪井新鍛冶屋町に源右衛門と云鍛冶此もの喜藏が孫聟にて候と亡父四十五六年以前に被申聞置候

一宗運饗原え出馬の砌同氏宗立に御船在々之百姓共を早々飯田山えのぼせ峠にいろめかせ野や峰をさめうがち候ていろめかせ候へと被申付候は相良の人々豐田饗原ゟ飯田山見え候に宗運は御船城をはつし飯田山へ攀登候はんやと思はせ扨又安見村の繩手を旗指物なしに忍びおしの樣に人數を被押候は必〳〵相良の者見候て其通を相良に申候はゝ宇土本郷よりの助兵と思ひ可申との智略の工夫少も相違なく其通に令推察油斷にて相良敗北被討負候經の坪より歸陳の砌以前の馬に乘不申前の道をも歸り不被申候雜兵手負の樣にばけて甲佐早川の樣に歸被申候は相良の家來に智臣有間敷にもあらず

野山谷川の邊に令密隱罷在候て主將義陽に一命を進上と思ひ切身を捨候はゝ弓やりにて宗運をねらはれまじきにもあらずと被存候て右通に而歸陳被申候と以後樂咄に入道被申候と語傳候

甲斐宗運一世中に四百八ッ宛の首を四度取被申候事

一御船城討取之初合戰に房行の上下四百八人討取被申候

一黒仁田豐後守阿蘇殿を奉背候を先書之通に上下四百八人

一丹花の瀨合戰に四百八人

一響原合戰に相良の上下四百八人

右之通に四百八ッ宛の首四度其外隈庄合戰少宛の小合戰に五十百計宛の首は數度の由に候

甲斐宗運井芹の黨を被殺候事

一御船甲佐在々に井芹何某〳〵と申候て井芹の一黨七十餘人天正の年中に有之候一人も不剛の者なく皆金石の武士にて阿蘇殿も御重寶に被思召候宗運も其通に被存候者ともにて候彼井芹の大將を加賀守と申候彼者共冥加もなく武運も盡果候て各一黨

連判の書狀を相認候て薩摩島津殿江密々申進候は阿蘇家の代官を井芹一黨に被仰付候はゝ味方に成可申候併何とぞ御手立を被成候て甲斐宗運を御味方に成被申候樣に被成候て可有御覽候彼入道被致隨意候はゝ阿蘇家の侍一人も不殘幕下に罷成可申候と申遣候由に付島津殿より有名なる古老の侍に謀計の狀を持せ御船に被指遣候宗運對面被致候而いか樣の御用にて貴殿御越候哉と被申候へば口上之儀は無之候と申候て書狀を文箱共に指出し申候を入道披見被申候へは味方に被招候狀にて候入道兎角の事をも不被申御船城外に朱賀和尙と申候て古老なる智德の禪和尙有之候を呼入道與にて被申候は和尙ゝ賴度事候て呼申候珍客請候間自分は客の會釋可申居候に座敷へ御出候て可被申候は客人と見え候御免候へ〳〵と被申候て宗運か膝を枕にして可被申には頃日は持病之脚氣令再發候て以の外足腰痛候いつもの樣に脚を捻りてたべ〳〵と被申候へ愚老捻り可申候此事此に心得有之候て賴候事にて候と被申候へは和尙被申候は殿の御用にて御望候上は慮外と申事は無之候間其通に致可申候

と被申候故入道座數え出四方山の噺など被申候處に和尙罷出右之通に被申候をいかにも捻りもみ打なといたし被進候島津殿之使者是を見候はゝ師匠と外存間敷候故罷歸り島津殿へ可申は宗運と申者は七十程に罷成候得とも不斷學問被致候と見へ申候其譯はゝ樣々々と咄させ可申ため其ためとは不斷學問いたし候者身にて古主を背き餘命なき折からなせ島津殿へなひき可申やといわせ可申ための事之由に候左候て其夜只一人に栗林等なと申はやわざ武士之者一人側に置使の仁にさゝやき被申候は島津殿ヶ樣の御狀を被下候事は不思儀に存候が御一存の御分別にて候や又はいか樣之譯共有之候ての事に候やヶ樣の御使御出候からは島津殿も無他事思召候貴殿にて可有之候上は御內意承度候と被申候へは使者被申候は其事に候阿蘇家の侍井芹の一黨七十餘人各運判にて島津の味方に成可申候併甲斐宗運を味方に被成候手立宜く存候と密々申越候就夫貴者も御內心は御同前にて可有之候間書狀進可申との事にて如此に候と申候やに候入道聞被申候て扨は左樣候かと被申候迄にていか樣の段

も問答不申使者を馳走被致音物共遣候て翌朝遣く立に小川に令一宿候樣に計ひ其夜中に甲斐武藏守同伊勢守兩人と被令密談井芹何某は何某に討候へ〳〵と七十餘人の討手を被申付翌朝右之使者罷立候跡に一日の內に甲佐御船在々に罷有候井芹共悉く討被申候井芹大將の加賀守は渡邊軍兵衛討申候當分之上豐內村庄屋又右衛門は加賀守の曾孫にて候井芹河內守が加賀守は甥にて候彼河內守か曾孫は糸田村の彌助十兵衛にて候右之通に七十餘人を一時に殺し被申候て宗運泪を流し候て被申候由は是非に不及候井芹の各おのれ〳〵か自害とは云なからあたら者共を殺し候此中老身度々の高名も彼者共一騎當千の奴原故にて候入道か指一つ折れ候と被申候て深く惜み被申候由に候右の使者案のとく小川泊り翌朝此事を令風聞舌を卷罷立候由に候入道其事を聞被申候て島津に返事を能して候彼使に風聞させんために小川町に泊り候樣にあひしらひ小川にて聞候樣に計ひ候と被申候由に候

宗運實子を被殺候事付同氏宗立無分別之事

一甲斐宗運は男子も數多有之候由に候嫡子親秀入道

も親宣親直ほとは無之候由然共丹花の瀬合戰にての首尾入道以之外感悦被申候由にて二男四男何れも理々數無之以の外入道心に不叶由にて三人なから討可申旨内々被申候由を三人ともに風聞候て豐後をさし落被申候を宗運聞付老身なから駈馬にて只一人追懸南郷俵山にて手討に二男三男討捨被申候四男一人漸逃候て日向の樣に合逐電其子孫當分日向の國何れかの御領家の祈禱山伏に成居被申候由令風聞候親秀入道宗立も少々不足の生得故入道の隱居遲く候とて阿蘇の御家を背き部屋住の身上にて其以前肥前國隆信より謀計狀被指越候に親父に令隱密同意被仕合志郡之内津久禮と云所に肥前人數密々令發向候に御船を隱密にて宗立部屋分の軍士引連津久禮に出浮被申候を宗運被聞屆不斷退兵二百騎程にて出馬に而津久禮近所迄押寄被申候へは肥前人數早々引取候故一戰に不及宗運立腹大形ならす宗立を引包み討捨可申と被仕候を合志殿中に入斷を被遂候上御船鄕中の諸家衆證に立連判之起請文を宗立被仕漸くの事にて助命被申付候て被致免許候由申傳候宗立隆信に歸依被申候譯は宗

運を亡し早々御船の城主に成度との内存にて候由に候左樣の心中故に薩摩より發向の砌も見くるしき佐々殿えも謀叛旁にて被致失命甲斐の家令滅亡候

甲斐宗運殘念咄の事

一宗運兼々咄被申候は日本國中に太平記にも見え候當國菊池に增したる弓取は無之候昔より中古迄其通に菊池令名譽候は鳥雲の陣の張樣一つにて每度勝利を得候菊池家の鳥雲の祕法令落去當分宗運か祕事に成候此鳥雲を令存もの故度々の高名して候いまく入道もなく可成候間鳥雲も入道と共に可令落去候と被申居候由語傳候宗立に鳥雲の祕事可被申付候へとも右之通之仁故宗運心に不被叶傳受なと無之事にてこそ候はんすれと云傳候

宗運死去之事

一宗運の孫宗立の娘は木山備後守惟久の内方にて候然は惟久の内方に宗立の内方則母親密々に被申候由は先年父之豐後守阿蘇殿え逆心故宗運公よりやみくと被討候逆心の親にて候へは是非不及其分にて候併正數亡父の敵にて候へとも一味內通申間

數との誓言をたて入道公に討せ申候上は今更親の敵と可存樣は無之候へとも亡父の所存いかゝ數候間其方は自らかためには子宗運の爲には孫にて候親は近く祖父は遠し然上は入道公に致毒害くれ候へ若又此密言いなと存候はゝ今生の對面是まて也死を共にわでせと一途に思ひ定へしと被申候に付力に不及承引仕其砌迄は木山城邊只今も泉湯の殘有之處能泉湯にて彼所え入道慰に孫の木山內方より宗運を招請被申候に入來の砌毒茶をたて中の間まて孫女直に持參候を珍數渡り候令滿悅候とて服用被申候て天正十一年七月五日に七十五にて死去被申候由に候其年迄も隱居不被仕候事末代には不可然申仁も有之候乍然宗立事宗運に似不被申阿蘇殿の御爲に令隱居候ては不宜候とて老身まても右之通の由と語傳候是尤の事と存候は益城郡、宇土、網田、郡浦、託磨、竹宮、飽田の正保、新開、阿蘇、南鄕、菅尾、小國の御地としに四季宛廻り被申候て寺社の修理人民の形義田畠の實否口舌之理非直に問屆賞罰糺明之由に候死期近く成候て被申居候は宗運死候はゝ墓を人の目に立處にせましく

候其仔細は薩摩の奴原共から弓の筈にて是てそ宗運か墓よ石塔よなとゝさしつくじられ可被口惜候見よくく老身なく成候はゝ三年之內に薩摩の手下になるへしぞくと被申候て泪をなかしくく被仕候由に候案のことく宗運死後三年之內に薩摩より令出馬候に有心の仁々申候由は宗運は神の化身と申習はし候はゝ其にて候と申候由語傳候

阿蘇神主惟種公御逝去惟前公御謀叛之事

一惟種公天正十一年之秋御歲二十有餘にて御逝去被成候然は甲斐宗運存命に候はゝ何の申分も有之間敷候へともはや阿蘇家下かちに罷成濱の御所え出仕申候仁人も其八月頃からは疎に成候如是の折節惟前公被思召候は惟光公惟善公を何とそ被成候て阿蘇大宮司御職を可被成御勤とて益城の中山、砥用、甲佐、堅志田の御知行は申に不及惡黨くと引卒し矢部に御取懸被成候はんと御座候此旨伊津野早川城代衆西北渡邊田上之仁々矢部に內通申上候に付家老仁田水犬飼高森其外男成井田の人々一同に申候は矢部に引受候ては見苦數候此方々令發向一戰を可遂とて右の仁々大將にて貳千人步立に

て令發向候處に矢部と砥用との堺濫坂にて雙方の軍人行逢無類の合戰に惟前公御敗北被成候て國中に御在館被成候處無之候故郡浦之樣に被成御落去船にて薩摩へ御父子共御立退被成候て島津を御賴被成候處に島津以之外取持にて拵護被申候由に候然とも惟前公追々御逝去にて御子へも御育米共被進候て被召置候に以後加藤清正公惟善公へ御知行千石被進候砌薩摩にて右之惟前公の御子惟元公へも知行千石被進候由に令風聞候惟元公御早世故御子孫斷絶の旨風聞いたし候併當分は神主殿之御親父友貞公と御狀の取やり共被成候かの樣に若輩の砌阿蘇にて承り候かと憚候

益城郡小熊野花の山城根本并落去之事

一益城郡之內小熊野村花の山と云野城は前々より有來候城にては無之候彼城は相良益城阿蘇御領內迄被致發向小川守山小野村小熊野村豐田響原迄押しかけ討死は被仕候へとも討死しなから響原迄は押領分と申事にて候也響原近所花の山を城に取立候事島津よりの所作にて彼城番代にも薩摩より絹脇刑部左衛門と云侍頭に數百人之與力を指添被遣置

候由に候相良事薩摩の幕下に成被申候て誓紙なと被令違背益城へは出馬討死被仕候故相良に對し弓ひ合戰も有之候はんづれとも宗運事は薩摩抔も令恐怖居候故せめてはヶ樣に成ともいたし候て相良家の者共に見せんと候て彼城は築候はんと其頃令沙汰候由に候宗運存生の間被申居候には相良領分として如此の仕方に候はゝ一日も召置間敷候へとも島津方より相良を取持如此に候島津に無意趣通りの所存を見せ不構に罷在候へ小川守山小熊野在々阿蘇を相背き島津相良に令隨意年貢等彼城に令納所候ものにて候へとも前々之通に阿蘇へ納所候上は別條無之候彼花の山の城は碁の中手にて候此方の內を無案內にて城取候事無法に候へともそれは少々令堪忍候へは又々能事有之候間暫て構ひ有間敷候と未々迄に被申聞置間には音信の取やりなと仕被申候の處に宗運死去無程百ヶ日之內外に宗立大將にて取かけ天正十二年に刑部左衛門を初め一人も不殘討取被申候島津家老新納武藏守忠元此事を聞被申候て甲斐宗運は死候そ〳〵肥後江出馬程あらせましく候そと被申候と語傳候

薩摩より肥前に軍士を指向候事肥前龍造寺隆信討死之事

一薩摩の幕下相良義陽を阿蘇の一老甲斐宗運討申候上に同宗立花の山城代綱脇刑部左衛門を宗運死後に討被申候遺恨にて島津より阿蘇正可出馬と內々密談有之由之折節其砌の少し前廉までは九州の內豐後肥前肥後筑前筑後此六州の分は豐州大友殿御幕下にて右之國々に城代被遣置候處に肥前國龍造寺隆信猛威を振ひ豐後筑前筑後肥前は申に不及肥後國も北の方半國は大方隆信の手に入被申候南の方薩北八代球磨は薩摩手下に成候て漸々肥後國中には阿蘇家斗大友殿の味方にて候由に候然は菊池の赤星前々より強兵なる侍にて漸々の事にて隆信彼赤星を手に入被申候て赤星幼少の子息を隆信に質に出し被申候て和平に成候由の處に彼子息を無調隆信殺害仕被申候赤星以の外憤り薩摩へ罷越新納武藏守忠元を賴島津殿へ申達候は右之段々如是の仕合生々世々口惜く存候島津殿ならては可奉賴方無御座向後御味方にも罷なり可申候間願くは肥前に討手を被指遣隆信を御討可被下候左候はゝ□

御恩赤不可過之候イニ
可忝候と偏に賴入候と申候へは忠元委細を聞申候て扨々尤の事共に存候と申候て島津殿江右の段々申上候得は御聞候て扨々尤の事いたはしく思召候間島津の名聞と云無道を討候事天理と云侍の賴み被申候事と云相良綱脇の弔ひと云勞に付人數を可有發向とて先肥後江令出馬肥後を手に入肥前に取かけらるへしとて赤星えは御賴の如く被得其意候侍の御賴候上は發向ほど有間敷候間左樣に思召候て御歸候へと御座候得は難有御事と禮詞を被遂罷歸被申候由に候扨天正十二年三月新納武藏守忠元イニ梅北國信イニ宮內少輔鎌田寬栖河上左京此四人を四將として騎馬雜兵三萬相良先陣にて兵船數百艘宇土郡の浦に着船天崎イニ之城代阿蘇家臣中村伯耆守惟冬イニを討取其勢宇土より益城の內熊之庄甲佐中山砥用御船江手わけいたし甲斐入道死後とても花戰可有之軍イニ候とて右の四將衆覺の軍士手たれのものは御船にて一戰をとけさせ候はんとて圍ひ置被申候處に甲斐宗立一戰に不被及御船の城を明け置飯田山によりのぼり使者を以て島津の手下に向後可罷成との降を乞被

申候由に候宗立如此の上は二老之仁田水も同前の心得にて甲斐氏仁田水阿蘇家兩老各薩摩の手下に成被申候へとも高森北里下城男成坂梨迫早川越前渡邊中佐中山田上村山此者共申談し惟光公惟善公御後室を不奉見捨宗運存生に候はゝ如此は有御座間敷候へとも跡目宗立二老之仁田水如此の上は阿蘇御家の侍各心々に見え候然れとも右の者共は心中に違逆を不奉存外様には薩摩に令歸伏候證にて（同士の通りイニ）罷在候て居候由に候左様に不仕候へはとし〳〵通し不申候故にて候也然れは薩摩勢南方は一面に手下也熊本を始め北目は元來右の赤星味方故そこ隼島津の手に入肥後大方薩摩の幕下に成候上は元來の本敵を可討とて右の四將衆各一所に會合せしめ宇土より兵船を揃へ肥前國内高來江被令著船使者を以て龍造寺隆信江申遣候は隆信事誠に威を振ひ近國を侵し無道の所意多候天下のため民のため奢者を討は天の道也就夫島津より爲討手新納梅北鎌田河上を被指越候今日御分國内高來迄令發向候當地江可有御出候也又は夫へ發向可申哉御返事次第に一戰を可遂候と申遣候へは隆信以の外仰天返事被申候由に候宗立如此の上は二老之仁田水も同前の心得にて甲斐氏仁田水阿蘇家兩老各薩摩の手下に成被申候へとも高森北里下城男成坂梨迫早川越前渡邊中佐中山田上村山此者共申談し惟光公惟善公御後室を不奉見捨宗運存生に候はゝ如此は有御座間敷候へとも跡目宗立二老之仁田水如此の上は阿蘇御家の侍各心々に見え候然れとも右の者共は心中に違逆を不奉存外様には薩摩に令歸伏候證にて（同士の通りイニ）罷在候て居候由に候左様に不仕候へはとし〳〵通し不申候故にて候也然れは薩摩勢南方は一面に手下也熊本を始め北目は元來右の赤星味方故そこ隼島津の手に入肥後大方薩摩の幕下に成候上は元來の本敵を可討とて右の四將衆各一所に會合せしめ宇土より兵船を揃へ肥前國内高來江被令著船使者を以て龍造寺隆信江申遣候は隆信事誠に威を振ひ近國を侵し無道の所意多候天下のため民のため奢者を討は天の道也就夫島津より爲討手新納梅北鎌田河上を被指越候今日御分國内高來迄令發向候當地江可有御出候也又は夫へ發向可申哉御返事次第に一戰を可遂候と申遣候へは隆信以の外仰天返

事被申候由に候島津直の使にあらす家臣として過分の口上見苦敷候不知して國内江入込候さへ殘念候自分居所江慮外者共を罷越候へと可申や早々高來を可引取候左無之候はゝ打て可捨候此旨いへと計の返事にてはや打立て者共とて使をとたんに隆信自身出馬二萬の兵士を引卒し高來江被出向高來にて無類の大合戰被遂候の處に隆信餘の速氣の大將にて元來人を下目に見候大將にて自身合戰を被遂令敗北討死被仕候大將如此の上は肥前軍人令周章候之處に薩摩勢彌手痛戰候に付隆信勢四角八方へ令退散候由に候右の大將衆討取候首數四千三百六十餘討取勝時を揚早々薩摩江引取候由に候左候て隆信の首を島津殿へ赤星に被遣候へは赤星の内方餘の子息殺害の無念さに首を踏被申候由に候此事を内方之儀無法なる女中と其頃分沙汰候由語傳候赤星の島津殿の高恩を重く懇禮を被遂候なとと語傳

惟種公の後室并惟光公惟善公を隱し奉る事

一阿蘇の御家臣甲斐氏仁田水氏初發に薩摩江令歸伏候故其外下いつれも同前にて惟種公の後室兩若御

達濱の御所江被成御座候ては當分御家人を先として他は申に不及無心元候とて元來金石の御家人に南鄉矢部兩高森男成早川の城主兄弟渡邊甲佐中山の田上砥用上島の田上北里下城坂梨西北迫此人々一同に申談候は御後室は小宰相と云大女房と能き隱居の在所へ供奉仕御心安可被成御座候御代々の御文綸旨御寶物は男成明神の御寶殿に奉隱納一太夫守護可仕候其内綸旨口宣文書は坂梨氏背負可申候此外の御寶物は濱の御所江人しらさる穴藏有之候に隱置迫井手兩頭在番仕與風御母子樣共に被成御上京候と申ふらし鳥居之大門をたて小門を開き注連を引廻し諸人出入令禁制可罷有候御兩若君へは坂梨氏孫太郎西源兵衛渡邊軍兵衛此三人供奉仕砥用矢部境の奥目丸の深山幽谷へ忍ひ隱れ守り仕時分（卯ニ）を待可申旨申合右の山中に各三人附居候て御兵粮の運送は右　殘り候者共彼幽谷の隱家に相送可申旨申談扨異先に御綸旨御文書を坂梨氏背負次に惟光公を西氏肩に載せ參らせ次に惟善公御子をほそ殿と申候を渡邊軍兵衛肩に載せ忍入候處に御跡を三人追かけ其若君はわれ〳〵請取守護可仕と申候を渡邊ふり返り見候て其手令推察候已等共薩摩江御供可申とや内々見聞々致候はん自分か手並見せんとて大岩のかけにほそ殿を置申候て提たる鑓にて坂の上よりまくりかけ異先の者を突伏候へは異下りにかいふつて逃候故鉢卷に能々御取附被成候へ大將はひつからぬものにて御座候ぞと申候て朱に成候鑓を片手にひつさけ各の跡をしたひ參り候由祖父折々咄被申候亡父度々承候と被語聞候阿蘇の御家其頃は惟前公方神主公方とて阿蘇家二つにわれて有之候由にて定而惟前公方の者にて有之候はんと亡父咄居申候惟前公先筆に書出候通に被成敗北候故其方人共は降人と成或は令逐電山谷野外に身をほそめ（細）罷在候由に候間定て左樣の者とも にて若君を背負薩摩江參間敷にもあらす候故軍兵衛被申分尤と存候惣て軍兵衛は大の男にて大刀の由語傳候亡父初て神主惟善公江軍兵衛病死後に罷出候へは亡父に孫兵衛と假名共被仰付上下被爲拜領なさ當分迄罷出不申候やと被仰出候に多年在京仕數醫傳受仕居申候て參不申上候と申候へは坂梨氏の老翁軍兵衛事を被申出昔物語被咄出候に

惟善公被仰出候は其通に候鎗に血のついて流れ候をすさまじく思ひ候事夢の様に有之候と被仰候と亡父折々咄聞被申候事

一島津大友殿を亡し可申とて兩人の家老を差向九州令動亂候事

一今時に薩摩代々ケ様の事候などゝ申候事は右の通に先年薩摩より人數を發向手下になし女童部共薩摩江無理に引連歸り候由に候左候て只今の通に高に何程物成如何ほどの発とて発の様子などはなく候て初穗々々を令運送令隨意候といふ印迄の事にて薩摩を頭に取持候迄の事にて候由に候薩摩手下といふ間の天正十二年より同十四年迄にて當分迄ゟ薩摩代め三年にて候と右老の仁々語傳候は右之通にて候然は天正十四年の九月島津ゟ豐州屋形大友殿を亡し可申とて日向國の方よりは鎌田寛栖肥後國よりは新納武藏此兩將右之國々より令發向豐後府内を奇可申との事にて寛栖は日向ゟ高知尾の様に押出し南鄉菅尾ゟ豐後江の押出との事新納は肥前筑前岩屋寶滿の合戰に討勝肥後國内小國江打越し阿蘇之様に令發向浪野原にて兩將出會被申候

筈の由にて浪野原に暫く被相待候之處に鎌田氏ゟ南鄉まて被押出候に阿蘇之老臣仁田水氏元來頃年薩摩江令歸伏候故南鄉高森伊豆守仁田水氏内緣故今度是非共高森氏に鎌田江一禮を被遂可然候左無之候は丶今度安全には通る間敷候と達て異見被申候へとゟ高森承引無之故薩摩勢押懸候處に仁田水氏寛栖に令加力高森を討候と語傳候阿蘇家には甲斐氏仁田水氏眞牛角の家老筋目にて候へとゟ右の通の兩人共にかがいなし故甲斐仁田水氏の末孫として無之候勿論阿蘇殿江右之兩氏の末々とて一禮を遂申ゟの無之候鎌田氏は右の仕合故浪野原に被籠出候事遲々に及候然れとゟ被申合候ことく浪野原にて兩將被致一同豐後守朽網の城を攻落し諸所方々の小城々々不殘實落し或は下城各手に入被申候へとゟ岡臼杵府内此三城は落城無之由に候然れとゟ豐州以の外令動亂候故大友殿甚周章の由に候

秀吉卿九州江被遊御下向候事

一島津九州を靡し豐後大友殿の居城臼杵府内迄令發向既に上方江兵船を揃へ責上候様に有之候故秀吉様江大友殿右之通被仰上候へは仙石權兵衛殿長曾我部殿御兩將被指下被爲遂一戰候之處に右之御兩將以之外御敗北にて御兩將より被成御言上候故天正十五年四月三日に秀吉様御直に二十五萬騎にて被遊御下向先豐後府内江被遊着艘候に數萬艘の御兵船金銀珠玉を粧りたて鎧長刀を拔身にて耀き渡り候を薩摩の田舍武士共令見聞各以之外周章令敗北崩れ立夜白を不論引取候由に候秀吉公御直の御馬故薩摩の叛人共悉く引取候と取沙汰せしめ候由に候島津に只今迄令歸伏候阿蘇の御家臣仁田水氏を初め濱の御所江各令群集若君御後室の御行衞を相尋廻り申候由昨日に今日は替りたる人心にて候と申候由語傳候

阿蘇御後室同惟光公惟善公御歸城之事

一秀吉様被遊御下向候に付薩摩の軍人不殘引取候故世上靜に罷成候就夫御後室若君達御隱居所より濱の御所へ被遊御歸候然は外目を仕候者共ゟ前々のことく勤たてまつり罷集別條無御座候故右之通に毎月つき副居申候者共先々在所々々江しばらく令歸宿候由に候

秀吉公九州え横目を被爲廻候事秀吉様江阿蘇

之後室御禮被仰上候事秀吉公薩摩江御馬入被遊候事肥後之國侍御禮被申上候事

一薩摩之軍士秀吉公被遊御下向候と其儘一戰に不及本國江引取候に付秀吉公豐後より肥後國内小國滿願寺に被遊御一宿御制札など御立被成筑前國秋月に被遊御出秋月より筑後肥後國南の關に被遊御出候之由に候豐後江被遊御着座候明日御横目を數人九國中に密々御廻し被成被遊御見聞候に矢部濱の御所の鳥居門を横目衆一覽候て鳥居門の傾被仰上候へは被仰出候は阿蘇の神主は被遊御聞候程有之凡人は鳥居門ならず候と被仰出候由語傳候

一右に書出候通に阿蘇御家人共顏に手をおゝひながら甲斐氏仁田水氏宗立を始執事の武藏前々のことく又濱の御所江勤申候て各申談候は南關江秀吉様暫く被成御滯座候内に御禮被仰上可然旨各評定仕候へは御後室ゟ尤と被仰出御女身ゟ之御禮にて候間女輿衆を可被成御進上とて小宰相と申大女輿古老之美相なるを被指上候へは御前宜數殊外の御機嫌にて後室の女使玖又幼少之子共故如此の旨宜數被思召上候爲肯先々御新知三百町被爲拜領候と被